
メルグウェン姫と騎士ガブリエルの物語

海乃野瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メルグウェン姫と騎士ガブリエルの物語

【Nコード】

N2681L

【作者名】

海乃野瑠

【あらすじ】

山に囲まれたエルギー地方の城主の娘メルグウェンは、勝気でお転婆な、何よりも剣術が好きな女の子。

父親はそんな彼女を政略結婚の駒にすることに決め、修道院に閉じ込める。

一方、貴族の次男坊であるガブリエルは、同じ境遇の仲間達と雇兵として戦う毎日を送っていた。

そんな二人が出会い、少しずつ近付いていく様子を、吟遊詩人の歌う騎士道ロマンスのようにゆっくりと紡いでいく欧州中世風の物語

です。

プロローグ

その習慣は、雪籠りのタベと呼ばれていた。

山に囲まれたエルギーオン地方では、冬は雪が多く夜が長い。

日が暮れると村長の家に村の者が集まり、大きな暖炉の前で女達は麻糸を紡ぎ、男達は藁で縄を織い、農具を修理する。

昼間から煮込んでいたルーンを飲み、老婆は昔話を語り、女達は歌う。

子供達は、床に膝小僧を抱えて座り、物語に目を輝かせ、鳥の骨でオスレゲームをする。

そして、そのうちにベンチに敷いてある毛皮に寝そべり眠ってしまふ。

それは、村の祭りと同様に若い男女にとっては、相手を見つける機会でもあった。

「エジエーン婆、お話をして」

村の北側にある森に住んでいるエジエーン婆の歳を誰も知らない。

百歳を超えているのではないかと噂では言われている。

ラディミール村では薬草に詳しい老婆を敬いこそするが、恐れてはいない。

エジェーン婆は昔話を語るのが上手かった。

過去に何度も聞いているにも拘らず、皆婆に話をせがんだ。

「何の話をしようかね」

「メルグウエン姫と騎士ガブリエルのお話をして」

エジェーン婆はしわがれた声で語り始める。

「遙か昔、ジユディカエル王が我が国を治めていた頃、エルギエー
ンの山奥に古い城があった。

城主はエルグ族の貴族ダネール。

ダネールには5人の子供があつたが、ある年この地方に流行つた悪い病で幼い子等は相次いで亡くなり、上の二人だけが生き延びた。

我が子の死に耐えられず、奥方は気が狂ってしまったという……」

カシーン、カシーン

中庭に金属がぶつかり合う音が響く。

その音に時折甲高い声が混じる。

木製の盾で体を庇い、剣を打ち合わせる子供が二人。

共に胴着とタイツ姿で身長は同じ位か。

一際高い叫び声と共に片方の剣が綺麗な放物線を描いて飛んでいく。

「お見事、グウェン様。マルカリード殿は、まだまだ練習が必要で
すな」

年取った剣術指南の褒め言葉に真っ赤に火照った顔に悪戯そうな大きな黒い瞳を輝かせ、少女は白い歯を見せて笑った。

あたかもスカートを着ているかのように裾を摘む振りをし、腰を屈めて優雅な礼をする。

1歳年下の弟は悔しそうに口をすぼめると、井戸の近くに落ちた剣を拾いに行った。

ダネールは、次の城主となる長男マルカリードには首都から迎えた

教師を何人もつけ厳しく育てだが、長女メルグウエンのことを目にかけることはまれだった。

メルグウエンに女の仕事を教えるべきふたりの母親は、気の病を何年も患った後、宗教に凝るようになり、一日の殆どを空気のどんよりとした薄暗い礼拝堂で過ごしている。

弟が勉強している間、同じ部屋で刺繍をしたり糸を紡いでいた筈のメルグウエンは、読み書きができるようになり、いつの間にか弟より数学も地理歴史もはたまた乗馬、武芸もできるようになっていた。

特に剣術は筋がよく、めきめきと腕を上げ、練習試合では5回に1回は剣術指南に勝てるまでになった。

反対に刺繍も糸紡ぎも上達しなかったが、音楽だけは好きでラウドを弾きながら澄んだ声で民謡を歌うことができた。

姉と弟の仲は特に悪くなかったが、良くもなかった。

マルカリードは、この怖いもの知らずで男勝りな姉を恐れていたし、メルグウエンは、甘えん坊で意気地なしの弟を馬鹿にしているところがあった。

親の目がないのをいいことに、メルグウエンは頻繁に城を抜け出しては、城下町で商家の子供達に混じって遊んでいた。

その子供達を引き連れているのは、宿屋の息子のリグワルという名の腕白小僧である。

無鉄砲な性格ではあったが、面倒見がよいその少年を仲間慕って

いた。

メルグウエンは、自分より1つ年上のその少年と集団の頭の座を張り合い、拳句の果てに考えつくありったけの悪戯を二人でやっているのだった。

城を抜け出す折には、武芸の稽古の時と同様に弟の服を借りていたため、メルグウエンとリグワルはよく兄弟に間違われた。

二人共黒髪黒目であったが、少年の硬い巻き毛に対して少女はすべらからで豊かな髪を後ろで束ねていた。

その日も3、4人の少年を従えた二人は、賑やかな市場に紛れ込み、林檎や菓子パンを屋台主の目を盗んで掠め取った後、場違いに着飾った質屋の妻とでっぴり太った肉屋の女房の服の裾を縫い合わせることに成功し、二人の女が取っ組み合いの喧嘩を始める前にその場を逃げ出した。

町外れの農家の納屋に忍び込み、人数分に公平に分けた果物と菓子を頬張りながら、リグワルは思い出し笑いをした。

2年前の冬、妹が病にかかり薬を買う金がなく両親が困っていた際にリグワルは、親に内緒で祖父母にもらった洗礼のメダルを質屋に持って行ったことがある。

訳を話しても銅貨1枚余分にくれなかった質屋を恨んだ。

その後、親にばれて顔が赤紫に腫れ上がるほど殴られた。

メダルはいまだに取り戻せていない。

肉屋の女房は、この前リグワルの母親と口喧嘩をしてから、よい肉を売ってくれなくなつたと両親が嘆いていたのを聞いている。

「おまえ、あの思いつきは最高だつたな。ざまあみろだ、あの婆達
！！！！」

積んである干草の上に勢い良く仰向けに倒れこみながら、リグワルは快活に笑つた。

メルグウエンは微笑んで、自分の分の菓子をゆっくりと口に運ぶ。

もうすぐ城に帰らなくてはならない。城の外はこんなにも面白いのに。

一口で自分達の分け前を飲み込んでしまつた少年達は、まだ腹が減つているのか納屋から抜け出し、肩車をして裏庭の林檎の木から林檎をもごうとしていた。

リグワルは草を噛みつつ寝転んだまま、林檎を齧っている少女を横目で眺める。

「なあ、俺とおまえが組めば怖いものなしじゃん。おまえがもうちよつとでかくなつたら俺の女にしてやってもいいぜ」

頬を染めたメルグウエンは、ニヤニヤしている無遠慮な少年を睨み付けた。

「ふん。あなたが素敵なお大人になったら、私の男にしてやってもいいわよ。でも、あなたには到底無理そうね」

勢い良く飛び起きた少年は、びっくりしている少女が何も言えぬ間に肩を掴んで押し倒した。

少年を見上げている少女の瞳は明るく、怯えはない。

ふつくらとした桃色の唇に少年は自分の唇を押し付けた。

その不器用な接吻に少女は笑い、自分からもう一度唇を合わせた。

少年の手が自分の体にぎこちなく触れるのを感じたメルグウェンは、彼を押しつけ上がった。

「もう帰らなきゃ」

その年の冬にメルグウエンは初潮を迎えた。

13歳になった少女は、以前の様に頻繁に城を抜け出すことはなくなった。

ある朝、メルグウエンは、着替えを手伝いに来た侍女から朝食がすんだら父親から呼ばれていることを伝えられた。

ノックをして部屋に入ると窓から外を眺めていたダネールが振り向いた。

部屋の隅に立っていた見知らぬ婦人が少女を見て頷く。

腰を屈めて挨拶をする娘を冷ややかに見ていたダネールが口を開いた。

「メルグウエン、大人の女にはやらなくてはならない仕事がある。おまえは今まで何を習ってきたのか？」

「ラウドを弾いて歌う事ができます。それから本を読んだり、詩を書くことも」

「それは聞いておる。針仕事や糸紡ぎが下手なことな」

メルグウエンは、この頑固で厳格な父が苦手であった。

また、跡継ぎの弟ばかりを気にかける父を恨んでもいた。

何年もの間、ほったらかしにしていたくせに、今更何だというのだろつ。

「乗馬と剣術の腕前は、剣術指南にお聞きになったらいいわ」

「馬鹿者!!!乗馬はまだしも女が剣を扱って何の役に立つ?!女は自分の主人の剣に護られればよいのだ」

「…」

ダネールは中年の婦人を手招くと、唇を噛んで俯いている娘に近づいた。

「おまえの叔母のマリアニッグだ。幼い頃に会ったことがあるつ。昨年夫を無くし息子夫婦に代を譲ったので、わしが引き取った。おまえの母の代わりに色々教えてもらうつとよい」

「…はい。ようこそ叔母上」

「おまえもそろそろ婚期だ。明日からは真面目に針仕事に励むがよい。また、音楽だけではなく踊りもできるようになさい」

息子1人と娘3人を育て上げたマリアニッグは厳しかった。

マリアニッグは、自分の姪の時間割や上達について、更に姪の態度や彼女に対する不満まで全て兄のダネールに定期的に報告したため、メルグウェンも以前の様に怠けることはできなかった。

初めは反発していたメルグウェンも、やはり自分を目にかけてくれる人ができて嬉しいのか、次第に言うことを聞くようになった。

幸いなことに踊りは思ったよりも楽しかったし、あんなに肩が凝った針仕事も続けるうちに無意識に針を運べる様になった。

自分が考えた構図が、麻糸で敷布やテーブルクロスに綺麗に刺繍された様を見るのも嬉しかった。

しかし、やはり剣を持ってないのは辛く、夜自分の部屋に入ってから寝るまでのひと時、暖炉のひっかき棒を手に一人剣術の稽古をするのであった。

自分の嫁入り道具を作らされているのは意識していたが、具体的に結婚は決まっていなかったのだと思っていた。

ある日の午後、暖かい春の日差しの中、薬草庭園にある菩提樹の下に座り、一人糸を紡いでいたメルグウェンは、洗濯物を取り込んでいる召使達の会話を耳にしてしまう。

「とうとうお決まりですってね」

「夏至の祭りの日にご婚約されるそうよ」

小声での会話は聞き取り辛く、メルグウェンは糸車を放り出すと、気づかれない様に四つん這いになり侍女達に近づいた。

服が土で汚れたが、その様なことに構ってはられない。

「姫がお生まれになった時から決まっていたお話だそうだから」

「ご結婚は一年後と聞いたわ」

ローズマリーの茂みに隠れたメルグウエンは、相手の名前が聞こえないか耳を澄ます。

「ネヴェンテル様の領地は、ネヴェン城からセリニヤツクの死火山まで広がっているそうね」

「あれ程のお方がこのお年までご結婚なさっていないのも不思議よね」

「やっぱり姫の持参金目当てかしら」

「シート！！！！誰かに聞かれたらまずいわよ」

その日からメルグウエンは、針仕事をしながら空想にふけることが多くなった。

自分の夫となる人、ネヴェンテルを想像してみる。

年は私より勿論上よね。

優しい人だったらいいな。

私のことを愛してくれるかしら？

私が剣を持つことを許してくれるだろうか？

それとも、やっぱり父上の言うように女は男に護られていればいいと思うのかしら？

侍女達の話で持参金目当てというのが引っかけだったが、話に聞いたように広い領地を持っている貴族がそんな筈はあるまい。

その頃になって初めてダネールは娘に婚約の話をし、五月祭の日にネヴェンテルを城に招待したことを伝えた。

五月祭までの期間が短かったため、翌日から城内は掃除をする人、祭りの準備をする人達で活気に溢れた。

メルグウエンは不安な気持ちでそれを見ていたが、同時に届いたばかりの新しい服や装身具を思い胸が高鳴るのであった。

その日、朝から化粧をされ準備を整えたメルグウエンは、イライラと足を揺すりながら座っている椅子の房飾りを筆っていた。

昼食後、呼ばれるまで部屋で待つように言われたが、この格好では何もできやしない。

待ちくたびれて、少し部屋の中を歩こうと立ち上がった時、ようやく塔の見張りが鳴らす角笛が聞こえた。

メルグウエンは窓に駆け寄り、身を乗り出して中庭を覗く。

中庭は急に騒がしくなり、着飾った両親と叔母、そしてマルカリードが騎士と近習、侍女、下男を従わせ出てくるのが見えた。

しばらくすると、蹄の音と共に、初めに赤地に3つ輪の鎖を白に染め抜いた旗を掲げた兵が馬に乗って正門を潜り、続いて武装した兵に前後を固められたネヴェンテルが到着した。

赤で固めた兵の中、ただ一人黒い服装の男が馬から下りて、城主とその家族に挨拶をする。

メルグウエンの部屋からでは、中庭にいる人達の顔までは良く見えないが、ネヴェンテルが帽子を取った時にその髪が白い様に思えた。

だが13歳の少女にまさか白髪の夫はないだろうと急いでその考えを打ち消す。

やっと呼びに来た侍女に続いて、大広間への階段を下りる時、メルグウエンは鼓動が高鳴る胸を片手で押さえる。

これから自分の一生を預ける人に会うのだ。

大広間には、白いテーブルクロスをかけた長いテーブルがあり、上には食べ物や飲み物が溢れるばかりであった。

人々は既に席について、姫君の入ってくるのを待っていた。

広間に足を踏み入れたメルグウエンの側に席を立ったダネールが来る。

そして娘の腕を取ると、テーブルの中心の自分とネヴェンテルの間の席へ連れて行った。

「ネヴェンテル殿、これが娘のメルグウエンです」

「初めまして、メルグウエンです」

「メルグウエン、こちらがおまえの夫となるネヴェンテル殿だ」

腰を屈めて挨拶をしたメルグウエンは、初めて自分の夫となる人を見た。

「美しい姫だ。長年待った甲斐があると言うものだ」

席についた少女は、体の震えを抑えられなかった。

何を食べているのか味もさっぱり感じないし、話しかけられても上の空で答えていた。

ネヴェンテルは、自分の父親よりも年上と見れる老人だったのだ。

五月祭の夜は、人の背の丈程の焚き火が焚かれる。

城下町では大聖堂の前広場に焚かれるのだが、城では毎年中庭に焚かれるのであった。

日が暮れるとお抱えの音楽家がガイデイやタラバードを吹き鳴らし、ラウドを弾いて歌う。

焚き火の周りを若い男女は夜通し踊り回り、その夜に誕生するカッブルも少なくなかった。

大人の仲間入りをしたメルグウエンは、今年初めてその踊りに参加することが許される。

できれば、自分の部屋に逃げ帰りたいメルグウエンであったが、父親に許婚の前で踊ることを命じられた。

頭をからっぽにし、野原で踊っていることを空想しながら踊る少女のまだ蕾の様なしなやかな体をネヴェンテルは、鋭い瞳で舐めるように見つめていた。

やっと許可を得て部屋に戻ると着替えを手伝おうとする侍女を下がらせ、メルグウエンは服が皺になることも構わずベッドに身を投げ出す。

今まで耐えていた涙が次から次へと溢れた。

挨拶をした時に見たネヴェンテルの様子を思い出し、メルグウエンは身震いした。

肩の辺りで切られた薄い白髪に囲まれた皺だらけの細い顔、鷹のよ
うな鼻、鋭い目、欠けた歯が覗く緑の垂れ下がった口。

食事の間に横目で見た長い爪を生やした染みに覆われた骨ばった手。

冗談じゃない。あんな老人と絶対に結婚なんかしたくない。

どうしたらいいのだろうか？

涙と鼻水を袖で拭いた少女は、結婚を止めさせる方法を考える。

目を閉じてじっと考えていると、結婚騒動ですっかり忘れていたり
グワルの笑顔がふと浮かんだ。

翌日は朝早くから大聖堂で礼拝がある。

城では城内の聖堂で礼拝があった後、年初めての鷹狩が行われる。

ネヴェンテルが近くにいたが、久しぶりに馬に乗ったメルグウエン
は狩猟を楽しんでいた。

五月らしい晴天に恵まれ、緑に染まった森の中は気持ち良かった。

お気に入りの隼ミルディンを皮の手袋をした片手に留まらせ、姿勢良く馬に乗って進む少女は美しかった。

昨夜は色々と考えて一睡もできなかったにも拘らず、少女の顔は晴れ晴れとしていた。

そんなメルグウエンを満足そうに眺めていたネヴェンテルは、少女に狩は好きかと聞き、メルグウエンが頷くと、自分の所有地にある森にも獲物が多いが、時に盗賊が出て困るという様なことを言った。

マルカリードも狩に参加していたが、訓練中に鷹に襲われたことがある少年は猛禽類を恐れて手ぶらだった。

鷹狩から城に戻り、豪華な昼食を取った後、夏至の祭りの日にまた来ることを約束し、ネヴェンテルは兵を従えて帰って行った。

それから毎日、メルグウエンは城を抜け出す機会を窺っていた。

夏至の祭りの前に何とかリグワルに会わなければならない。

しかし、叔母マリアニッグの監視の目は厳しく、気づかれずに城を抜け出すことは無理だった。

そして毎晩、今日も駄目だったとがっかりしながらベッドに入り、夏至までの日にちを数え、ため息をつくのだった。

とうとう夏至の祭りの前日になった。

五月祭の時のように数日前から準備で城内はおおわらわである。

昼食後、ラウドで新しい曲を練習していたメルグウエンは焦っていた。

明日はネヴェンテルと婚約しなければならない。

今日、脱出できなければもう望みはない。

マリアニッグにしかわからないことがあったようで、侍女が聞きに来た。

練習を続けるようにと言った後、呼びに来た侍女と一緒に叔母が部屋を出て行くのを見て、メルグウエンは今しかないと思った。

着替えている時間はない。

礼拝用の黒いシヨールを衣装箆笥から出し頭から被ると、メルグウエンは準備していた包みを腰に巻き、部屋を抜け出した。

リグワルは急に消えてしまった少女に腹を立てていた。

彼は少女が城内に住んでいることを知っていたが、少女の正体は知らなかった。

城で働いている知り合いに尋ねたが、グウエンという名の召使の子供はいないと言う。

本当の名前ではないかも知れないと思ったが、どうにも調べようがない。

そのうち、もうグウエンは死んでしまったのかも知れないと思うようになった。

その日、他の少年達と祭りの夜のため薪を積んでいるリグワルのところ、シヨールを被った女が近づいた。

リグワルは女の顔を見て驚いて声を出す。

「お、おまえ！！！死んじまつたんじゃねえのか?!」

「馬鹿なこと言っていないで、着いてきて頂戴」

聖堂の裏にリグワルを引っ張って行ったメルグウエンは早口で状況を説明した。

少女が城主の娘と知ってびっくり仰天している少年を見上げて自分の希望を伝える。

「あなたに私と一緒に逃げてほしいの。新年のお祝いに父からもらったお金と母の宝石を持ってきたから、直ぐに食べることは困らないわ」

リグワルはこの少女に惹かれていた。

前よりも背が伸び、体つきも女らしくなっている少女を見て考える。

しかし、メルグウエンより一つ年上とはいえ、城下町のガキ大将でしかない少年にそのような重大な決心をすることは不可能だった。

万が一逃げ切れなかったら？

捕らえられたら、城主の娘を攫ったとして罰を受けるのは自分である。

グウエンの金と宝石を持っていたら、その上泥棒の罪まで被ることになるだろう。

リグワルはまだ死にたくはなかった。

「今は一緒に逃げるのは無理だ。だけど、後何年かして俺が大人に

なったら絶対に助け出してやるから」

「今じゃなきゃ駄目なの。明日にはもう手遅れなのよ」

「今は一緒に行けない」

メルグウエンは絶望的な気持ちで、自分から目を逸らし俯く少年を見つめた。

「わかったわ。さようなら」

城に戻ったメルグウエンは、父の部屋に向かう。

あんな子供に頼った自分が馬鹿だったわ。

頼れるのは自分自身だけ。

「父上にお話があります。ネヴェンテル様との結婚を取り消してください」

「今更何を言うのだ。既に決まったことだ」

「私は結婚したくありません」

「ネヴェンテルとダネールの繋がりには、両家のために絶対不可欠なのだ」

「私は嫌です」

「おまえに拒否権はない。生まれた時からそう決まっていたのだから」

ダネールは話は終わりだとばかりに娘に扉を示す。

部屋から出て行く時に、父がすれ違いに部屋に入った召使に娘が逃げ出さないようよく見張っている様に言い付けるのを聞いた。

自分の見方になってくれそうな人は本当に誰もいないのか。

メルグウエンは弟の部屋に行った。

「マルカリード、話があります。私に力を貸してほしいのです」

姉から初めてその様に助けを求めれたマルカリードは驚いている。

「何でしょうか、姉上？」

「私はネヴェンテル様と結婚したくないのです。あなたから父上に話してもらえれば」

しかし、マルカリードは顔を顰めて、姉の言葉を遮った。

「姉上をお手伝いしたいが、それだけではどうにもなりません。家はネヴェンテルの兵力が必要なんです」

父は跡継ぎの息子には、ネヴェンテルとの繋がり必要性を説明していた。

マルカリードがメルグウエンに話したのは、ネヴェンテルはいつでも使える兵を百人も持っているということだった。

この地方では裕福なうちに入るダネールの城と隣のオルカン城の間では代々領地争いが絶えなかった。

ダネールの城には、オルカン城同様に十数名の騎士しかいない。

自分の娘と兵力を持つネヴェン城の城主との結婚の約束で、ダネールは自分の城を守ったのだ。

百人もの兵を食べさせるのは金がかかる。

金はダネールが娘の持参金として出すということになっていた。

ダネールは悩んでいた。

確かに今まで娘にあまり手をかけてやらなかったと思う。

戦略結婚の駒として見ていたこともあるが、それよりも彼女は似すぎていたのだ。

自分の妻の若かった頃に。

特に笑顔がそっくりだった。

けれども、メルグウエンの男勝りな性格は、母親から受け継いだものではなかった。

もしも妻が娘の様な強い性格だったらという思いを消すことができず、活発な娘を見ることが耐えられなかった。

メルグウエンはネヴェンテルと結婚したくないと言った。

明日の婚約式は何とかなるだろう。

しかし、その後は？

結婚を早めたほうがよいのか？

無理やりに結婚させたら、あの娘はどうするのだろうか？

大人しくネヴェンテルの妻の座に納まるとは到底思えなかった。

娘の反応を恐れている自分に気付き、ダネールは椅子から立ち上がり、部屋の中をイライラと歩き回る。

翌日、念入りに化粧をされ、婚約式の衣装を着せられたメルグウェンは、自分の部屋で椅子に座り、呼ばれるのを待っていた。

部屋には、マリアニッグの他に侍女と召使が3人いる。

もう逃げ出すことはできない。

このままネヴェンテルと結婚させられてしまうのか。

ネヴェンテルの奥方となり、彼の子を産むのか？

それだけは絶対に嫌だ！！！！

婚約はもうどうしようもないだろう。

しかし、結婚式までには後1年ある筈だ。

絶対に機会を見て逃げ出してやる。

それまでは大人しくして油断させるのだ。

婚約式は予定通りに聖堂で行われた。

祭司による拝礼の後、許婚の前に手を合わせ跪いたメルグウェンは、彼の接吻を額に受ける。

ルビーを散りばめた金の首飾りと金銀の糸で裏地一面に刺繍を施し

た黒いビロードのマントを贈り合った二人は、家族の祝福を受けた。こうして、両家の契約は結ばれた。

大広間での食事の後、ダネールはネヴェンテルとメルグウェンに向かって話す。

「今日は両家にとって誠に喜ばしい日です。そして、両家の絆は1年後に確実なものとなります。娘がネヴェンテル殿の申し分のない奥方となるため、この1年間バザーンの修道院で花嫁修業をさせようと思っっているのですが、ネヴェンテル殿のご意見を伺いたい」

「良妻賢母を育てるといふ評判の修道院ですな。話は聞いたことがあります。勿論異存はありません」

その夜、生まれてこのかた城を離れたことのないメルグウェンは、興奮して眠れなかった。

修道院での生活には不安があつたが、それ以上にバザーンまでの旅が楽しみだった。

途中、霧が多く危険な沼地や盗賊の出る森を通らなければならないと聞いたのだが、冒険好きな少女は全然怖いと思わなかった。

ダネールは直ちにバザーンの修道院長に手紙を送り、娘を受け入れる旨の返事をもらった後、修道院への出発は2週間後に決まった。

準備は着々と進み、ダネールがメルグウェンを修道院に送っていく

ことが決まった。

バザーンはエルギーオン地方の北西にある町で、海に向かって馬で5日程かかる所にあった。

野薔薇が咲き誇る夏の初めのある朝、メルグウエンは父と6人の騎士に守られバザーンに旅立った。

城の中庭には、母と弟が一行を見送りに出ていた。

父に留守を頼まれたマルカリードは不安そうな顔だが、ネヴェンテルとの絆もできた今、そんなに心配することはなさそうだった。

ダネールの奥方は、挨拶に近づいたメルグウエンに目を合わせず、お幸せにと呟いただけだった。

母親のそんな態度に慣れているメルグウエンは無言で腰を屈めると、隣に控えている召使から手綱を受け取り馬上の人となった。

乗馬は好きなメルグウエンだが、何日も続けて馬に乗るのは流石に慣れておらず、初めの数日はかなりきつかった。

馬から下りられるのは、昼食を取る時と夜宿を借りる時だけだ。

だが慣れてくると、自分の隣に行く滅多に口を開かない父親に色々質問をしては、回りの景色に目を輝かすのだった。

幸い晴天に恵まれて旅は順調に進み、盗賊に襲われることも、霧で迷子になることもなく、終わりに近づきつつあった。

町に近づいた証拠に、馬に乗った旅人にすれ違ったり、馬車の百姓を追い越したりすることが多くなった。

バザーンに入るには、パエール河に架かる橋を渡った。

河には小船が行き交い、橋の上は荷馬車や家畜、荷物を抱えた人々でごったがえしており、メルグウェンは目を見張った。

ダネールの城下町は小さかったため、この様に大勢の人を見るのは初めてだった。

一行はのろのろと進む列に並び、橋を渡った所にある門でダネールは人数分の通行費を支払った。

元々バザーンはパエール河沿いの小さな村であったが、2世紀程前から河と陸の交通路を使う商人が住み着き栄えたという。

その時の城主が町全体を囲う頑丈な城壁を作らせたため、敵に攻められてもバザーンは落ちることなく、ますます富み栄え現在に至る。

昼前だったが、その日はバザーンの町に泊まり、翌朝、町の東にある修道院に行く予定だった。

宿屋で昼食を取った後、ダネールは娘を伴い、バザーンの城主に挨拶に向かった。

城は修道院とは反対に町の西側にあった。

宿屋の親父の話では、城主のザルビエルは奥方、娘二人と長女の婿と暮らしているとのことだった。

息子に恵まれなかった城主は、昨年結婚した長女の婿を跡継ぎに決めた。

十数年の間、万が一城主に何かあったらと不安だった町の人々もようやく一安心したそうだ。

婿はまだ若く城主としては未熟だが、王家の遠縁にあたるフィルド家の次男で将来を期待されている。

長年、ザルビエルに養子を取るよう強く勧めていた町の長老達も満足いく婿であった。

夫の話に頷きながら一行に給仕をしていた女将も口を挟む。

「噂によるとジルド様の都仕込みの立ち振る舞いと見栄えの良さにエステル姫はぞっこんだそうですよ。こんなに幸せな結婚はありますまい」

「そうだな。後はお二人の跡継ぎが生まれるのを待つばかりだなあ」

お喋りな女将は、自分は出席していない婚礼の模様を詳細を加えて熱心に旅人達に語るのだった。

一行が城門に着き門番に名を告げると、跳ね橋が下げられ門が開かれた。

ダネールの城と同じ様な造りだが、バザーンの城は最近付け加えられた風な塔や装飾が目立った。

屋根はエルギーオン地方の赤い粘土瓦とは違い、青味がかつた黒い粘板岩で葺かれている。

親子は中庭で馬を降り、出迎えた召使に手綱を渡すと、侍女の後に続いた。

中央の塔の螺旋階段を上り、城主の部屋に案内される。

バザーンの城主はダネールと同年輩の男だった。

ダネールは小柄だが筋骨逞しく典型的なエルグ族の風貌をしていたが、対照的にザルビエルは赤ら顔に立派な口髭を蓄えた、でっぴりと太った大男だった。

側に立つ澄ました奥方と娘達も大柄である。

いずれ両親の様に肥えるだろう娘達は、メルグウエンの方を横目で窺っては、扇の影で互いに囁き合い忍び笑いを漏らす。

二人共明るい栗色の髪を最新の流行の形に結い上げ、都から取り寄せた服を纏っていたが、健康そうな血色の良い顔は美人ではなかつ

た。

長女の婿のジルードは皆より少し離れた所に立っていたが、宿屋の主人達の噂話に劣らず美男で礼儀正しく見えた。

ザルビエルは、ダネールが自分と同じく王軍の兵士として、エスペレンの戦に参加したことを知ると急に友好的な態度になった。

エスペレンの戦とは、25年前、ジュディカエル王即位の際に起こった先王の弟コノガンとの争いである。

7ヶ月もの戦いの末、王軍はエスペレンの丘で大勝利を収め、コノガン公を含む首謀者は斬首された。

父親が自分のことを城主とその家族に話しているのを眺めていたが、メルグウェンは頭では別のことを考えていた。

修道院に入るため、持っている中でも一番質素な服しか持ってきていない。

また修道院に個人の侍女を連れて行くことは禁じられているため、道中も自分で身の回りのことをしてきた。

髪は毎朝梳って、リボンで後ろに纏めているだけである。

明らかに自分の服装を馬鹿にしているザルビエルの娘達の態度には腹が立ったが、服装等はどうでもよいという気持ちもあった。

メルグウエンは一年間修道院で過ごすことになっていたが、その間、家に戻ることはないと決まっていた。

ダネールはネヴェンテルとの結婚を嫌った娘が何か行動を起こすことを恐れていた。

娘を修道院に預ける一番の理由は、自分では監視しきれない分、娘を逃げ出すことのできない環境においてしまうためであった。

4大祭祀さえ娘を迎えに来ないと言うダネールは、ザルビエルに道中が安全ではないためと説明しているが、メルグウエンは皆が自分を哀れんでいると思い怒りに唇を噛んだ。

「それでしたら、祭りの期間はメルグウエン姫に城に来てもらいましょう」

初めはザルビエルの申し出を丁寧に断ったダネールだったが、城への送り迎えは勿論、自分の剣に懸けて娘と同じ様に守るので強く勧められ提案を承諾した。

それでも、帰り際、見送りに出たザルビエルに結婚が決まっている娘なのでくれぐれも間違いのない様にと念を押すことを忘れなかった。

宿屋に帰る頃には既に日が暮れかかっており、長旅と城の訪問で疲れきった親子は、口数も少なく夕食を取ると早々と寝室に引き上げた。

翌朝まだ薄暗いうちに目を覚ましたメルグウェンはベッドに座って素早く着替え、ベッドを囲っているカーテンをそつと引いた。

父親はまだ眠っているらしく、ベッドはカーテンが閉まったままだ。床に脱ぎ捨ててあつた革靴を履くと忍び足で扉に向かう。

軋む階段を気にしながら広間に下りると、既に暖炉には火が焚かれ、女将が朝食の準備をしていた。

「おはようございます。よくお休みになりましたか」

濡れた手を前掛けて拭きながら挨拶する女将に軽く頭を下げたメルグウェンは広間を横切ると宿屋の扉を開けた。

まだ冷たい朝の空気を胸いっぱい吸い込む。

マントを被りベンチに横になっていた騎士が起き上がり、音もなくメルグウェンの背後に立つ。

「おはようございます、グウェン様」

急にかけられた声にビクツとしたメルグウェンだが、頬に僅かな微笑みを浮かべると振り返らずに答える。

金も剣も持たない自分が逃げるわけがないのに。

「おはよう、パエール。見張り番ご苦労様」

バザーンの修道院は町の東にある丘の上にあった。

バザーンの修道院の歴史は、半世紀程前にバザーンの大祭司がトリ
ンの男子修道院を対照とした女子修道院をバザーンに造ることを決
め、自分の妹を修道院長にしたことから始まる。

当初から修道院としての役割の他に、裕福な家庭の子女に必要な教
養と家事を教え込むことを目的とした寄宿学校も兼ねていた。

修道院に着いたダネールとメルグウエンは、若い修道女に面会室に
案内される。

例え父親であっても修道院内は面会室以外、男性禁止となっていた。

さほど待たされることもなく修道院長が部屋に入ってきた。

背が高くがっしりした体つきの修道院長は、案内の修道女と同じ灰
色の修道着を身に纏い、同じ色の布で髪を隠していた。

その眉間に皺の刻まれた厳しい顔を見てメルグウエンは自分の叔母
を思い出した。

修道院長は立ち上がるうとするダネールとメルグウエンを視線で押
しとどめ、木の机を挟んで自分も席に着いた。

挨拶の後、二人に修道院の規則と一日の時間割を説明する。

確かにこれでは余計なことを考えている暇などないだろう。

安心したダネールは、娘に別れを告げ、修道院長に挨拶をすると修道院を後にした。

修道院長と廊下に出たメルグウエンは、立ち去っていく父親の後姿を心細い気持ちで見つめていた。

修道院長に連れられてメルグウエンはほの暗い修道院内を歩いた。

厚い灰色の石壁に囲まれた修道院は厳格な建物だった。

柱の上部に施された彫刻以外の装飾は一切無い。

建物の中心にある中庭は、花も無く砂利が敷き詰められているだけであったが、真ん中にある噴水からはキラキラと陽の光を反射して水が流れ落ちていた。

中庭を囲むアーチの列から成る回路を通り、集会室、図書室、食堂と見て回る。

静かな空間、石の床に響く靴の音、重い木の扉が立てる軋んだ音、淀んだ空気に微かにロウソクの匂いが混じる数々の部屋、これらがこれから自分の生活の一部となるのだ。

現在、バザーンの修道院には、58人の修道女が暮らしている。

その内7人は修道女見習いである。

寄宿生はメルグウェンを入れて36人になるとのことだった。

修道女は灰色の修道着、寄宿生は薄茶色の修道着と決まっている。

まだ正式な修道女ではない見習いは白の修道着だった。

また修道女になるためには剪髪式があったが、寄宿生はある期間を過ぎると俗世に戻るため髪は切らない。

食べ物も修道女は肉は禁止されているが、寄宿生の食事には1日1品肉が付いた。

見学の途中で見かけた女達は好奇心に満ちた視線をメルグウェンに向けてはきたが、声をかけてくる者はおらず、すれ違う際に無言で頭を下げた挨拶をするだけである。

暗い螺旋階段を上ると長い廊下があり、その左右に続く部屋が修道女と寄宿生の寝室だった。

「ここが今日からあなたの部屋です」

と言って案内された一室は、両脇に小さなベッドが設えられた質素な造りであった。

そこでメルグウェンは部屋のもう一人の主を紹介された。

修道院では、余程身分のいい家庭の子女以外は、二人で一部屋が当たり前である。

「では着替えて、食事の時間になったら食堂に来てください」

修道院長はそう言うと二人を残して去った。

メルグウエンと同室になった娘は、国の北東にあるブラバン地方の貴族の娘でマルゴーという名である。

マルゴーはメルグウエンより2歳年上だった。

今まで同じ年頃の同性の友達がいたことのないメルグウエンは嬉しかった。

マルゴーは典型的なブラバン地方の風貌で、殆ど白く見える金髪に灰色がかかった蒼い瞳を持っていた。

それは黒髪黒目のメルグウエンにとっては、とても珍しく綺麗に見えるものであった。

マルゴーは既に一年前から修道院で生活しており、新しく入ってきたメルグウエンに色々と説明をしてくれた。

「自室では多少話すことができるけど、仕事中和公用の場では私語は禁止されているわ。今朝はあなたが来るので、私は特別にお休みをもらったの。普段は今の季節は大抵畑仕事よ。庭師は勿論いるのだけど、私達の仕事は薬草庭園の世話、染物に使う植物の採取、農園や果物園の収穫等色々あるわ。午後は日によって違うので、今日は歌のレッスンよ」

メルグウエンはベッドに置かれた修道着を手に取った。

薄茶色に染められたゴワゴワする麻でできた服に着替え、髪を後ろ

で纏めて括り頭布を被る。

部屋には鏡はない。

「可笑しくないかしら？」

「頭布はもうちょっと前に引っ張ったほうがいいわ」

自分も頭布をぴっちりと被ったマルゴーがそう言いながら手伝ってくれる。

「ありがとう」

「馴れば簡単よ。今日みたいな暖かい日は頭が蒸れるから自室に戻る度に脱いだり被ったりしているわ」

準備ができたメルグウェンが今まで着ていた服を自分の荷物にしまい終わると、立ち上がったマルゴーが言った。

「そろそろ食事の時間よ。鐘が鳴り出したら直ぐに出ないと間に合わないの。遅刻したら食事抜きになるから気をつけた方がいいわ。廊下に出たら私語は禁物よ」

鐘が鳴り出すと二人は廊下に出た。

同じ様に他の部屋から出てきた女達で廊下は込み合っている。

そろそろと階段を下りて食堂に向かう。

先程見学した時にはガランとしていた食堂は、今や同じ服装の女達でごったがえしていた。

しかし食堂では話すことを禁じられているため、ベンチの軋む音以外は静かだ。

部屋を出る前にマルゴーに説明してもらったが、食堂は修道女側と寄宿生側に分かれている。

そして寄宿生側の席は自由に選べる。

話すことができないので誰の隣でも構わないのだが、皆大体同室の人と座るとのことだった。

メルグウェンも黙ってマルゴーの隣に腰を下ろす。

修道着を着ていない赤ら顔の太った女とほそつぼちの少女が、大きな鍋を乗せた車の付いた台を押しながら、席に着いた皆の後ろを通り、器に料理をよそっていく。

湯気を立てている料理はとても良い香りで、メルグウェンは思わず出てきた唾を飲み込んだ。

父親と朝早く朝食を取ったためとても空腹だった。

皆が席に着くと、修道院長が3人の年配の修道女を従えて入ってきた。

3人の中で一番若く見える修道女が、手を膝に置き俯いている娘達

を見回し、声高に祈りを捧げる。

祈りが終わると、修道院長はメルグウエンに立つように命じ、彼女を皆に紹介した。

そして、修道院長ら4人が修道女側の席に着くのを見て皆食べ始める。

食事は量は少ないが質の良いものだった。

鶏と野菜の煮込みは程よく煮えており、月桂樹やパセリの香りがする。

厚めに切ったパンも美味しかった。

飲み物は大きな水差しに入った林檎を発酵させて作るシストルがあった。

木の器に盛られた料理を夢中で食べていたメルグウエンは、やっと空腹も治まり、顔を上げて同じテーブルにしている娘達を見回した。

皆自分の皿に目を落とし大人しく食べている。

城でも食事中に話すことはあまりなかったが、これ程の人数がいるにも拘らずこの沈黙は不自然だった。

いくらも経たない内に、メルグウェンは自分が修道院の暮らしに向いていないことに気付いた。

最後の数ヶ月は叔母の監視の下だったが、今まで比較的自由に生きてきたメルグウェンにとって、修道院の生活は相当窮屈なものだった。

修道院の一日は聖務日課によって区切られている。

寄宿生は日の出から日没までの時課を行えば良く、真夜中の時課には出なくても良いことになっていた。

それでもまだ夜が明けない内に起きることは辛く、鐘の音も耳に入らず熟睡していて、マルゴーに揺すり起こされて初めて目が覚めるのであった。

祈りの最中にウトウトすることもあった。

寝惚けてうっかりと聖歌の本を床に落としてしまい、周りの人に白い目で見られたこともあった。

夜は一日の疲れでベッドに横になるとすぐ眠りに落ちてしまうのだった。

修道院に入って1カ月も経たない内にメルグウェンは規則を破った

として何度か罰せられていた。

薬草庭園で草むしりをしている時に隣の農家から手伝いに来ている女に話しかけたのが初まりだった。

知らない薬草の名を尋ねただけで、何故他の娘よりも長い時間草むしりをしなければならぬのか分からなかった。

次は朝の集会で自分より年配の修道女に失礼な態度をとったとして、他の娘達がバザーン風のレース編みを習っている時間、礼拝堂で反省していなければならなかった。

言葉遣いが悪かったとは思わないし、自分の意見を述べただけで、何故それが失礼な態度になるのか分からなかった。

初めは修道院の習慣に馴染もうと努力していたメルグウエンだったが、納得できない理由で繰り返し罰を受けるにつれ、特に反抗的な態度を取ることにはなかったが、素の自分を隠そうとしなくなった。

自分が興味あることには禁止されていても近づいたし、仕事中でも食事中でも自分が話したい時には話し、笑いたい時に笑った。

寄宿生も参加できる勉強会では教典のある章を読みその内容について論議するが、それでも自分の意見を曲げようとせず、先生との一対一の激しいやりとりが長引き、終了の時間までに決着つかないことが頻繁に起こった。

そのため勉強会は一時的に中止となり、その時間退屈していた娘達はメルグウエンに感謝した。

毎日の僅かな自由時間は、普通は昼寝や家族への手紙を書くのに使われるのだが、メルグウエンは木の枝を削って作った剣を持ち敷地内の林に走り木々を相手に剣術の稽古をするのであった。

そのようなメルグウエンだったが、他の寄宿生からの評判はよく、彼女が通ると皆憧れの眼差しで見るといった。

また同室のマルゴーも呆れながらもよくメルグウエンの世話を焼き、食事を抜かされ自室で反省させられているメルグウエンに自分が食べ残したパンを隠して持ち帰り食べさせるのだった。

メルグウエンが他の娘達に与える影響を恐れた修道院長は何度かダネールに手紙を書いていった。

その度ダネールからは厳しくご指導を願うという返事がきた為、その娘に与えられる罰は段々と厳しいものになっていった。

体罰まではいかなかったが、冷たい礼拝堂の床に跪いたまま一晩祈り明かすこともあれば、パンと水だけを与えられて地下室に一日閉じ込められたこともあった。

しかし、メルグウエンに操行を改める気配はなく、毎日のように修道院の規則を破っては罰を受けるのだった。

収穫祭には殆どの寄宿生は家族の元に帰る。

1週間前から迎えの者が次から次へとやって来て修道院内は慌しかった。

家に戻れないメルグウエンは一人寂しく修道院で過ごしていた。

バザーンの城主ザルビエルは祭りにはメルグウエンを城に招くとダネールに約束したが、あれはただ挨拶みたいなもので、自分達のような田舎者はすぐ忘れられてしまったのだらうとメルグウエンは思っていた。

だが収穫祭の3日前、ザルビエルからの迎えにメルグウエンは病気で臥せているから行かれないと断ったと修道院長に言われ、初めて自分の今までの態度を激しく後悔した。

次から次へと与えられる罰に根競べの様に、絶対に服従するまいという意地で耐えていたメルグウエンだったが、修道院長の方が一枚上手だった訳だ。

一時的にでも修道院を抜け出す唯一の機会だったのだ。

次の祭り、感謝祭までには2カ月以上もある。

それまでは絶対に大人しくしなければならぬ。

ザルビエルはまた迎えを寄こしてくれるのだろうか？

その時、修道院長は自分が城に行くことを許してくれるのだろうか？

それから、見違えるほど大人しくなったメルグウエンを見て、やはり厳しく指導したことが良い結果を招いたと教育者達は頷いた。

やがて季節は移り変わり、陽の光は弱まって風は冷たくなり木々は黄金色に染まった。

ある午後、薬草庭園の手入れをしていたメルグウエンは、頭上から聞こえてきた鳥の騒がしい声に痛む腰を伸ばし空を仰いだ。

渡り鳥が群れを成して南に向かって飛んで行くところだった。

鳥は自由だ。

翼の無い私はここに縛られている。

鳥達が戻って来る頃には、婚礼の支度のため城に帰らなければならぬ。

そして、夏至の祭りにはネヴェンテルの奥方となる。

夜、終課を終え自室に引き取ってから、メルグウエンはマルゴーと悩みを打ち明け合うことが多くなった。

マルゴーは子供の頃から一緒に育った従兄と婚約していたが、隣国の大学に行っていた従兄が1年前病で亡くなってしまった。

花嫁修業のため修道院に入れられていたマルゴーは、そのまま親が

新しい結婚相手を見つけるまでの間、バザーンに残ることになった。マルゴーは従兄が忘れられず、修道女になるつもりはないが、家に戻るのも気が進まないのであった。

「フロリアンとは5年前から離れ離れだったから、死んでしまったという実感がわからないの。他の人と結婚はしたくないけど、家のためだから諦めてるわ」

「私は諦めきれないの。家のためでもあんな爺と結婚するなんて死んだ方がましよ」

「でも具体的に結婚を止めさせる手立てはないんでしょ？」

「色々考えているの。逃げ出しても野垂れ死にはしたくないし」

「女が一人で生きていくのは無理よ」

「あーあ、私が男だったら、剣一本で身を立てるのに」

「そういえば、夏に家に帰った時に噂で聞いたのだけど、最近お金で雇われて戦をする雇われ兵が西部に増えているそうよ。何でも貴族の次男坊が金稼ぎのために自分の部下の騎士を引き連れてそういうことをやっているという話だったわ。いざという時には戦力になるから王も非公式には認めているみたい。バザーンは絶対落ちないと言われているから安心だけど、故郷の町では戦に備えて色々準備をしていたわ」

「物騒な世の中よね。私の家も隣人との領地争いが絶えなくて、父は私を戦力を持っている男に嫁がせることで自分の城を守ろうとし

ているのよ。あんな山奥の領地なんかあったってどうってこともないと思うんだけど。どうして男って自分の持っている物だけで満足しないのかしら？」

「それが人間のさがなんでしょうね」

「嫌だわ。そんなことのために犠牲にされる娘達はそついう運命だったっていう訳？私は絶対に最後まで諦めない」

そつ言い切ったメルグウエンだったが、良い考えは全然思い浮かばなかった。

収穫祭の時と同様に感謝祭の1週間前から修道院内は騒がしかったが、娘達が帰路につくにつれ静けさを取り戻す。

待ちに待ったザルビエルの迎えは、祭りの2日前の朝に来た。

前日に知らせを受けていたメルグウエンは、修道院に来た時に着ていた服を身に着けて待っていた。

数着の着替えと肌着だけの小さな荷物を抱えて、ザルビエルの御者と侍女に付き添われて修道院の敷地を出た。

外は朝から薄暗く霧雨が降っているにも拘らず、メルグウエンにとっては明るく眩しく思えるのだった。

馬車までの道を歩きながらひんやりと湿った空気を胸いっぱいに吸い込む。

数日間だけだが自分は自由だと感じるのは気持ちが良いものだ。

城に着くと城主自らメルグウエンを迎えに現れた。

客間に案内され落ち着くと奥方と娘二人が挨拶に来た。

奥方はメルグウエンに対して礼儀正しかったが、あまり興味はなさそうだった。

娘二人は初めて会った時の様にメルグウエンの服装をジロジロ観察

していたが、口では来てくれて嬉しいというようなことを言った。

奥方と娘達とはあまり気が合いそうもないとがっかりしたメルグウエンだったが、ザルビエルのことは信頼できる親切な人だと思った。どうやらザルビエルは外見に違わず優しい心の持ち主で、親元を離れて暮らしているメルグウエンを気の毒に思い、同じ年頃の娘がいる自分の城に招待してくれた様だった。

ザルビエルの婿のジルードとは食事の時に顔を合わせた。

自分の魅力を十分に承知し余裕たっぷり、都会人らしく話術の巧みな男をメルグウエンは初めから苦手だと思った。

何気ない顔で雑談に応じながら冷静な目で人を観察しているジルードを危険な男と感じていた。

何故かジルードは執拗なくらいにメルグウエンの家のことを聞きたがった。

その口調が気に食わなかったメルグウエンは失礼にならない程度に素っ気無く答えた。

次の日の朝、習慣で早く目が覚めてしまったメルグウエンは、窓の外が明るくなるとすぐ起き出した。

前夜祭の準備でおおわらわな城内は、メルグウエンにダネールの城を思い出させた。

感謝祭は明るい季節から暗い季節への移り変わりを祝う祭りであり、年一回感謝祭の前夜には神々の世界の扉が開くと言われている。

そして迷信深い人々は死者の霊が地上を彷徨う日と信じていた。

祭りを中心に前後の7日間は、年の流れに含まれない非時間的な期間とされ、戦士は征服や襲撃を止め、農耕民や牧畜民、職人は仕事を休む習慣だった。

その期間は町の広場に市が立つ。

大きな町ではこの日の為に辺り一帯から農家で取れた蜂蜜や葡萄酒を売りに来る農夫、砂糖漬けや薬草を売りに来る修道士、珍しい外国の布や香料を売る商人、見世物や大道芸等が集まりとても賑やかになる。

前夜祭には大掛かりな焚き火が焚かれ、その神聖とされる火を人々は松明に移し、大切に家に持ち帰りかまどに入れるのだった。

祭りの日には朝から大聖堂で礼拝がある。

メルグウェンは城主の娘達と一緒に城内に飾る麦の穂の小さな束を作り、林檎遊びで使う林檎を選んだ。

次女のコーリンは修道院での生活を詳しく聞きたがった。

メルグウェンが寄宿生の時間割と規則を話すと、姉のエステルと顔

を見合わせて大袈裟に笑った。

「よくそんな場所で暮らせるわね」

「仲の良い友達もできたし、色々教わることはあるわ」

メルグウエンはそう答えながら、何故自分も嫌っている修道院を悪く言われると腹が立つのだろうと不思議になる。

やがて城主の娘達は支度をして来るからと言って、メルグウエンを残して出て行った。

メルグウエンも自分に与えられた部屋に戻り、持ってきた中では一番地味ではない服を出して着替える。

修道院までザルビエルが迎えに寄こした侍女が着替えを手伝い、髪を結い上げてくれた。

前夜祭の夜、城での食事には町の長老や祭司等の有力人物が招待されていた。

メルグウエンは城主の客としてジルドと祭司の間に座らせられた。ザルビエルに悪気はなかっただろうが、メルグウエンにとって食事の時間はとても長く感じられた。

ジルドはもうメルグウエンには興味はない様で、反対側に座っている義妹のコーリンとずっと話していた。

正面に座っている妻のエステルも時々会話に加わり、楽しそうに笑い合っている。

目をシヨボシヨボさせた猫背の祭司は、修道院長をよく知っていると言いつつ、修道院のことを色々尋ねてきたので、メルグウエンは居心地が悪かった。

食事が終わると音楽が始まり、城主の娘達は唄と踊りを披露した。

メルグウエンもあまり気が進まなかったが、ザルビエルの親切に伝えようと思いつつ皆の前でラウドを演奏した。

ザルビエルの奥方のものだったラウドは、バザンではバルハートと呼ばれており、メルグウエンが家で弾いていたものよりも本体が丸く大きく弦が硬かった。

あまり上手く演奏できなかったと思ったが、城の客は綺麗な音色だと褒めそやし、メルグウエンの生まれ故郷について色々尋ねるのだった。

夜が明けるまで、人々は飲み、歌い、踊った。

それは、栄える町バザンの最後の平和な夜となった。

2年前の冬。

ドドッ、ドドッ、ドドッ……

冬の朝の冷たく湿った空気の中、落ち葉の敷かれた狭い林の道を馬で駆け抜ける男がいた。

馬の背に身を伏せてただまっしぐらに馬を走らせる。

林を抜け、今は干からびた草しか生えていない畑の間を歩いて行く。

やがて畑も途切れ、馬は速度を緩めないまま丘へ駆け上がった。

しかし、前方に海が見え始めると男は手綱を引き、並足で小道を進んだ。

丘の頂上近くに馬を止めた男はまだ若かった。

端正な顔の口元にはまだ幾らかあどけなさが残っていたが、大柄で逞しい体つきは既に大人の男のものだった。

体にぴったりとあった鼠色の胴着を着て、腰には剣を帯びている。

海から吹き付ける身を切るような風にもビクともせず、どこまでが空でどこからが海かはつきりしない水平線をじっと見つめている。

冬の海は鉛色で波が高く、うねり狂うような水面は眩暈を引き起こ

しそうだ。

馬が身震いをして嘶いた。

波の音に混じって蹄の音が聞こえ、海を見ていた男は眉を顰めチツと舌打ちすると、自分が来た方向を振り返った。

馬に乗った男が二人近づいて来た。

一人は男と同じ年恰好、一人はまだ少年だ。

二人共顔を火照らせ息苦しそうだ。

「ガブリエル殿、今日のご報告の日です。逃げ出すことはできませんぞ」

「せめて一言私に声をかけてからお出かけください」

同時に声をかけてくる二人を鬱陶しそうに見ながらガブリエルは答えた。

「逃げ出してなどいない。海を見に来ただけだ」

それだけ言うと馬の首を返し、さっさと元来た道を戻り始める。

二人は慌てて後を追いかけた。

その日の午後早く、ギドゴアール地方きつての名家キリル家の城に、

家来二人を伴い馬を乗りつけた若者がいる。

それは、ダネールの城はともかく、ザルビエルの城も足元に及ばぬ
壮大な城だった。

果てしなく続くと思われる城壁には東と西に正門と裏門があった。

建物全体の屋根と高く聳える数多くの塔の屋根は鉛の板で葺かれて
いる。

建物の窓には珍しい色のガラスがはめ込まれている。

レースの様に細かく石を刻んだ立派な聖堂もある。

跳ね橋を通り正門を潜ると若者は、目深に被っていたくすんだ青の
外套のフードを脱いだ。

その首筋あたりで切られた髪は栗色で、目は青みがかつた灰色だ。

朝早く海を見に行っていたガブリエルである。

ガブリエルを中庭に出迎えた男は、城主キリルの長男ジョスリンだ。

こちらは流行りの形の緋色の帽子を被り、薄茶色で内側が緋色の外
套を着ている。

ガブリエルより頭一つ程背が低いが、良く似た整った顔立ちをして
いる。

ガブリエルが馬を下りると、近づいてきたジョスリンが肩を抱いた。

「元気が、ガビツク？」

抱擁を返したガブリエルが言う。

「ああ。兄上は元気そうだな」

「相変わらずさ。チビは日々悪知恵が発達してくるようだし、赤ん坊は泣き喚くし、忍耐力が求められる毎日だ」

「ハハツ…パドリック殿は俺に似ているからな。アゼノール様はお元気か？」

アゼノールはジョスリンの妻である。

「ああ、後で顔を出すと言ってた。おまえに冬物を縫ったそうだ」

「それは有難い」

「ほら、行こう。父上が待ちかねている」

二人は話しながら城主の寝室や居間がある主塔に入って行った。

ジヨスリンとガブリエルは子供の頃から仲の良い兄弟だった。

剣が持てる歳になると二人共、母方の叔父ルゲーンの城に送られた。近くの貴族の家から同じ様に送られて来た同年輩の少年3人と、ルゲーンの小姓として4年間勤めた。

その後、二人は近習に昇格し、ルゲーンの側で更に4年間勤めた。

ルゲーンは自分の甥達を他の少年達と少しも区別せずに厳しく鍛え上げた。

特に乗馬、剣、槍、弓等の武器の扱い、一対一の戦い、多数の敵を相手にした戦いの戦略等、様々な厳しい稽古を受けた。

全てにおいて平凡なジヨスリンに対して、ガブリエルは乗馬と剣術の上達がずば抜けて早く、実戦の経験も多いルゲーンが舌を巻くほどの戦略を考え出した。

確かに子供の頃から、誰も思いつかないような突飛なことをやらかしては、周りの人々を散々な目に遭わせてきたガブリエルであった。ガブリエルがまだ幼いうちにジヨスリンと一緒に叔父の城に送り込まれたのは、彼を扱いかねた両親が困って叔父に頼み込んだという理由がある。

彼が考えつく数多くの悪戯のとはっちりを一番先に食うのは兄のジ

ヨスリンだったが、ジョスリンはあまり怒ることも無く弟を庇っていた。

叔父の城に着いて初めに思いついた悪戯は、人間大型投石器を作ることだった。

小姓の少年達が誰も実験台になろうとしなかったため、自分自身で試し、手足を縛られたまま川に飛ばされ溺れかけた。

それを知った叔父はガブリエルを殴ったが、説教をしているうちに笑い出してしまい、それっきりになったのだった。

数年後、近習の少年達と僅か5人で、叔父の隣人の城主を騙して誰も傷つけることもなくその城を占領した時には、大騒ぎになった。

騙されて自分の城を追い出された城主が激怒して王に訴えると言い出し、訴えを取り下げてもらったためルゲーンは苦心惨憺した。

その時モルゲーンはガブリエルをきつく叱ったが、その後にはあれは名案だったと笑ったのだった。

大きくなるにつれ多少落ち着いてはきたが、怖いもの知らずで短気、そして楽天的な性格はそのままだった。

成人したジョスリンは翌年の春、父親と叔父に付き添われ首都に赴き、王に騎士の称号を授けられた。

故郷の城に戻ったジョスリンは妻を娶り、時期城主として父親と行

動を共にしていた。

ジョスリンよりも3歳年下のガブリエルは、ジョスリンがいなくなった後も叔父の側に残り、やっと半年前に騎士となり、キリルの城に戻って来た。

この時代、貴族の長男以外の息子は、軍人になるか、聖職者になるかのどちらかだった。

ガブリエル達の弟もまだ幼い頃から修道院に入って暮らしている。

その弟とは殆ど顔を合わせることがない。

ガブリエルの将来はもう決まっていると言っても良かった。

他の城主のお抱え騎士となるか、首都に上り王軍の兵となるかのどちらかである。

しかし、父親のキリルはガブリエルが自分の側から離れることを望まなかった。

彼の無鉄砲な性格が災いして何か騒ぎを起こし家の恥となることを恐れてもいたし、城主として彼の力を頼りにしていた。

キリルが跡継ぎのジョスリンと話し合って決めたことは、ガブリエルに少しの土地を与えて管理させることだった。

その土地には、キリルの父方の祖母が夫を亡くした後、余年を過ごすため建てられた小さな古い城があった。

ずっと使われていなかったため、多少の修復工事が必要だった。

キリルが金を出し、工事がやっと終わったのが一ヶ月前だ。

それからガブリエルはその城で暮らしていた。

彼は城主ではない。

城主はあくまでもキリルであり、ガブリエルはキリルの持ち物である城に住まわしてもらっている訳だ。

そのため、一カ月に一回キリルへの報告を義務付けられていた。

そして今日は2度目の報告の日だった。

翌日、朝早くからガブリエルは近習のルモンと小姓のカドーと共に作戦を練っていた。

ガブリエルより1歳年下のルモンは、藁色の髪に青い目の頑丈な若者で、少し猫背なのを覗けば結構男前だ。

カドーは金髪に薄茶色の目、そばかすが沢山散った顔をしたやせっぽちで手足ばかり長い少年だ。

二人は半年前からガブリエルに仕えている。

二人共ガブリエルが好きで、この大胆で冒険好きで、気前がよく細かなことに無頓着な主人にどこまでもついて行く気である。

そして現在のガブリエルの状況に心を痛めていた。

ガブリエルは、父親から毎月小遣いを貰っているが、それだけでは食べていくので精一杯だ。

その他に父親に与えられたのは、以前から城を管理していた中年の夫婦の家来。

これは妻が料理と掃除洗濯、夫が雑用と庭仕事を受け持つことになった。

それに近習のルモンと小姓のカドーだけである。

ガブリエルは他の城主の下で働きたいとは思わなかったし、王軍に入るのも躊躇われた。

自分の自由にできる今の生活が一番自分に合っているように思える。

ただ、金が足りなかった。

手っ取り早く金を稼ぐにはどうすれば良いのか？

暖炉の前に陣取った3人の男は、朝食の黒パンとベーコンに齧り付きながら思いつくことを次々と口にしていった。

「やっぱり盗賊しかありませんかね。覆面して旅人を襲えば分からないでしょう」

ルモンがとんでもないことを言い出した。

「おい、そりゃあないだろ。俺を縛り首にさせたいのか？」

「法に触れることは絶対に駄目ですよ」

カドーがおどおどと言う。

この少年は年の割にはよく気がきくのだが、臆病なのが玉にきずだった。

「俺は騎士としてある城主に縛られるのはご免だが、一時的だったらどうだろうか？」

ガブリエルが自分の考えを話す。

「何年間か期間を決めてと言うことですか？」

「いや。戦の時には城主は兵を集めるだろ？だがその兵はいつもは畑を耕したり、靴を直したりしている奴らだ。満足に戦える筈がない」

「そうですね。槍を干草を掻き集めるのに使う熊手か何かと想っている人達に多くを求められませんよ」

「だから、戦を起こす貴族から金を取って俺達の力を貸すのさ」

「ちゃんと金を払ってくれますかねえ。戦に負けた場合はどうするのですか？」

「俺達3人で勝ち負けを決定付けることは無理だろ。ああ、2人半か」

「えっ、私も行かなきゃならないんですか？」

情けない声を出したカドーをルモンが睨み付ける。

「そりゃあ、小姓だったら一緒に行くのが当たり前だろう」

「前払いしてもらおうしかないな」

「信用してもらえますかねえ」

「うーん。まあ当分はここらで行われる馬上槍試合に出場しまくって宣伝でもするか。勝てば金も貰えるし一石二鳥だわ」

馬上槍試合は、4大祭祀の期間以外は一年中、特に春から秋にかけて頻繁に行われる催し物である。

規模の小さいものでは数百人、大きいものでは数千人もの参加者が集まる。

有名な試合には外国からも多くの若い騎士達が自分の腕を試しに来る。

ギドゴアール地方でも暖かい季節には、かなり大きな試合が行われた。

冬の間も小さい試合ならいくつかある筈だ。

ガブリエルは、カドーに2週間以内に近くで試合があるか調べるように言いつけて、父親の城へ行かせた。

馬上槍試合に出る前に、腕を試す機会は思ったよりも早く現れた。

ジユデイカエル王の遠縁の者がお忍びで隣国に行くことになり、途中ギドゴアル地方の南部にある森を通らなければならなくなった。

昼間でも夜の様に暗い鬱そうな森には熊や狼、はたまた盗賊が出るとの評判で、近辺に住む人々は絶対に森に近寄らなかつた。

更に迷信深い人々は、ブレシリアンの森には、それだけではなく靈や妖精のたぐいも出ると信じて疑わない。

大袈裟な護衛をつける訳にもいかず、内密に地方で腕の立つ騎士を求めているとの話がキリルにあった。

キリルは直ちにガブリエルを呼び、依頼をしてきた王の使いの者に引き合わせた。

使いの者はガブリエルがキリルの息子だと知り、その姿を見て安心した様だった。

前金に200ゾル、旅人を無事隣国に送り届けたら残りの300ゾルを支払うと言われ、ガブリエルは平静を装いながら内心では興奮していた。

500ゾルとは節約すれば一年間は何もしないで暮らせる金額だ。

話はトントン拍子に進み、ガブリエルは使いの者と詳細を詰め、全

てが決まると握手をして別れた。

数日後、準備を整えたガブリエルら3人は、雇い主との待ち合わせ場所のブレシリアンの森近くの町に向けて出発した。

冬の夜は長い。

暗い中の移動は危険が伴う。

盗賊に襲われることもあるし、道に迷ったり、悪い場合には崖から転落したり、沼に嵌ったりすることがある。

そのため旅は日中に限られていた。

ガブリエルの城からブレシリアンの森まで、馬で一週間程かかる。

馴れている者にとっても、この季節の旅は結構辛かった。

ギドゴール地方は国の西にあり、海に面している。

その為、冬でも気温はマイナスになることは殆どなく、雪は降らなかったが、湿気が多く霧雨が降ることが多かった。

一日中霧が晴れない日もあった。

ブレシリアンの森までは途中町を通ることは稀なので、夜は運良く荒野に点在している人家に辿り着けばいいが、そうでなければ野宿である。

針のように細かく冷たい雨に一日晒された後、やっとありつけるのは固いパン、休めるのは泥濘んだ地面というのは堪えた。

その日は運良く漁師の小屋に宿を借りることができた。

独り者の漁師が暮らしている粗末な小屋だったが、海草と泥炭を焚いた暖炉で服を乾かし、暖かいスープにパンを浸して食べられるだけでも有難かった。

唇を紫色にして歯をカチカチ鳴らせていたカドーは、縁の欠けた土器の器によそわれ湯気を立てているスープに感激の涙を流さんばかりだ。

顔に深い皺の刻まれた口の重い漁師は随分歳を取っている様に見えるが、実際はガブリエルの父親ぐらいかも知れない。

食事が終わり萎びた林檎を齧りながらガブリエルが尋ねた。

「冬でも漁に出るのか？」

漁師は暖炉の前の地面に座り網を繕っている。

「天気の良い日には出ますです」

「この季節は何が獲れる？」

「運がよけりゃ鱸が釣れますわ。蟹や海老も獲れます」

「ふーん、そりゃ豪勢だな」

革の小袋から笛を取り出しながらルモンが言った。

「ここら辺は妖精が出るって言うのは本当ですか？」

漁師はそれを聞くと、慌てた様に手を顔の前で振って言った。

「しーっ、そんな大声で奴らの話をしたらいかん。霧の深い夜などは裏の荒地のあたりにウジャウジャ出て来おる」

「爺さんは見たことあるのかい？」

「若い頃、夜道を歩いていたら出つくわしたことがある」

「どんな奴だったんだ？」

「わしの腰辺りまでで、目玉が飛び出そうにでっかくて耳が尖った奴じゃった」

「へーえ、会ってみたいもんですね」

「いやいや、お若いの。奴らは本当に狡賢い。無用心に近づけば痛い目に遭いますぞ」

漁師は怖そうにそう言つと、暖炉に向かって何かを呟きペツと唾を吐いた。

「それっておまじないか何かですか？」

体が温まって元気が出てきたらしいカドーが尋ねた。

「奴らがわしの小屋に近づかないためじゃ」

ガブリエルがルモンの笛を取り上げた。

「俺が吹く」

ガブリエルがギドゴール地方に伝わる民謡の節を繰り返して吹くと、ルモンが歌い出した。

ルモンはガブリエルに仕える前、騎士にならずに吟遊詩人になると真面目に思っていた時期もあったそうで、とてもいい声だ。

短く単純な節が繰り返される曲で、若い娘が月夜に荒野に彷徨い出て、妖精に惑わされ婚約者を忘れて踊り明かし、最後には呪われて彷徨える魂となってしまふ話だ。

途中からカドーが手拍子を打ち、いつしか漁師も木靴を踏み鳴らしていた。

深い霧の中、小さな黒い影が漁師の小屋に近づき、尖った耳をすませていたのを誰も気付かなかった。

旅は順調に続き、夕暮れ時には時折自分達以外の足音が聞こえる気がしたが、何者にも出くわすことなく、一行は約束の町に着いた。

いかにも旅人らしい彼らを見て、宿屋の客引きが寄って来る。

この季節、客は少なく、誰も彼も客の気を引くのに一生懸命だ。

「どうぞ、どうぞ。ご立派な騎士様ご一行様」

「ようこそ、いらっしやいませ」

「美味しい料理に清潔な寝床があります」

「こちらがこの町一番の宿屋です」

「一番はこっちですよ」

「いやいや俺の所が一番だ」

喧嘩になりそうな雰囲気だ。

その中で何も言わずに近づいて来て、ガブリエルの馬の手綱を取った娘がいた。

ぴっちりとした胴着が豊満な体を締め付け、スカートの上に真っ白い前掛けをしている。

髪は布で包んであったが、魅力的な顔の周りを金色のカールが囲んでいた。

「ここに行くぞ」

ガブリエルがそう言うと、他の客引きはあつと言つ間に散っていった。

すたすたと歩いていく娘の後に馬で続く。

娘が案内したのは『銅の斧』という看板の下がっている小綺麗な宿屋だった。

亭主に部屋に案内され荷物を下ろした後、3人は食事をするため下の広間に降りた。

「何で金や銀じゃなくて銅の斧なんでしょうね？」

長いベンチに腰掛けながらカドーが言った。

「あの娘に聞いてみりゃいいじゃないか」

「ルモン殿が聞いてくださいよ」

怖そうに首を竦めているカドーを見てガブリエルが笑う。

「そんなんじゃない、いつまで経っても恋人はできないぞ」

「今はとても忙しくって恋人なんか作っている暇はありません！」

真っ赤になってあたふたしているカドーを見て二人は噴出した。

薄暗い広間は居心地が良かった。

大きな暖炉には火が燃え、天井の梁から大きなハムやソーセージがぶら下がっている。

給仕に來た娘にルモンが尋ねる。

「何で銅の斧なんだね？」

「金銀の斧は勿体無くて私どもには扱えません。高級宿ではないけれど、鉄の斧よりは少しはましですよってことです」

「ふーん、そういうことか」

「騎士様達はこの寒い中どこに行かれるのですか？」

「妖精を探して旅している。ここら辺はよく出ると聞いたのでね」

真面目な顔をして答えるガブリエルに娘は眉を顰める。

「ブレシリアンの森には沢山いるって聞きますけど、近寄ったら危ないですよ」

「それはギョ 口目で耳の尖った奴らか？」

「騎士様はご覧になったことがあるのですか？」

「いや、明日見に行くつもりだ。一緒に行くか？」

ガブリエルが自分をからかっていることに気付いた娘は、流し目で睨み、持っていた布巾でガブリエルの肩をぶつ振りをする。テーブルを離れた。

「畜生、あの娘は絶対今夜ガブリエル殿の寝床に潜り込んで来ますよ」

ルモンが悔しそうに言った。

「なんなら俺と入れ替わるか？」

「いえいえ、悔しいですが遠慮します」

宿屋は空いていたのでガブリエルは、ルモンとカドーにもベッドを取ってやるうと言ったが、ルモンが、家来が騎士と同じ様にベッドで休んだら怪しまれると言って断ったのだった。

騎士の家来は他の客と一緒に屋根裏部屋の藁の上で休むのだ。

カーテンで囲われたベッドは金持ちの貴族のためだった。

翌日、朝早くから食堂に下りた3人は朝食を取ると、娘に待ち合わせ場所の聖堂への行き方を聞き宿を出た。

雇い主は一目でそうと分かる格好をしていた。

農夫か何かに扮装しているのだろうけど、重たそうな外套や帽子はともかく真新しい靴が不自然だし、第一農夫は革靴など履かないだろう。

この町まで一緒に来た筈の護衛の姿は見えなかった。

男はガブリエル達が聖堂に入るとすぐに近寄ってきた。

目鼻の丸い、ずんぐりとした中年の男である。

ガブリエルが頭を軽く下げると、その男は前もって決めていた合言葉を囁いた。

「眠っている狐の口には何も落ちてこない」

ガブリエルも答える。

「時間を有効に使わぬ者は非難を浴びるだろう」

明らかにホツとした顔をして男が言った。

「私のことはエスチエと呼んでください」

「私はガブリエル・キリルです。それでは、エスチエ殿、行きますか？」

「馬は聖堂の裏庭に繋いであります。道中よろしく頼みます」

一行はまだ人通りの少ない道を進み、町を出て森に向かった。

道が狭いので、一番にガブリエル、その後にエスチエが続き、ルモン、カドーの順に馬を進めた。

ブレシリアンの森の中はとても静かで、時折パラパラと木の枝から落ちてくる雫の音以外は何も聞こえない。

地面は濡れた木の葉で敷き詰められ、蹄の音もしなかった。

熊は冬眠しているだろうが、狼には出くわす可能性があるので、注意を怠れない。

盗賊のことは心配していなかった。

誰がこんな湿っぽい冬の日にいつ通るかも分からない旅人を待ち伏せているだろうか？

その日はかなりの速度で森の中を進み、翌日の昼前には森を出られる予定だった。

辺りが薄暗くなり、そろそろ野宿する場所を決めなくてはと思っている時にそれは起こった。

初めに馬が異変に気付いた。

急に立ち止まると耳をピンと立て辺りを伺うと不安そうに鼻を鳴らし、踵を返そうとする。

「ルモン、後ろを向いて剣を抜け」

ガブリエルは手綱を片手に巻きつけると自分も剣を抜く。

エスチエとカドーを間に挟み込むようにして、ガブリエルとルモンは剣を構えた。

エスチエも外套の下に隠し持っていた剣を抜き、カドーも青い顔をしながら槍を構えている。

木々の間にギラギラと光る目が見え隠れし始めた。

狼だ。

腹を空かせた狼が馬の匂いを嗅ぎ付けて集まってきたのだ。

狼の遠吠えがあたりに響きわたり、カドーの喉がヒュッと言う様な音を出す。

ガブリエルは馬の首に顔を寄せ、落ち着かせるために話しかけた。

十四、五匹いると思われる狼はじわじわと近づいて来る。

群れの中に際立って大きな狼が一匹いた。

かなり歳を取っているようで、額と顎の回りの毛が長く白い。

「奴が頭だ」

ガブリエルがそう言った時、若い狼が頭の合図を待たずにルモンに飛び掛ってきた。

驚いた馬が嘶き後足で立ち上がるが、ルモンは振り落とされずに剣を振るい野獣を傷つけた。

血塗れになって崩れ落ちる仲間を見て怯む狼達。

「今だ」

ガブリエルは自分から頭の狼に突っかかって行く。

狼は年寄りとは思えない敏捷さで飛び上がり、剣をかわすと着地した。

間を空けずに切りつけるガブリエルを横から他の狼が襲ってきた。

まずい、馬が暴れると思った時、その隙を見逃さなかった頭の狼が正面から飛び掛ってくる。

脇の狼を切り捨て、咄嗟に体を立て直したガブリエルは、剣を槍の様に持つと跳躍した狼の胸に的を定めて投げつけようとした。

その瞬間、時が止まったように見えた。

森の中に角笛の音が響き渡った。

腹の底に轟く様なその音は何度も何度も繰り返し鳴り響き、尾を引くようにして消えた。

狼達は攻撃を止め、耳を伏せると後ずさりし一匹、また一匹と走り去って行く。

頭の狼はまだ剣を構えたままのガブリエルと暫くの間睨み合っていた。

しかしガブリエルが僅かに剣を下げると、ブルブルと身震いをして他の狼の後に続いて去って行った。

後に取り残された人間達はしばしぼんやりしていた。

角笛を吹き鳴らした人が現れるかと思ったが、いつまで経っても誰も来ない。

「何が何やらさっぱり分からん」

「あれは誰だったのでしょうか？」

「誰か知らんが、俺達は助けてもらった訳だ」

辺りはすっかり暗くなっている。

殆ど手探りで岩に囲われた洞穴を見つけた。

ルモンが油紙に包んで持ってきた火付け石で松明に火を灯し、洞穴に何も住んでいないか確認する。

幸いなことに洞穴は大人が4人楽に座れる大きさだった。

洞穴の前に焚き火を焚き、宿で準備してもらった弁当を食べた。

ルモンは怖がるカドーに松明を渡して狼の死骸を取りに行かせ、毛皮を剥ぐように命じた。

これは町で売れば結構な値がつく。

座って燃える火を見つめていたガブリエルが、ルモンに笛を出すように言った。

「人間だか妖精だか知らんけど、礼に一曲歌ってやれ」

ガブリエルが笛を吹くと、ルモンが歌い出す。

エスチエは目を閉じて聞き入っている。

それは、吟遊詩人が好んで歌う魔術師ミルディンの唄だった。

森を抜け、旅も終わりに近づいて来た。

国境には翌日の夕方に着く予定である。

その日は久し振りに雲の間から青空が覗いていた。

その分気温が低い。

地面に降りた霜がやっと陽の光で解け始めたのは既に昼近かった。

そろそろ昼食にしようと思った時、木々の上に農家の藁葺き屋根が見えた。

「これは丁度いい。湯を沸かしてもらいましょう」

ルモンがそう言って、カドーと食事の準備をするために急いで農家に向かった。

暫くしてガブリエルとエスチエが農家の前庭に乗りつけると、真っ青な顔をしたカドーとしかめっ面をしたルモンが出てきた。

カドーはガブリエル達の前で止まらず、前庭の端まで走って行き、激しく吐いている。

エスチエにはそのまま待つように言って、ガブリエルは馬から下りた。

「どうした？」

「皆死んでいます」

「病か？」

「いや、戦に行く兵が襲ったのではないのでしょうか。拷問された死体もありましたから」

ガブリエルは扉を開けて家の中を覗き顔を顰める。

扉は蝶番が半分壊れて斜めに傾いている。

家の中は家具が倒され、農民一家の死体が散らばっていた。

すえた様な匂いと血の匂いが強い。

死体は身包み剥がれ、恐怖に目を見開いたままだ。

「酷いな。女子供も皆殺しか」

ルモンがガブリエルの後ろに立った。

「戦に行く前は気が高ぶりますからねえ」

「殺されてからあまり時間が経ってないな」

ガブリエルはエスチエの側に戻ると言った。

「できるだけ早く国境まで行った方が良さそうです。戦に巻き込まれたら厄介だ」

裏に回っていたルモンがバタバタと暴れる鶏をぶらさげて戻ってきた。

そしてニコニコしながら言った。

「略奪を免れた鶏が見つかりました。今晚の飯にしましょう」

ふらふらしながら馬によじ登るカドーを見てガブリエルが聞いた。

「おい、大丈夫か？」

「…はい」

「俺達が見ても気持ちのいいもんじゃないぞ。戦に行けばある程度は慣れるが」

「はい」

ここは早くこの場所を離れた方が良さそうだと思ったガブリエルはルモンを急かす。

そして一行は国境への道を急いだ。

王が兵を挙げての戦はここ2年ばかりないが、領主同士の戦は頻繁にあり田舎は荒れていた。

大抵は農作物や家畜を略奪されるだけで済んだが、時には兵にやりたい放題をさせる領主もいたので、農民は兵を極端に恐れていた。雇われ兵は農民が多かったが、自分達と同じ境遇の者に残酷になるのを躊躇わなかった。

戦は人を狂わす。

領主が勝手に起こす戦の犠牲になるのは、一番に領地に縛られている農民達だった。

国境までの道には所々兵が通った跡が見られたが、戦は既に終わっている可能性が高かった。

冬には籠城戦は望ましくない。

相手の城がすぐに落ちない場合は、いったん休戦に入り、機会を見て新たに戦を起こすのであった。

それでもやつと国境に着いた時には、4人は無事に旅が終わったことを喜び合った。

エスチエを隣国の迎えの者に預け、約束の300ゾルを受け取ったガブリエル達は帰路についた。

貴族工スチエを隣国まで護衛した後、馬上槍試合に積極的に出場したのが良かったのか、ガブリエルの所に次第に仕事が舞い込むようになった。

雇われ騎士としての評判は上々で、戦場で知り合った仲間にも慕われ、今やガブリエルの城には居候の騎士が4人いた。

それぞれの家来と新たに雇った料理人を含むと、城の住人は5人から14人に増えたことになる。

一人当たりの分け前は減るが、仕事が増えたために生活は以前より楽になっていた。

城の裏庭の小さな畑からは、ホウレン草、ニンジン、パースニップ、エンドウ豆、ナス、キャベツ等の野菜が採れたし、薬草庭園から採れるパセリ、セージ、クミン、アニス等で料理に味付けすることができた。

葡萄酒と小麦、馬にやる干草はキリルの城から安く買うことができた。

庭の片隅には鶏小屋があり、鶏は毎日卵を産んだし祭りには肉になった。

一頭だけいる山羊の乳からはチーズが作れた。

その他にキリルの城で豚や牛を殺す時にはお裾分けをもらえたとし、

食べ物に困ることはなかった。

細かいことが苦手なガブリエルの代わりにルモンが家計を管理している。

ルモンは金貸しの様に細かく、城で使われる燃料の量からめいめいが飲んだ葡萄酒の量まで書き留めていた。

財布の紐はルモンが握っているため、騎士達は村に女を買いに行く時まで、ルモンに報告しなければならぬのに閉口していた。

4人の騎士達は歳も性格も過去の経験もバラバラだったが、ガブリエルを城主と認め彼の騎士として仕えることに誇りを持っていた。

現在ガブリエルは仮の城主でしかないが、いつかはきっと王に城主の称号を授けられるだろうと彼らは信じて疑わなかった。

夏も終わりのある日、ガブリエルの城に仕事の依頼に来た者がいた。人払いをして欲しいと言ったその男は、ガブリエルが書斎として使っている部屋に入り扉を閉めると、さっそく仕事の内容を説明し始めた。

驚くような話だった。

男は自分は王の密使だと言い、その証拠に王の印のついた通行許可証を見せた。

両手に剣と秤を持った王の印は確かにジュディカエル王の物だった。ギドゴアール地方の南、ブレシリアンの森を越えてずっと進むとパエール河に辿り着く。

パエール河を船で3日程遡った所にバザーンの町がある。

行ったことはないが、ガブリエルも落ちることのない商人の町バザーンのことを聞いていた。

王の使者が言うには、バザーンの城主ザルビエルは、25年前エスペレンの戦で功績を立てて以来王の信頼も厚かった。

しかしザルビエルは2年前に王が定めた税率改定について批判的な内容の手紙を出しており、昨年からの税金をきちんと納めていない。

その上、我が国と冷戦状態にあるシミリア国の商人と取引するような反逆的な態度が伺われる。

その様な理由があり、王は密かにザルビエルを征伐することを決めた。

とどのつまりバザーンの富を自分の物にしたいって訳だなとガブリエルは胸の中で思った。

あるいはバザーンの地理的、経済的な価値を考えてのことかも知れない。

使者は話を続けた。

「幸いなことに手引きをする王の息のかかった者がバザーンの城内にいるのです。ザルビエルの娘婿になっているフィルド様が」

「フィルド家の者か？」

「当主の次男のジルド様です」

「ふうん。それで？」

「王は甥のメレイヌ様に今度の作戦の指揮を取るように命じられました」

「私達にも参加して欲しいと？」

「はい。ガブリエル殿と騎士達の噂は王の耳にも届いております。是非力を借りたいとのことでした」

「報酬は？」

「お一人当たり1500ゾルです。成功した際にはガブリエル殿の将来についても考えたいとお言葉です」

「前払いしてもらえるのだろうか？」

「それは問題ございません」

「では検討して3日以内にお答えしよう」

「できるだけ早くお答えくださいますよう。日にちも迫っておりますので」

「分かった。3日以内にお答えする」

これ以上言っても無駄だと分かった使者は城を後にした。

その日のうちにガブリエルは騎士達に仕事の話をした。

4人共乗り気だったが、ガブリエルは少々確認したいことがあると言っただけには決断しなかった。

翌朝早くから父親に会いに行ったガブリエルは、キリルとジョスリンに大雑把な話を伝え、この依頼が本当に王から出ているのか内密に調べてもらおうように頼んだ。

後で王からではないと分かり、罰せられたり責任を取られるのは真っ平だった。

自分一人だけならまだしも、仮でも城主の立場にあるガブリエルは、他の騎士や家来をそのような危険にさらす訳にはいかなかった。

落ち着かない数日を過ごした後、ガブリエルは、貴族の連絡網を使って情報を調べたキリルから呼び出された。

「確かに王から出た話だそうだ」

「そうですか」

「メレイヌ家、フィールド家が拘っているので、おまえ達が非難されることはないと思われる」

「はい」

「この話、受けるつもりか？」

「そうしたいと考えております」

「非情なことはするな」

「分かっております」

ジヨスリンは弟の身を案じているようだ。

「ガビック、気をつけてな。ちゃんと帰って来るんだぞ」

「ああ、勿論だ、兄上」

ガブリエルは城に戻ってこの話を騎士達に伝え、約束通りに答えを聞きに来た使者に依頼を受けると答えた。

使者は早速7500ゾルをガブリエルに渡すと、作戦の詳細を語り始めた。

使者を引き止めて、ガブリエルは他の騎士達を書斎に呼んだ。

作戦を説明すると案の定、騎士達は色々と質問をしてくる。

「バザーンの城主とその家族は生け捕りにすればいいのですか？」

「王はザルビエルとその奥方、娘二人を捕虜にすることは望まないと仰せられた」

何事もはつきりさせないと気の済まないモルガドが尋ねる。

「殺せということですね？」

使者は言葉を濁しはつきりと答えなかったが、王の望みはそういうことだろう。

「作戦は収穫感謝祭の前夜と聞きました。神々の祟りはないのでしょうか？」

信仰が厚いパバーンが聞いた。

「王はベルビザンの神を信仰されている。それ故、収穫感謝祭に纏わる迷信は信じておられない」

「ベルビザンとはここ何年かで信者が急激に増えている新しい宗教だ」

「アイルカ島から来たベルビザン教の僧が宮廷に来てからですね」
セズニはおしゃべりで話を逸らすのが得意だ。

「今やロパルゼ僧は王のお気に入りと聞いている」

「まあ、それはいいさ。だが私達にも祟りはないのだろうか？」

既にキリルの城の祭司に確認しているガブリエルが答えた。

「感謝祭の期間は休戦する習慣だが、宗教的には何も定められては

いないそうだ」

「礼拝の最中ならともかく、前夜だから問題ないだろう。どうぞ続きをお話してください」

使者に話を続けるよう促した。

「貴方方には変装してバザーンに潜り込んで頂きます」

「何に変装するかは自由なのだろうか？」

騎士達の中で一番若く洒落者のドグメールが尋ねる。

「騎士と分からない服装だったら何でも構いませんが、あまり目立つようなご格好はお止めください」

メレイヌの軍との合流の時刻と場所を伝え使者は帰って行った。

感謝祭の1週間前に無事バザーンに着いた一行は、青猪館という宿屋に腰を落ち着け、町の様子を窺っていた。

怪しまれない様に8人を3つの組に分けている。

馬や武具はその前に馬商人に扮したモルガドとパバーンが、バザーンの町外れに借りた家に運んであった。

前夜祭の昼過ぎ、吟遊詩人に扮したルモンとガブリエルは大聖堂の前広場で客を集めていた。

ルモンはバルハートを掻き鳴らしながら歌い、ガブリエルは笛を吹く。

隣の屋台でパンを売っていた男が、お蔭で自分の店に客が集まると礼を言い黒パンをくれた。

パンを齧りながらパン屋と世間話をする。

パン屋は城にもパンを売っているらしく色々と詳しい。

「今夜はお城は客を大勢招いて大変ですよ」

「外国の客ですか？」

「いやいや、町のお偉いさん方ですわ」

「じゃあ、城に寝泊りはしないんですね」

刃向かわない限り町人には危害を与えない様にと言われている。

城に残るのはできるだけ少人数の方が有難い。

「皆町に家を持つ者ばかりですよ。あ、そう言えば修道院に入っている娘を招いていると聞きました」

「城に招かれているなら偉い所のお嬢さんですかね？」

「いや、お城の台所係りは、どこか山から出てきた田舎貴族の娘だと言っていましたよ」

では何かあっても問題にはなるまい。

その娘もこんな時に城に居合わすなんて運が悪い。

その夜、前夜祭を祝った人々が疲れ果てて家で寝息を立てている頃、密やかに馬を進める一行がいた。

城門から隠れて見えない一角に馬を止めるとあたりを伺う。

馬は嘶けないように布で工夫された轡をされている。

約束の時間まで後僅かだ。

早課の鐘が鳴り出すと同時に蹄の音が近づいて来た。

メレイヌの軍だろう。

5、60人はいるだろうか？

だがそのうち馬に跨っているのは20人程、鎧を纏っているのは10人程度である。

彼らが城門の前に立つと、するすると跳ね橋が下げられた。

ガブリエル達が近づくと、メレイヌと思われる男が側に来た。

「キリル殿か？」

「はい」

「主塔を攻める。私に続いてもらいたい」

「分かりました」

メレイヌが号令をかけ、兵が跳ね橋を駆け足で渡り始めた。

ガブリエル達も城門を潜るメレイヌの後に続く。

中庭では異変を感じて出てきた警備の兵を相手に既に戦いが始まっていた。

……ここはよく知っている場所。

そう、故郷の城の広間だ。

まだ夜ではないのに、何故こんなに暗いの？

父上が亡くなった。

母上も、叔母も、弟のマルカリードも。

もう誰もいない。

私は一人ぼっち。

寂しさに胸にぽっかり穴が開いたようだ。

……小さい女の子が泣いている。

可哀想に、私と同じ様に一人ぼっちなのだろうか？

肩に手を置いて慰めようとすると、女の子は顔を上げた。

その女の子は自分だった。

ギョツとして後退りすると女の子は小さい両手で私を突き飛ばす。

私は後ろに倒れ、そして暗い穴の中に落ちていく。

……！！！！！！

城主の寝室の隣の小部屋で休んでいたメルグウェンは、必死で何か

に掴まるうとして目が覚めた。

ああ、よかった、夢だった。

胸はドキドキするし、背中はずっとりと汗をかいて気持ちが悪い。

ベッドに座って動悸を鎮めていると外から妙な物音が聞こえてきた。

暫く耳を澄ませていたメルグウエンは、暖炉の熾で燭台に火を灯すと大急ぎで服を着て部屋を飛び出した。

廊下の窓から中庭を見ると、松明の火が飛び交い警備の兵が何者かと打ち合っているのが見えた。

「ザルビエル様、狼藉者です。早く起きてください!!!」

城主の部屋の扉を拳で叩く。

中で慌てて起き上がる気配がした。

メルグウエンは階段を駆け上り、武器倉庫に向かった。

武器倉庫の前には兵が二人いたが、まだ何も知らない様子で、息せき切ったメルグウエンを見ると大層驚いた。

「城が襲撃されました。戦う準備をしてください!!!」

メルグウエンが叫ぶと二人は緊張した面持ちで口々に尋ねる。

「ザルビエル様は？」

「敵はどこに？」

「ザルビエル様は今起きられるところです。敵は既に中庭に入ってきています」

二人は大声で眠っている仲間を起こした。

「ザルビエル様にお届けする武具はありますか？それからできれば私も剣と盾をお借りしたい」

メルグウエンが武具を抱えて階段を駆け下りると、丁度上がってきたザルビエルの家来達とすれ違った。

「ザルビエル様の武具は私が持っています」

そう叫ぶとメルグウエンは城主の寝室に急いだ。

「メルグウエン姫、感謝します。貴方がいなかったら寢床の中で殺されるところでした」

武具を身に着けながらザルビエルが謝った。

「申し訳ない。貴方のお父上に約束をしていながらこんなことになってしまった。もし貴方の身に何かあったら謝っても謝りきれない」

「いいえ。ザルビエル様のご親切、感謝しております」

メルグウエンは緊張した顔にそれでも微笑を浮かべると、武装した家来達と広間に下りていく城主を見送った。

「何故貴方が剣なんか持っているの？」

刺々しい声に振り向くと、服を着たザルビエルの娘二人と奥方がメルグウエンを睨んでいた。

「狼藉者を手引きしたのは貴方なの？」

奥方が扉の前で寝室を守っている兵を呼ぶ。

「この娘を捕らえなさい」

兵はザルビエルの言ったことを聞いていたので躊躇している。

「その様なことはしていません。ご婦人の保護を頼みます」

メルグウエンは兵に向かってそう言い捨てて階段を下りて行った。

怖くないと言ったら嘘になる。

窓から覗いただけでは敵はどの位の人数かは分からなかったが、城に容易く侵入できたことから見ても十分に準備をして攻めて来ているものと思えた。

城が落ちた時、女達にはどのような運命が待ち受けているかは知っている。

だがメルグウエンはおめおめと敵の手に落ちるつもりはなかった。

自分の剣で可能な限りの敵を討ち、恥を受ける前に自害するつもりであった。

暗い広間には誰もいなかった。

しかし外からは叫び声や何かを引き摺る音、金属がぶつかり合う音が聞こえてくる。

あれ程嫌いだったら修道院が懐かしく思える。

城から抜け出すことはできるのだろうか？

万が一城から出ることができたとしても、町はどうなっているのだろうか？

修道院は？

メレイヌの軍はジルドのお蔭で簡単に城に侵入できたが、警備兵の思わぬ抵抗にあい、なかなか主塔に入れないでいた。

その上、城主が武装した家来を引き連れて現れると、警備兵は勢いを増しメレイヌの軍を追い返した。

メレイヌは焦っていた。

日の出まで少し時間はあるが、町人が目覚める前に戦いを終わらせなければならぬ。

目の前の敵を倒したガブリエルは、あたりを見回し状況を見て取るとルモンを呼んだ。

ルモンは頷くと直ちに仲間の騎士達にガブリエルの指示を伝えるに行

く。

「城主をその家来から引き離せ。城主を倒す必要はない」

騎士達は少しずつザルビエルに近づいていく。

大剣を振り回して戦っている巨漢の城主は、軍神さながらの迫力だ。

しかし騎士達は怯むことなく、一人また一人と城主の前に現れては相手になる。

その焦らす様な態度にザルビエルは苛立ち、自分が主塔の前から離れ、家来とも引き離されていくのに気付いていない。

気が付いた家来達が助けに駆け寄ろうとした時、メレイヌの兵が主塔に雪崩れ込んだ。

メルグウェンは身を隠す場所を探していた。

父親の城なら絶対に見つからないという自信のある場所もあったが、ここは知らない城だ。

広間の下は台所だろう。

衣裳部屋はどこだろう？

礼拝堂は？

父の城には礼拝堂の隣に書物を保管している小部屋があった。

広間の横の小さな扉を開き階段を上がり始めた時、下から叫び声と入り乱れる足音が聞こえてきた。

とうとう敵が主塔に入って来たのだ。

メルグウェンは慌てて階段を駆け上がり、初めに目に入った扉を開いて中に入った。

何のための部屋か分からないがここに隠れよう。

あまり使われていない部屋の様で、中の空気は冷たく黴臭い。

メルグウェンは燭台の火を消すと邪魔にならないように隅に置く。

そして、剣を持って扉の横に立ち、侵入者を待ち構えた。

自分より若い騎士を相手に戦っていたザルビエルは次第に疲れてきた。

自分の側にいた家来は二人共騎士達に斬られ、地面に横たわっている。

今相手をしている騎士は、打ち合いながらも色々話しかけてくるのでザルビエルは苛立っていた。

相手を何度か傷つけたが、いずれも軽傷だったようので攻撃は弱まらない。

「お相手しよう」

ザルビエルと同じ位の背丈の騎士が近づいてきた。

交代するようにおしゃべりな騎士は横に飛び退いた。

今度の騎士は他の者とは比べ物にならぬほど強かった。

だがザルビエルは最後の力を振り絞って戦う。

前領主から受け継いだバザーン。

ザルビエルの代になってから、道路の整備、大聖堂の修復工事、港の拡大等によってより多くの商人を向かえ、更に繁盛した町。

この一瞬で失うにはあまりにも惜しかった。

しかし疲れはザルビエルの動きを鈍らせ、肩に強い一撃を食らった城主はついにガクリと膝をついた。

剣を下げたガブリエルが近づいて来る。

「私は城主殿を殺すつもりはありません。隊長に判断を任せます」
そう言うとザルビエルの腕を取って立ち上がらせ、捕虜を丁寧に扱うことを頼んだ上でメレイヌの兵に引き渡した。

乱暴に扉が開かれた。

メルグウエンは両手で剣を持ち、誰か入ってきたら斬りつけようと身構えていた。

「何もねえよ」

「何だ、つまんねえ」

強い訛りでそう話し合う声がする。

入っては来ないようだ。

メルグウエンは足音が遠ざかるのを待つて扉を閉めた。

しかし見ていた者がいた様だった。

「おい、誰かいるぞ」

「誰だ」

「出て来い、城は落ちたぞ」

口々に扉の前で叫んでいる。

何人いるのだろうか？

メルグウエンは唇を噛み剣を握り締めた。

ではザルビエルは殺されたのだ。

奥方と娘達はどうなったのだろうか？

メルグウエンは胸に溢れる不安を無理矢理打ち消し、扉が開かれるのを待った。

夜が明けてきた。

パエール河の川沿いは晴れる日でも朝はよく霧が出る。

その日も城はうっすらと白い朝靄に包まれていた。

ガブリエルは城主が捕らえられたので、もう自分達の役割は終わったと思い、メレイヌを探しに主塔に入った。

広間では既に兵達が家具を破壊し、金になるものを持ち出しているところだった。

遠くに女の泣き声が聞こえる。

広間を抜け階段を上がると床に兵の死体が転がっていた。

目の前の扉に別の足が挟まっているのが見える。

ガブリエルは剣を抜くと体を盾で庇い、扉を蹴り上げた。

薄暗い部屋の中をさっと見回すと、扉に挟まっていた死体以外にもう一人兵が倒れている。

そしてガブリエルに剣を向けて立つ女がいた。

いや、女が雑兵とはいえ武器を持った何人もの男を倒すような腕を持っている訳がない。

女装した密偵か？

ガブリエルは女に尋ねた。

「おまえは誰だ？」

剣術が好きで、父親に剣を持つことを禁じられてからも密かに練習していた。

しかしメルグウエンは実際に人を斬ったことはなかった。

先程メルグウエンの隠れている部屋に入ってきた兵を3人斬ったのが初めてだった。

自分の剣が相手の肉を裂き、骨を砕く感触は耐え難いものであった。死体を運び出すこともできず、吐き気と戦っていた時に新しい男が入ってきた。

今までの百姓が剣を持ったみたいなのとは違い、鎧を身に纏った騎士である。

背が高く見るからに強そうなその男は、メルグウエンが戸惑うような間の抜けた質問をしてきた。

兜を被っているので顔は分からないが、声を聞く限り若そうな男だ。

「おまえは誰だ？」

何と答えたらいいのだろうか？

名前を聞かれているのだろうか？

それともここで自分が何をしているのかを？

メルグウェンが言いよんどんでいると、その男は怒ったような声で尋ねた。

「誰に雇われている？」

意味が分からない。

誰かと間違えられているのだろうか？

メルグウェンが黙っていると、その男は剣を構えた。

メルグウェンも慌てて剣を上げる。

ガブリエルは自分の質問に戸惑っている風な女を見ていた。

芝居をしているのだろうか？

確かに密偵だったらスラスラと質問に答える筈がない。

これは捕まえて吐かせてやらねばと考え、剣を構えた。

思ったよりも女は手強かった。

片手でガブリエルの剣を受けるのは無理だと分かったのか、盾を捨て両手で剣を持って戦っている。

力はガブリエルの方が圧倒的に強いのだが、女はすばしこくガブリエルの剣をかわし反撃してくる。

これ以上戦いを長引かせたくはないと思った時、女が兵の死体に躓きバランスを崩した。

その隙を見逃さず、ガブリエルは相手の剣を払い除けた。

剣は女の手を離れ、部屋の壁にぶつかり鈍い音を立てて落ちた。

さて、こいつをどうやって料理するか？

剣を持ったまま近づくとガブリエルを女は強張った顔で見つめていた。

「覚悟はできているんだろうな」

メルグウエンは男を睨みながら床に座り、仰向けに寝そべった。

「好きにしたらいいわ」

男は自分の盾を壁に寄り掛け、剣を床に置いた。

そして、兜を脱ぐと、短刀を取り出しメルグウエンに近づいた。

「ああ、好きにさせてもらう」

服の締め紐を切られてもビクともしなかったメルグウエンだったが、服に手をかけられると流石に怯えて抵抗した。

しかし大の男の力に敵う筈はなく、瞬く間に服も肌着も引き裂かれてしまった。

朝の光の中に浮かび上がるメルグウエンの裸体をジロジロ見ている男は溜息をつくと立ち上がった。

「男じゃないのか。まあ女でもないが」

服の切れ端で体を隠そうとしていたメルグウエンは、肘をついて体を起こし男を睨みつけた。

「女でもないってどういふこと？」

「安心しろ。俺はガキを襲う趣味はない」

何て失礼な男だろう。

確かに自分は発育が遅いのかも知れない。

だけど来年結婚する予定の私をガキ呼ばわりするなんて。

犯されなかったことを喜ぶべきなのに、メルグウエンは女扱いされないことに怒る自分に呆れた。

剣を持ったガブリエルは女の所に戻った。

女は床に座り、膝を立てて肩を抱いている。

「さて、どうするか?」

女を殺すのは好きではないとガブリエルは思った。

「でも殺してやった方がおまえのためなんだろうな」

女がキツとした目で睨んでくる。

「俺の後に来る奴は、ガキでも何でも構わん奴かも知れん。兵に散々犯された拳句殺されるよりは今俺にグサツとやられた方が良くないか?」

女は答えない。

命乞いしないのだなとガブリエルは感心する。

不思議な女だ。

ふと昨日の昼間、パン屋に聞いた話を思い出す。

「山から来た貴族の娘というのはおまえのことか？」

背筋を伸ばした女が答える。

「私はエルギーオン地方の貴族ダネールの長女メルグウエン」

「メルグウエン、運がなかったな」

そして、ガブリエルは剣を振り上げた。

殺されると思った。

何か言わなくてはと焦った。

胸にこの男に対する憎しみが溢れた。

剣が振り下ろされる前にメルグウエンは、男に向かって両手を伸ばし相手を呪う仕草をした。

「私は呪……」

「黙れ！」

剣を下ろした男がメルグウエンの口を手で塞いだ。

硬い革の手袋が痛かった。

苦しくて男の手を掴み首を振ると男はメルグウエンを離した。

男は立ち上がって部屋の奥に行き、そこに幾つもある木の箱を開けてごそごそやってたが、やがて肌着と女物の服を腕に抱えて戻ってきた。

メルグウエンの隠れていた部屋は衣裳部屋だったのだ。

多分もう着ない服がしまわれていたのだろう。

「これに着替える」

メルグウエンは黙って服を受け取ると素早く着替えた。

男がどういっつもりなのか分からないが、裸で殺されるよりはずっといい。

服を着たメルグウエンをみると男は言った。

「俺はギドゴアール地方の貴族キリルの次男のガブリエルだ」

そして、灰色の目を細めて初めて笑った。

「俺の城におまえを連れて帰る」

ガブリエルはメルグウェンを連れて城の中庭に戻った。

中庭ではまだ戦いの後始末が終わっておらず、ザルビエルの家来やメレイヌの兵の死体が残っている。

そして中心には俄か作りの絞首台があり、城主とその家族がぶら下がっていた。

裸に剥かれた彼らの死体を見てメルグウェンは涙を流した。

ガブリエルは厩の前に座り込んでいた騎士達の所に行き、ギドゴアール地方の方言で暫く話すと、メルグウェンを仲間に託し絞首台の横に立っているメレイヌの方に歩いていった。

方言は各地方にあったが、貴族は子供の頃から標準語を話すように躰けられている。

しかし貴族であっても同郷出身者とは方言で話す者が多かった。

ギドゴアール地方の方言は、遙か昔にその土地を通ってアイルカ島まで攻め込んだガラワン民族の言語に強く影響を受けており、その地方出身ではない者にはさっぱり分からない。

メレイヌは数人の兵に指示を与えているところだった。

彼らが馬に乗って町の方に走り去るのを見たガブリエルはメレイヌに近づいた。

「メレイ又殿、私達はこれで帰ります」

「キリル殿、噂に違わず良い働きだった。その旨ご報告しよう」

メレイ又は誰にとは言わなかったが、伯父であるジュディカエル王に報告するのだとガブリエルは思った。

「礼を言います。それから戦利品としてあの子供と馬を一頭頂きたい」

騎士達の方を指差して言った。

メレイ又は意外だとも言うようにガブリエルをジロジロ見たが頷いた。

「いいだろう。馬は鹿毛の中の一頭を取れ」

バザーンの大聖堂の鐘が鳴り響く中、ガブリエルら一行は城下町の門を出てパエール河を渡っていた。

朝早いにも拘らず、既に河には小船が行き交い、橋は門が開くのを待つ荷馬車の列ができていた。

城が占領されたのをまだ誰も知らないのだろう。

メルグウェンはこの橋を父親と渡った日のことを思い出していた。

あれからまだ数ヶ月しか経っていないのに随分昔のこのようだ。

修道院はどうなったのだろうか？

寄宿生達は殆ど実家に戻っていたから良かったけれど、修道女達は無事なのだろうか？

メルグウエンは騎士達とは口をききたくなかった。

特にあの無礼なキリルとかいう男とは。

勝負に負けたことはとても悔しかったし、その後のことは今思い出しても腹が煮え繰り返るようだ。

あの男、いつか絶対に打ち負かしてやる。

だけど私が呪いの真似事したらあんなにも怖がっていた。

ふん、偉そうにしているけれど本当は臆病者なんだ。

それにしても、自分の城に私を連れ帰ってどうしようというのだろうか？

自分はガキには興味ないと言っていたから、その面では安心できるのだろうか。

それに仕返すには近くにいた方がいい。

馬に揺られながらメルグウエンは考える。

私がいなくなつて父上は悲しむだろうか？

それとも政略結婚の駒がいなくなつて損したとしか思わないのかしら？

私がネヴェンテル様と結婚しないと家はどうなつてしまふのだろうか？

家のことは心配だったが、娘を利用せずに父と弟で何とかすれば良いのにといい思いもあった。

そして、これから妖精の住みかと言われるギドゴール地方に行くことを思うと、メルグウエンの冒険好きな心は躍るのだった。

その日は昼食を取るため少しばかり休んだだけで、薄暗くなるまでパエール河の川沿いの道を進んだ。

空は曇っていたが運良く雨は降らなかった。

しかし空気は冷たく、馬から下りたメルグウエンは騎士の一人が貸してくれた外套を羽織っていたにも拘らず、体が冷え切っていた。

野宿をするのは生まれて初めてである。

悴んだ手を擦り合わせながら、やっと燃え上がった焚き火にそろそろ近づいた。

焚き火の周りに座り込んでいた男達が気付いて席を空けてくれる。

男の一人が収穫感謝の祈りを捧げる。

大きな袋から食べ物を取り出した別の男が皆に配り、メルグウエンにもパンとチーズをくれた。

朝バザンを出るときに外套をメルグウエンに貸してくれた男だ。

マルゴーと同じ様な青い目をしているとメルグウエンは思った。

修道院は嫌いだったが、初めてできた女友達とこんなに早く別れてしまったのは残念だった。

小さな声で礼を言い、パンをちぎって口に運ぶ。

久し振りに外の空気を吸って運動した所為で腹が減っていた。

食事が終わると青い目の男が楽器を取り出した。

バザンではバルハートと呼ばれているラウドだ。

旅行用なのか小型で扱いやすそうだった。

楽器を爪弾きながら良い声で歌う男を見て、メルグウエンはこの人とはお話ししてもいいかも知れないと思った。

マルゴーと同じ目をしているし、大好きなラウドをこんなに上手に弾けるんだもの。

焚き火の周りの男達は皆気持ち良さそうに聞き入っている。

そうして感謝祭の夜は更けていった。

ガブリエルは女の叫び声で目を覚まし飛び起きた。

辺りを見ると、自分の足元で寝ていた筈のメルグウェンが目を見開き、恐怖に引きつった顔をして座っていた。

瞳孔の開いたその目は何も映していない。

ガブリエルは、見張り番のドグメールと近習のイアンが立ち上がるうとするのを目で止め、メルグウェンを引き寄せる。

メルグウェンは抵抗し、ガブリエルの胸を叩き顔を引つ掻いた。

髪を掴もうとする手を捕らえ、自分の胸に抱き寄せる。

そして支離滅裂なことを叫び、泣いて暴れるメルグウェンを腕に閉じ込め優しく背中をさすった。

暴れるのを止めたメルグウェンは暫くの間泣いていたが、そのうち大人しくなったので顔を覗いてみると眠っていた。

涙に濡れた丸い頬を焚き火が照らし出す。

ガブリエルはメルグウェンを外套に包み、抱き締めたまま地面に横たわった。

かわいそうに。

多分戦なんて初めてなのだろう。

そして人を斬ったのも。

ガブリエルは城で留守番をしているカドーを思い浮かべた。

あいつだったら多分敵と戦う前に泣いて逃げ出しているな。

それに比べてこの娘は勇敢に戦った。

俺が剣を突きつけても許しを請ったりしなかった。

悪夢を見て怯えたからといって、誰もおまえを臆病者とは思わないだろう。

だけど、もういい。

もう無理に気丈に振舞うことはない。

これからは俺が守ってやる。

メルグウェンは目に見えない敵と戦っていた。

力いっぱい目の前の暗闇に斬りつけた。

刃が闇を切り裂く。

手応えがあった。

血の匂いがする。

パツと辺りが明るくなった。

私が殺した男が足元に転がっている。

顔を上げると絞首台にぶら下がっている死体が見えた。

あれは私の父上、母上と弟だ。

私が殺したの？

…私…が？

…違う。

私じゃない!!!

私が殺したんじゃない!!!!!!

夢の中のメルグウエンはそう叫びながらも自分が殺したことを知っていた。

……私はただ剣を握るのが好きだったただけなのに……

苦しみのあまり悲鳴を上げ、もがいていると誰かに抱き締められた。

あれは、いつだったんだろう？

父上が戦に行かれる前、幼い私を抱き上げて頬擦りしてくれた。

他にもあったのだろうけど、父上に抱き締められた記憶はその一回しかなかった。

頬に当たる硬くて冷たい鎖帷子、私を包む力強い父上の腕の感触。

幼い私は戦が何かも分からず、父上に愛されていると感じて嬉しかったんだ。

そう、あの頃私は幸せだった。

……貴方は誰？

私を優しく抱き締めてくれるのは誰なの？

誰だか分からないけれど、とても安心する。

その心地よさに強張った体から次第に力が抜けた。

「俺が守ってやる」

低い声が耳元でそう言うのを聞くと、全てが真っ暗になり何も分からなくなった。

翌朝メルグウエンが目を覚ますと、皆既に起きて朝食を取っているところだった。

まだあたりは暗く、凍ってはいないがとても寒い。

パチパチと燃え盛る焚き火がありがたかった。

メルグウエンは外套に包まったまま起き上がり、手を火にかざした。

硬い地面に寝ていた所為で体の節々が痛い。

ガブリエルはチラツとメルグウエンの方を見たが、何も言わずに武器の手入れをしている。

「お早うございます、メルグウエン姫。どうぞ」

振り向くと、青い目の男が火で炙ったベーコンを乗せたパンをメルグウエンに差し出していた。

「ありがとう」

メルグウエンは受け取りながら頬を染めた。

夜中にうなされて、誰かに抱き締められた記憶がある。

もしかしたら、あれは私の面倒を見てくれるこの男だったのではないか？

「貴方の名前は何ていうの？」

「ガブリエル様の近習のルモンと申します」

「ルモン、いつもありがとうございます」

立ち上がって馬の方に行きながら、ルモンが言うのが聞こえた。

「正当防衛は殺人とは違うと思います」

メルグウェンがルモンの後姿を見送っていると、別の男が声をかけた。
「きた。」

「どうぞ。熱いですからお気をつけ下さい」

差し出されたのは、金属製のコップに入った肉桂、生姜、胡椒等で
香り付けた葡萄酒だった。

「私はガブリエル殿の騎士の一人でセズニと言います」

茸の傘のような髪型をした人懐こそうな丸顔の男は、湯気の立つ葡萄酒を啜っているメルグウェンに仲間の騎士達を紹介した。

「ガブリエル殿には、亡くなられたスクラエラ姫とってお仕えし
ると…」

話し続けるセズニをガブリエルが遮った。

「セズニ、そんな子供に構っていないで、早く準備しろ。出発する

ぞ」

メルグウエンは憤慨していた。

あのガブリエル・キリルという男は本当に頭にくる。

確かに騎士達と口をきくつもりはなかったけれど。

親切にしてくれた人に礼を言って少し話したからって、何であんな失礼なこと言われなくちゃならないんだろう？

ガブリエルはメルグウエンに興味がないと言っていたが、メルグウエンは他の騎士達に対して少なからず警戒心を抱いていた。

しかし彼らは皆彼女に礼儀正しく接し、細やかな心遣いを見せる者も何人かいた。

あの男以外は。

あの男は騎士として女性に対する礼儀をわきまえていない。

でも、もし私が文句を言おうものなら、おまえは女性でないから丁寧にあつたらすぐにも勝負してやるのに。

あの時は私が躓いたから負けてしまったけど、今度は絶対に負けるものか。

ものか。

子供だって馬鹿にしたのを後悔させてやる。

メルグウェンは跪いて命乞いをするガブリエルを思い浮かべ溜飲を下げた。

まだ薄暗い道を一行は一列になって進んだ。

後少ししたら川沿いの道を外れ北に向かう。

その日のうちにギドゴアル地方に入り、ブレシリアンの森で野宿することになっていた。

ブレシリアンの森って妖精の住みかって言われるあの森よね？

妖精は現れるかしら？

妖精ってどんな風なんだろう？

やっぱり母上の部屋に飾ってあるタペストリーに描かれているような綺麗な女の人なのだろうか？

午後になり森に入った。

あたりが薄暗くなり始めると、ガブリエルは松明に火をつけるように言った。

松明を持つように言われたメルグウェンは顔を顰めた。

片手で馬を御するのには馴れている。

けれども、松明は髪に火が燃え移らない様に注意しなければならず、炎が眩しいと目が眩んで道が見えないのだ。

「狼に食われたくないんだったらちゃんと持ってるよ」

「狼ですって？」

「ガキは羊か豚みたいに丸ごと食われてしまつらしいからな」

「貴方こそ狼の餌食になってしまえばいいわ」

からかうと面白い様に反応する。

子供と言われる度に本気で怒るメルグウェンを見てガブリエルは笑った。

怒るのは悪くない。

いくらでも彼女の怒りを受け止めてやる。

それで彼女の意識が逸れるのだったら。

夜中、肩先が寒くてメルグウエンは目を覚ました。

寝返りをうつって焚き火の方を向き、外套を口元まで引き上げる。

眠ろうと思ったが、男達の鼾が耳について眠れない。

暫く悶々とした後、仕方なく起き上がると、見張り番のガブリエルとルモンがメルグウエンの方を見た。

「用を足しに行くんだったらついて行くぞ」

「いいえ、違います」

「じゃあ何だ。ちゃんと眠っておかないと明日馬から転げ落ちるぞ」

「……」

「ルモン、子守唄でも歌ってやれ」

もう、何だっこの男は私の気に触ることばかり言うのだから？

わざとやっているとしたか思えない。

私を怒らせて面白がっているのだ。

そんな言葉は聞こえませんでしたという風に、つんと澄まして見せるメルグウエンを見てガブリエルが噴出した。

カツとなったメルグウェンが文句を言おうと口を開きかけた時、ルモンが歌い始めた。

暗い森に叙情的な声が響き渡る。

それはギドゴール地方に伝わる民謡で漁師の唄だった。

漁に出た男が嵐で無人島に流れ着き故郷を想い恋人を想う、もの悲しく船を漕ぐ様にゆったりとしたメロディーだった。

唄が終わり聞き惚れていたメルグウェンがふと森の方を見ると、木々の間にボンヤリとした明かりが見えた。

目を凝らすと明かりの中に狼のような動物が数匹動いているような気がした。

だが狼は後足で立ち上がったたりしない。

まるで踊っているように見えるあの影は何なのか？

メルグウェンが森の方を指差すと、ガブリエルとルモンもそちらを見たが、ルモンは何も言わずにまた歌い始めた。

カエルの晩課と呼ばれる数え歌である。

1から12まで順番に繰り返される呪文の様な歌詞は、深い意味があるのか、ただ言葉を並べているだけなのか分からないが、聞いていると不思議な神秘的な気持ちになる。

メルグウェンも子供の頃に習って知っているその唄を小さな声で口ずさむ。

何度も何度も繰り返しているうちにメルグウェンは瞼が重くなり、座っていられなくなった。

そのまま横になると数秒で意識が途切れた。

翌朝、目を覚ましたメルグウェンは真つ先にルモンの側に行った。

挨拶の後、早速気になっていることを尋ねた。

「昨日の夜、貴方が歌っていた時に森の中に何かがいるのが見えたでしょ？」

「何かって何ですか？」

「明かりの中で何かが踊っていたわよね？」

ルモンは黙ってメルグウェンのことをまじまじと見つめる。

メルグウェンは恐々と質問を繰り返した。

「…もしかして、何も見なかったの？」

「何もいませんでしたよ。夢じゃないですか？」

眠ってもいなかったのに、夢を見る筈はない。

では、あれは目の錯覚だったのか？

「そう」

メルグウエンは釈然としないまま焚き火の方に戻った。

その為、後ろでルモンが呟いたことは耳に入らなかった。

「私も妙な夢を見ましたよ。ガブリエル様のご婚礼はどうなったのでしょうか？」

ガブリエルは見たことのない首飾りをじっと見つめていた。

何故か今朝目を覚ました時に自分が手に握っていたのだ。

首飾りは乳白色に青い光が混じる月長石に紐がついたシンプルなものだ。

金属の部分は黒ずんでおり、かなり古い物と思われた。

昨夜は見張りをパバーンとモルガドと交代して、その後はすぐ眠ってしまった。

そして奇妙な夢を見た。

.....

気が付くと草原に仰向けに寝ていた。

空は青く遙か遠くに雲が浮かんでいる。

自分の上に屈みこむいくつもの小さな顔。

顔の大部分を金色の丸い目が占めている。

唇の薄い口からは小さく尖った歯が覗いており、毛の生えた耳は大きく尖っていた。

髪が短い者もいれば、長くみつ編みにしている者もいたが、皆羽や貝やガラス玉の飾りをつけている。

皮膚は茶褐色で細かい皺がよつていて、木の皮で出来た服を着ている者もいたが、大抵は裸だった。

「ここはどこだ？」

ガブリエルはそう言うつと身を起こそうとした。

見ると自分も裸だった。

「ここは夜の闇に通じる世界」

一人がそう答えると別の一人が言った。

「女王様の所にご案内しよう」

「おまえ達人間の言葉が話せるのだな」

ガブリエルは感心すると立ち上がり、小さな生き物達の後続いた。

森に入ると生き物達はガブリエルを何百年も経っていると思われる大きな木のある場所に導いた。

四方に節くれだった太い枝を伸ばし、葉を茂らすその木は、下に立つとまるで大きな神殿のようだ。

そしてそこには他の者達の倍ぐらいの背の生き物が枝を組み合わせて作った椅子に腰掛けていた。

風貌は他の者達にそっくりだが、宝石のついた冠を被り羽や貝の飾りを沢山つけているところから見て、多分皆が女王と呼んでいる者なのだろう。

ガブリエルを連れて来た者達と鳥の囀る声のような声で暫く話した後、女王はガブリエルの方を向いた。

「騎士ガブリエルよ、ヤウン・エレージアによつこそ」

ガブリエルは丁寧な礼を返した。

「今日はお願いがあってそなたを我が国に招いた」

女王が話し出した。

「ここ数年、我が国はウルゲルミールの子孫の侵略に悩まされている。度重なる戦で恋人同士は引き裂かれ、子は親を失い、森は荒らされる一方だ」

続いて語られる話にガブリエルは愕然とした。

「我が種族は力では到底奴らに敵わない。巨人の様な奴らに抵抗するため、新月の夜、長老達の会議で重大な事柄が決定された。余の配偶者に人間の男を迎え、奴らに負けない強健な子を作るのだ。そして、その幸運な花婿に選ばれたのがそなただ」

女王が横を向いて手招きすると、いつの間にか控えていたルモンが側に来た。

ルモンは葉で作った腰巻を纏い小さな豎琴のような楽器を抱えている。

「丁度音楽家も呼んである。直ちに婚礼の準備にとりかかれ」

女王が手を叩くと、他の者達がさっと辺りに散らばった。

慌てたガブリエルが大きな声で言った。

「そのような大切なお役目に選んでいただきありがとうございます。ですが、私はまだ結婚するつもりはありません」

「長老会の決定を拒否するの？」

「…はい」

女王はガブリエルの逞しい裸体を舐めるようにジロジロと眺め回す。

その尖った小さな舌で唇を舐める仕草に、ガブリエルは嫌な汗が背

中を伝うのを感じる。

「そなたは申し分のない具を備えている。それにそなたの種は余だけではなく、種族の女全員に注いでもらうことに決まっている」

冗談じゃないと思ったガブリエルは、何とかその場を言い逃れようと必死で考える。

「それは良い考えではないと思います。人間と交わったら、女王様の種族はこれから先滅んで行くでしょう」

「確かにそれは長老達も危惧していた。種族の血が薄まることを」

「でしたら止めましょう。そのようなことをせずとも侵略者達を防ぐのに私達の力をお貸しします」

「…騎士殿は余に魅力を感じないのか？」

ガブリエルは俯いて言う女王を気の毒に思ったが、女性として魅力を感じるとは言えなかった。

「見る者によつては女王様は十分魅力があると思います。私は妻としてお慕いすることはできませんが、妹としてなら…」

「無礼者!!!余の方が年上であるぞ」

何故女は皆子ども扱いされると怒るのだろうとガブリエルは可笑しくなりながら言った。

「…では姉上としてお慕い申します」

「真に残念だがそういうことにしよう。約束どおり余が助けを求めたら直ちに来て欲しい」

「分かりました」

そして女王はガブリエルに姉弟になった印に月長石の首飾りを与えたのだった。

.....

あれは夢ではなかったのか？

俺が妖精の女王の婿になるだと？

馬鹿馬鹿しい。

まあいい、どうして俺が持っていたのか分からないが、昔から月長石は悪霊を祓うと言われているから害はあるまい。

じっと考え込んでいたガブリエルは、頭を振ると、首飾りに首を通した。

夕方、森を出た一行は、以前ガブリエルがある貴族の男を隣国まで護衛した時に通った町に着いた。

ルモンがガブリエルに尋ねた。

「あの宿屋に行きますか？銅の斧でしたっけ」

行きは変装していたが、万が一ばれたら不味かったので別の宿に泊まったのだった。

「ああ、そこ別嬪がいる所だろう。だがあれは手強いぞ。俺が誘ってもちつともなびかなかった」

ドグメールがそう言うと、セズニが笑う。

「あれはドグメール殿の完敗だった。だがいい女だったな。最近流行の胸は片手に納まる程小さく、胴は両手に納まる程細くっていうのより断然好みだな」

「やっぱり女は抱き心地がいいのが一番だ」

「胸がでかくて、尻もでかいのがいいよなあ」

「おい」

自分達を冷ややかに見ているメルグウエンに気付いた男達は気まずそうに咳払いし黙った。

一行は寄って来る客引きをかわし、宿屋に向かった。

宿屋に着くと亭主が手を擦りながら出迎え、大声で召使や女房に指図している。

急に9人もの客が来て宿屋はおおわらわである。

「ソレナ!!!」

亭主が階上に向かって怒鳴る。

階段を駆け下りて来た金髪の娘がガブリエルを見て目を輝かせた。

だが後ろにいるメルグウェンに気が付いて笑みを引っ込める。

騎士のうちの誰かがヒューと口笛を吹いた。

翌日、朝早く宿を出た一行は北に向かって進んでいた。

メルグウエンは腹を立てていた。

昨夜の騎士達の会話といい、夜中の出来事といい、やはり男達に気を許してはならないと思った。

昨夜、食事も終わり寝室に引き上げた時、メルグウエンの案内されたベッドが窓脇だったので、ガブリエルは自分のベッドと取り替えることを提案したのだった。

その時はメルグウエンも窓から遠い方が寒くないと思い、喜んで取り替えたのだが、皆が寝静まった夜中にそれは起こった。

メルグウエンは急に寒気がして目を覚ました。

布団を探して手を伸ばすと冷たい肌に触れた。

誰かが自分を襲いに来たかと思ひ込んだメルグウエンは叫び声を上げベッドから転げ落ちた。

その音で目を覚ました騎士達が燭台に火を灯し慌てて駆け寄ってきた。

そしてガブリエルが剣を抜いて掛け布団を捲り上げると、その中で宿屋の娘ソレナが裸で震えていたのだった。

騎士達が笑いながら自分達のベッドに戻った後、メルグウエンは寒さに震えながらベッド脇に立って、泣いている女を慰めているガブリエルを見ていた。

女がガブリエルが寝ていると思ってそのベッドに忍び込んできたのは分かった。

運悪くそこにはメルグウエンが寝ていたのだけ。

だけど何故私のベッドでぐずぐずしているの？

そのうち接吻の音や女の吐息まで聞こえてきて、メルグウエンは顔を引き攣らせた。

ソレナの上に覆いかぶさっていたガブリエルは身を起こすと、振り返ってメルグウエンを見た。

「ガキはさっさと寝に行け」

そう言っただけでベッドのカーテンを閉めた。

メルグウエンは怒りに震えながらベッドに歩み寄り両手でカーテンを勢い良く開いた。

「私のベッドからとっとと出て行ってよ……!!」

「向こうのベッドで寝れば良いだろう?」

「あつちは貴方のベッドでしょ? 私は貴方のベッドなんか使いたくないわ」

「じゃあ、そこで終わるまで待ってる」

ガブリエルはそう言って肌着を脱いだ。

メルグウェンは頭に血が上り、怒りのあまり卒倒するかと思った。

力尽くで追い出してやろうとベッドに近づいた時、女がベッドから降りて部屋を横切り出て行った。

どうやらガブリエルは自分の肌着を女に貸してやった様だった。

「ほら、ベッド返してやるからさっさと寝ろ。風邪ひくぞ」

ガブリエルが燭台を吹き消しながら言った。

メルグウェンは無言でベッドに潜り込んだ。

裸の女がいたベッドは嫌だったが、この部屋は寒すぎた。

そついう訳で朝からメルグウェンは誰とも口を利かずにいた。

話しかけると軽蔑しきった目で見られるので、騎士達もチラチラ様子を窺うように見るだけで話しかけては来ない。

昼食の時も皆が気まずく黙っているのを見かねたガブリエルがメルグウェンに言った。

「拗ねて脹れるのもいい加減にしろよ。皆が気にしているだろうが」

「……」

「大体おまえは何をそんなに怒っているんだ？」

「……」

「おれがあの娘を誘ったんじゃないぞ。だけど勇気出して訪ねて来てくれた相手を邪険にはできないだろ？ 煩いガキの所為で何も出来なかつたけどな」

「……」

「それとも、昨日のあれか？ 俺達の好みがおまえみたいじゃないから拗ねてるのか？ だけど考えてみるよ。その方が襲われる可能性が少なくないだろうが」

「……」

「おまえもちゃんと食って寝たらそのうち成長するだろ。10年ぐらいかかるかも知れんけどな」

唇を噛み締めて我慢をしていたメルグウェンだったが、ガブリエルの最後の言葉を聞くと、つかつかとルモンに歩み寄った。

「貴方の剣を貸して頂戴」

ルモンが躊躇するとガブリエルが言った。

「貸してやれ」

メルグウェンは差し出された剣を受け取りガブリエルに言った。

「勝負しましょう。もし貴方が勝ったら話を聞くわ」

そして剣を抜き払った。

ガブリエルは呆れた顔をしたが、剣を抜く前に確かめる。

「勝ち負けはどうやって決めるんだ？怪我するぞ？」

「本当は貴方を殺してしまいたいところだけど。まあ先に傷を負ったほうが負けということにしましょう」

「ふん、そんな偉そうなこと言えるのかよ。雑兵斬っただけでピーー泣いてた癖して」

「貴方を殺しても私の良心は傷まないと思っわ」

「容赦しないぞ。後悔するなよ」

「そっちこそ後悔しないようにね」

ガブリエルが剣を抜くと、それまであんぐりと口を開けたまま二人のやり取りを観ていた騎士達が慌てて止めようとした。

「何をなさるのです」

「ガブリエル殿、相手は女性ですぞ」

「剣をお収めください」

「こいつは女なんかじゃねえよ」

ガブリエルがニヤリとして言った。

メルグウエンの目に怒りが燃え上がる。

剣を構えるとガブリエルに言い放った。

「その無礼な口を二度と聞けない様にしてあげるわ。覚悟しなさい」

そして剣を振りかぶると自分より頭一つ半背の高い男にかかって行った。

騎士達は感心した様にメルグウエンの動きを観ていた。

ガブリエルはメルグウエンを傷付けるつもりはなかった。

そして自分も怪我などしたくない。

だが本気でかかってくる相手を傷付けずにかわすのは難しい。

その上、こいつはすばしこく腕が立つ。

剣を持たせたらまるで戦の女神マーエウの生まれ変わりだ。

気を抜けば自分がやられてしまう。

だがガブリエルは、メルグウエンが一瞬でも隙を見せたら決着をつけるつもりだった。

メルグウエンの気を逸らすために話しかける。

「何でおまえは剣が使えるんだ？」

ガブリエルはメルグウエンの攻撃をかわしながら尋ねた。

「……」

「山では女にも剣術を習わせるのか？」

間合いを外しながら更に尋ねる。

「……」

「おまえは修道院で暮らしてたんだろ？」

メルグウエンはガブリエルに傷を負わそうと躍起になっている。

「屁になろうとしてたのか？」

ガブリエルの質問攻めにメルグウエンは苛立った声を上げた。

「もしかして親に捨てられたのか？」

「そんな訳ないでしょ……!!」

そう答えた瞬間、ガブリエルの剣がメルグウエンの剣を跳ね飛ばした。

メルグウエンは悲鳴を上げ腕を抱えて蹲る。

「見せてみる」

剣を収め近寄って来たガブリエルが、メルグウエンの腕を無理矢理取って調べる。

「手首を捻ったのか。ルモン、手当てしてやれ」

メルグウエンは俯いて唇を噛んでいた。

また負けてしまった。

悔しさのあまり、必死で我慢してないと涙が零れそうだ。

だが自分を二度も打ち負かしたこの男の前で涙を見せることは自尊心が許さなかった。

ルモンが小袋から打撲傷や捻挫に効く練薬を出し、メルグウエンの傍らに跪き、薬を手首に塗って布を巻いてくれた。

暫くして落ち着いたメルグウエンはガブリエルの側に行った。

「悔しいけれど負けを認めるわ」

「じゃあ約束を守れ。俺の質問に答える」

「剣術は興味があつたから弟と一緒に習ったの。父は反対していたわ。バザーンの修道院には結婚を嫌って逃げ出さないように入れら

れたの」

「結婚だと？」

「そうよ。でも信じられないんだったらそれでもいいわ。これで満足した？」

「いや。何故朝から怒っていた？」

「貴方達が女性を卑下するような態度を取るからよ。まるで女性が男のために存在しているような言い方をして」

「違うのか？」

「違うに決まってるでしょ！！私達がいなかったら人類は滅びてしまふのよ。大体騎士の掟に女性への敬意と礼儀って含まれているんじゃないの？」

黙って二人のやり取りを聞いていたドグメールがメルグウエンの前に来ると頭を下げた。

「メルグウエン姫、先程の自分の非礼をお許してください。確かに自分達の態度は騎士として失格だった」

他の騎士達も次々と戸惑っているメルグウエンに侘びを言いに来た。

ガブリエルだけは自分は謝らなきゃならないようなことはしていないと言って謝らなかったが、騎士達に囲まれているメルグウエンを満足そうな顔で見ている。

長かった旅も残り僅かとなった。

夕方には城に着くと見たガブリエルは、その朝パーンとイアンを早駆けで城に向わせていた。

一行は海沿いの細道を進んでいる。

幸いなことに霧は出ていなかった。

辺りの地面は暗灰色のヒースと茨で覆われており、遥か下に見える海は鉛色で波が高い。

海から吹き付ける風は身を切るように冷たかった。

山奥で育ったメルグウエンには馴染みのない景色だったが、果てしなく広がる海も荒れた崖も嫌いではないと思った。

ガブリエルとの決闘で手首を傷めたメルグウエンはルモンの馬の尻に乗せてもらっていた。

ここら辺は既にキリルの領地であり、ルモンが時々振り返って説明してくれた。

「ここから東に半日程向った所がキリル城です。今はガブリエル様のご両親と次期城主のジョスリン様のご家族が暮らしておられる」

メルグウエンは黙って聞いている。

「ガブリエル様の城はこの道を海に沿ってもう暫く進んだ所です。今頃パバーンとイアンが私達を迎える準備を大急ぎでさせているでしょう」

暫くして一行は海辺の道を折れヒースの中を奥地の方に向った。

やがて林や畑が現れ、人里が近くなった気配がしてきた。

辺りは既に薄暗くなってきている。

馬ももうすぐ城に着くと分かったのか、足並みも軽く元気になったように思えた。

そして、辺りがすっかり闇に染まった頃、とうとう一行は城に着いた。

門入ると松明を持った家来が転がる様に出てきた。

下男と小姓のカドーである。

騎士達は馬を厩に連れて行き、後の世話を二人に任せて城に向った。入り口の階段を上った所でガブリエルはメルグウエンを振り返り皮肉めいた口調で言った。

「我が城へようこそ、メルグウエン姫」

メルグウエンも負けないように優雅な挨拶を返す。

「お招き有難うございます」

広間には火が赤々と燃え、大きなテーブルには果物や飲み物が置かれている。

一行が席に着くと、家来が次々と湯気の立つ料理を運んできた。

それを見て空腹だった皆は目を輝かせ歓声を上げた。

食後、久し振りに風呂に入りすっかり満足したメルグウエンは、与えられた小部屋の暖炉の前に座り髪を梳っていた。

貸してもらった男物の服は大きく膝まである。

自分の服は洗って台所に干してもらっているから明日の朝までには乾くだろう。

直ぐに薬を塗ったのが効いたのか、手首はもうそれ程傷まない。

2、3日もすれば治癒するだろう。

ガブリエルが何故自分を殺さずに城に連れてきたのかはまだ分からないが、悪い思惑があったのことは思えなかった。

自分のことを子ども扱いして馬鹿にするガブリエルを許せないと思っていたが、同時に彼を信用する気持ちが自分にあることが不思議だった。

彼が頼りになる城主であることは、騎士達の態度で分かった。

だがバザーンの城でのことはメルグウエンの記憶から決して消えることはなく、思い出す度に怒りで頭に血が上る。

メルグウエンは明日から毎日剣術の稽古をして、いつか絶対にガブリエルを打ち負かすことを自分に誓うのだった。

翌日、メルグウエンが広間に下りていくと、セズニとドグメールが留守番を頼まれていた3人に大袈裟な身振り手振りを加えて落城と旅を語っている所だった。

3人のうちの一人は青年だったが、後の二人はメルグウエンと同じ位の歳に見えた。

メルグウエンは入っていくと皆が黙り自分の方を見たので、多分自分の話をしていただと思った。

皆の挨拶にメルグウエンが答えると、セズニが言った。

「ガブリエル殿は今朝早くキリル様の城に向われた。帰りは夕方になるでしょう」

「そう」

ではルモンも一緒に行ったのだろうか。

剣術のことを尋ねたかったのに。

でも、自分の主人を傷つけようとした者に剣を渡して練習させてくれるだろうか？

多分ルモンはガブリエルに相談するだろう。

そしてガブリエルの気分次第で私は剣を握ることができる。

腹が立つけれど仕方がない。

ここはあの男の城。

私はお情けで居候させてもらうのだから。

物思いにふけていたメルグウエンをセズニの声呼び戻す。

「メルグウエン姫に城を案内するように言われています。食事が済んだら行きましょう」

簡単な食事の後、メルグウエンはセズニの後に続いて広間を出た。

セズニとメルグウェンが階段を下りると小姓の二人もついて来た。

「お前達は他にすることがあるだろう!!」

セズニが叱ると二人は残念そうに去っていった。

台所から初めて食糧貯蔵室、酒蔵、聖堂、図書室、居間、寝室と回る。

小さいけれども数十人が生活できる様に設計された機能的な城だった。

元々城主が住んでいた訳ではないので、堀は申し訳程度のものだし、城壁も頑丈な作りではなく牢屋もない。

メルグウェンは聖堂が武器倉庫となっているのにびっくりしたが、信仰深いパバーンは大層不満に思っているとセズニが笑った。

「我々は人数が少ないので、塔の見張りも武器倉庫の見張りも置くことができないのです。だから代わりにガブリエル殿が考えた罠が城の周りにあちこち仕掛けてある」

セズニは危険だから絶対に一人で城の周りを歩かぬ様にとメルグウェンに注意した。

「ガブリエル殿は定期的に罠の場所を変えさせて、新しい仕組みを考えるので、私も詳しくは知りません」

城に住み始めた頃は泥棒が何回かかかったことがあったそうだ。

図書室はガブリエルの書斎となっていた。

中に入ったメルグウエンは目を輝かせた。

この城の元の持ち主が集めたのだらう、棚には革張りの立派な書物が並んでいる。

壁には地図や海図が張られ、家具や机の上には様々な大きさの砂時計やその他メルグウエンの知らない器械が沢山あった。

「航海で使う物が殆どです。キリル様は領地内の港に船を何艘か持っておりますので」

「貴方は船に乗ったことがあるの？」

「子供の頃に一度だけ。船酔いして散々でしたが」

「私も乗せてもらえるかしら？」

「姫は面白いお方だ。怖くないんですか？」

「知らないんだもの、怖くないわ」

「普通は知らないと怖いものなんですがね」

「これは何？」

「これは羅針盤といって船の上で方角を知るために使う器械です。」

「どう使うの?」

「どこにいても、これが北を示すのですよ」

「魔法がかかっているみたいね。こっちの綺麗な機械は?」

「これはアストロラーベです。キリル様が外国の商人からお買い求めになりガブリエル殿に贈られた物と聞きました」

「どこから来たものなのかしら?」

「ガブリエル殿はこれはアランダルの天文学者が昔から使っていた器械で、あちらでは航海にも使われていると言っていました」

「どう使うの?」

「確か船の上で緯度を計算するのに使われると」

「緯度って何?」

「海の上を西から東に走る目に見えない線です」

「どうやって計算するの?」

「星の高さを測って計算するようです」

メルグウェンは次々と質問してはセズニを困らせた。

「私もそんなに詳しくないんです。ガブリエル殿に聞かれた方がいい」

どうせまた散々馬鹿にされるだろうから聞くつもりはない。

ただあの男は船が好きなのだろう。

こんなに色々持っているのだから。

いつか私も船に乗ってみたい。

外が暗くなる前にガブリエルは城に戻ってきた。

ルモンの他に中年の女を連れていた。

階段を上がるガブリエルの後をメルグウエンはついて行く。

ルモンに聞くより直接ガブリエルに聞いた方が早いと思ったのだ。

背後のメルグウエンに気付いたガブリエルは立ち止まった。

「何か用か？」

「お願いがあります。私に剣をください」

「自分を殺そうとする相手に剣を差し出す馬鹿がいるか？」

やっばり。

予想通りの答えが返ってきて、メルグウエンは俯いた。

修道院にいた時の様に木の枝で作るしかないだろう。

そう思つて踵を返そうとした。

「ほら」

ガブリエルの声に顔を上げると、布に包まれた細長い包みを渡される。

まさかと思うがこの大きさだとそれ以外思いつかない。

期待に胸を高鳴らせながらメルグウエンは包みを解いた。

思わずホーツと溜息が漏れた。

それは、素晴らしく美しい剣だった。

女性向けに短めに作られているが、鞘から抜き放つと切れ味の良さ
そんな刃は鋭く光り、細かい模様が刻まれた柄には握りやすそうに
革紐が巻いてあった。

「…これは？」

「妹の剣だ」

「もう使われないのですか？」

「ああ、死んだのでな」

「…私がもらってもいいのですか？」

「そのために持って来た」

ガブリエルは輝く瞳で剣を見つめるメルグウエンを見て笑った。

「俺は馬鹿だな」

そして扉を開けると自分の部屋に入ってしまった。

メルグウエンの侍女にとガブリエルの連れてきた女はアナという名で、キリルの城でガブリエル達兄弟の子守だった女だ。

少々口煩いが気立てのいい女で、ジョスリンやガブリエルのことをまだまだ子供と思っているところがあった。

その丸い桃色の頬と青い目を見てメルグウエンは一目で好きになった。

アナは早速メルグウエンの部屋を掃除すると、包みから出した何着かの服をきれいに畳んでベッドの足元にある大きな箱にしまった。

バザーンの城の衣裳部屋から取ってきた服しかなかったメルグウエンにとってはとても有難かった。

「捨てないで取って置いてよかったです」

アナは木の小箱をメルグウエンに差し出しながら言った。

開いてみると中には白い貝殻で作った首飾りや、紫水晶のペンダント等様々な装身具が入っていた。

決して高価な品ではないが、若い娘の喜びそうな物ばかりだ。

「これは？」

「ガブリエル様の妹のスクラエラ姫が子供の頃されていた物です。」

亡くなった方の物はお嫌かも知れませんが」

「私が使ってもいいのかしら？」

「スクラエラ様が嫁がれた時に残された物で、どうしても捨てられずにしまつてあつたのです。宜しかったらどうぞお使いになつてください」

「喜んで使わせてもらつね。ありがとうございます」

早速ペンダントを着けてみる。

「あら、これは」

良く似合うと褒めていたアナがメルグウェンの腰に下がっている剣に気付いた。

「スクラエラ様の剣ですね。幼女の頃、姫は何でも兄上達と同じにするといい張つて、キリル様がこの剣を作らせたんです」

アナは薄っすらと涙を浮かべ話し続ける。

「この剣を腰に下げてジヨスとガビツクみたいに騎士になると胸を張っていたスクラエラ様が目に浮かびます。勿論剣をお使いになることは一度もなかったんですがね」

「可愛かつたのでしょうかね」

「それはもう。まるで天使のように愛らしい方でした」

「亡くなられて残念でしたね」

「もう3年になります。お産で亡くなられたのですよ。ガブリエル様はスクラエラ様がまだ幼すぎると初めからこのご結婚に反対されていたんですけど、城主様がお取り決めになられたご結婚でしたから」

アナは自分が育てた姫がその様にあっけなく逝ってしまい悔しいのだろう。

それでもメルグウエンは亡くなった姫を羨ましく思った。

自分の結婚は誰も反対などしてくれなかった。

私がネヴェンテルと結婚してお産で死んだら誰か惜しんでくれる人はいるのだろうか？

ガブリエルの城での生活は思ったよりもずっと快適だった。

初めの頃は夜中に悪夢に魘されることがあったが、段々とそれもなくなつた。

数ヶ月経った頃にはメルグウエンは皆と打ち解け、皆を家族の様に思うようになっていた。

剣術は好きなだけ練習できたが、メルグウエンはそれだけではなく家事も進んで手伝った。

自分が居候だという思いがあったので、何か役に立ちたかったのだ。アナはかつてスクラエラに教えたように蜂蜜と香辛料入りの焼き菓子の作り方や、ジャムの作り方をメルグウエンに教えた。

また洗濯に使う石鹼やラベンダー水の作り方も教えた。

メルグウエンは肌着や胴着の裁ち方や縫い方をアナに教わり、騎士達に服を縫った。

その他に、アナはメルグウエンにこの地方の言葉を教えた。

初めはメルグウエンは皆標準語を話すのだから必要ないと思っていたのだが、新しい言葉を覚えるのが楽しくなり、騎士達にも積極的に方言で話しかけるようになった。

メルグウエンが自分達の言葉を話すのを皆喜び、熱心に耳を傾け丁寧に間違いを直してくれたため数ヶ月すると意思疎通できるぐらい上達した。

ある日、メルグウエンは自分の知らない唄を教えてくれるようにルモンに頼んだ。

ルモンはギドゴール地方の民謡だけではなく他の地方の唄も沢山知っていた。

しかしメルグウエンの故郷のエルギーン地方の民謡は知らなかったので、メルグウエンは喜んで自分が知っている唄をルモンに教えたのだった。

ルモンは自分が持っていたラウドのうち小さい方をメルグウェンに貸してくれたので、メルグウェンは好きな時にラウドが弾けるようになり嬉しかった。

剣術の稽古は、城で剣術指南の役を務めているモルガドにつけてもらっていた。

稽古は二人の小姓カドーとマロと一緒にである。

初めて稽古に行った日、カドーとマロはメルグウェンが自分達の勇姿を見に来たと思い有頂天になった。

ニヤニヤしているモルガドからメルグウェンが稽古用の剣を受け取ると、女の子に剣は向けられないと馬鹿にしたように口を尖らした二人だったが、いざ剣を交わして見るとあつと言つ間に二人共手から剣を叩き落とされ、みつともない思いをしたのだった。

それ以来、カドーとマロはメルグウェンの後を子犬のようについて回っている。

二人の稽古を見ながらメルグウェンは自分の弟のマルカリードを思い浮かべ、もう少しちゃんと面倒を見てやればよかったと思うのだった。

あの頃は父親が弟ばかりを気にかけるのに嫉妬して、弟とは張り合つか無視するかのどちらかだった。

メルグウェンは何かをしている時にふと故郷を思い出すことがあった。

結婚が決まった時は城を逃げ出すことしか考えていなかった。

だが今離れてみて思い出すのは懐かしいことばかりだった。

大きな菩提樹のあるハーブの香りが漂う薬草庭園、祭りの際に作られるアーモンド入りの焼き菓子と柑橘類の花で味付けをした砂糖菓子、腕白小僧達と駆け回った城下町、弟と剣の稽古をした古い井戸のある中庭、書物を保管してある薄暗い小部屋、そして小さいが居心地のいい自分の部屋。

自分が姿を消しネヴェンテルとの結婚が中止になってしまい家族はどうしているのだろうか？

城は無事なのだろうか？

家族は少しでも私のことを悲しんでくれたのかしら？

メルグウエンは城の住人達と仲良くなったが、唯一ガブリエルとは距離を置いていた。

剣をもらって間もない頃、ガブリエルの放った一言に逆上したメルグウエンは剣を抜き払い、背を向けたガブルエルに斬りつけたことがあった。

だが剣はガブリエルに届かず、側にいたフェリスという名の家来に足を掬われたメルグウエンは地面にしたたか顎をぶつけた。

メルグウエンの腕を背中であぐらで捻り上げ、ガブリエルの指図を仰ぐフェリスにガブリエルは言った。

「放してやれ」

「この娘はガブリエル様のことを」

「分かっている、放してやれ」

放された腕を摩りながら立ち上がったメルグウエンをちらと見てガブリエルは言った。

「こいつは絶対に卑怯なことはしない」

「え？でも今ガブリエル様の背後から」

「いいから、放っておけ」

そしてガブリエルはそのままその場を立ち去ったのだった。

メルグウエンは自分の部屋に入って扉を閉めるまで涙を耐えていた。擦りむいた顎がヒリヒリと痛んだ。

また負けたと思った。

この男には敵わないと思った。

剣にはない。

ガブリエルの寛大さにである。

そしてメルグウエンは泣きながら思った。

どんなに私を怒らせるようなことを言われたとしても、もうこの男に剣は向けるまい。

だが急に愛想良くすることはメルグウエンにはできなかつた。

その為、それからずっと何となく気まずい状態が続いている。

しかしそれはメルグウエン一人が思っていることであって、ガブリエルは相変わらずメルグウエンの顔を見るとからかうのであった。

夏のある日、キリルの城から帰ってきたガブリエルは騎士達を書斎

に集めた。

ジュディカエル王から騎士ガブリエルに出頭の命令が下ったのだ。

バザーン落城のことが頭にある騎士達にはそれは明るい兆しに思えたが、ガブリエルは行ってみなければ分からないと言って皆を黙らせた。

この季節は王は首都にはおらず、南部の領地に宮廷を移している。

参上するのはガブリエルとパバーン、それに近習のルモンとイアンと決まった。

その日の夕方、ガブリエルに呼ばれたメルグウエンは書斎の扉をノックした。

「入れ」

ガブリエルは窓際の革張りの椅子に腰掛け窓から外を眺めていた。

夏はこの時刻でもまだ外は明るい。

メルグウエンが入っていくと、ガブリエルは座るように促してから暫くの間黙ったまま外を見ている。

居心地悪くなったメルグウエンが椅子の上で身動きすると、ガブリエルはやっと振り向いて話し始めた。

「家に帰りたいか？」

唐突に聞かれたメルグウエンは答えられない。

「家族の許に帰りたいか？」

帰りたくないと言ったら嘘になる。

自分が無事だと家族に知らせたい。

家のことも心配だったし、生まれ育った城が恋しかった。

だが、戻ったら結婚しなければならない。

ネヴェンテルとの結婚に決められていた夏至の祭りはとうに過ぎている。

もしかしたら政略結婚以外に城を守る手段が見つかったのではないか？

期待する思いもあった。

「今度、南部への旅が決まった。おまえの故郷は通り道ではないが、近くを通るので寄り道をするのは可能だ。もし帰りたいなら送って行く」

ガブリエルの城は居心地が良かった。

だがメルグウエンは自分はここにいるべきではないとも思っていた。

自分はガブリエルの騎士でもなく家族でもないのだ。

もしかして私を厄介払いしたくなつたのかも知れない。

不安そうな顔をして黙つたままのメルグウェンを見てガブリエルは笑つた。

「まあ、帰つてみて、やっぱり俺の城の方がいいと言つたら戻つてきてもいいぞ」

「ではお願いします」

しっかりとガブリエルの目を見てメルグウェンは答えた。

数日後、4人の男とメルグウエンは南に向けて城を発った。

半年以上一緒に暮らしてきた人々に別れを告げるのは辛かった。

特にアナはメルグウエンに縋りつき、もう一度自分の姫を失うようだと嘆いた。

カドーとマロは海辺の道を半日程一行について来た。

いつもは一生懸命背伸びしている二人が別れを惜しんで泣くのを見て、メルグウエンも涙を浮かべた。

「ちゃんと勉強して稽古して早く一人前の騎士になるのよ」

「はい、姫もお幸せに」

「お元気で」

馬に揺られながらメルグウエンは海に別れを告げた。

潮の匂いを胸いっぱい吸い込み打ち寄せる波を見つめる。

そんなに頻繁に来ることはなかったが、メルグウエンは海が好きだった。

上質の布の様に滑らかで透けるような青緑の海も、白い飛沫を立て波が踊る深い青の海も、強い北風の中荒れ狂う鉛色の海さえも。

もう二度とこの景色を見ることはないだろう。

家族の元に戻ることを決心した筈なのに、メルグウエンの心は揺らいだ。

後悔する思いを振り払うようにメルグウエンは頭を振ると自分の前に伸びる道を見つめた。

道中が安全ではないため男達は武装し、メルグウエンは修道女の格好をしていた。

メルグウエンの故郷まで馬で2週間程かかる見込みだった。

ガブリエルは海辺の道を離れたら東に向かって進み、首都から南部に下る道を使ってもりだった。

国で唯一石畳で舗装された道である。

その道に行く旅人は多い。

そのため旅人を襲う犯罪も多かった。

王族や金持ちの貴族がこの道に行く時には、護衛の兵が前を行き怪しい者は全て排除するため問題ないが、一般人の場合はそうはいかない。

しかし武装した騎士達を見て盗賊達も恐れをなしたのか、さして危

険な目に遭うこともなく一行は順調にエルギーオン地方に向って馬を進めていた。

季節は夏であり、しかも夜は道沿いにある宿屋に泊まれたため、バザーンの時と比べて遥かに楽な旅であった。

道は幅があるため、一行はメルグウエンを真ん中に前後左右を固め守る形を取っていた。

メルグウエンは最後の旅を楽しむことにした。

辺りの景色は農地の多かった平地から、緩やかに起伏する丘に変わった。

時折遠くに牛や羊が草を食んでいるのが見える。

道の両脇に植えてある木々の間を通る時には爽やかな風が吹き渡り、日向では蜂や蠅が羽音を立てて通り過ぎ、蝶が一行の周りを舞うのであった。

メルグウエンはルモンが隣にいる時には、おしゃべりをしたり一緒に歌いながら馬を進めた。

南に近づくにつれ段々と日中は日差しが強くなり、鎖帷子を着ている騎士達にとっては苦痛になりつつあった。

そのため、ガブリエルは旅のリズムを変更し、朝は日の出前に出発し昼食の後休憩して日が傾き始める夕方からあたりが暗くなるまで進むことにした。

そしてとうとうある日の夕方、一行はダネールの城下町に着いた。

ガブリエルは町の門から少し離れた林で馬を止めさせた。

メルグウエンは馬から下りると、別れを告げるため騎士達に近づいた。

「パバーン殿、礼を言います。お元気で」

パバーンはメルグウエンの差し伸べた手を握って言った。

「姫の上に神々のお恵みがありますように」

メルグウエンは次にイアンの手を取って言った。

「イアン、有難う」

「メルグウエン様もお達者で」

ルモンにも手を差し出そうとしたメルグウエンだったが、青い瞳に涙が浮かんでるのを見ると我慢できずその腕に飛び込む。

びっくりしたルモンだったが、ぎこちない手でメルグウエンの頭を撫でた。

「ルモン、今まで本当に有難う。貴方のことは絶対に忘れない」

「私も姫のことは忘れません」

最後にメルグウエンはガブリエルの前に行った。

腰を屈めて丁寧な礼をする。

「今までお世話になりました」

「何だ、俺には握手も抱擁もなしかよ。まあいいが」

メルグウエンの挨拶を笑ったガブリエルであったが、ふと真顔になつて言った。

「もしおまえの家族がおまえを受け入れないようなことがあったら、遠慮せずに俺の城に戻って来い。」

この町を出る前に明日の夕方の同じ時刻にここで待っているから」

その言葉にメルグウエンは泣き出しそうになり、無理矢理微笑みを顔に浮かべた。

「有難う。それからこれをお返しします。城に持って帰ったら取り上げられますので」

そう言つて腰に下げていた剣をガブリエルに差し出した。

メルグウエンにとって剣を手放すことはとても辛かった。

一行は歩いて町に向うメルグウエンを見送った。

メルグウエンは一度だけ振り返り手を上げると、真っ直ぐ前を見て門に向つて歩いていった。

城門を守っていた兵は大慌てで城主に知らせに走っていた。

皆が死んだとばかり思っていた姫がひよつこりと現れたのだ。

城の中庭には城主ダネール本人が出てきた。

メルグウエンが初めて見る心底驚いた顔をして近寄ってくる。

「メルグウエン!!」

「父上!!」

メルグウエンは父親に駆け寄ろうとしたが、ダネールの冷たい声に立ち止まる。

「おまえは今までいつたどこにいたのだ？」

「……」

「バザーンが落ちておまえが行方不明となり、ネヴェンテル殿との約束は破談となった」

「…はい」

死んだと思っていた娘が無事戻って来たというのに、父上はそのことしか気にならないのか？

メルグウェンは父親に違う態度を期待していた自分に嫌気がさした。やはり私は父上にとっては政略結婚の駒でしかないのだ。

「今更戻って来ても結婚する権利のなくなったおまえは家の役には立たぬ」

ダネールはそう言い捨てて城に入っていった。

後に残されたメルグウェンは続いて城に入るかどうか迷う。

ダネールの後から城を出てきた弟のマルカリードと叔母のマリアニツグが側に来た。

「姉上、よくぞご無事で」

「よく帰って来ましたね」

「……」

メルグウェンはダネールの消えた扉を黙って見つめていた。

二人に促され居間に入る。

見慣れた家具や壁に掛けてあるタペストリーが懐かしい。

マルカリードが言った。

「突然のことに父上は動転されているのです。それであのようなことを」

「いいえ、あれが父上の本心だわ。でもネヴェンテル様との結婚が破談になったからって、何故私に結婚する権利がなくなったことになるの？」

マルカリードとマリアニッグが顔を見合わせ、マリアニッグが話し難そうに言った。

「それは貴方が清い体ではなくなっただからですよ」

「どづいつこと？」

「落城の際に……」

マルカリードをマリアニッグが遮った。

「結婚するには生娘でなくてはならないのです」

メルグウェンの頬がカツと紅に染まる。

「バザーンでは誰にも何もされていないわ。勿論その後も」

それを聞いたマルカリードは黙って部屋を出て行った。

翌日、ガブリエルは朝からイライラしていた。騎士の格好で城下町に入って目立ちたくはなかったので、夜は町の近くの林で野宿をした。

メルグウェンと約束したため、ここで夕方まで待たなければならなかった。

ガブリエルは待つことが苦手だ。

昼食前にとうとう我慢できなくなったガブリエルは立ち上がると服を脱ぎ出した。

「ちよつと様子を見て来る」

ルモンに手伝わせ鎖帷子を脱ぐと、胴着の上に荷物から出した短めの上着を羽織る。

フードを目深に被り短剣を上着の下に隠したガブリエルは、すたすたと町の門を目指して歩き始めた。

こうなったら止めてもどうにもならないのをルモン達は経験上知っている。

問題なく城下町に入り込んだガブリエルは食事をする場所を探す。

何軒かの居酒屋を覗き、汚いが安そうな店に入っていた。

料理の匂いが立ち込めている薄暗い店内はガヤガヤと騒がしい。

ガブリエルは誰もいない奥まったテーブルに近寄り、フードを脱ぎ木のベンチに腰掛けた。

注文を取りに来た親父に食べ物とビールを頼み、早速話しかけた。

「仕事を探しているんだが、何かないかね？」

ニコニコしながら話しかけるガブリエルに親父は警戒心を解いた。

「どづいつたお仕事で？」

「金になるんだつたら何でもいいんだが。あの城に何かないだろうか？」

親父は愛想良く答える。

「お客さんだつたら警備兵になれるんじゃないですか？」

そして隣のテーブルで食事をしている男に呼びかけた。

「おい、ディデル。おまえさん城に出入りしてるだろう？城で人を求めてるか知らないかい？」

ディデルと呼ばれた男が振り返る。

「今城は大騒ぎでさあ。それどころじゃないよ」

「何があつたんだい？」

「皆が亡くなったと思っていた姫が昨夜帰ってきたんだ」

「えっ？バザーンに行つてた姫か？」

「そつだよ。ダネール様には娘は一人しかいないじゃないか」

ガブリエルは興味ない振りをしてしながら耳をそばだてた。

「それで今朝早く使いがネヴェンテル様の元に向ったそうだ」

「そうか、許婚が無事戻ってきてネヴェンテル様も嬉しいだろうな。我々の町もこれで安泰か」

「いやいや、そう簡単にはいくまい」

「どうしてさ？」

男達はぼそぼそと小声になり、ガブリエルは腰を浮かせて耳を澄ました。

「…ネヴェンテル様も10数本の蠟燭を灯した燭台は欲しがらないだろうよ」

「そうかやっぱり落城の時に…」

ガブリエルはビールを飲み干すと立ち上がった。

メルグウエンは酷く腹を立てていた。

こんな失礼な申し出を受け入れるなんて父上はどうかしている。

ネヴェンテルからの返事は午後になってから届いた。

メルグウエンを翌日自分の城に寄こして、もしダネールが主張しているようにメルグウエンが清い体だったならば当初の予定通り婚禮を挙げよう。

しかし、もし違ったならば契約は破棄するが、メルグウエンをそのまま自分の元に留めるかそれとも親に戻すかは、自分がその時に判断するというような内容だった。

つまりネヴェンテルは、例えメルグウエンが処女であったとしても気に入らなければ、結婚しなくても済むということだ。

あんな老人に弄ばれるのは死んでも嫌だった。

「絶対に嫌です!!!」

そう叫ぶメルグウエンにダネールは冷ややかに答えた。

「既にネヴェンテル殿には了承すると伝えた」

ダネールは家来にメルグウエンを部屋に連れて行き、扉に厳重に鍵をかける様に命じた。

別に娘が憎い訳ではない。

ただ彼にとっては娘よりも自分の領地の方が大事だったのだ。

娘がネヴェンテルの奥方になることが望ましい。

だが、もしネヴェンテルが娘を返して寄こすようなことになったら、娘は自分の城で養っていくつもりだった。

メルグウェンは昨日ガブリエルが言っていたことを思った。

約束の時間までに絶対に脱出しなければならない。

だが扉は頑丈でメルグウェンの力ではどうにもできそうもなかった。

その上、ダネールは扉の前に見張りまで立たせているようだ。

どうしたらいいのだろうか？

メルグウェンは涙を堪え必死で頭を働かせる。

窓から出られるだろうか？

メルグウェンの部屋は中庭に面している。

もし窓から出られたとしても誰にも見られずに下まで下りることは絶対に不可能だろう。

このまま籠の中の鳥のように閉じ込められてネヴェンテルの城に連れて行かれてしまうのだろうか？

絶対に嫌だ！！！！

そんなことになるなら死んだ方がましだ。

メルグウェンは顔を上げると拳を握り締めた。

最後の瞬間まで戦ってみせる。

もし駄目だったらそれまでだ。

ネヴェンテルのものになる前に死んでしまえばいい。

そう決心すると少し楽になった。

一つだけ考えが浮かんだ。

上手くいくとは到底思えないがやってみるしかない。

メルグウェンは動きやすくするため、髪を頂で纏めると着ていた修道着の裾を絡げた。

居酒屋で聞いた話を皆に語りながら、ガブリエルはメルグウェンを実家に帰らせたことを後悔していた。

戯れるカドー達を遠い目をして眺めているメルグウエンを見て、ガブリエルは彼女が家族を恋しがっていると思ったのだった。

もう少し詳しく家族のことを聞いておけば良かった。

そう言えば以前あいつは結婚を嫌って修道院に入れられたと言っ
てなかったか？

メルグウエンの許婚という男がどのような反応をするか分からな
ったが、居酒屋で聞いた噂から見てメルグウエンがこれから幸せに
なれるとは思えなかった。

「しかしガブリエル殿、姫はご自分で決心されてご家族の元に帰ら
れたのですぞ」

パバーンが言った。

確かにそうだ。

だがあの時、妹も自分から進んで結婚すると言ったのだ。

自分がどうしたら幸せになれるかなんてガキには分からないんだ。

ガブリエルは眉を顰めて舌打ちをした。

「まあ、今はここで待つことしか出来ませんね」

ルモンが言った。

ガブリエルはメルグウエンは来ないだろうと思った。

やっぱり城まで迎えに行った方がいいのではないか？

だが城から城主の娘を連れ出すにはどうしたらいいのだ？

イライラと歩き回るガブリエルをルモンが不安そうに見た。

確かにメルグウエンのことは心配だが、ガブリエルが面倒なことに巻き込まれるのだけは避けたかった。

メルグウエンは窓から見下ろして中庭に誰もいないことを確かめると窓によじ登った。

隣の部屋の窓まで、間に螺旋階段があるため20フィートはあると思われた。

壁の外側の床と同じ位の位置に出っ張りがあるので、そこに足を乗せて壁伝いに進むつもりである。

メルグウエンは壁に張り付く感じでそろそろ隣の部屋に向って移動し始めた。

階段の部分は丸くなっているので腕を伸ばして壁に抱きつくようになら進む。

中庭に誰かが来るのではないかと不安だったが背を向けているので確認は出来ない。

この高さからもし落っこちたら頭を打って死んでしまうだろう。

自分でも気違い沙汰だと思いがこれしか考え付かなかったのだ。

壁の石で腕を擦りむき爪を傷めたがその様なことに構っていられない。

服がざらついた石に引っかかりヒヤッとさせられる。

いつまで経っても一向に距離は縮まないとされた。

長い長い時間だった。

途中で何度も挫けそうになった。

もうどうなってもいいと気を抜いて手を放しそうになった。

しかしその度に何故か旅の途中にルモンと歌ったギドゴアル地方の民謡が頭に浮かび勇気が湧いた。

後少し、後少しと繰り返し呪文の様に唱えながら、一步一步進んでいく。

やっと隣の部屋の窓に手をかけた時は嬉しくて泣きたい気持ちになった。

だが、はたして部屋の中にいる筈の人は自分を入れてくれるだろうか？

カーテンが引いてあり部屋の中は見えなかった。

メルグウェンは息を吸い込むと窓の框を拳で叩いた。

約束の時刻まで後少しだ。

ガブリエル達はメルグウェンが来なかった場合のことを相談していた。

ガブリエルは直ちに城に乗り込んで行くつもりだったが、他の3人が一生懸命に思い止まらそうとしていた。

今日中に発たないと王に拝謁する日に間に合わない。

結局、このまま出発して帰りにもう一度この町に寄ることを決める。

確かにその日の中に行動するには作戦を練る時間が足りなかった。

「よし。じゃあ行くとするか」

立ち上がったガブリエルにパバーンが驚いたように言った。

「だがまだ約束の時刻じゃないですぞ」

「いや、あいつは来ないだろう。待っていても仕方がない」

地面に下ろしてあった荷物を馬に積み、騎士達は兜を被った。

そして馬に乗ると林の中を進んでいった。

メルグウェンが乗って来た馬はイアンが自分の馬に繋げて引いてい

る。

5日後に絶対に戻ってくるからとガブリエルは心の中でメルグウェンに約束した。

カーテンが左右に開かれほっそりとした婦人が顔を覗かせた。

灰色がかった白の粗い麻でできた服を纏い顔をベールを被っている。窓に掴まっているメルグウェンに驚いた風もなく、メルグウェンが部屋の中に入れるように横に退いた。

メルグウェンは急いで部屋に入ると外から見られないようにカーテンを閉める。

そして薄暗い部屋の中で椅子に腰掛けた婦人の前に行き跪いた。

「お久し振りです、母上」

何故そのようなことをしたのか分からない。

物心がついてから母親らしくしてもらった記憶はない。

虚ろな目をして黙ったままの母親にメルグウェンは自分の結婚のことを語った。

ネヴェンテルが出してきた条件のこと。

それが嫌で堪らないこと。

そして自分が今から何をするつもりなのかも。

急に立ち上がりゆっくりと扉の方に行く母親をメルグウエンは見つめた。

誰かを呼びに行くのだろうか？

しかしダネールの奥方は家具から何かを取り出すとメルグウエンの方に戻ってきた。

「どうぞ、これを」

差し出されたのは小箱で中には金の鎖で編んだ帯に花を模った宝石を散りばめた美しい首飾りが入っていた。

奥方が嫁入りの時に実家から持って来た、古風だが上品な物である。

婚約式でネヴェンテルにもらった派手な首飾りよりは、ずっとメルグウエンの好みに合った。

メルグウエンはその首飾りを母親が着けているところを一度も見たことがなかった。

多分これを着けていた頃は彼女も幸せだったのだろうと思う。

頭を下げて小箱を受け取ると、上から聞こえてきた声に思わず目頭が熱くなった。

「お幸せに」

「母上もお大事に」

扉を開けて廊下に誰もいないのを確認するとメルグウェンは部屋から滑り出て扉をそつと閉めた。

袖で涙を拭くと足音を忍ばせて階段を下りる。

階段の反対側にある自分の部屋の前に立っている見張りに気付かれ
たら全てが終わりだ。

メルグウェンは誰にも見つからずに城を抜け出すと、庭に向って走
った。

子供の頃使っていた城下町への抜け道はそのままだった。

服が土で汚れ、木の枝で顔には引っ掻き傷ができたが、メルグウェ
ンは構わず生垣を抜けると誰もいない街角に降り立った。

そして顔を隠すように頭布を深く被ると町の門に向って歩き出した。

門前は、朝から町に商売に来てこれから家路に就く人々でこったが
えしていた。

メルグウェンはその中に紛れ込み、門番に見咎められずに町を脱出
することに成功した。

急がなければならぬ。

何気ない風を装って皆が通っていく道を外れ、林の中に踏み込んだ。

メルグウエンは約束の場所に向って走り出した。

聖堂の鐘が鳴るのが遠くに聞こえた。

走っている途中、メルグウエンは大きな袋を背負った男とすれ違った。

男はメルグウエンを見るとハツとした顔をして立ち止まり、直ぐに踵を返してメルグウエンの後を追う。

約束の場所に急ぐことしか考えていなかったメルグウエンは、後をつけて来る男に全然気付いていなかった。

息を切らして約束の場所に着いたメルグウエンは、騎士達の姿が見えないのに失望した。

少し前まで誰かがその場所にいた痕跡がある。

押し潰された草や土の上に残された蹄の跡を見てメルグウエンは、耳を澄ませあたりを見回すが、馬の嘶きも人声も聞こえず何も見えなかった。

大声を出すのは躊躇われた。

道とは反対の方向とはいえ誰かの耳に入らないとは限らない。

メルグウエンは何も考えられなくなり、突っ立ったまま暫くの間ぼんやりしていた。

待っていてくれなかったんだ。

周りの景色が霞んだと思うとそれは涙だった。

後から後から溢れてくる涙を止めようとメルグウエンは歯を食い縛る。

どうしたらいいんだろう？

私には馬もないし武器もない。

行く場所もなかった。

思わず町の方角を振り返ろうとしたメルグウエンは、後ろから誰かに乱暴に引き寄せられた。

林の中を騎士達と馬を進めていたガブリエルは、急に手綱を引いて馬を止めた。

「おい、聞こえたか？」

「え？どうしたのですか？」

「女の悲鳴が聞こえなかったか？」

「いいえ。気のせいではないですか？」

「いや、あれはあいつだ」

そう言うとガブリエルは馬の首を返し、元来た道を全速力で戻り始めた。

騎士達も慌てて後を追う。

あれはメルグウエンだ。

ガブリエルはそう確信するとせっかちな自分の性格を呪った。

畜生、俺は馬鹿だ！！！！

何故も少し待ってやらなかったのだろうか？

「急げ！！！」

嫌な予感がする。

あいつは俺を頼って約束の場所に来たんだ。

もしあいつに何かあったとしたら悔やんでも悔やみ切れない。

ガブリエルは妹を想った。

あの時も、もつとちゃんと俺が反対すべきだったんだ。

俺が中途半端な態度を取ったからスクラエラは命を落とした。

今度はメルグウエンか？

また俺の所為で？

これ以上早く走れないのか？

ガブリエルはじれったさに齒噛みしながら馬を飛ばした。

メルグウエンは自分を捕らえた腕から逃れようと暴れていた。

口を押さえる相手の手に噛み付いた。

悪態をついた男に突き飛ばされたメルグウエンは、体を起こしながらその顔を見てあっと叫んだ。

「貴方は」

「久し振りだな、グウエン。いや、メルグウエン姫か」

メルグウエンは立ち上がると服の埃を払いながらその男を睨み付けた。

背が伸びて体つきも遅しくなっていたが、黒い巻き毛の下の黒い目は子供の頃と変わっていなかった。

数年前まで同じ年頃の子供を引き連れて城下町で一緒に遊んでいた宿屋の息子のリグワルだ。

「助けてくれるつもりなら、何故こんな乱暴なことをするの？」

「悪いが、助けるつもりはない」

「どづいこと？」

「俺は金がいるんだ。逃げ出したおまえを城に連れて帰れば城主様から褒美がもらえるだろ」

卑しい笑いを浮かべる男にメルグウエンは必死で言い募った。

「最後に会った時、大人になったら助け出してくれると言ったでしょう？その約束を破るの？」

「状況が変わったんだ」

リグワルは決まり悪そうに眼を逸らした。

「昨年の冬から親父が病気で寝込みじまい、お袋と俺で宿屋を切り盛りしているんだ。ここ数年は旅人も減ってるし、親父の薬代やなんだかねで金は出て行く一方だ。おまけに秋には俺の許婚に赤ん坊が生まれる」

「そう」

別にリグワルはメルグウエンの恋人だった訳ではない、それに大人になっただけなら助け出してやるという約束もメルグウエンは信じていた訳ではなかった。

それなのに何故裏切られたような気がするんだろう？

「だから俺と一緒に城に帰ってもらおう」

メルグウエンはじりじりと近づいて来るリグワルから逃げる様に後退りした。

櫓の幹に背中があたりメルグウエンはリグワルの腕に囲われる形になる。

初めはリグワルも唯メルグウエンを城に連れ帰り城主に引き渡すだけのつもりだった。

だが初恋の少女を腕に抱き締めているうちに妙な気持ちになって来

る。

自分より2歳年上のノアンは美人と評判のパン屋の看板娘で、立春の祭りでそういう仲になった時は自分のことを幸福者だと思った。

だがここ数ヶ月は、膨れ上がった腹を抱え青白い浮腫んだ顔をしている女に無理強いはず、欲求不満の状態が続いている。

男の欲望にぎらつく目を見たメルグウエンの顔に怯えが走る。

顔を背け体を捻ってリグワルの腕の中から逃れようとしたメルグウエンは、首筋に噛み付かれ悲鳴を上げた。

「さっきのお返しだ。優しくして欲しかったら大人しくしろよ」

「放して!!!縛り首にしてやるわよ」

「バザーンの兵や年寄りの婚約者なんかよりいい思いをさせてやるからよお」

メルグウエンはやっとのこと男を押し退け走って逃げようとするが、直ぐに足を引っかけられて転んでしまう。

膝をついたメルグウエンの服の裾から覗いた白く引き締まった脹脛にリグワルは我慢ができなくなった。

娘の頭を乱暴に地面に押し付けると服を捲り上げ、覆い被さっていた。

爪で地面を引っ掻いて逃れようとしたが、腰を掴まれ引き戻された。もう駄目だと思ったメルグウェンは、急に自分の上から男の体が消え驚いて跳ね起きた。

武装した騎士が殴り倒したりグワルに向って剣を抜いたところだった。

「その男を殺さないで!!!」

兜の目庇を上げたガブリエルは、眉を顰めてメルグウェンを見た。

「おまえ、自分が何をされたか分かってんのか？」

「分かってるわ。私にその男と話をさせて」

メルグウェンはリグワルの前に行くとき手を振り上げ平手打ちを食らわした。

「生まれてくる赤ちゃんがいなかったら貴方を殺していたわ」

「…グウェン」

「もう二度と会うことはないでしょう。家族を大事になさい」

そう言うとメルグウェンはリグワルに背を向け、二度と彼を見ることはなかった。

ガブリエルを追って来た騎士達が駆け寄って来る。

「この男、どうしたらいいんですか？」

そう尋ねたルモンにガブリエルが答える。

「こいつが殺すなと言うから、裸にしてその木にでも縛っておけ。運が良けりゃ飢え死にする前に誰かに見つかるだろ」

リグワルに猿轡をしながらパバーンが言った。

「熊か狼に食われちまうかも知れないな。姫に悪さをしようとした奴の一物切り捨てていいですか？」

縛られた男はモガモガと声にならぬ悲鳴を上げる。

「ことには至らなかったようだし勘弁してやれ。自分のがちょん切られるようで気分が悪い」

「これは何だ？」

側に落ちていた袋を開けながらルモンが驚いた声を上げる。

「こいつは密猟者ですよ。こりゃまあ、たつぷりと捕ったもんだ。我々の夕食にもらって行こう」

ガブリエルが皆を見回して言った。

「ここを早く立ち去った方がいい」

イアンがメルグウエンの馬を引いて来た。

5人は馬に飛び乗ると林の中を駆け足で進んだ。

暫く走ると上がり坂になり馬は並足に速度を落とした。

坂を上り切った所でガブリエルは皆に馬を止めるように命じた。

メルグウエンが馬から下りると、ルモンが布の包みを持って側に来た。

「どうぞ、これにお着替えください」

男物の服だった。

「こういうこともあるかと思い、城を出る時にマロの服を借りてきました。あいつは丁度姫と同じ位の背丈ですから」

男達の前で着替えるのは躊躇われた。

「背を向けていてやるからさっさとしろ」

ガブリエルに急かされ、皆の背中を見ながら修道着を脱ぎ緑色の胴着とタイツを着けた。

髪を服の中に隠し帽子を被ったメルグウエンを見て、ガブリエルは笑いを耐えられない。

「本物よりも本物らしい小姓だな」

腹を抱えて笑うガブリエルをメルグウエンは睨んだ。

メルグウエンの顔は土で汚れ、額や頬にはかすり傷がある。

ルモンが水の入った革袋と布を持って近づいた。

「これでお顔を」

手を差し出したメルグウエンにガブリエルが言う。

「いや、そのままでもいい。汚れていた方が見破られないだろう」

その日は日が暮れて殆ど何も見えなくなるまで一行は狭く険しい山道を進んだ。

とうとうガブリエルはこれ以上行ったら道に迷つか崖から落ちる可能性があると思い、野宿することに決めた。

結局その日のうちに南部に下る道に行き着けなかった。

かなり南の方に来たとはいえ夜は結構冷える。

雉や野兎等の豪華な食事を終えて、焚き火の側に横たわりながらメルグウエンは思った。

もう城では私がないことに気付いただろう。

父上は追っ手を寄こすのだろうか？

これで私は帰る家も家族も失ってしまった。

リグワルはまだあそこにいるのだろうか？

それとも誰かに助けてもらえたのかしら？

多分何もなかったからこんなに冷静でいられるのだろう。

メルグウェンはガブリエルに助けてもらった礼を言っていないことを思い出す。

明日の朝ちゃんと言おう。

それから、当たり前のように私と一緒に連れて行ってくれるけど、迷惑じゃないのか聞いてみよう。

もし迷惑だつて言われたら困るのだけど。

メルグウェンはガブリエルにまた自分の体を見られてしまったことを思い顔を赤らめた。

でも、どうしてだろう？

以前のようにこの男を憎む気持ちにならなかった。

からかわれるのに馴れてしまったのだろうか？

段々瞼が重くなってきたメルグウェンは眠りに落ちる前に思った。

城の皆にまた会えるのが嬉しい。

皆も私が戻ったら喜んでくれるのかしら？

数日後、王家の領地にある町に着いた一行は、宿屋に腰を落ち着け次の日のための準備をしていた。

拝謁するのはガブリエルとパバーンと決まっていたので、二人は風呂に入り髭をあたり身だしなみを整えた。

メルグウエンはルモン達と湯を運んだ後、手伝うこともできずベッドに座って待っていた。

通常、騎士の支度を手伝うのは小姓の仕事なので、小姓の格好をしたメルグウエンが一人で下の広間で待っていたら怪しまれてしまう。

今のところ追っ手と思われる者には会っていないかったが、油断はできなかつた。

ダネールだけではなくネヴェンテルも兵を使ってメルグウエンを探させている可能性がある。

そのため当分の間は小姓の格好を続けるようにとガブリエルに言われていた。

メルグウエンも風呂に入りたかったが、男達が使った湯に入る気になれず、衝立の陰で湯に湿らせた布で体を拭くことしかできなかった。

湯の始末が終わったメルグウエンが広間に下りていくと既に皆テールに着いていた。

ルモンが空けてくれた席に座ったメルグウェンは、大きなスープ入れから豆のスープを自分の器によそうとパンを浸して食べ始める。

旅と先程の労働で空腹だった。

出てくる料理を夢中で平らげ、ああ、お腹も一杯で眠くなってきたと思った時、はたと気付いた。

小姓である自分はベッドで休むことができないのだ。

屋根裏部屋で他の客達と一緒に男も女も関係なく雑魚寝するのである。

プレシリアンの宿屋の様にカーテンを閉めたベッドでも決して安全という訳ではなかったが、見も知らぬ人が裸で隣に寝ているのとは訳が違う。

食事が終わると騎士達と寝室に上がる。

小姓のメルグウェンは、ルモンやイアンと騎士達が服を脱いで寝る支度をするのを手伝わなければならなかった。

パバーンは恐縮してメルグウェンの手を借りようとしなかったが、ガブリエルはメルグウェンをこきつかって楽しんでいるようなところがあったので腹立たしかった。

イアンは他の客の家来との籤引きで負けて寝室の番をすることになっている。

メルグウエンはルモンの後に続いて屋根裏部屋に上がった。

既に寝ている人を踏まないように注意して壁際まで進む。

ルモンはメルグウエンに壁側に寝るように言った。

そして自分はさっさと服を脱ぎ、梁の間に伝っている紐に脱いだ服を引っ掛けると、メルグウエンに背を向けて横になった。

メルグウエンものろのろと胴着とタイツを脱ぐ。

横になったが回りの気配に落ち着かず眠気はすっかり覚めてしまった。

ルモンは既に眠っているようだ。

やっと眠くなってきた時、妙な物音が聞こえてきてメルグウエンは目を開いた。

辺りは暗く窓の周りだけが薄っすらと見える。

喧嘩かしら？

影の中で誰かがのたうちまわっているような音がする。

ルモンを起こした方が良いのではないだろうか？

身を起こそうとした時、耳に入った女の喘ぎ声にやっと状況を理解

したメルグウエンは闇の中で顔を赤くして耳を塞いだ。

数日前にリグワルに乱暴されかけたことが思い出された。

いくら耳を押さええていても聞こえてくる物音にメルグウエンは身を縮混ませて耐えていた。

誰かがゲラゲラ笑っている。

別の誰かが眠れないと悪態をついた。

暫くして一際大きな音を立てた後、二人共満足したのか辺りは静かになった。

だが皆が寝静まってもメルグウエンは寝付けず、窓の辺りが白み始めるまで悶々としていた。

220

翌朝、目の下に隈をこしらえたメルグウエンにガブリエルは尋ねた。

「朝から疲れたような顔してどうしたんだ？」

「あまりよく眠れなくて」

顔を赤らめたメルグウエンを見てガブリエルは、昨夜ルモンと何かあったのかと推量する。

そして別れる時に抱き合っていた二人を思い出した。

まあ、いいだろう。

二人は好き合っているようだし、来年か再来年ルモンが騎士になった際には二人を結婚させてやってもいい。

「王に会うのに緊張しないのですか？」

食事をしているガブリエルを見ながらメルグウエンが尋ねる。

二口で半熟卵を片付けたガブリエルが答えた。

「いや、今回が初めてではないし。行ってみなけりゃ何の話が分からんしな」

この男は緊張することなどないのだろう。

パンを切りその上に雉のパテを厚く塗っているガブリエルを見ながらメルグウエンは思った。

それにしても朝からよく食べること！

寝不足と暑さの所為でメルグウエンはあまり食欲がなく、香料と蜂蜜入りのパンを一切れとよく熟した小さな桃を一つ食べただけだ。

食事が終わった一行は馬に乗り王の別邸に向った。

ルモン、イアンとメルグウエンの三人は門の前で馬を降り、中に入っていくガブリエルとパバーンを見送った。

3人は門が見える木陰を探すとそこに腰を落ち着けた。

どの位かかるのか分からないが、この暑さでは日向にいたら日干しになってしまっただろう。

「良い話だったらいいんだがね」

イアンが言うとルモンが答える。

「まあ待つてりゃ分かるさ」

ルモンも大分ガブリエルに似てきたようだ。

メルグウェンは先程から自分達の上に枝を広げる木が気になっていた。

「これは何の木かしら？」

「さあ？何か実がなっていますね」

イアンも知らないらしい。

「ああ、これはオリーブの木ですよ。実は塩漬けにして食べれるし油が取れます」

「きれいな木ね」

「この地方の唄でこんなのがありますよ」

ルモンはそう言つと歌い始める。

オリーブの収穫の際によく歌われる唄だそうだ。

聞き惚れていたメルグウエンは唄が終わるとルモンに聞いた。

「ルモンは何故吟遊詩人にならなかったの？」

「ガブリエル様に出会わなければ多分なっていたと思います」

「自分の夢を諦められる程の男なのかしら？」

「姫はガブリエル様がお嫌いですか？」

「…嫌つてはいないわ。私を救い出してこうやって連れて行つてくれるのだし」

「ガブリエル様は稀に見るよい主人です。自分の下に勤める者はどんなに身分の低い者でもきちんとしていてくださる。だから皆あの方について行きたくなる。それにあの方といると人生が面白いのです。吟遊詩人となつて旅をして回ることに同じ位に」

「確かにそうだ。あの方はどんなことを思い付かれるか見当がつかないからな」

「だがその反面、誰かが側にいて面倒なことにならぬように気を付けている必要がある」

ルモンがそう言うと、イアンも笑いながら頷いた。

「貴方のこともバザーンを出る時に言われたのですよ」

「え？」

「ガブリエル様の妹と思って接するようにと。もし無礼を働く者がいれば絶対に許さない。その時は自分が相手になってやると」

そうだったの。

だから皆私に礼儀正しかったのだわ。

私は初めからあの男に守ってもらっていたのだ。

「でも今は皆貴方のことを大切に思っていますよ」

俯いたメルグウエンにルモンが慰めるように言った。

「分かっているわ。ありがとう」

メルグウエンは顔を上げると微笑んだ。

「私も皆が家族のように思えるもの」

午後遅くなった頃、やっとガブリエルとパバーンが門から出てきた。

メルグウエンは木陰で横になりうとうととしていた所だったので、話し声が聞こえてびっくりして飛び起きた。

二人共髪から水を滴らせ顔を上気させているので、何があったのかと尋ねたイアンにパバーンが答えている。

「領地の川で水遊びに行っていた」

私達が暑い所で待っているのに水遊びですって？

ムツとしたメルグウエンだったが、王の命令ならガブリエル達は従わざるを得ないことは分かっている。

「それでお話は？」

ルモンが聞く。

「ああ、ちよいと面倒なことになった」

ガブリエルはそう答えるが全然面倒そうな顔をしていない。

メルグウエンはガブリエルをじっと見ていた。

本当にルモン達が話していたような男なのか自分で確かめることにしたのだ。

自分を見つめるメルグウエンに気付いてガブリエルは言った。

「どうかしたか？」

「いいえ、何も」

答えながらメルグウエンは思った。

あら、この男の目は灰色だとばかり思っていたのに、太陽の下で見ると青いんだ。

髪は濡れている所為かいつもより色が濃く見える。

確かに外見は魅力的な男だわ。

女がベッドに潜り込んでくるのも仕方がないのかも知れない。

だけど見た目だけじゃない。

どこまでもついて行きたくなるくらい中身も魅力的なのかどうか見極めてあげるわ。

「俺達の城から海岸沿いに北に向かって2日程行った所にワレックという城主が治めている町がある」

宿に戻ってからガブリエルが話し始めるとルモンが言った。

「聞いたことがあります。海に面している町ではないですか？」

「そうだ、ワルローズという城壁に囲まれた港町だ。ワレックは長年一番近い隣人のグルロエスという城主と領地争いを続けていた。ワレックは先月またグルロエスの城を攻め、戦いの末城主を殺した。だがワレックも数週間後に病で死んでしまったんだ」

「運が悪い人ですねえ、お気の毒に」

イアンが全然気の毒そうではない口調で言った。

「ワレックには家族はおらず跡継ぎも決まっていなかった。その結果、主人を失ったワレックの家来達が仲間割れをして内乱状態になっているらしい。グルロエスの方は息子がいるらしいが、ワレックの城に捕らえられているそうだ」

「遺産を残す子供もないのに何故人の土地を欲しがるのかしら？」

メルグウェンが呆れたように言うのとルモンが答える。

「欲は人を墮落させると言いますが、実際は殆ど皆持っているんじゃないですか？財産や権力を持つ者は特に」

「人の性ってこと？」

そう言いながらメルグウエンは修道院で一緒に暮らしていたマルゴ
ーを思い出した。

今頃どうしているのだろうか？

死んでしまった許婚を忘れられないまま、親の決めた人と結婚して
しまったのかしら？

ガブリエルは話し続ける。

「王はその状況に胸を痛ませておられる。また王はバザーンで功績
を残した騎士に褒美を取らせようと考えておられる。つまり、どう
いうことか分かるか？」

「我が王は頭が良い」

「そうだ。自分の懐は傷まず、頭痛の種は無くなるという訳だ」

皆の目がガブリエルに集中する。

「1か月以内に内乱を治めろとのご命令だ。王は成功すれば俺をワ
ルローズの新しい城主として認めると仰せられた」

ホーツとイアンが息を吐いた。

暫くしてルモンが沈黙を破った。

「失敗したら？」

「今まで通りだろ」

「じゃあ考えるまでもないですね」

ガブリエルは皆の顔を見回してニツと笑った。

「そういうことだ」

翌日、日の出前に旅立った一行は足並みも軽く北を目指していた。

王が決めた1カ月の期限を守るために、できるだけ早く城に戻る必要があった。

メルグウェンは呆れていた。

何故このような話でこの人達はこんなに元気になるのだろうか？

王に良い具合に操られている様な気がするけど。

男って単純なのね。

彼らのは欲とは少し違う気がした。

まるで新しいおもちゃを与えられた子供だ。

メルグウェンは彼らと同じ気持ちを分かち合えないのを少し寂しく

感じた。

城主が戦に出かける時、奥方はこのような気持ちになるのではないだろうか？

夫の身を案じる気持ちや夫が留守の間城を守らなければならない不安やらの他に、自分だけ仲間外れにされたような疎外感を感じるのではないか？

その日は暗くなるまで進み、メルグウエンは散々文句を言ったのだが聞き入れてもらえず道端の宿屋に泊まった。

確かに野宿をするよりも安全だろうが、小姓としてこきつかわれるのは勘弁して欲しかった。

しかしガブリエルは容赦なく、暑いから汗を流したいと風呂を要求し、メルグウエンはまたしてもルモン達と湯を運ぶ羽目になった。

夜はまた屋根裏部屋かと気が重かったが、ガブリエルは小姓には寝ずの番をさせると言い、メルグウエンに朝まで自分のベッドの足元に座っていることを命じた。

メルグウエンは拒否しようとして口を開きかけたが、その前にガブリエルがワザとらしく皆に聞こえるように主人の命令を聞かぬ小姓はどうなるか知っているかと聞いたので黙った。

ガブリエルが横になった後、仕方なくメルグウエンはベッドに這い上がりガブリエルの足元に膝を抱えて座り込んだ。

絶対に口を利いてやらない、もし私に触れでもしたら大声で叫んで

やると思っていたメルグウエンだったが、寝不足と昼間の疲れに耐え切れずいつしか眠りに落ちていた。

ベッドに入って一刻もしないうちに自分の足の上に倒れこんだメルグウエンを見てガブリエルは可笑しくなった。

これが寝ずの番かよ。

本当だったら二人共寢床で刺し殺されるぞ。

勿論ガブリエルは最初からメルグウエンをベッドに寝かすつもりであんなことを言い出したのだった。

城で育ったお姫様には他の客との雑魚寝はちときつかったようだ。

メルグウエンが二晩殆ど寝ていないのを知っている。

丸まったまま崩れ落ちているメルグウエンを抱き上げると自分の横に下ろす。

メルグウエンはされるがままでびくともしなかった。

ガブリエルは声を立てずに笑いながら、あどけない顔で寝息を立てているメルグウエンに背を向けると自分も横になった。

こいつはガキと言われると怒るけど、これがガキ以外の何だと言うのだろうか？

目が覚めた時、メルグウエンは自分がどこにいるのか分からなかった。

久し振りにぐっすり眠れた気がする。

横を向くと裸の大きな背中が目に入る。

ルモンかしら？

見ていると大きな体は寝返りを打ち両腕を上げて伸びをし、栗色の頭がこちらを向いた。

灰色の瞳がメルグウエンを見つめて、唇の端がクツと持ち上がる。

メルグウエンは飛び起きるとベッドから転げ落ちた。

カーテンを開いてガブリエルが怒鳴る。

「おい、寝ぼけてんじゃねえよ」

そしてメルグウエンが落つこちた音で他のベッドから首を覗かした男に謝っている。

近頃の若い者はまったく役立たずで困ると文句を言っているのが聞こえたが、メルグウエンは振り返りもせず部屋を飛び出した。

顔を火照らせて、ぶつけた肘と腰を摩りながら階段を駆け下りる。

昨夜のことが思い出された。

寝ずの番どころか一晩中ぐっすりとのあの男のベッドで眠ってしまったのだ。

あまりにも情けなくてメルグウエンは大きな溜息をつく。

あの男は私に興味がないからいいものの、これじゃあまるで襲ってくださいって言っている様なものよね。

これからは注意しないと。

メルグウエンにとっては幸運なことにそれからの何日かは、夜になっても宿に行きつけず野宿をすることになった。

男達は順番に見張りをして焚き火の火を絶やさぬようにしたが、ガブリエルはメルグウエンには寝ているように言った。

「こいつに見張りをさせたら、俺達全員眠っているうちに殺されちまうからな」

そう言って笑ったガブリエルをメルグウエンは睨んだが、自分が毎晩横になると日中の疲れで直ぐに眠りに落ちてしまうことを知っていたので反論できなかった。

そして旅は順調に続き、一行は本道を外れ森の中を北西に向っていった。

数日前から人里離れた道を進んでいたため、水を補給することが必要だった。

昼食を取るため馬を下りた一行は残り少ない葡萄酒を回し飲みした。

「日暮れ前に行きに通った村に着く筈です」

ルモンが言うとガブリエルが答えた。

「今夜の宿はその村で借りてもいいな」

午後遅くなった頃、先頭を進んでいたイアンは歓声を上げると馬を急がせた。

模様を刻んだ巨大な岩は、行きにその村を出た所で見たものだった。

もう少し行くと澄んだ水が湧き出ている石で囲われた泉がある筈だった。

だが暫くするとイアンが頭を振りながら戻って来た。

「飲めません」

「戦か」

矢が背中に刺さったままの兵の死体が折り重なるようにして泉の中に倒れていたのだ。

「井戸がある家があるかも知れません」

イアンは見て来ますと言って、ルモンと一緒に村の中へ進んで行った。

ガブリエルはメルグウェンを振り返った。

「絶対に俺達の側を離れるなよ」

メルグウェンは緊張した面持ちで頷いた。

ガブリエルは荷物の中から剣を出すとメルグウェンに渡して言った。

「ほら、おまえの剣を返す。弓矢でかかって来られたら役には立たないが、持っていれば少しは心強いだろ？」

村の中を進んで行くと急に辺りに角笛の音が響き渡り、パバーンがハッとして叫んだ。

「あれはイアンだ！」

3人は急いで音のした方向に馬を走らせた。

どこかで盗んだと思われる壊れた兜を被った兵が、イアンとルモンの馬を連れ去ろうとしている所に出会う。

パバーンが近づき剣を振るうと兵は呆気なく崩れ落ちた。

パバーンは2頭の馬を自分の馬に繋いだ。

兵が出て来た農家の中庭に馬を乗り入れる。

パバーンがメルグウエンに言った。

「姫は私の側にいてください」

イアンは星球武器を振り回す兵と戦っている所だった。

最初の男と同じ様にあまり武器の扱いには慣れていない様子だ。

ガブリエルは馬を下りると剣を抜き放ち、イアンの相手に向かって行った。

「イアン、奴を殺すな！」

イアンの剣に手を傷付けられた男は、武器を取り落とし喚き散らしている。

男の襟首を掴み上げ垢に塗れた髭面を睨みつけて、ガブリエルは鋭い声で尋ねた。

「他の仲間はどこだ？」

男は救いを求める様に濁った瞳をキョロキョロさせた。

「答える」

首元に剣を突きつけられた男は酷い訛りで答えた。

「俺を殺さないでくれ。女房と子供が待っているんだ」

「もう一度聞く。仲間はどこにいる？」

「戻って来たのはファンシユと俺だけだ」

ガブリエルはそれを聞くと、男の肩を掴み後ろ向きにして尻を蹴飛ばした。

「とつとと失せる。今度その汚い面を見せたら容赦しないからな」

男は傷付いた腕を抱え一目散に逃げて行った。

離れた所でパバーンと一部始終を見ていたメルグウエンは、馬を下りるとガブリエル達の方に行こうとして井戸の脇を通った。

井戸の陰でイアンが倒れた人の側に跪いているのを見てメルグウエンは叫び声を上げる。

ルモンが服を血に染めてうつ伏せに倒れていたのだ。

「ルモン、ルモン！！！！」

メルグウェンが叫ぶと、ルモンは薄っすらと目を開いた。

微笑もうとしたようだが、たちまち苦しそうな顰め面になってしま
う。

メルグウェンの叫び声を聞いてガブリエルとパバーンが近づいて来
た。

「そこを退け」

ガブリエルはメルグウェンを退かせると、ルモンの傍らに跪き短刀
で服を裂いた。

「井戸に屈みこんでいた時に後ろから切りつけられたのです」

イアンが馬に積んであった荷物から小さな包みを取り出しながらそ
う言った。

「頭も殴られたようだ」

ルモンの体を調べていたガブリエルが言った。

「動くな。余計に出血する」

起き上がろうとしたルモンを押し留めながら、ガブリエルがメルグ

ウエンを振り向いた。

「裁縫はできるか？」

「あまり得意ではないけれど、服を縫い合わせるぐらいなら」

「運良く傷はそんなに深くない。だが、何針か縫っておいた方が治りが早いだろう」

それを聞いてメルグウエンはギョツとした顔をする。

イアンが薬を染み込ませた布に包んであった糸を通した針を差し出した。

メルグウエンの手が震えているのを見たガブリエルが言った。

「この前おまえは、俺に自分を連れて行くのは迷惑ではないかと尋ねたな？ できることは手伝うと言ったのはおまえだろ？」

メルグウエンはガブリエルの顔を見た。

「無理だったらイアンにやらせる」

「いいえ、私がやります」

メルグウエンはイアンから針を受け取るとルモンの側に跪いた。

まるで自分が傷みを感じているかのように歯を食い縛りながら、メルグウエンは仕事に取り掛かった。

ルモンがピクリと肩を震わせ唸り声を立てる度にメルグウエンは手が竦み、嫌な汗が背中を伝うのを感じた。

傷を井戸水で洗い清め薬を塗って布を巻いた時には、メルグウエンはくたくたになっていた。

ガブリエルは何も言わなかったが、その様子を見て目を細め頷いた。

こいつは鍛えりゃカドーやマロより役立つようになるだろう。

ガブリエルは早くこの村を立ち去った方が良いと思ったのだが、怪我人を連れて夜に移動する訳にもいかず、村はずれの小さな丘の上で夜を越すことにした。

夜襲をかけてくる者がいないとも限らないため、焚き火は焚いていない。

皆は農家から取って来た干草の束を地面に敷き、その上にルモンを横たえてやはり農家から取って来た麻の敷布をかけた。

ガブリエルはもう一つの敷布をメルグウエンに放った。

「これを被ってる。風邪でもひかれたら厄介だ」

いつもどおり気に触る言い方だと思ったが、寒さに震えていたメルグウエンは有難く受け取った。

ルモンの側に行き横になる。

ルモンの額に手を当ててみるが熱はなく、よく眠っている様子だった。

メルグウェンはホツとして敷布に包まり目を閉じた。

色々なことがあり中々眠れないのではないかと思ったが、いつの間にかぐっすりと眠っていた。

翌日、夜が明けるとガブリエルは、車が見つからないかどうか村の中を見て回るようにイアンとパバーンに命じた。

メルグウェンと一緒に行くとうするとガブリエルは言った。

「ひっくり返られたら迷惑だからここにいろ。」

ガブリエルの馬鹿にしたような口調にムツとしたメルグウェンだったが、確かに死体を見て平気でいられる自信がなかったため大人しく座りなおした。

一晩寝て少し元気になったルモンが声をかけてくる。

「メルグウェン姫、昨日は有難うございました」

「どういたしまして。傷が大したことなくて本当によかったわ」

「私としたことが、井戸を見つけた嬉しさに注意を怠りました」

「あんな後ろから攻撃してくるような卑怯な男は逃がしてやらなくても良かったのに」

メルグウエンがガブリエルの方を見てそう口を尖らすと、ガブリエルはニヤツと笑って答えた。

「ああ、確かにそうだ。背後からかかってくるような奴は斬り捨ててしまえば良かったな」

ガブリエルが自分のことを言っているのだと気がついたメルグウエンは気まずそうに視線を逸らした。

すっかり忘れていたけれど、私はこの男に対して卑怯な真似をしたことがある。

暫く躊躇っていたメルグウエンは、立ち上がるとガブリエルの前に行き潔く頭を下げた。

「あの時の無作法をお許しく下さい」

真っ赤な顔をして頭を下げるメルグウエンを面白そうに見ていたガブリエルは、からかうような口調で言った。

「もし許さないと云ったらどうする?」

「どうしたら許してくれるの?」

「そうだな。ルモンにしていたように俺の首にかじり付いて、泣きながら許しを乞うなら…」

「では、許してくれなくて結構です!」

ハハハツと笑うガブリエルの声を背中に聞きながら、メルグウエンはブンブンしてルモンの側に戻った。

本当に嫌な男だ。

人が折角勇気を出して謝ったのに。

もう知らない。

絶対に謝ってなんかやるものか。

大きな音を立てて何かを引き摺りながらパバーンとイアンが戻って来た。

農家の子供が使っていたと思われる手押し車、木の扉や板切れた。

これで遊んでいた子供達を思ってメルグウエンは胸を痛めた。

殺戮を免れた村人はいるのだろうか？

手押し車はおもちゃにしてはしっかりとした作りだ。

上に扉を乗せ縄で固定すると俄作りの荷馬車ができた。

馬に繋ぎ干草の上にルモンを寝かせて一行は出発した。

翌日からルモンは起き上がり一人で馬に乗れると言い張ったため、ガブリエルは渋々ながら承諾した。

確かに今の速度だと予定よりかなり遅く城に着くことになってしま
う。

ガブリエル達は一刻も早く城に戻り、ワルローズの内乱を治めるた
めの戦略を練りたかったのだ。

ルモンの包帯を替えながらメルグウエンはガブリエルに尋ねた。

「とても良く効くみたいだけど、この薬は何？」

「魔女の秘薬だ」

そう答えるとガブリエルはそのまま馬の方に行ってしまった。

不満そうにその後姿を見送るメルグウエンにルモンが言った。

「ガブリエル様が以前勤めておられた城の近くに住んでいた女に秘
伝を授けられたものだそうです」

「その人は魔女だったの？」

「薬草に詳しく病や怪我に効く薬が作れたと聞いていますが、本当
に魔女だったのかどうかは知りません」

「どうして薬の作り方を教えてくれたのかしら？」

ルモンは可笑しそうにクスクス笑いながら答えた。

笑うと傷が痛むようで、脇腹を押さえながら笑っている。

「何でも3カ月程女の家に居座ってしつこく頼んだみたいですよ」

「あの男のやりそうなことだわ」

「城ではガブリエル様が行方不明になったと思えば大騒ぎになったそうです」

「そのお婆さんは、さっさと追い出さなくて教えたのじゃないかしら？」

「老婆ではなく若い女だったそうですよ。以前姫が怪我をされた時に使った打撲傷や捻挫に効く薬と、この切り傷に効く薬があります」

「今は誰が作っているの？」

「ガブリエル様が材料を採取して来られ、カドーに手伝ってもらって私が作っています」

本当に変な男だ。

ふと嫌な予感がメルグウエンの頭を過ぎった。

もしかしたらあの男、その魔女に色仕掛けでもしたのではないかしら？

確かにその薬は効果があるようで、一行がガブリエルの城に着く頃には、ルモンは殆ど元通りの体となっていた。

城では皆、ガブリエルがメルグウエンを連れて戻って来たのを見て喜んだ。

特にアナ、カドーとマロは、一日中メルグウエンの後をくつついて回ってガブリエルに笑われた。

次の日からガブリエルと騎士達は書斎に閉じ籠り、食事の時以外めつたに外に出てこないようになった。

メルグウエンは何が起こっているのかとても知りたかったのだが、食事の時に顔を合わす騎士達は話しかけられるような雰囲気ではなかった。

仕方なくモルガドの代わりにカドーとマロに剣術の稽古をつけてやり、アナの仕事を手伝っていたメルグウエンだったが、好奇心を抑えることができず、葡萄酒を取りに書斎から出て来たルモンに尋ねた。

だがルモンはまだ何も決まっていらないからと言葉を濁した。

そのまま一週間が過ぎ、これ以上作戦を練っている時間があるのかとメルグウエンは心配になった。

その日の夜、食事のために部屋から出て来たガブリエルは、不安そ

うな顔をして自分を見つめるメルグウェンに気付いて尋ねた。

「何辛気臭い顔をしているんだ？」

「……」

メルグウェンは何も言わずに、自分の前に来たガブリエルを見上げた。

松明の明かりは端正な顔に影を作り、額にかかる乱れた髪には金色の筋が混じって見える。

メルグウェンは今は殆ど黒く見えるガブリエルの瞳を見つめ感情を読み取るうとした。

「明日の朝、騎士達とワルローズに向う。おまえとルモンとイアンに留守を頼む」

「…はい。ご無事を祈っています」

真面目な顔をして答えたメルグウェンにガブリエルは笑って言った。

「ちゃんと戻ってくるからそんな顔するな」

この男にそう言われると本当にそうだという気になる。

「はい」

メルグウェンは初めてガブリエルに素直な笑顔を向けた。

翌日、武装した騎士達は留守番をするルモン、イアンとメルグウエ
ンに見送られ旅立って行った。

ガブリエル達が城を去ってから数日は、いつも通りに振舞っていたメルグウエンだったが、王に定められた期日が近づくにつれ段々と落ち着かなくなった。

ガブリエルは帰ってくると約束したが本当に大丈夫なのだろうか？
今頃皆は何をしているのだろうか？

怪我をした人はいないのだろうか？

特に信心深い訳ではないメルグウエンだったが、いつの間にか毎日聖堂に向うことが習慣となっていた。

普段は武器倉庫となっている聖堂だったが、黒ずんだ石の壁、彫刻を施した石の柱、色のついたガラスの嵌め込まれた窓等に囲まれていると落ち着いた気持ちになった。

普段パバーンが使っている椅子があったため、メルグウエンはそこに座り皆の無事を祈った。

その日は朝からルモンはキリルの城に行っており、メルグウエンはイアンとルドウス・ドウオデシム・スクリプトルムという古代から伝わるゲームで遊んでいた。

城にはガブリエルの趣味で立派なチェス盤やその他のゲームがあったのだ。

メルグウエンはこのゲームは結構得意だったのだが、上の空だったため知らないうちに自分の駒を幾つも困われてしまっていた。

「ああ、もう！！今日は本当に運がないわ」

またしても自分の求めている数が出なかったメルグウエンは、サイコロをテーブルに放り出した。

イアンもメルグウエンと同じ位不安になっているようで、頻りにガブリエル達の話をしている。

近習の中では一番若いイアンは、パバーンの従兄の息子である。

少しばかり落ち着きがないが、ガブリエルを崇拜している朗らかで勇敢な若者だ。

中肉中背で茶色の髪を短く刈り快活な顔をしたこの男をルモン程ではないにしろ、メルグウエンは気に入っていた。

「今頃何をしているのでしょうか？」

「さあ？」

「もう知らせが来る頃ですよね？」

「そうね」

「絶対無事で帰って来ますよ」

「ええ」

先程から何度となく交わされた会話である。

質問する側が変わっただけで内容はいつも同じである。

メルグウェンは、もしガブリエルに何かあったら自分はどうなるの
だろうと思う。

ルモンはどうするのだろうか？

騎士達は？

誰か私と一緒に連れて行ってくれる人はいるのだろうか？

自分だけで精一杯の人達が自分のようなお荷物を引き取ってくれる
とは思えなかった。

メルグウェンは今更ながら自分がどれだけガブリエルに守られてい
たのかを実感した。

自分だけではない。

この城の住人全員だ。

離れているとガブリエルの長所ばかり頭に浮かぶのにメルグウェン
は苦笑いをした。

近くにいる時はあんなに腹の立つあの男が何でこんなにも懐かしく
感じるのだろうか？

メルグウェンは自分をからかう時にガブリエルが見せる楽しそうな笑顔と明るい灰色の目を思い浮かべた。

無事で帰ってきてくれるのなら、どんなに嫌味なことを言われても笑って答えてあげるわ。

ガブリエルは自分達の計画が予想以上に上手くいったのを見て満足していた。

彼らは直接ワルローズに行かなかったのだ。

ワレックの家来がそれどころではないのを察知して、一行はグルロエスの城に向ったのだった。

グルロエスの城は攻め落とされた後、ワレックの死でほったらかしにされていた。

運良くグルロエスの執事だった男が城に残っており、残りの家来を纏め城が略奪されるのを防いでいた。

ガブリエルは生き残った城の住人を集めると、自分が王の命令でワルローズの新しい城主となることを伝え、そうなった折にはワレックの城に囚われているグルロエスの息子を釈放し、城と領地は彼に譲渡することを約束した。

次に城下町の有力者を集め同じ話を伝えた。

主を失って混乱していた人々は大層喜び、グルロエスの跡継ぎメリ

アデックが釈放されるまでガブリエルの力となることを約束した。

そして全ての準備が整ったある朝、ガブリエルが率いるグルロエスの生き残りの軍隊はワルローズに向った。

戦力としては大したことはないが、ガブリエルはワルローズ側が仲間割れしているのなら十分勝ち目はあると見ていた。

ワルローズは前方は海、西にはレジンカ河の河口を支配する岬に建てられた城壁に囲われた町だ。

過去に北国からの侵攻を何度も受け破壊された歴史を持つが、半世紀前の城主が岩の上に築き上げた城壁とその後代々の城主が強化してきた要塞のお蔭で現在はもつとも攻撃し辛い町とされている。

しかしフレックの死後、個人の利益と目先のことしか見えない連中の所為で、防備は疎かになっている。

ガブリエルはモルガドとその近習のフェリスを偵察に送り込み、正門以外には見張りがいないことを知っていた。

岬の付近は干満の差が大きく、干潮時には辺りは砂浜になる。

ガブリエルは潮汐に詳しい漁師の力を借り、ワルローズに攻め込む時間を決めた。

干潮を利用し海から迂回して裏門を攻めるのだ。

そして眩しい朝日の中、グルロエスの軍はガブリエルとその騎士達を先頭に砂浜に馬を乗り入れた。

その日、キリルの城に呼ばれていたルモンは、キリル親子と共にガブリエルからの知らせを待っていた。

ガブリエルのことだから絶対上手くいくと信じているルモンだったが、期日が近づくにつれやはり多少不安になるのは避けられなかった。

特に城ではメルグウエンとイアンが数日前からソワソワして落ち着きがなく、二人を安心させるのに疲れたルモンは朝早くから城を出たのであった。

キリルは自分からガブリエルを援助するつもりはなかったが、万が一に備えて数十人の兵をいつでも出動できるように待機させていた。

「ルモン、一緒に遊ぼう」

中庭に出たルモンにジョスリンの息子のパドリックが纏わりつく。

金色の頭にふつくらした桃色の頬、青みがかった灰色の大きな目をした大層美しい子供だった。

だが容貌だけではなく性格まで叔父に似ているパドリックは、両親と祖父母にとって頭痛の種だった。

思いつく悪戯は後を絶えず、その上まだ幼い妹まで兄の真似をするため、二人の子守と母親のアゼノールは毎晩子供達が寝るまで一時も休む暇がない。

パドリックは叔父とその騎士達が大的お気に入り、ルモンが来ると聞いて昨日から首を長くして待っていたのだ。

ルモンはガブリエルの幼い頃を見ているようで可笑しかったのだが、毎日一緒にいる訳ではないので親の苦勞は良く分かる。

パドリックはルモンの手を引いて裏庭に連れて行った。

新しく作ってもらったキルー・コースを見せたかったのだ。

「凄いでしょ。もうアエラと母上と遊んで僕が勝ったんだよ」

「パドリック様はお強い」

「僕が始めるね」

パドリックは木のボールを手にすると、9本の高さの違うピンに向かって投げた。

初めの4回は横に逸れ、最後のボールはピンを超え庭の隅に転がっていた。

「ちょっと手が滑っちゃった。今度はルモンの番」

ルモンは初めのボールで他のピンには触れずに一番高いピンを倒す。

パドリックは悔しそうに小さな足で地団太を踏んでいる。

結局勝つまで続けると言い張るパドリックに昼まで付き合わされた

ルモンは、食事だと呼びに来たアゼノールに救われた。

だがパドリックのお蔭でガブリエルのことを考える暇もなかったのだから有難いと思わねばとルモンは考えた。

「キリル様、ワルローズから使者が来ました！！」

家来と共に居間に入って来た少年を見てキリルは思わず立ち上がった。

赤みがかったクシャクシャの髪に緑色の目をした痩せっぽちの少年は、ドグメールの小姓のマロである。

初めての大病に非常に緊張しているようだ。

「それで？」

マロは何度か口をパクパクさせ話そうとしたが声が出せず、震える手でキリルに手紙を差し出した。

手紙を広げさつと目を通したキリルは、家来に言ってジョスリンとルモンを呼びに行かせる。

最初にジョスリン、その直ぐ後にルモンが息せき切って部屋に駆け込んで来た。

ルモンの後ろにはパドリックがくっついていてる。

厳しい顔をしているキリルを三人は食い入る様に見つめた。

キリルは皆を見回し、ふと微笑んで言った。

「ワルローズの新しい城主から手紙が来た」

暫しの沈黙の後、ジョスリンとルモンは歓声を上げる。

何が起こっているのかさっぱり分からないパドリックも両手を上げ、皆の真似をしてわぁいと大きな声を出した。

キリルがガブリエルの手紙を皆に読んで聞かせた。

ルモンが呆れたように言った。

「自分は直ぐには戻れないから引越しの準備は任せるって、城主になられてもせっかちな性格は相変わらずですね」

「負傷者を殆ど出さずにワルローズの城を落したとは、さすがガビツクだ」

ジョスリンは嬉しそうに笑った。

そして足元で自分を見上げている息子を抱き上げて言った。

「おまえの叔父上は大きな城の城主様になられたぞ。今度遊びに行こうな」

「わーい！！僕、叔父上の小姓になるんだ」

ルモンはキリルとジョスリンに暇を告げた。

城で首を長くして待っている二人に一刻も早くこの良い知らせを伝えられた。

結局、城を片付け荷造りをするのに思ったよりも時間がかかり、メルグウエンがルモン、イアン、アナとマロを伴ってワルローズに向ったのは、それから2週間後のことだった。

もうすぐ夏も終わりだというのに朝からきれいに晴れた日で、メルグウエンにとってそれは明るい兆しに思えた。

海沿いの道は紫のヒースのカーペットが一面に敷かれた中を通っていく。

その紫にシダや茨の緑、エニシダの黄が混じり合い、青い海と白い雲の浮かぶ青い空に映え素晴らしい眺めだった。

この景色が好きだとメルグウエンは思った。

ここは私の第二の故郷になりつつある。

いつかここを去らなければならなくなったら、私は山と同じ様にこの海を懐かしく想うだろう。

その日は日が暮れる前に海沿いの道から離れ、近くの村に宿を借りた。

次の日も朝早くから出発し、一行は北に向かって進んでいた。

午後遅くなった頃、先頭のイアンが前方を指差して言った。

「多分あそこがカトワロンの岬だと思います。間違っていないければその次がワルローズですよ」

ワルローズは美しい町だった。

メルグウェンは城壁の上に聳え立つ城と聖堂の塔に見とれていた。

ここが私の新しい住処となるのだ。

門番に名を告げ町に入った一行は城を目指した。

内戦も漸く終結し町は活気を取り戻していた。

建物の間の細い道を馬に乗った5人が通ると皆物珍しそうに眺めている。

城門に乗り付けると髭面とのっぽの二人の門番は許可証がなければ通れないと跳ね橋を下げてくれなかった。

ルモンが自分達はガブリエルの家来だと言っても聞き入れてくれない。

「ここ数週間、おまえらの様な若者が仕事を求めて次から次へと押しかけて来るんだ。相手をしていたらきりがない」

イアンが怒って怒鳴ろうとするのを押し留めルモンは言った。

「ガブリエル様のご命令で、我々は許婚のメルグウェン姫をワルローズまで護衛して来た」

メルグウエンが口を開きかけたのを片手で制しルモンは更に言った。

「門を開けてもらいたい」

門番達はメルグウエンをじろじろ見ると何事かを囁き合い、一人が慌てて誰かを呼びに行ったようだった。

本当だったらまずいと思ったのか、跳ね橋がスルスルと下ろされた。

メルグウエンが文句を言う前にルモンは謝った。

「申し訳ない。ああでも言わないと入れてくれそうもなかったので」

5人が城の中庭に馬を乗り入れると、のっぽの門番と一緒に一人の男が出て来た。

ガブリエルの騎士の一人のモルガドである。

「何だ。あいつがガブリエル様の許婚だとか言うからベアトリスかと思っただら、メルグウエン姫のことでしたか」

笑いながらメルグウエン達に挨拶するモルガドはとても元気そうだ。

馬丁が皆の馬を連れて行くと、男達は話しながらどこかに行ってしまいい、メルグウエンとアナは中庭に取り残された。

「どござ、こちらです」

その声に振り向くと侍女が塔の扉を押さえて立っていた。

階段を上ったメルグウエンはある部屋に案内され感嘆の声を上げた。

「城の中で一番見晴らしのいい部屋です」

扉の前に立っている侍女がそう言った。

窓から真正面に海が見えた。

「元城主のワレック様がご結婚なさったら奥方様にと考えていた部屋です。城主様にもそう申し上げたのですが、メルグウエン様の部屋にすると仰って」

貴方は奥方でもないのにこの部屋は勿体無いと言われたようでメルグウエンはムツとした。

「ガブリエル様は姫をとても大事になさっています」

アナが側から言ってくれたが、確かに家族ではないメルグウエンが何故ここにいるのか不思議に思われても仕方がない。

妹のように守ってくれているのは分かっているけど私はあの男の妹ではないのだから。

「アナ様のお部屋はこちらです。お食事の時間にお迎えに上がりませう」

そう言うと侍女は部屋を出て行った。

一人になったメルグウエンは窓に駆け寄った。

窓から海が望めるなんてとても嬉しかった。

海に太陽が沈んでいくところが見えるわ！！

メルグウエンは手を叩いて喜んだ。

数少ない自分の荷物を家具にしまう。

食事の時間まで城の探検に行きたかったが、あの侍女が迎えに来た時に部屋にいなかったら叱られそうだ。

まあいいわ。

明日にでもゆっくり探検しよう。

そう思ったメルグウエンは椅子を持って窓辺に行くとそこに座り、食事に呼ばれるまで海を眺め続けていた。

夕食の席で初めてメルグウエンは城主となったガブリエルと顔を合
わせた。

ガブリエルが近づいて来るのを見ながらメルグウエンは眩しそうな
顔をした。

「おめでとつございます」

祝いの言葉を言うメルグウエンにガブリエルは頷いて聞いた。

「どうだ？部屋は気に入ったか？」

「はい。とても」

目を輝かせて答えるメルグウエンを見てガブリエルは笑った。

何故かメルグウエンは暖かい気持ちになり、この男と話していて腹
が立たないのは初めてだと思った。

騎士達は皆嬉しそうにメルグウエンに挨拶に来た。

カドーが得意げに自分の武勇伝を語るのでメルグウエンは笑ったが、
既にマロから聞いて知っている話だった。

ガブリエルはワレックの家来達をそのまま使うことに決めたようで、
その者達が挨拶に来た。

ガブリエルが前もってメルグウエンのことを説明していたのだろう。皆とても丁寧だった。

席に着いたメルグウエンは辺りを見回した。

前の城とは比べものにならないほど広い広間。

揺らぐ松明の光。

中に人が座れるようになっていた大きな暖炉。

壁を覆う豪華なタペストリー。

天井に反響する人々の話し声や笑い声。

大勢の人々に囲まれ楽しそうにしているガブリエルや騎士達を眺めながらメルグウエンはふと寂しくなった。

前のお城が恋しくなるなんて私ったらどうかしてるわ。

メルグウエンは頭を振ると、自分の前にある料理に手を伸ばした。

次の日、メルグウエンは支度を手伝いに来た侍女に城を案内して欲しいと頼んだ。

朝食の後、侍女について中庭に出ると、丁度ルモンとイアンがドグメールに城を案内してもらったところだった。

メルグウエンは侍女に断り、ルモン達について行くことにする。

前の城と違う所は、鍛冶屋の他に武具を作ったり修理する武具師と鍔を研ぐ研師が独立した建物で仕事をしており、厩の他に狩に使われる鷹がいる鳥小屋と犬小屋があることであつた。

鷹匠は可愛がつている猛禽類をメルグウエンが怖がらないのを見て喜び、自分の鷹を選ぶように言ってくれたため、メルグウエンはダネールの城で自分が飼っていた隼に良く似た鳥を選んでミルディン2世と名付けた。

犬小屋では春に生まれた子犬を狩猟係が訓練している所だつた。

「まあ、可愛い!!」

暫く子犬と戯れた後、ドグメールが今試験中の新型投石器を見せてやると言うのでそちらに向おうとした時、藁葺き屋根の小屋から出て来た女が皆に声をかけた。

「あたいらの所は素通りかい？つれないねえ」

豊満な体に胸元が広く開いた紫色の服を身に着けている。

縮らせた金髪を結び上げ、派手な目鼻立ちをした美しい女だ。

ドグメールがメルグウエンの方をチラツと見てどう答えようか迷っていると言った。

「おやまあ。この子が城主様の許婚とかいう姫かい？」

「いや、ベアトリズ。メルグウエン姫は…」

「いいえ、私は許婚でもなければ妹でもないわ」

昨日メルガドが言っていたことを思い出したメルグウエンはドグメールを遮った。

自分を値踏みでもするようにジロジロ見つめる女を真っ直ぐに見てメルグウエンは言った。

「貴方があの男の恋人なの？私は人のものを取る気はないのでどうぞご安心を」

そんなつもりはなかったのだが口調が刺々しくなるのを避けられなかった。

女は笑い出した。

「こりゃ気の強いお姫様だね。あたいらはそんな偉い者じゃないよ」

小屋からもう一人派手な格好をした女が出て来た。

肌も露な緑色の服に透けるシヨールを巻いている。

「ベアトリズ、こんな朝っぱらからお客かい？」

「いやいや、城主様の許婚でも妹でもないお姫様とおしゃべりしてただけさ。まだあんたは寝てていいよ」

もう一人の女はドグメールと一緒にいるルモンとイアンを見て嬉しそうな顔をした。

「あら、新入りかい？新しい城主様はあの通りの男前だし、ご家来はびちびちした若いのばかりで、商売が楽しくなるわねえ」

その言葉にイアンは顔を真っ赤にした。

漸く女達が誰なのか分かったメルグウエンは、さっさと先に歩き始めた。

父親の城にもその様な女が数人いたが、彼女達はいつも黒い服を着てできるだけ目立たないようにしていたと思う。

子供の頃、何も知らずに彼女達の部屋に遊びに行き、乳母にこっぴどく叱られた覚えがあった。

メルグウエンは自分の部屋に戻るため階段を上がりながら、ガブリエルのことを思い眉を顰めた。

何故こんなに腹が立つのだろう。

あの男が誰を好きになると、何をしようと私の知ったことではないのに。

それから暫くの間、食事の時間以外にメルグウェンはガブリエルの姿を見ることはなかった。

食事の時も意識してガブリエルの方を見ないようにしていたため、ずっと口を利いていない。

メルグウェンは昼間は殆どの時間をアナと過ごし、カドーとマロと剣術の稽古をする時だけ外に出ていた。

ルモンとイアンも騎士達と忙しそうにしている様子で殆ど会うことはなかった。

その日の午後、メルグウェンがいつものとおり剣術の稽古に行くと、カドーとマロの他にガブリエルがモルガドと話していた。

メルグウェンが挨拶すると頷いたガブリエルは言った。

「カドー達の相手ばかりじゃ腕が鈍るだろ。今日はこいつらはモルガドに任せて、俺がおまえの稽古を見てやる」

メルグウェンは黙ったまま頷いた。

稽古用の剣を取り向かい合う。

メルグウェンは口元を引き締めるとガブリエルの目を見据えてかかって行った。

打ち合いながらガブリエルはメルグウェンに聞いた。

「何か気に食わないことがあるならばつきり言ったらどうだ？」

貴方があの女と親しいのが気に入らないなどと言える訳がない。

それにメルグウェンは自分でも何故そのことが気になるのか分からなかった。

「誰かがおまえに無礼な態度をとったのか？」

「……いいえ」

「体の具合が悪いのか？」

「いいえ」

「じゃあ何だ？」

「……」

ガブリエルがメルグウェンの剣を跳ね除け、メルグウェンの胸元に切っ先を突きつけた。

メルグウェンは唇を噛み締めると俯く。

「家が恋しいのか？」

「……」

家ではない。

前の城が恋しかった。

皆で家族のように暮らしていたあの小さな城が。

新しい城では自分以外は皆忙しくしていて、メルグウエンは取り残されたように感じて寂しかったのだ。

メルグウエンは涙が溢れそうな気がして慌ててギョツと目を閉じた。

ガブリエルは剣を下ろしてそんなメルグウエンをじっと見ていたが、ふと悪戯っぽい笑みを漏らすと言った。

「俺がかまってやらないから拗ねていたのか？」

「…そんな訳ないでしょ!!!」

真っ赤になって叫ぶメルグウエンを見てガブリエルは笑った。

「大丈夫そうだな」

その日からガブリエルはメルグウエンの姿を見かけると、わざわざ側に来て以前の様にかうかうようになった。

かまってもらえないから拗ねていると思われるのは癪に障ったし、からかうためだけに自分に話しかけるガブリエルにも腹が立った。

その度にメルグウエンは顔を火照らせて怒ったが、いつしか声をかけられるのを待っている自分がいることに気付き愕然とした。

まるで本当にかまってもらえないから怒っていたみたいじゃないの。からかわれるのに馴れてどうかしてしまっただわ。

ガブリエルはメルグウエンの様子を見て安心した。

ワルローズに引越してきた時には塞ぎこんでいて心配したが、新しい環境に慣れるまで時間が必要だったのだろう。

ガブリエルは城主となってから城と領地について色々知らなければならぬことも多く、ワレックが執事に任せていたような事柄も自分で確認しようとしたため一時期は寝る間もない程の忙しさだった。

そのためメルグウエンのことをきちんと見てやることができずに気にかかっていたのだが、どうやら大丈夫のようだ。

あいつは怒らせると元気になる。

食事の後、自分の部屋に戻りながらガブリエルは思い出し笑いをした。

もう少し落ち着いたら狩に連れて行ってやろう。

ワルローズの領地には2つの港の他に森や畑があり、小麦や大麦、カラス麦の畑の近くには村が点々とあった。

一番近い隣人はグルロエスだったが、その領地はワルローズから半

日の距離にある。

グルロエス亡き後、息子のメリアデックが跡を継いでいた。

ガブリエルに牢から出してもらったメリアデックは、領地争いの元となっていた土地をガブリエルに譲り渡し、今後一切ワルローズに刃向かわないことを誓った。

真面目で正義感の強そうなその若い城主をガブリエルは気に入り、そのうち自分の城に招き騎士達と一緒に狩猟を楽しむことを約束していた。

ワルローズに引越してから数ヶ月が経ち、やっとメルグウエンも新しい生活に慣れてきた。

初めはメルグウエンのことをあまり良く思っていなかった侍女達も、アナのお蔭もあってメルグウエンを新しい女主人として認めるようになっていた。

親しくなった人達もいた。

暫くの間、城の牢に繋がれていたワレックの剣術指南は頑固な老人で、メルグウエンは最初自分の父親を思い出させるこの男が苦手だった。

内乱の首謀者となった一人で落城の際に相手側の首謀者達と捕らわれたのだが、ガブリエルは彼らを処刑せず自分を新しい城主と認め忠誠を誓うならばそのまま元の職務に戻すことを約束したのだった。

しかし皆が我先に忠義を誓う中、この男だけは見も知らぬ若造を我が主と認められるか直ぐには分からんと答え、愉快に思ったガブリエルに許されて剣術指南の役に戻っていた。

小柄な体の背筋を常にしゃんと伸ばし、深い皺の刻まれた顔の中もじやもじや眉毛の下で冷たい灰色の瞳を光らせている男をカドー達はとても恐れていた。

この年老いた剣士コンワールは、初めは女が剣を持つなんて見たことも聞いたこともないと文句を言ってわざとメルグウエンに辛くあ

たった。

だがどんなにきつい稽古でも弱音を吐かないメルグウエンをいつしか認めるようになり、今では自分の師弟の中でも稀に見る剣士だと褒めてくれる。

いまだに女が剣術をすることに関して考え方を改めてはいないようだが、メルグウエンは例外のようだった。

ただメルグウエンの弱点は少しのことで動揺することだと言って、わざと耳を塞ぎたくなるような暴言を吐きながら稽古をつけてくれるので、メルグウエンは閉口していた。

その他にメルグウエンが毎日のように会いに行く鷹匠のティリオウと隼のミルディン2世、それから台所で働いている又エラがいる。

ティリオウはごつごつした感じの無口な男だったが、自分の可愛い小鳥達の話をする時だけ饒舌になった。

毎日ミルディン2世の訓練をするのにメルグウエンが来るのを待っていてくれる。

ミルディン2世は、まるで黒い兜を被り純白の胸当てをしたように見える美しい鳥だった。

少し荒っぽい性格だったミルディン1世に比べ、2世は案外人懐こくメルグウエンがそつと羽を撫でたり頭に唇を寄せると嬉しそうにする。

又エラとはひよんなことから仲良くなった。

ある日剣術の稽古から戻ってきたメルグウエンは中庭で、揚げ菓子を山積みにした皿を持って台所から慌てて出てきた娘と衝突してしまった。

地面に散らばった菓子を見て泣き出した娘を慰めたメルグウエンは、一緒に台所に戻り料理長に余所見をしていた自分の所為だと謝り、代わりの菓子を作るのを手伝わせて欲しいと言ったのだった。

料理長は姫にそのようなことをさせる訳にはいかないと最初は断つたのだが、食事の時間も迫っていてやむをえずメルグウエンに頼んだ。

揚げ菓子を作りなおす時間がなかったため、メルグウエンは自分の故郷のアーモンド入りの焼き菓子を作ってみた。

うる覚えだったので上手くできるか不安だったが、美味しく焼き上がった菓子は皆にも好評で、その後時々『姫の焼き菓子』と名づけられたその菓子が食卓に上るようになった。

そして下働きのヌエラはメルグウエンを崇拜するようになり、メルグウエンが通る時刻になると何かと用事を見つけては中庭に顔を出すのであった。

秋も深まったある日、ガブリエルは隣人のメリアデックを狩猟に招待した。

メリアデックは5人の騎士と共に朝からワルローズにやって来た。

メルグウエンが挨拶するために広間に入っていくとガブリエルの隣に座っていた金髪の男が慌てて立ち上がった。

「メリアデック殿、ご紹介しよう。我が城の客のメルグウエン姫だ」次にガブリエルはメルグウエンの方を向いて言った。

「こちらがクエノン城の城主メリアデック・グルロエス殿だ」

メルグウエンは腰を屈めて挨拶をするとガブリエルの隣に立っている男を見た。

数ヶ月前に父親を失ったメリアデックは城主というにはあまりにも若過ぎるように思えた。

すらりと背は高かったが繊細な顔立ちは少年のようで、ふとメルグウエンはガブリエルの書斎にあった古代の彫刻を思い出した。

濃い金色の巻き毛が覆っているその形の良い頭を見てメルグウエンは首を傾げた。

こんなきれいな顔をした若い男に城主が務まるのかしら？

メリアデックが居心地悪そうに咳払いをし、メルグウエンは自分が無遠慮に相手をじろじろ見ていたことに気付いた。

決まり悪くなったメルグウエンも頬を染めて顔を背ける。

「では、また後ほど」

軽く頭を下げ、自分の席に向うメルグウェンの後姿をメリアデックは明るい空色の目でずっと追っていた。

ガブリエルはそんなメリアデックを呆れたような愉快そうな顔をして見ていた。

秋の空に角笛の音が響き渡った。

狩に向う一行は2列になり森への道を進んだ。

先頭に鷹匠がまだ目隠しをした鳥を肩と拳にとまらせ歩いていく。

鷹達の餌を腰に下げ、鳥を乗せていない方の手には藪や枝を払う棒切れを持っていた。

次に狩猟係が肩から角笛、腰には刀を提げ、まだ若い犬を繋いだ縄を持ち歩いていく。

訓練中の犬達は嬉しそうにそこらじゅうを嗅ぎ回り、狩猟係は縄がこんがらがらない様にするのが大変だ。

その後に馬に乗った騎士と家来が続いた。

一行の周りを獵犬が待ちきれぬように駆け回っている。

メルグウェンはガブリエルのすぐ後ろにメリアデックと並んで馬を進めていた。

「行くぞ！」

森に入った途端、ガブリエルは自分の鷹を放つと同時に馬の腹を蹴り後を追って駆け出した。

ルモンとイアンが慌てて後を追う。

メルグウエンは驚いた声を上げた。

「鷹や犬よりも先に貴方が行ってどうするのよ！！！」

呆れたように叫ぶメルグウエンに後ろにいたパバーンが言う。

「相変わらずせっかちなお方だ」

「あんなに飛ばしたら落馬して首の骨を折るわ」

眉を顰めたメルグウエンにメリアデックが羨ましそうに言った。

「城主殿と姫はとても仲が良いのですね」

メルグウエンは驚いてメリアデックを振り返る。

傍から見たらそう見えるのだろうか？

あの男はわざと私を怒らせるようなことしかしないのに。

黄金色に染まった木々の間をゆっくりと進む皆の所にガブリエルが蹄の音を轟かせて戻ってきた。

片手に鴨をぶらさげている。

「久し振りにすつきりした」

獲物を狩猟係に渡すと、そう言って笑いながら袖で額に光る汗を拭いた。

皆が口々に絶賛する中、メルグウエンはメリアデックと話しているガブリエルを見つめて呟いた。

「運が良い人だこと」

黒い帽子を被り濃い青の外套を纏ったガブリエルは、その所為でいつもは灰色の目が青く見える。

隣にいるメリアデックは緋色と鼠色のいでたちで、それが髪の色を際立たせ大層似合っていた。

それぞれ鼠色の芦毛と純白の月毛の馬に跨った二人は絵から出てきたように凛々しく美しく見えた。

その後は騎士達は競い合って獲物を狩った。

ミルディン2世も立派に勤めを果たし、メルグウエンは得意げに美

しい緑色の雉を狩猟係に差し出した。

結局、鴨2羽と野兎1羽を仕留め一位になったのは意外なことにメリアデックで、嬉しそうに皆の賛辞を受けている。

メルグウエンが側に行つて祝いの言葉を述べると照れたような笑顔を浮かべた。

城に戻つた一行は広間に赴き食事の準備してあるテーブルに着いた。

次から次へと運ばれてくる料理に皆は感嘆の声を上げた。

習慣で狩猟の後は客を招き何時間も続く豪華な食事を楽しむ。

それは城下町の貧しい者達にとつても嬉しい習慣で、余つた食べ物は皿代わりに使われたパン切れと一緒に彼らに与えられる。

メルグウエンは隣に座つたメリアデックと話し、外見に反して彼がルモンと同じ年だということを知つて驚いた。

メルグウエンの素性については何も尋ねずに自分の話、過去の失敗談や子供の頃の話をするメリアデックにメルグウエンは好意を持つた。

メリアデックは少年時代を首都に近い城で過ごしており、メルグウエンがまだ行つたことのない首都の話聞かせてくれた。

王の宮殿がある、ワルローズやバザーンよりももっと大きな都ラゾン。

石畳で敷き詰められた道や美しい広場、高く聳える塔を持つ聖堂、貴族の住む豪華な城、地方や外国から来た商人が集まる大きな市や沢山の店の話にメルグウエンは目を輝かせた。

だが騎士達はそれよりも都で行われる競技大会や馬上槍試合、それから王の軍隊に興味があるようだ。

またジュディカエル王が改宗し、国内で信徒を拡大しつつあるベルビザン教も話題になった。

王に近い貴族達は入信した者が多いそうだ。

メルグウエンは皆の話を黙って聞きながら、でも神々は自分達から去っていく人々に罰を与えないのかしらと思った。

新しい神が守ってくれるのかも知れない。

メルグウエンは聞いた人が皆涙を流して感激するというロパルゼ僧の説教を聞いてみたいと思った。

その夜はメリアデックとその騎士達はワルローズ城に泊まり、翌朝早く自分の城に帰って行った。

ある冬の日、朝からワルローズの城は騒がしかった。

ガブリエルの兄のジョスリンが尋ねて来たのである。

メルグウエンはジョスリンに会うのは初めてであったが、一目でガ

ブリエルと兄弟と分かる容貌とその柔和そうな感じに親しみを覚え
た。

ジョスリンはガブリエルについて城を見学した後、二人で書斎に閉
じ籠った。

広間に集まった騎士達は何かあったのだろうかと不安げに顔を見合
わせた。

メルグウェンも先程廊下で擦れ違った時にガブリエルの様子がおか
しかったことを思い出し不安になった。

まるで私を怒っているような目で見ていた。

全然怒られるようなことはしていないと思うのだけど。

部屋に戻ったメルグウェンはアナに言った。

「アナ、書斎に葡萄酒を持って行って、様子を見て来てくれないか
しら？」

「葡萄酒は先程ガブリエル様がご自分で持って行かれましたから、
何か摘む物でも持って行きましょう」

アナがそう言って出て行ってから、メルグウェンは落ち着かず部
屋の中を歩き回っていた。

風が強いので雨戸を閉めてあり、部屋の中は薄暗い。

暖炉には赤々と火が燃えている。

時折雨戸の隙間から風がヒューと鋭い音を立てて吹き込んだ。

棚に飾ってある砂時計を次々とひっくり返しながらジョスリンが言った。

「うまくいつているようだな」

立ったまま壁に寄りかかっているガブリエルが答える。

「まだやらなきゃならぬことは山ほどあるけどな」

「ワレックの家来にも慕われているようだし、こんな短い期間でたいたもんだ」

「自分に仕える者を大事にしろ、家来に背かれるほど城主として惨めなことはないと父上が言っていただろ。それを実行に移したまでさ」

「それで、息子の件は受けてもらえるか？」

「ああ、勿論だ。来年の夏だったらパドリック殿は6歳になったばかりか？俺が叔父上の所に行った時と同じ歳だ」

「叔父上の苦勞が身に染みて分かるだろうよ」

兄弟は顔を見合わせて笑った。

二人は暫く思い出話に花を咲かせていたが、ふと真面目な顔に戻った。ジョスリンが聞いた。

「それから先程の件だが、どうするつもりだ？」

「少し考えてみる」

「既成事実を作ってしまう訳にはいかないのか？」

「結婚ということか？」

「ああ、そうだ」

「誰と？」

「おまえと」

ガブリエルは眉を顰めた。

「俺はまだ結婚するつもりはない。それにあいつはまだ子供だ」

ジョスリンが気遣わしげにガブリエルを見た。

「だが彼女を大切に思っているんだろう？」

「俺はスクラエラの時と同じ過ちを犯す訳にはいかないんだ」

「妹の死はおまえの所為ではないだろうか？」

「ちゃんと最後まで反対しなかったのは俺の責任だ」

「父上の決定におまえが逆らえる訳はないと思うが」

「確かにそうだ。だがスクラエラが自分も結婚を望んでいると言った時、俺はそれなら仕方がないと思ってしまったんだ」

ジヨスリンは声を荒げたガブリエルに近づき肩を叩いた。

「分かったよ。妹もこんな兄貴がいて幸せだったな」

「だから、あいつは幸せにしてやらないと俺の気が済まないんだ」

ノックの音がすると扉が開いてアナが顔を覗かせた。

干した杏と葡萄、それに胡桃を載せた皿を持っている。

心配そうに二人の顔を窺うアナを見てジヨスリンは笑った。

「何だ？俺達が隠れて悪戯していないか見に来たのか？」

「アナ、夏から忙しくなるぞ。パドリック殿をここで預かることになった」

胡桃を齧りながらガブリエルがそう言うのと子供好きなアナは嬉しそうにした。

「おやまあ、それは賑やかになりますね」

「できるだけガビックに世話をさせるようにしろよ」

笑いながらジヨスリンがそう言うと、アナはガブリエルを見ながら言った。

「姫も小さいお友達ができて喜びますよ」

「そうだな。あいつに子守をさせてもいいな」

アナは二人の顔をかわるがわる見て言った。

「姫は本当に優しくて気立ての良い方です。それに我慢強く働ける者で……」

「何だ急に」

「分かってるよ。それにとっても美しい方だ」

ジヨスリンが宥めるようにそう言うと、アナはホッとした顔をする。

「スクラエラ様はそれはそれは見事な金髪を持っておられましたけど、姫の黒い髪も艶があつてとても美しいんですよ」

「あいつの髪って黒かったか？」

「ガブリエル様！ 姫は何か叱られるようなことをしたのではないかと心配なさっています。何かございましたか？」

ガブリエルはチラッとジヨスリンの方を見た。

「いや、何もなし」

「そろそろ広間に戻るか？」

ガブリエルとジョスリンが広間に入ると、そこにいた全員が話すのを止め二人を見た。

部屋でアナを待ちきれなくなり、広間に下りてうろろしていたメルグウェンも不安そうな顔でガブリエルを見つめた。

ガブリエルが話し始めた。

「夏から兄上の長男のパドリック殿を我が城で預かることになった。彼が一日も早く立派な騎士となるように皆の協力を頼む」

「ふつつかな息子だが宜しく頼みます。厳しく育ててやってください」

ジョスリンも頭を下げた。

皆ががやがやと話し始める中、メルグウェンは目を丸くした。

ガブリエルの甥のパドリックのことはルモンから聞いていた。

何でも叔父そっくりで大変な悪戯っ子らしい。

でもまだ幼いのではないか？

そんな小さな子を親から引き離しても大丈夫なのだろうか？

メルグウエンは自分の弟を想った。

二人の兄弟が相次いで亡くなった為、父親はマルカリードを別の城主に預けず手元で育てることを望んだ。

この前会った時は随分としっかりしてきた様に感じたが、幼い時は本当に泣き虫で意気地なしの子供だった。

乳母や子守がついてくるのかしら？

母親の代わりとはいかないけれど、姉の代わりに優しくしてあげようとメルグウエンは思った。

寒い冬の朝、ワルローズ城の塔に登り目の前に広がる海を見つめる男がいた。

激しく吹き付ける風に外套の裾をなびかせ、目を細めじっと立っている。

細かい霧雨を含んだ風がその栗色の髪を乱す。

その男、ガブリエルはどうすべきか悩んでいた。

ジヨスリンの話によると、秋の初め頃にエルギーンのある地主が王に告訴状を出したらしい。

結婚の決まった自分の娘が数週間前に行方不明となった。

数名の暴漢に攫われたと証言する目撃者が現れたため、直ちに山狩りを命じたが、既に彼等は領地を離れた疑いが高く手がかりを掴むことができなかった。

嫁入り前の貴族の娘を城から攫うような真似が許されてはならない。

彼等が捕らわれぬ限り、他でも同じことが繰り返される可能性が懸念される。

その為、王に娘をかどわかした犯人を捕らえ裁くことを懇願するということのような文面だったそうだ。

王は軍を動かすことまではしなかったが、告訴状に基づいた犯人の人相書きをエルギーエーンの近隣地方に配り、その首に2千ゾルの賞金をかけた。

それに依頼者の地主が2千ゾルを足したので、犯人を捕らえた者は4千ゾルの賞金がもらえることになっている。

秋からずっとそれらの地方では、賞金を目当てに若い者達が山や森を駆け回り犯人を探しているらしい。

ジヨスリンが言うには、その人相書きはガブリエルや騎士達とは似ても似つかぬそうで、その面では余り心配することはなさそうだ。

万が一、メルグウエンがワルローズにいたことがばれたとしても、自分達が暴漢から救い出したとでも言い訳はできる筈だ。

だがその場合、メルグウエンは家に連れ戻されてしまうだろう。

都に住むキリルの知人の画家が偶々犯人の似顔絵を描くことを依頼され、こんなことがあったとキリルの城に来た時に話したらしい。

ジヨスリンはその話を聞き、ガブリエルがバザーンから連れ帰った娘のことではないかと心配し、ワルローズを見に行く良い機会だと訪ねてきた訳だ。

どうする？

結婚させるか？

ガブリエルはルモンのことを考えた。

あいつはルモンとだったら幸せになれるだろう。

それにルモンだったらメルグウェンがもう少し大人になるまで待つてくれるような気がした。

だがルモンはまだ騎士の称号を授与されていない。

或いはメリアデックか？

メリアデックは若いが既に城主だ。

ガブリエルはメリアデックに好意を持っていたが、メルグウェンを任せるのは迷いがあった。

あの男は真面目すぎて融通のきかない所がある。

貴族の娘らしくないあいつを受け入れることができるのだろうか？

今更こんなことを思っても仕方がないが、あいつを家に戻そうとしたのは失敗だったな。

ガブリエルは溜息をつくと頭を振り、階段の方に歩き出した。

もし追っ手がここを嗅ぎつけた時には直ぐに結婚できる様に準備を整えておこう。

自分の尻は自分で拭うしかない。

その時は俺が責任を持ってあいつを貰ってやるつ。

冬の夜は長い。

そして昼間も薄暗い日が多かった。

だがメルグウエンはどんな寒い日でも、朝起きると雨戸を開け海を眺めた。

曇った空の下、海は緑がかかった灰色で波は高かった。

霧が深く何も見えない日もあった。

それでもメルグウエンは耳を澄ますと波の音が聞こえる気がして安心するのだった。

どんな海でも好きだと思っていたメルグウエンだったが、ある夜雨戸に吹き付ける風の音で目を覚ました。

外で慌しい物音がして、メルグウエンは慌てて服を来て部屋を飛び出した。

バザーンの嫌な思い出が蘇る。

震えながら広間に下りると既に騎士達は皆起きていて、ガブリエルが地図をテーブルに広げ何か説明しているところだった。

メルグウェンが入って行くと、ガブリエルは一瞬顔を上げたが、すぐにまた地図の上に屈みこんだ。

メルグウェンは腕に抱えてきた外套に包まるとベンチの隅に腰を下ろし、皆の様子を見ていた。

ガブリエルが指示を出し、騎士達は次々と外套を羽織り松明を手にして出て行った。

最後にルモンと兵2名と一緒にガブリエルは広間を出て行こうとし、縫りつくように自分を見つめているメルグウェンに気付いた。

ルモン達を先に行かせると、メルグウェンの側に戻ってきたガブリエルは言った。

「嵐が来た。港の方の様子を見て来る」

不安そうに大きな目を見開いて見上げるメルグウェンにガブリエルは笑って言った。

「すぐに戻ってくるから泣くなよ」

そしてメルグウェンの頭に手を乗せ、子供にするように優しく髪を撫でた。

メルグウェンは動かさずにとガブリエルが出て行った扉を見つめていた。

この部屋の空気はとても冷たいのに何故私は顔が熱いのだろう？

熱でもあるのかしら？

メルグウェンは嵐の中に出て行った男達を思った。

どうか皆が無事で帰ってきますように。

長い長い時間が経ったような気がした。

外では更に風が強まり吹き荒れている。

戸の隙間から入ってくる風の音は、まるで獣の唸り声のようで恐ろしかった。

雨戸にバラバラと叩きつけるような雨の音が聞こえる。

もう夜が明ける時間の筈だがまだ外は真っ暗だった。

アナに声をかけられてメルグウェンはベンチの上で縮こまっていた体を伸ばした。

胡椒と肉桂の効いた暖かい葡萄酒の入った杯を受け取ると両手で持つて啜る。

大きな暖炉には赤々と火が燃えているが、寒さで体が強張ったようだった。

それとも不安の所為だろうか？

メルグウェンの頭の中は一つのことではいっぱいだった。

どうか誰も怪我をしませんように。

皆ちゃんと戻って来ますように。

自分の祈りが無意識のうちに変化しているのにメルグウェンは気付いていなかった。

いつしかメルグウェンは一人の男のためだけに祈っていた。

どうか、どうかあの男が無事でありますように。

早く戻って来て。

お願い。

私は貴方のことが…

メルグウェンは居眠りから覚めたようにビクンとすると、真っ直ぐに座り直した。

今私は何を思っていたの？

まさか私はあの男のこと？

いや、そんなことある訳ない。

あの男がいなくなったら皆が困るのだもの。

メルグウェンは妙な思いを振り払うように頭を振った。

この嵐の所為で私はどうかしてしまったのだわ。

皆のことが心配なのに。

どうか皆無事に戻って来ますように。

メルグウエンの祈りが叶った様に騎士達は一人、また一人と城に戻ってきた。

ずぶ濡れで寒さで唇を紫色にしているが、それでもやるべきことをやり遂げた満足そうな顔をしている。

着替えた後、皆広間に集まったが報告すべき人がまだ戻って来ていない。

馬丁が駆け込んで来て、厩の屋根が吹き飛ばされたと告げた。

馬を安全な場所に移すため数人の騎士が一緒に出て行く。

途中でガブリエルと別れたというルモンが戻ってきた時、メルグウエンは我慢ができなくなった。

先程帰ってきたパバーンの側に行く。

「港の方に様子を見に行くことはできませんか？」

パバーンはメルグウエンの怯えたような様子に驚いた。

「ガブリエル殿はまだ戻っておられないのですか？」

「はい。もう随分経ちますし」

「分かりました。様子を見てきましょう」

「私も一緒に」

パバーンは呆れた顔をしてメルグウェンを見た。

「そんなことをしたらガブリエル殿に私が絞め殺されます」

「でも」

「姫はここで待っていてください」

暖炉の前で悴んだ手を温めているルモンと話した後、メルグウェンを安心させる様に力強く頷いたパバーンは数人の家来と共に広間を出て行った。

クエノン城の年若い城主は暖炉の前に座り物思いにふけていた。

赤々と燃える火がその彫刻のように美しい顔を照らし出す。

時折煙突から風が雨と共に吹き込み、薪がパチパチと音を立てた。

外は嵐のようだが、海の近くのワルローズではこことは比べものにならないほど風が強いことだろう。

メルグウェン姫は無事だろうか？

この秋に初めてワルローズで会った時から、メリアデックはメルグウエンに強く惹かれていた。

この地方では珍しい黒髪黒目の美しい姫に。

メリアデックはその優れた容貌のお蔭で子供の頃から人々に、特に女性にちやほやされてきた。

女の媚びるような態度には馴れていたし、相手を傷つけずにかわす術も心得ていた。

しかしメルグウエンにはそのような態度は一切見られず、かといって無関心という訳でもなく自然で、メリアデックは好もしく思ったのだった。

姫はワルローズの新しい城主とは兄妹のように仲良さげだったし、騎士達にも大層慕われているように見えた。

狩の時に見た限りでは馬の扱いも慣れているようだったし、隼も彼女によく懐いていた。

音楽を少々たしなむと言っていたし、勿論刺繍や縫い物は聞いてみるまでもないだろう。

メリアデックは食事の時見たメルグウエンの小さな可愛らしい手を思い出した。

城主の奥方として申し分ないと思える。

嵐が過ぎ去ったら、様子を見にワルローズに行ってみよう。

姫は自分を嫌っていないと思うが、今はまだ特別な感情は持っていないようだ。

これは頻繁に会って積極的に近づくしかない。

そして絶対に姫の心を捉えてみせるとメリアデックは決心した。

昼食に殆ど手をつけなかったメルグウエンの側に来たルモンが言った。

「私ももう一度港に行ってみます」

「気をつけてね」

「大丈夫ですよ。ガブリエル様のことだから、きっと元気で戻って来られますよ」

「そうね」

無理に微笑もうとするメルグウエンにもう一度大丈夫ですよと繰り返すと、ルモンは兵2人と共に嵐の中へ出て行った。

風が弱まった気配はないがそれ以上に雨が激しくなり、まるで空が落ちてくるようだと言った。外を覗いた騎士が言った。

酒蔵が水浸しになっちまうなあと誰かがぼやいた。

2、3人が笑ったが、すぐに静かになってしまった。

皆口に出さずともガブリエルのことを心配しているのだ。

メルグウエンは寒いのも構わず、広間を出て玄関までの薄暗い廊下を行ったり来たりし始めた。

何かしていないと悪い方向にばかり考えてしまう。

頭の中を空っぽにし自分の足元に注意を向けひたすら歩く。

何度往復したか分からない。

急にガヤガヤと人の話し声や足音が近づいてきた時、メルグウエンは初めは錯覚かと思った。

扉が勢いよく開かれ濡れ鼠の男達が姿を現した。

その中に他の男よりも背の高い逞しい男を見つけたメルグウエンは、麻痺したように動けなかった。

ぼんやりと突っ立っているメルグウエンの前に来たガブリエルは愉快そうな顔をした。

濡れた髪が男の整った顔をより精悍に見せている。

「何だ。幽霊でも見たような顔をして」

メルグウエンは他の男達と快活に話しながら自分の部屋に上がっていくガブリエルの後姿を睨んだ。

人がこんなにも心配していたというのに、何でもないような顔して帰ってきて！

もう会えないかと思ったのに！！

メルグウエンは急に鼻がつんとして慌てて目をギュッと瞑って涙を

止めようとした。

だが夜からの緊張が急に緩み、硬く閉じていた唇が震え嗚咽が漏れてしまう。

自分達を押し退ける勢いで階段を駆け上がり、顔を背けて自分の部屋に飛び込んだメルグウエンを見て、ガブリエルは目を丸くした。

「何だあれは？嵐の所為であいつは気が狂ったのか？」

一緒にいたルモンが言った。

「姫はガブリエル様のことをいたく心配なさっていたから」

「そうか？」

パバーンも笑いながら言った。

「そうですよ。私と一緒にガブリエル殿を迎えに行くと言われた時はギョツとしましたよ」

「あいつは冒険好きだからな。だが一緒に連れて来ないで正解だったぞ」

「まるで魚にでもなった気分でしたよ」

男達の笑い声を扉越しに聞きながら、メルグウエンは床にズルズルと崩れ落ちた。

膝がガクガクして立っていられなかった。

震える両手で自分の体を抱きながら蹲った。

よかった。

本当によかった。

頭にはその言葉しか浮かばなかった。

翌日は前の日の嵐が嘘だったようにからりと晴れた。

沼のようになっていた裏庭の辺りや屋根のなくなった厩、水浸しの地下室等が嵐の被害を物語っていた。

しかし城や城下町の被害は大したことがなかったと言えるだろう。

港付近は他よりも嵐の影響を受けていたが、それでもガブリエルの適切な指示のお蔭で破損した船の数は少なかった。

死者、負傷者は今のところ報告されているのが、水に流された者が3名、木の下敷きになった者が1名で、過去の嵐と比べても多くはないようだ。

季節が冬だったのも幸いした。

農作物への被害は少なく、嵐の所為で飢饉に見舞われる可能性は殆どない。

その為、嵐が過ぎ去った後は皆元気に後始末に励んでいる。

城でも地下室の水を掻き出したり、屋根を修理したり大騒ぎだ。

そんな所へひよつこりと家来を従えたメリアデッキが現れた。

こんな忙しい時にと騎士達は眉を顰めた者もいたが、ガブリエルは見舞いに来たと言うメリアデッキを丁寧を迎えメルグウエンを呼びに行かせた。

台所の者が皆食糧貯蔵室の整理と水を掻き出す役目に駆り出されてしまったため、メルグウエンは料理長を助けてパン生地を捏ねている所だった。

「パンを釜に入れてしまふまで待つてもらってください」

メルグウエンは呼びに来た侍女に言った。

「姫様、そのようなことは私がやります。どうぞ早くお客様のもとへいらしてください」

メルグウエンは渋々パンから手を放すと、料理長のお礼の言葉に頷いて台所を出た。

部屋に戻るとメルグウエンは手を洗いそのまま客の待っている応接間に行こうとした。

せめてその粉だらけの服を着替えてからと言うアナにメルグウエンは答えた。

「皆が忙しくしているのに、私だけ着飾ってなんかいられないわ」
そしてパンパンと服を叩くと広間に降りていった。

メルグウエンが部屋に入って行くと椅子に腰掛けていたメリアデックは微笑みながら立ち上がった。

挨拶を交わした後、メリアデックは昨日の嵐で自分がどんなにメルグウエンのことを心配したかを情熱的に語った。

「私はここで座っていただけですもの。何も危険な目に遭わなかったわ」

答えながらメルグウエンは自分が昨日どんなにガブリエルのことを心配したか思い出していた。

今朝はメルグウエンが起きる前にガブリエルは出かけてしまい、昼食時に帰って来なかったので、まだ顔を合わせていない。

城には戻っているようだが何をしているのだろうか？

今朝はあの男が外出したと聞いてホッとしたのだけど、何故か顔を見たい気もする。

どうしてだろう？

メリアデックに何かを聞かれたメルグウエンは顔を上げた。

「ごめんなさい。聞いていませんでした」

素直に謝るメルグウエンにメリアデックは辛抱強く質問を繰り返す。

「母は好きですか？」

「はい」

「春になったら是非私の城にも来てください。母が沢山採れる林が近くにあるのです」

「ええ。クエノン城も見てみたいわ。とても綺麗なお城なんですってね」

「祖父から受け継いだ城を父が母のために増築したのですよ。母は数年前に病で亡くなってしまいました」

「？」兄弟は？」

「弟がいたのですが、幼い頃にやはり病で死にました」

憂いに沈む美しい横顔を見てメルグウエンは同情した。

「それではお寂しいことでしょうね」

私はもう会えないかも知れないけれど両親も弟も生きている。

この世に誰も家族がいないのは、とても心細いのではないだろうか？

「そうですね。早く妻を娶って自分の家族を持ちたいですよ」

「メリアデック様なら喜んでお嫁に行く人が大勢いるでしょうに」

こんなに若くて美しい城主なら花嫁候補は選り取り見取りだろうとメルグウェンは思った。

城主となったら結婚して跡継ぎを作ることは絶対不可欠である。

自分の城を任せることができる奥方がいなくては戦にも行けないし、跡継ぎがいなのまま死んでしまったら家名は滅び城も財産も全て他人の物になってしまう。

そう言えば何故あの男は結婚しないのだろうか？

もしかして、もう決まっている相手がいるのかしら？

「貴方は…」

「え？」

また相手の話を聞かずに物思いにふけっていたメルグウェンは、決まり悪そうにメリアデックを見た。

「ごめんなさい。何て仰ったのかしら？」

「いえ、何でもありません」

今日は姫は何故か始終ボンヤリしているとメリアデックは思った。

やはり嵐で恐い思いをしたのではないのか？

「お疲れの様なので、今日はこれで失礼します」

そう言つて立ち上がったメリアデックをメルグウエンは引き止めた。

「城主殿を探してきますので少々お待ちになつて」

「いえ、今日は姫のご様子を見に來ただけです。城主殿にはどうぞ宜しくお伝えください」

家來を従えて歸つていくメリアデックを見送つたメルグウエンは、家來達と部屋の隅に控えていたルモンに尋ねた。

「私が失礼なことをしたから機嫌を損ねてしまつたのかしら？」

「そんなことはないと思いますよ。だけど何故あんなにうわの空だつたのですか？」

ルモンが笑いながらメルグウエンに聞いた。

「ちよつと別なことを考えていて」

メルグウエンはそう答えながら頬を赤らめた。

「メリアデック殿もお気の毒に」

「家族がいなくて寂しいわよね」

「いえ、そうではなくて」

「何？」

「分かなければいいんです」

ポカンとしたメルグウエンだったが、部屋を出ようとしたルモンに尋ねる。

「ルモンの家族は？」

「私は両親も兄弟も健全ですよ」

「それは良かったわ」

「ご家族が恋しいのですか？」

「…いいえ」

自分の父が王に告訴状を出したことを知ったら、メルグウエンはどつするのだろうか。ルモンは思った。

それから春までの間、クエノンとは頻繁に交流が続き、メリアデックはワルローズ城の住人と友好を深めた。

メルグウエンが部屋に入るとメリアデックは目に見えて快活になるため、彼がメルグウエンに思慕を抱いていることは誰の目にも明らかだった。

メルグウエンもこの真面目で礼儀正しい青年に好意を感じていた。

メリアデックは彼女に自分の城の図書室から持って来た本を貸した。

メリアデックの父親はギドゴール地方に伝わる民話に非常に興味を持っていたようで、この地方に伝わる昔話や伝説、詩等を書き取らせ美しい挿絵をつけて立派な書物に仕上げていたのだ。

目を輝かせて喜ぶメルグウエンを見てメリアデックは嬉しかった。

その日もメルグウエンが借りていた本を返すと、メリアデックは聞いた。

「いかがでしたか、この詩集は？」

「とても美しいと思いました。でも読んでいると胸が苦しくなり泣いてしまいました」

「最後は2人が幸せになればよいと思いましたか？」

「はい」

表情豊かな大きな黒い瞳を見つめて、メリアデックは満足そうに微笑んだ。

それは非恋物語ばかりを集めた詩集だったのだ。

ある日、メルグウェンが剣術の稽古をしているのを知ったメリアデックは驚いて言った。

「私だったら貴方の美しい手に剣など持たせぬものを」

自分のことを心配してくれているのは分かったが、メルグウェンは思わず強い口調で答えていた。

「でも私は剣術が好きなのです」

「怪我でもなさったらどうするのです。私から城主殿に話します」

怒ったように言って部屋を出て行くメリアデックを目を丸くして見送ったメルグウェンは、ガブリエルが自分に妹の剣をくれた時のことを思い出して微笑んだ。

あの男は私が剣を使うのを一度も止めたことがない。

顔を合わすと私をからかってはかりいるけど、私のことをよく理解してくれていると思う。

側にいると私は自由だけど同時に守ってもらっているように感じるのだ。

メリアデックがノックもそこそこに書斎に入っていくと、ルモンと話していたガブリエルは驚いた顔をした。

「姫に剣を持たせるのを止めて頂きたい」

相手に口を開く暇を与えず、硬い表情で詰め寄るメリアデックにガブリエルは納得したような顔をする。

「喧嘩でも吹っかけられましたか？」

「そんな筈ないでしょう！！姫は淑やかな方です。何故あのような危険なことをさせているのですか？」

誰が淑やかだと思ったガブリエルだったが、それは口にせずメリアデックの次の言葉を待った。

メリアデックはガブリエルを真っ直ぐに見ると言った。

「私に姫をください」

ガブリエルは溜息をついた。

「彼女はまだ若い」

「常に側にいて守ってあげたいのです。結婚は1、2年後でも良い

ので、せめて婚約だけでもさせて欲しい」

「本人の考えを確認してからお答えする」

「私から姫に話してもいいでしょうか？」

「いや、私が聞きます。今日のところはこれでお引取り願いたい」

さて、どうするか？

最近メルグウエンの様子がおかしいとガブリエルは思った。

よく視線を感じて顔を上げると慌てた様に顔を背けるメルグウエンの姿があった。

自分が近づこうとすると何故か顔を赤くして逃げられる。

自分に話す時は顔を見ようとしてもしない。

明らかに避けられている。

俺は何か怒らせるようなことをしたか？

いつもからかっているから、何があいつを怒らせたのか分かりやしない。

それともメリアデックとの間に何かあったのだろうか？

俺に話すのは恥ずかしいからあんな態度を取っているのか？

まあいい、直接本人に聞けば分かることだ。

ガブリエルは召使に呼びに行かせたメルグウエンを書斎で待ちながら思った。

もしあいつがメリアデックと結婚したいと言ったら俺はどうするのだろうか？

メルグウェンはのろのろと階段を上がっていた。

あの嵐の日からガブリエルを変に意識する様になってしまった。

顔が見たくて声が聞きたくて、朝から城の中をガブリエルの姿を求めて彷徨っているのに、本人を前にすると何故か逃げ出したくなってしまう。

近くにいると何故か胸がドキドキして顔が火照ってしまうのだ。

ガブリエルのことを思うとメリアデックに借りた本を読んだ時のように胸が苦しくなるのだ。

随分ゆっくり歩いたつもりだったが、もう書斎の扉の前まで来てしまった。

メルグウェンは深呼吸をすると息を止めて扉を叩いた。

緊張した面持ちで部屋に入ると、机に寄りかかっていたガブリエルがその様子を見て笑った。

「今日は逃げるなよ」

それから真面目な顔になって言った。

「大事な話がある」

ガブリエルから父親の話が聞かされたメルグウェンは顔を曇らせた。家に連れ戻されてしまうのだろうか？

もう次は絶対に逃げ出せないだろう。

「そんな顔をするな。おまえを家に帰すつもりはない」

「でも」

ガブリエルは家に帰らないようにするためには、別の誰かと結婚してしまっしかないと説明する。

「おまえが嫌っているその年老いた城主の代わりに若い夫を選ばせてやる」

不安そうな顔をしたメルグウェンにガブリエルは言った。

「メリアデック殿がおまえを妻にと望まれている」

「メリアデック様が？」

メルグウェンは目を丸くする。

「俺はおまえの考えを聞くまで待つて欲しいと答えた」

メリアデック様が私のことを？

今までそんな素振りを見せたことないのに？

友達だと思っていたメリアデックに裏切られたような気がする。

「メリアデック様のことは好きだけど、結婚したいとは思っていません」

「そうなのか？」

「ええ」

「ではこの話は断っても良いのかな？」

「はい」

ガブリエルは自分もこの結婚に賛成していなかったことは言いつつも
りはないらしい。

「ルモンはこの秋に騎士となるだろう」

ガブリエルの声でメルグウェンは我に返った。

「そうしたら結婚させてやっても良い」

「誰と？」

「おまえと」

この男は何を言っているのだろうか？

メルグウエンは混乱してきた。

「どうして私がルモンと」

「二人は好き合っているのではないのか？」

「私はルモンを家族のように大切に思っているけど、結婚相手として考えたことはないわ。ルモンだってそんなこと考えていないと思うわ」

心底驚いている風なメルグウエンを見てガブリエルは溜息をついた。では自分の思い違いだったのか？

「二人共嫌だと言うなら仕方がない。万が一追っ手にここが見つかった時には、俺がおまえを貰ってやる」

そう言ったガブリエルをメルグウエンは睨みつけた。

怒りで顔がカッと熱くなる。

メルグウエンはブルブルと震える拳を握り締めて叫んだ。

「お断りします！！貴方と結婚するくらいならネヴェンテルと結婚した方が千倍もましだわ！！！！」

そして呆気にとられているガブリエルを残して部屋を走り去った。

自分の部屋の鍵をかけ、ベッドに身を投げ出してメルグウェンは枕に顔を埋めた。

ガブリエルに対する自分の気持ちがはっきりと分かってしまった。

私はあの男のことを好きになってしまったのだ。

メルグウェンはメリアデックの本の一節を思い出した。

「貴方の側で貴方を初めて見た時から、私の心はあまりにも動揺し、私が去つても尚貴方の手の中に残った。

そして私の心は代償もなく甘美な牢獄に閉じ込められた。牢獄の柱は欲望、扉は美しい眼差し、鎖は期待でできていた」

いつからだろう？

嵐の日から意識し始めたのだが、考えるとそれよりもずっと前からそういう気持ちがある中であつたように思われる。

それなのに別な男との結婚を勧めた挙句、どちらも嫌だつたら仕方ないから俺が貰つてやるですって?!

あの男と結婚など絶対にするものか。

メルグウェンは泣きながら思った。

絶対にあの男に私の気持ちを気付かせてはならない。

哀れまれるのはまっぴらごめんだつた。

ガブリエルがメルグウエンの答えを伝えたと見え、それからメリアデックの訪問は途絶えた。

メルグウエンは寂しかったが、彼と結婚したいとは思えないので仕方がない。

メリアデックの申し込みをメルグウエンが断ったことを知って、アナはとても残念がった。

「だけどメルグウエン様、あれほど素晴らしい方はこの世の中には滅多におりませんよ」

「そうですね」

「お家柄も申し分ないし、あのように美男子で礼儀正しくて優しい方なのにごがお気に召されないのでしょうか?」

「私には勿体無いくらい素晴らしい方だわ。でも私は彼の奥方になるつもりはないの」

「あまり選り好みをなさっていると行き遅れてしまいますよ」

「そしたら、ここのお城の小姓になるわ」

「メルグウエン様!!」

メリアデックはメルグウエンの侍女を味方につける努力を怠らなか

った所為で、この孤独で若く美しい城主はアナのお気に入りだったのだ。

アナは次の機会を待つ間、結婚の準備をすることを決めたようで、メルグウエンに次々と手仕事を与えた。

いつの間にか野薔薇の季節となり、すぐそこに夏が迫っていた。

最初は渋々ながら裁縫道具を出していたメルグウエンだったが、そのうち敷布や枕カバーに刺繡をするのが楽しみになっていた。

庭に咲き乱れる花をパターンにすることにしたのだ。

炭で描いた堇、鈴蘭、水仙、雛菊等を布と同じ色の糸で敷布の縁に刺繡していく。

そう言えば父親の城で自分が作っていた花嫁道具はどうなってしまったのだろうかと思っただ。

あの頃は自分の許婚の顔も知らず、どんな人だろうと想像しながら針を運んだのだった。

今私が白い野薔薇を刺繡しているこの敷布は決して使われることはないだろう。

だけど、もし…

針を宙に浮かしたままボンヤリしているメルグウエンを見て、アナ

は大袈裟な溜息をついた。

メルグウェン様は最近夢見てばかりいるようだ。

お支度も全然捗らない。

まあそんな急ぐこともないのだけど。

あのお気の毒な城主様のような方が早く姫に申し込んでくださると良いのだけど。

それにしても何故あんな良い縁談を断ってしまったのだろうか？

二人はとても仲が良さそうだったのに。

それとも姫は別に誰か意中の方がいるのかしら？

アナは刺繍の上に屈みこんで頬を染め、唇に薄っすらと微笑みを浮かべているメルグウェンを見て頷いた。

これは確かに恋している乙女の顔だわ。

相手が誰なのかさっそく探らなくては。

その日からアナは広間でのメルグウェンのことを注意して見ていた。

騎士達と仲良さげに話しているメルグウェン。

小姓達とふざけて笑い合っているメルグウェン。

ガブリエルに不機嫌な態度を取るメルグウェン。

アナは溜息をついた。

あの二人は何故あんなに仲が悪いのだろうか？

一緒に暮らすようになって、もう何度も思ったこと。

姫はガブリエル様が随分とお嫌いのようにだ。

でもあれはガブリエル様が悪いのだ。

スクラエラ様になっていたようになってばかりなさるから。

本当にどうしようもない城主様なこと。

ある日の午後、廊下を歩いていたアナは、窓から中庭を眺めているメルグウェンを見かけた。

窓枠の影に姿を隠しつつ物悲しげな瞳で何かをじっと見つめている。

長くて濃い睫が柔らかかそうな頬に影を作っている。

メルグウェン様は大層お美しい。

この春から随分と女らしくなられたとアナは思った。

アナはそっとメルグウェンに近づき、窓から下を覗いた。

アナの気配に気付いたメルグウエンがビクツとして振り向く。

「あら、あれは」

メルグウエンは頬を染め、何も言わずに窓際を離れた。

それでは、メルグウエン様はあの方を…

アナはメルグウエンが閉め忘れた扉を見つめながら考え込んでいた。

夏至、それは一年で最も昼間の長く、夜の短い日である。

太陽が一番空高く輝く日の前夜にその祭りは行われた。

町や村の広場には、何日もかかって準備された大きな焚き火が焚かれる。

人々は音楽に合わせて火の周りを踊る。

勇敢な若者達は燃え上がる炎を飛び越える競争をした。

そしてその翌日、人々は焚き火の灰を掬って畑に撒くのであった。

そうすると魔法の籠もった灰が肥料となって、麦は夏の間すくすくと育つと信じられていたのだ。

城では中庭に火が焚かれ、ルモンの他に楽器の弾ける何人かがこの地方に伝わる踊りの曲を奏でた。

メルグウェンも皆と一緒にラウドを演奏した。

小姓のカドーとマロは競い合って焚き火を飛び越えたが、晴れ着を焦がした上に火傷を負い、騎士達に散々からかわれていた。

夏至の夜明けに摘まれた薬草は特別な効果があると信じられている。

迷信をあまり信じていないガブリエルも、この日は何故か魔女の秘薬に使う草を摘みに出ることにした。

主塔を出たガブリエルは、火を吹き消した燭台を階段に置くと、空を見上げた。

辺りはまだ薄暗く空には白っぽい三日月が浮かんでいる。

眠気を覚ますように、ひんやりとした空気を胸いっぱい吸い込んだガブリエルは、城を出て庭に向った。

必要な薬草が生えている場所はあらかじめ調べてある。

薬草庭園の入り口で、ふと何かの気配を感じたガブリエルは立ち止まり、剣の柄に手をやり神経を研ぎ澄ました。

薄闇の中に白い影がふわりふわりと動いて行く。

ガブリエルがじっと見ていると、その影は地面に屈みこみ何かを拾っている。

薬草を摘んでいるのか？

足音を忍ばせ近づいたガブリエルは、誰だと問いかけようとした口をまた閉じた。

手に布を巻きつけ、花を摘んでいるその白い影はメルグウェンだったのだ。

白い服を身に纏い、いつもは結い上げるか項で纏めている黒い髪をほどいて長く垂らしたメルグウエンは精霊のように見えた。

野薔薇に白爪草、セージに熊葛にヘンルーダと、木の陰に立ったガブリエルは幼い頃アナに教えられた花の名前を呟いた。

いや、あれはアナがスクラエラに教えていたのを側で聞いていた俺も覚えてしまったのだった。

夏至の明け方、直接花に触れず一言も口を利かずに摘んだ花には魔法が籠もっている。

乙女がその花で花束を作り枕の下に忍ばせれば、その夜の夢に未来の夫が現れると言う。

子供の頃もそんな馬鹿なことはある訳ないと思ったが、あいつはそんな迷信を信じているのか？

メルグウエンはガブリエルに気付かずに摘んだ花を布で包むと庭を出て行った。

薬草を摘んで籠に入れながらガブリエルは思った。

誰か好きな男でもいるのだろうか？

爽やかな薬草の匂いが辺りに漂う。

ルモンでもメリアデックでもない誰か別の男が。

数日後、メルグウエンは剣術の稽古の後に台所を訪れていた。

台所で働いている又エラが、最近鼠が出るので、農家から貰ってきた猫を飼うことにしたと教えたためだ。

動物好きなメルグウエンは、さっそくその猫を見たがった。

しかし猫は人見知りをして棚の下に潜り込んでしまった。

メルグウエンは猫を誘い出そうと鳴き声を真似ながら屈みこみ棚の下に手を差し出した。

すると驚いた猫はフーツという唸り声と共に飛び掛り、メルグウエンの顔を引つ掻いた。

姫が頬から血を流しているのを見た料理長は、その悪魔の乗り移った猫を始末するように下男達に命じた。

又エラは顔を真っ青にして侍女を呼びに走った。

「駄目よ。その猫を殺さないで！！」

頬を手で押さえながら立ち上がったメルグウエンが叫んだ。

手に手に調理器具を持って猫を追いかけていた男達が立ち止まる。

「私が悪かったの。私のことをまだ知らないのに触ろうとしたから」

アナが血相を変えて台所に飛び込んで来たが、メルグウエンは料理

長が猫を殺さないと約束するまでその場を離れようとしなかった。

「綺麗なお顔にこんな傷などつけてしまって」

傷口を洗い清め、薬を塗りながらアナが言った。

「傷跡が残ったらどうしましょう?」

「誰も私のことをお嫁にしたくなくなるわよね?」

笑いながらそう言ったメルグウエンをアナは慌てて遮った。

「そんなことはございません。この薬はとてもよく効きますもの、絶対に治りますわ」

そんな訳で夕方食事に下りていったメルグウエンは、顔の左半分に茶色い練り薬を塗りたくっていた。

「どうなさったんですか?」

扉の近くにいた騎士のモルガドが驚いてメルグウエンに尋ねた。

「ちょっと猫に引っかけられてしまって」

笑いながら答えたメルグウエンを見ながら、モルガドは感心しないという風に頭を振った。

「この城に猫なんていましたっけ?」

「台所で飼っている猫なの。又エラが教えてくれて見に行ったの」

「城主殿に知られたら、猫も又エラも追い出されてしまいますよ」

「そんなこと絶対にさせないわ。私がちよっかい出したのが悪いのですもの」

そしてメルグウエンは聞かれる前にガブリエルの側に行き、いつもの素っ気無い口調で自分が悪くて猫に引っかけたことを話し、怪我は大したことないので絶対に猫や又エラに罰を与えないでくれと頼んだ。

アナと又エラから既に話を聞いていたガブリエルは、顔半分が塗り薬で化け物の様になっているメルグウエンを見て噴出しそうになったが黙って頷いた。

その日の午後、書斎に駆け込んで来て床に身を投げ出し、泣きながら許しを請うアナと又エラを見てガブリエルは大層驚いたのだった。

しかし、話を聞いてみるとメルグウエンの傷も大したことがなさそうなので、咎めずに許した。

もし顔の傷が原因で嫁に行けなくなると言うなら、俺が貰ってやってもいい。

あいつは絶対に嫌がるだろうけどな。

ある夏の朝、メルグウエンは侍女達と一緒に客間を整えていた。

客人が手を清められるようにきれいな水を準備し、暖炉の上に庭の花を飾る。

ガブリエルの兄のジョスリンが息子のパドリックを連れて来ることになっていたので。

パドリックはこれからこの城でガブリエルの小姓となる。

小姓と言っても幼い子供のことだ。

数年はカドーやマロの手伝いをするようになるだろう。

メルグウエンはパドリックに会うのがとても楽しみだった。

アナの話によるとパドリックは、子供の頃のガブリエルに瓜二つらしい。

ルモンは彼のことを大変な悪戯っ子でキリルの城では皆困っているようなことを言っていた。

ガブリエルには、おまえとは気が合うだろうから面倒見てやってくれと頼まれている。

子供の頃は父親の城を抜け出して、城下町の腕白坊主達と町を駆けずり回っていたメルグウエンだ。

悪戯っ子と聞いても少しも恐れていなかった。

昼食の後、自分の部屋で針仕事をしていたメルグウエンは角笛の音に部屋を飛び出した。

一行が到着したのだ。

メルグウエンが広間に下りると、丁度ガブリエルが騎士達にパドリックを紹介しているところだった。

ジヨスリンの隣には彼の背丈の半分くらいしかない男の子が立っている。

これから大好きな叔父とその騎士達と暮らすことに興奮して、丸い頬を紅潮させ大きな目を輝かせている。

まあ、本当にあの男にそっくりね。

メルグウエンはパドリックの嬉しそうな顔を見て微笑んだ。

メルグウエンに気付いたジヨスリンが側に来る。

「メルグウエン姫、紹介します。息子のパドリックです」

「初めまして、パドリック殿」

「パドリック、こちらがこれからお世話になるメルグウエン姫だ」

「こんにちは」

パドリックははっきりとした声で挨拶すると、メルグウエンをじろじろと見た。

それから父親の方を向いて言った。

「父上は叔父上の城にはお姫様がいると言ったけど、この人は偽者だよ」

「パドリック!!!」

「本当のお姫様は金髪で目が青くて綺麗な白い顔をしているよ。こんな醜い顔をしている筈ないよ」

最初の日ほどではなかったが、メルグウエンの頬にはまだ完全に癒えていない傷を隠すように練り薬が塗ってあったのだ。

ジヨスリンはパドリックを叱りつけ、メルグウエンに謝ったが、側にいたガブリエルは笑いを堪えられぬ様子だ。

メルグウエンは怒りで顔が熱くなった。

醜いなどと言われたのは生まれて初めてだった。

本当に叔父そっくりだわ、この失礼な子供は。

パドリックと何故かガブリエルにも腹を立てながらメルグウエンは思った。

見てなさい。

剣術の稽古で二度と私に生意気な口を利けぬ様にきっちりと躡けてやるわ。

翌日はジヨスリンに敬意を表して狩猟が予定されていた。

ガブリエルは春から会っていないメリアデックも招待していた。

メルグウエンはそれを知って戸惑ったが、以前と変わらず友人として歓迎しようと決めた。

メリアデックが尋ねて来なくなってから、一人で寂しい思いをしているのではないかと心配していたのだ。

昼前にワルローズに着いたメリアデックは、日に焼けた顔をして元気そうだった。

メルグウエンの顔を見て一瞬ギョツとしたようだが、すぐに落ち着きを取り戻し慇懃な挨拶をした。

メルグウエンも丁寧に挨拶を返すと、ジヨスリン達が近づいて来るのを見てホツとしてその場を離れた。

何もなかったように振舞うのは難しいとメルグウエンは思った。

自分が何を言っても嫌味に取られてしまうような気がした。

仕方がないわ。

私はメリアデック様のことをそういう風には好きになれないのだもの。

でも元気そうであつたわ。

軽い昼食の後、狩に行く準備を整えた者達は森に出かけた。

メルグウェンは怒っていた。

城を出る前にガブリエルに言われたのだ。

「パドリックが流れ矢にでも当たったら面倒だ。うるちよろしないようにしっかり見ているよ」

メルグウェンは文句を言おうとしたのだが、ガブリエルは言いたいことだけ言つと行つてしまった。

私はあの生意気な子に嫌われているのよ。

面倒なんか見れないわよ。

パドリックはまだ一人では馬に乗れないため、誰かが一緒に乗せてやるか、歩かせるかのどちらかである。

本人は犬達と駆け回りたいうのだが、危なくて仕方がない。

溜息をついたメルグウェンは馬を下りると、狩猟係の持っている槍を自分が持つと言ってきかないパドリックの側に行った。

「パドリック殿」

声をかけるとパドリックは不満そうな顔をしてメルグウエンの方を向いた。

「大人の邪魔をしていないで、こちらにいらっしやい」

メルグウエンは、そっぽを向いたパドリックの手を取って引っ張った。

「何故貴方について行かなくてはならないの？」

「貴方の叔父上が仰ったことです」

ガブリエルの指示と聞いてパドリックは大人しくなった。

頬を膨らませてメルグウエンの後をついて来たパドリックだったが、メルグウエンが鷹匠のテイリオウからミルディン2世を受け取ると目を輝かせた。

「これは貴方の鳥？」

「ミルディン2世っていうの」

メルグウエンは隼の羽をそっと撫でながら答えた。

「触ってもいい？」

メルグウエンは自分の頬を指差して言った。

「知らない動物に触れるのは、怪我をするからやめておいた方がいいわよ。今度世話の仕方を教えてあげるわ」

「隼に襲われたの？」

「いいえ、猫に引つ搔かれたの」

「お城に猫がいるの？」

「台所にね。でも私にも懐いていないから、明日にでも一緒に見に行きましょう」

「うん！」

パドリックは元気よく返事をする。メルグウエンを見上げた。

「昨日はごめんなさい」

「え？」

「どんなに醜い人でも、女性に容貌のことで文句を言っではいけないと叔父上に叱られた」

メルグウエンはムツとした。

それではあの男は私のことを醜いと思っているのか。

そうよね。

あの男の好みは金髪で目が青くて胸が大きいあのベアトリズとか、
どこかの宿屋の娘みたいな女ですものね。

眉を寄せて黙り込んだメルグウェンにパドリックがおずおずと尋ねた。

「その傷、治らないの？」

「…もう殆ど治っているのよ」

「傷がなかったらそんなに醜くないよ」

「それは、ありがとう」

子供の言うことを真に受けて落ち込むなど馬鹿げている。

メルグウェンは気を取り直すとパドリックに微笑んだ。

「じゃあ、私はお姫様だけど、悪い魔女に姿を変えられてしまった
っていうのはどう？」

「そしたら王子様が助けに来てくれる筈だよね」

「王子様はいいから、パドリック殿が魔法を解く方法を見つけられないかしら？」

小さな腕を組み、暫く真面目に考え込んでいたパドリックは言った。

「分かった。僕が貴方を元の姿に戻す方法を探すよ」

家来に手伝ってもらい自分の馬にパドリックを乗せたメルグウエンはホッとしていた。

何とか仲良くなれそうだ。

木陰で一人休んでいたメルグウエンを見たメリアデックが近づいてきた。

メルグウエンは辺りを見回してパドリックを探すが、先程獲物の足跡を見せてくれると言った狩猟係について行ってまだ戻って来ない。

仕方なくメルグウエンは立ち上がりメリアデックを迎えた。

「お疲れですか？」

「パドリック殿と一緒にだったので」

「元気な子供ですね」

「そうですね」

暫く沈黙が続いた。

何か話さなくてはと思ったメルグウエンが尋ねる。

「今日の獲物は？」

「今日は勝利は他の方に譲ることにしました」

「……」

「メルグウェン姫、私にはもうこのようなことをお話しする権利はないのでしようけど。少しだけ聞いてもらえますか？」

「…はい」

「ガブリエル殿からお聞きになったように、私は貴方を妻にしたかった」

メルグウェンは俯いて服についていた草を掃った。

「多分、始めてお目にかかった時から」

メリアデックの声があまりにも悲しげだったため、メルグウェンは思わず顔を上げた。

「…ごめんなさい」

「謝らないでください。私が勝手に貴方を好きになったのだから」

「でも、やっぱりごめんなさい。私、メリアデック様に幸せになつて欲しかったんです」

「望みがないのは分かっています。この数ヶ月貴方のことを忘れようとしてきました。他の女性との結婚も考えました。でも、この気持ち

だけはどうしようもなかった」

メルグウェンはガブリエルのことを思った。

メリアデックの気持ちが良く分かる。

望みがないのは知っている。

それでも自分の目が、心が、あの男の姿を追うのを止められない。

「貴方のことを想い続けることをお許してください」

メルグウェンはメリアデックの目を見つめて首を振った。

「それはなりません」

「何故ですか？ご迷惑になるようなことは誓ってしません」

「分かっています。メリアデック様は私を困らせるようなことはなさらないと。でも貴方は早くご結婚なさって跡継ぎを儲けられなくては」

「無理です」

メルグウェンは追い詰められた気持ちになった。

私は自分が嫌だったことを彼にさせようとしている。

私も好きな人と一緒になれないなら、一生独りである方がましだと思った。

でも、それは完全に諦め切れていないからではないのか？

もし本当に望みがないなら…

不幸になるのは私一人でいいのではないかしら？

それに不幸になるとは限らない。

メリアデック様の奥方になったらとても大事にしてくれるだろう。

だけど別の男を好きな私がメリアデック様を幸せにできるのだろうか？

物思いに沈んでしまったメルグウエンをじっと見ていたメリアデックが言った。

「メルグウエン姫の心には」

「え？」

「既に誰かいるのですね？」

不意打ちを食らったメルグウエンはうつろたえた。

逃げ出そうとしたメルグウエンの手をメリアデックが捕らえた。

「その幸運な人は誰です？ 貴方を幸せにできる男ですか？！」

「メリアデック殿、その手を離して頂きたい」

二人は同時に振り返った。

ガブリエルが木の陰から姿を現した。

メルグウエンの顔に浮かんだ安堵の色をメリアデックは見逃さなかった。

安堵だけではない、そこには僅かだが恥じらいや喜びも見られたのだ。

では姫は城主殿に惚れているのか。

自分よりも年上で、自信に溢れ、家族にも家来にも慕われている、男の自分でも惚れ惚れするようなこの男に。

メリアデックは生まれて初めて身を焼くような嫉妬の苦しみを味わった。

子供の頃から周りの皆にちやほやされ、大事に育てられた所為もあり、メリアデックは今まで他の誰かを羨ましいと思ったことがなかった。

そのためメリアデックはこの瞬間に自分が感じた感情の強さ、ガブリエルに対して憎しみさえ感じたことに戸惑った。

「既に私からお断りした筈だ」

ガブリエルはメリアデックをじっと見ながらメルグウエンを背後に守るように立った。

「メルグウエン姫、ご無礼をお許してください」

メリアデックはメルグウエンに向って頭を下げると、その場を離れ

ながらガブリエルに固い口調で言った。

「貴方は自分がどれだけ幸運なのか分かっていない！」

後に残されたガブリエルとメルグウェンは顔を見合わせた。

「何だあれは。意味分かったか？」

「…いいえ」

「無理に愛想良くすることはないぞ」

「していません。でもメリアデック様には幸せになってもらいたいです」

「あの男と結婚する気がないなら、変に気を持たせるような態度を取るな」

「そんな態度取っていません。ただ私はメリアデック様の辛い気持ち分かるから」

「モルガドはおまえと結婚してもいいと言っていたぞ」

メルグウェンが眉を寄せる。

「何故そこにモルガド殿の名前が出てくるのです？」

ガブリエルは横を向いて呟いた。

「やっぱり違うじゃないか。アナの奴、もうボケたのか？」

メルグウエンが自分をじつと見ているのに気付いたガブリエルは言った。

「まあいい。皆の所に戻るぞ。それはそうとパドリックと仲良くなつたようだな？」

狩にばかり夢中になっている様で、ちゃんと自分達のことを見てくれたと思いいメルグウエンは嬉しそうな顔をする。

「最初は貴方によく似て、躰のなっていない無作法な子供だと思っただけ、結構可愛いところがあるわ」

「俺は躰がなっていないくて無作法か？」

「ええ」

即答したメルグウエンにガブリエルは笑い声を立てた。

しかしその後、真面目な顔をして言った。

「俺の大切な甥だ。宜しく頼む」

「はい」

メルグウエンは返事をしながら、胸の中が暖かくなった。

この男は人をとても大事にする。

私のことも大事にしてくれていると思うのは自惚れだろうか？

皆の方に歩いて行くガブリエルの後姿を見送りながらメルグウエンは思った。

この男に恋人として愛される女性はなんと幸せなのだろう。

町に使いに行っていたルモンが初めに噂を聞いてきた。

有名な吟遊詩人のグイルヘルムがギドゴール地方を旅しているらしい。

あと数日すればワルローズに着くだろうという話であった。

ルモンは尊敬しているケルヴェランのグイルヘルムに会えると興奮している。

話を聞いたガブリエルは直ちにメルグウエンを書斎に呼んだ。

何かとメルグウエンが危惧しながら入って行くと、何故か部屋には台所で働いているヌエラがいた。

「吟遊詩人のグイルヘルムが近々俺達の城に来るらしい。俺としては手厚くもてなしたいと思っている」

「はい」

「だが吟遊詩人は旅の間に目にしたことを詩にして歌う。ワルローズの城で会ったこの地方では珍しい黒目黒髪の姫がなんとらんたら…とでも歌われてみる、おまえの居場所などすぐに国中に知れ渡ってしまうぞ」

メルグウエンは不安げな面持ちでガブリエルを見つめる。

「これから一ヶ月間おまえには小姓の格好をしてもらう」

「小姓の仕事もしなければならぬのですか？」

「小姓の姿をして仕事をしなければ怪しまれるではないか」

またこの男にこき使われるのか。

メルグウエンはうんざりした。

「そしておまえの代わりは明日から又エラに勤めてもらう」

目を丸くして二人を見ているメルグウエンに又エラは慌てて言った。

「そのような恐れ多いことはできませんと言ったのですが、城主様が……」

「ワルローズに姫はいなかったと言われるより、金色の髪の美しい姫がと歌われた方が敵の目が欺けるだろ？」

又エラはとてもいい子で確かに可愛い。

可愛いけど……

パドリツクに偽の姫だと言われたことを思い出し、メルグウエンは悲しくなった。

私よりも又エラの方が本当のお姫様みたいなのだろう。

私は醜くて小姓の姿が丁度いいという訳ね。

考え込んでいたメルグウエンは、お辞儀をして又エラが部屋を出て行ったことにも気付かなかった。

「おい、大丈夫か？」

急に声をかけられビクツとする。

ガブリエルが目の前に来て心配そうに見下ろしていた。

「絶対に家に帰さないようにするから心配するな」

メルグウエンはガブリエルの顔を見上げた。

「…はい」

ガブリエルがニヤツと笑って言った。

「嫌がるおまえを無理矢理に俺と結婚させたりしないから安心しろ。相手を選ばせてやる」

メルグウエンはゆるゆると首を振った。

「…私って」

「ん？」

「私って、…そんなに醜い？」

そんな質問をされると思っていなかったガブリエルは言葉に詰まった。

だがメルグウエンが悲しそうに目を伏せるのを見て慌てて言った。

「アナは随分とおまえの容貌を褒めているぞ」

「……」

「それにメリアデック殿をあそこまで虜にしたのだから、醜い訳がないだろうが」

「…貴方は？」

「俺が何だ？」

「貴方は結婚なさらないの？」

「まだしたくないのだが、そろそろ親が煩くなってきている」

「相手の方は？」

「さあ、親が誰か探してくるだろ」

「そう」

「そんなことより、明日からちゃんと働けよ」

メルグウエンはムツとした。

絶対にこの男は私をこき使うことに喜びを感じている。

翌日からメルグウエンはカドーやマロ達と行動を共にした。

その他に以前からワルローズにいたルリーとブランもいる。

この二人はカドー達よりも少し年上だった。

それから見習いのパドリックも一緒である。

直ぐに分かったのは小姓達は誰かが厳しく目を光らせていなければいけないということだった。

ガブリエルの前の城にいた頃はカドーとマロは決して怠け者ではなかったのだが、ワルローズに来てから騎士達が忙しかったのもあって怠け癖がついてしまっていた。

それにルリー達の影響もあったのだろう。

ルリーとブランは小姓の格好をしているメルグウエンが姫だと分かっている筈なのに、まるで新しく入った男の子に対するように接した。

メルグウエンは彼らの一日の主な時間は、何をする時でもわざと娼婦の住んでいる小屋の前を通り、小屋の中を覗くことであることに気付くと激しく怒った。

その上、とんでもないことに娼婦達の肢体を眺めるだけでは飽き足らず、小屋に通う男達の性的能力を計って賭けをしていたのである。

それもパドリックを連れてである。

パドリックは見つからないように道を見張っていただけのようだが。

メルグウエンは口答えをしたルリーに平手打ちを食らわし、これから必要な場合以外は小屋の前を通らぬことを4人に誓わせた。

メルグウエンは4人の時間割を修道院並みに細かく作った。

初めの仕事は手入れを怠っていたためすっかり錆付いてしまった騎士達の鎖帷子の錆をおとすことだった。

大きな樽に砂と武具を入れ地面を転がすだけの単純な仕事だ。

しかし樽はとても重く、かなりの重労働だった。

メルグウエンは4つの樽を転がす小姓達を厳しく見張り、少しでも怠ける者がいると細い木の枝で尻を打った。

パドリックは皆を手伝うと言って、小さな足を踏ん張って小姓達と一緒に樽を押した。

武術の稽古の時間も延ばした。

コンワールとモルガドを手伝って、メルグウエンも剣術や乗馬など自分ができることには手を貸した。

その他に自分が鷹匠のテイリオウの所に行く時は小姓達を連れて行き、猛禽類の扱い方を教えてもらうようにした。

生徒が急に増えたテイリオウは喜んだ。

最近さぼりがちだった読み書きや計算の勉強もきちんとするようにした。

その他の小姓の仕事、騎士達の身の回りの世話や食事の給仕などを含むと、4人の小姓達は余計なことを考えている暇もなくなったのであった。

パドリックはメルグウェンに夢中だった。

この魔法にかけられたお姫様は隼を手懐けているだけではなく、なんと馬に乗ったまま矢を射ることもできれば、モルガドやコンワールに負けないくらい剣が使えたのだ。

その上メルグウェンは、辛抱強くパドリックの話を聞いてやった。

自分の家族の住んでいる城のことや、母や妹のことを一生懸命語るパドリックを不憫に思っていたのだ。

まだ母親に甘えたい年頃だろうに。

ある日の午後メルグウェンは、一人前の小姓になったつもりで働き、疲れ果てて食事もせず眠ってしまったパドリックの側に腰を下ろした。

秋の日差しはまだ暖かく、これから長く暗い冬が来るとは到底思え

ない。

メルグウェンはパドリックの額にかかる金色の巻き毛を撫でた。

この子は本当にいい子だ。

時々とんでもない突飛なことを考え付くけど、悪戯をしようとしている訳ではなく、聞けばちゃんとした理由があるのだ。

自分が子供の頃にリグウル達とやっていた悪戯はもつとたちが悪かった。

最初はパドリックが何かをしでかす度に腹を立てていたメルグウェンだったが、今では叱ることはまれだった。

鎖帷子をきれいにする樽の中にブナの灰と蓬とラベンダーを水で溶いたものを入れたのも、下女達が汚れた衣類をきれいにするにはこれが一番だと言っているのを聞いたからだだった。

メルグウェンは辛抱強くパドリックに布と金属は違うこと、金属をきれいに保つためには水気があってはならないことを説明した。

パドリックが牛の胃袋で作った袋をいつも持ち歩き、時々尻に当てていたことがあった。

何をしているのかと尋ねたところ、パドリックは大真面目に答えたのだった。

ブランが屁は火薬みたいに爆発すると教えてくれたので、戦になった時の為に毎日溜めているのだと。

そしたら叔父上は火薬を節約できるでしょと得意げに話すパドリックに、メルグウェンはそんなことはブランの出鱈目だと真面目な顔をして説明するのに骨が折れた。

メルグウェンはガブリエルに良く似ているこの子供の世話をするのが楽しかった。

パドリックの青みがかった大きな灰色の瞳が感嘆するように自分を見ると、まるでガブリエルに褒められているように思えるのだった。

「おやすみなさい」

メルグウェンはそっとパドリックの額に口付けると部屋を後にした。

朝晩は空気を冷たく感じるようになった頃、とうとう吟遊詩人のグイルヘルムが城にやって来た。

メルグウエンが小姓の格好をし始めてから既に1カ月が経とうとしていた。

以前と違って胸を隠すために布を巻かなければならなかったが、全体的にほっそりとしたメルグウエンは、髪を隠して男の服を着ると可愛い男の子に見えた。

メルグウエンは他の小姓やパドリックと結構楽しい時間を過ごしていたが、又エラは馴れない服を着て部屋に籠り、次から次へとアナが持ち込む針仕事をするのにいい加減厭きていた。

しかし自分の崇拜する姫様のため、城主様から頼まれた大切な仕事だと思つて、欠伸を噛み殺し傷む首筋を揉みながら、今日も裁縫に励んでいた。

部屋に入って来たアナが言った。

「とうとう初舞台ですよ」

又エラは不安そうな顔をして縫い物を取り落とした。

拾おうとする手がブルブルと震えている。

「そんな顔をしないの。これから貴方は姫様なのだから」

「間違ったらどうしましょう?」

「何も言わないでただ座っていれば良いのですから。もし誰かに何か聞かれたら話さないで、ガブリエル様か私の顔を見るのですよ」

「はい」

アナに着替えと化粧を手伝ってもらいながら又エラが溜息をついた。

「姫様になるのは本当に大変です。私は台所の又エラで良かったわ」

「ちゃんと言われたとおりにするのよ。今夜の貴方に姫様の生涯がかかっているのですからね」

「はい」

メルグウエンの部屋でそのような会話が交わされていた頃、居間に通されたグイルヘルムはガブリエル、セズニとルモンを相手に春から旅した各地の話をしているところだった。

ケルヴェランのグイルヘルムは、不思議な男だった。

彼の生い立ちには謎に包まれていたが、噂によるとある裕福な商人の息子だということだった。

ケルヴェランの城主に10数年仕え、その評判を聞いたジュディカエル王の宮廷にも招かれたが、城主の死後流離の旅に出て、そのま

ま旅を続けているそうだ。

このように雑談している時は、少しばかりくたびれた中年の男に見えた。

色褪せた長い髪、深い皺が刻まれ日焼けした顔に澄んだ緑の瞳が対照的だった。

しかし、いったん彼が膝に置いたザラベーターを奏でながら深い渋みのある声で歌い始めると、その顔には生気が溢れ、まるで少年のように若々しく見えた。

豪華な夕食の後、皆は広間に集まり吟遊詩人の唄を聞いた。

万が一を考えてメルグウエンは給仕には出なかったのだが、今は広間の扉の脇に他の小姓達と立って聞いていた。

初めは歌詞よりも音楽を聞いていたのだが、知らぬうちに物語に引き込まれ息を潜めて聞き入っていた。

まるで自分が唄の中の3人の騎士達と一緒に湖のほとりを馬に乗って進んでいるような気がしてきた。

5月の空は青く高く澄んでおり、時折心地よい風が吹き抜けていく。

さざなみの上には木の枝が風に揺れ、その上には鶯がとまり良い声で鳴いている。

騎士達が木陰で休んでいると、3人の乙女が水浴びにやって来る。

はしゃいで水をかけ合う娘達。

水に靡く長い長い髪。

水の中でキラキラ光る蛇の鱗。

メルグウエンは水音が聞こえるような気がした。

.....

グイルヘルムが歌い終わり、暫しの間、沈黙があった。

皆はまるで今夢から覚めたように顔を見合わせ、やがてワツとばかりに歓声と拍手が轟いた。

その後グイルヘルムは今回の旅で新しく書いた詩を何曲か歌い、最後に皆が知っている魔術師ミルディンの唄を演奏した。

メルグウエンは吟遊詩人に聞き惚れている人々を見回した。

ルモンが紅潮した顔で両手を握り締めながら聞いているのを見て、メルグウエンは思った。

もしかしたらグイルヘルム殿について行きたくなくなってしまつのではないかしら？

夢を諦めるのは簡単なことではないだろう。

特にその夢がこのように手の届く所であれば。

パドリックの手を引き寝室に連れて行きながらメルグウエンは思った。

ルモンがいなくなったらとても悲しいけれど、でもやっぱり私は彼のことを応援するだろう。

ルモンは素晴らしい才能を持っているもの。

グイルヘルム殿のようにそれが開花せずに埋もれてしまうのはあまりにも勿体無い。

もう半分眠っているパドリックの服を脱がせ、ベッドに寝かせる。

メルグウエンも服を脱ぎ、灯りを吹き消してパドリックの隣に横になると、もう眠っていると思ったパドリックが言った。

「貴方の姿を変える方法を探すの止めたよ」

「あら、どうして？」

「そのままが一番いいから」

そう言うとパドリックは今度は本当に眠ってしまったようで、スーと寝息を立て始めた。

本当にこの子はどこまで叔父に似ているのだろうか？

暗闇の中でメルグウエンは微笑んだ。

この子のことは素直に大好きだと言えるのに…

キリルの城から来た手紙を読んだガブリエルは愉快そうな顔をした。

ワルローズで10日間程過ごした後、旅立って行った吟遊詩人のグイルヘルムは、キリルの城にも寄ったのである。

「ケルヴェランのグイルヘルムの演奏は相変わらず素晴らしく感動するものであった。特につい最近詩人が書いた、長い金髪を風に靡かせてレジンカ河の辺に立ち海を眺める、哀れな身の上の姫の唄は美しかった」

ガブリエルは別れ際のグイルヘルムの言葉を思い出した。

「この城で私はとても楽しい時を過ごしました。城主殿の不利になるようなことは誓ってしませんよ。でも今度来る時には、何年後になるか分かりませんが、あの美しい小姓が身分相応の姿をしているところを見たいものですね」

やはり人を観察することに馴れている吟遊詩人の目は欺けなかったが、結果としては協力してくれたのだなとガブリエルは思った。

秋になるとガブリエルとルモンは首都に赴いた。

結局ルモンはグイルヘルムについて行かなかったのだ。

吟遊詩人として世界を放浪するより、城に留まり騎士として勤めることを新たに決心したのであった。

そしてとうとうルモンは王によって騎士に叙任されることになった。

ワルローズの城では二人の帰りを首を長くして待っていた。

しかし予定の期間が過ぎてもいつころに帰ってくる気配がない。

皆が不安になり始めた頃、キリルの城から使いの者が来た。

どうやら二人は暫くの間キリルの城に滞在することに決めたらしい。

手紙にはルモンが無事騎士となったことが書いてあったので、皆は喜んだが、祝ってやりたい本人がいないのでどうしようもない。

やっと二人が帰って来たのは、秋も深まり地面が枯葉に覆われた頃だった。

皆に囲まれ口々に祝いの言葉をかけられたルモンは照れくさそうにしている。

夕食の席で今までキリルの城で何をしていたのかと尋ねたモルガドにガブリエルは答えた。

「見合いをしていた」

「えっ、ルモンがですか？」

「いや、俺だ」

「相手はどこのだなで？」

「マギユスの城主の娘だ」

「ほおー、それは良縁ですね。どんな方でした？」

ドグメールが聞いた。

「噂に違わず絶世の美女だったぞ」

「それでご結婚なさるのですか？」

パバーンが恐る恐る尋ねる。

「多分そうなるだろう。近いうちにワルローズを訪問したいと言っていた」

メルグウェンは皆が自分の方を見たような気がした。

私は変な顔をしているのだろうか？

皆の前で絶対に泣いたりするものか。

強張った顔に努力して微笑みを浮かべると、メルグウェンは食事が終わるのを静かに待った。

その後どうやって自分の部屋まで帰りついたのか分からない。

メルグウェンは扉を閉めるとフラフラとベッドに近寄った。

ガブリエルを好きになってしまったと気付いてからずっと恐れていたこと。

それが、とうとう本当になってしまった。

不思議なことに涙は出なかった。

しかし胸が締め付けるように痛く苦しく、ベッド脇に跪いたメルグウエンは齒を食い縛って呻き声を耐えた。

ガブリエルの言った絶世の美女という言葉が消しても消しても頭に浮かび、それからメルグウエンは眠れない夜を過ごすことになった。

やがてマギユスから使いの者が来て、ダレルカ姫がその母親と収穫感謝祭にワルローズを訪問することを告げた。

城中が祭りの準備でおおわらわの中、メルグウエンは殆どの時間を自分の部屋で過ごしていた。

刺繍や縫い物には触れる気になれず、ラウドを弾く気にもなれなかった。

毎日寒くても窓辺に座りじっと海を眺めていた。

この部屋もいずれは奥方に譲らなくてはなるまい。

仲良くしている二人を見るのに私は耐えられるのだろうか？

どこかに行ってしまいたい。

でもいくら遠くに離れても、この思いは私の胸の中から消えてくならないだろう。

この苦しみが消え去るまでどのくらいかかるのだろうか？

日に日にやつれていくメルグウエンを見てアナは心配した。

アナから話を聞いたガブリエルは、自分が結婚したらメルグウエンを城から追い出すと心配しているのかと思った。

ガブリエルに言われたようにアナはメルグウエンに、この城でのメルグウエンの立場は奥方が来ても変わらぬことを伝えた。

しかしメルグウエンは頷いただけで何も言わず、いつこうに元気にならなかった。

何か別の事情があるのではないかと思ったアナは、メルグウエンと仲のいい又エラヤルモンに相談した。

又エラはさあと当惑した顔をしたが、ルモンは溜息をついて言った。

「メルグウエン姫をお気の毒に思いますよ。でも我々ができることは、側で見守ってあげることしかないと思います」

アナは何が気の毒なのか問い詰めたのだが、ルモンは首を振って答えようとしなかった。

パドリックは滅多に笑わなくなってしまったメルグウエンをとても心配していた。

悪い魔女に魔法をかけられてしまったのかも知れない。

毎日のようにハシバミの実やきれいな色の落ち葉などを持って、部屋に訪ねて来るパドリックをメルグウエンは無理した笑顔で迎えた。

一生懸命元気付けようとしてくれているのが伝わってきて嬉しかった。

だが同時にガブリエルにそっくりなこの子供を見るのは辛かった。

一度耐え切れずにメルグウエンが泣き出したことがあった。

「もう直ぐお城に新しいお姫様が来ると叔父上に聞いたよ」

「…ええ」

「物語に出てくるお姫様みたいに綺麗な方なんだって」

「そつみたいね」

「だけど、僕は貴方の方が好きだよ」

「……」

「貴方は何でもできるし、とても優しいから」

「…ありがとう」

メルグウェンは溢れてくる涙を止められなかった。

メルグウェンが泣いているのに気付いたパドリックはびっくりした。

「どうしたの？どこか痛いのか？誰か呼んで来ようか？」

メルグウェンはパドリックを自分の膝に引き寄せた。

「いいえ、大丈夫。少し胸が痛かったけど、こうしていたら治まるから」

こんな子供の前で泣いたりして。

メルグウェンは口元を引き締めると涙を袖で拭いた。

俯いたメルグウェンの黒い艶やかな髪を小さな手がぎこちなく撫でた。

収穫感謝祭の2日前、マギウスからの一行が城に到着した。

大勢の兵に守られ城門から入ってきたマギウスの城主の奥方とその娘は、馬から下りると辺りを見回した。

中庭に迎えに出たガブリエルに愛想良く微笑みながら奥方は言った。

「綺麗なお城ですこと」

娘のダレルカは嬉しそうにガブリエルを見上げた。

ダレルカはガブリエルが話していたようにとても美しい姫だった。

背が高く、透き通るような美しい肌を持っていた。

蜂蜜色の髪が渦を巻いて背中に流れ、古代の彫刻を思わせる顔の優美な弓を描く眉の下には夏の海のような青い瞳が輝いている。

唇は薔薇のように紅くふつくらとして、相手を魅了する微笑を浮かべていた。

ダレルカは自分の美貌が相手にどのような影響を与えるか十分に承知していた。

子供の頃からそうやって自分の周りの者を意のままに動かしてきたのである。

キリルの城で初めて会った時から、ダレルカは家柄、地位、容姿の全ての面から見て完璧な結婚相手と思えるガブリエルの心を捉えるための努力を惜しまなかった。

この美しく少しばかり高慢な姫は、年若く男らしい城主を自分の足元に跪かせたくなったのだ。

見合いの席でガブリエルは自分の魅力に無関心ではないように見えた。

だがそれだけでは不十分だ。

自分の夫となるだろうこの男に自分に恋をして欲しいのだ。

燃えるような恋を。

ダレルカは首を傾げ計算された眼差しでガブリエルを見上げると、魅力的な声で城について色々質問した。

広間に入り騎士達に引き合わされたダレルカは、満足そうな溜息を漏らして母親の方を見た。

ガブリエル様の城は父上の城よりずっと楽しそうだわ。

「あいつはどこだ？」

ガブリエルは侍女に何かを尋ねている。

「気分が優れないそうで、お部屋に籠っておいでです」

「病気ではないだろうか？」

「夕食には下りて行きますと仰っていました」

ダレルカはガブリエルに近づいて心配そうに言った。

「どなたかご病気ですか？」

「いや。城で預かっている姫が機嫌を損ねているようだ」

アナは非難するようにガブリエルを見た。

「まあ、そんな方がここにおられるんですか？」

「ああ、妹のように思っている。仲良くしてやって欲しい」

「お目にかかるのが楽しみですわ」

ダレルカはそう答えたが、眉間に僅かな皺を寄せ考え込んでいた。

ずっとメルグウエンの側で様子を見ていたアナは、やっとメルグウエンが塞いでいるのはガブリエルの婚約者となる姫の所為ではないかと気付いた。

メルグウエン様はガブリエル様のことをお嫌いだとばかり思っていたけれど、それは私の勘違いかも知れない。

もしかして、その正反対なのではないのかしら？

そうだったら辻褃が合うわ。

ルモン殿が言っていたことも。

アナは窓からモルガドとガブリエルを眺めているメルグウエンを見つけた時のことを思い出した。

姫があんな切ない瞳で見つめていたのはガブリエル様だったのか。

アナはメルグウエンのために胸を痛めた。

もう少し早く自分がそのことに気付いていれば、何とかできたかも知れない。

でも何故、姫は好きな人に対してあのような態度を取っていたのだらう？

メルグウェンは自分が情けなかった。

昼食には広間に下りていけなかった。

ガブリエルの奥方となる女性を見て冷静でいられる自信がなかったのだ。

今日はティリオウの所にも行かなかった。

剣術の稽古に行くのだったら、もうそろそろ向わなければならない。

少し外に出て運動をしたら気分もすっきりするかも知れない。

そう思ったメルグウェンは、稽古の時にいつも着ている着古した服に着替えると部屋を出た。

広間の横を通る時、中をそっと覗いてみたが誰もいないようで静かだった。

今日は天気が良いから皆は城下町に散歩にでも出たのかも知れない。

だが中庭に足を踏み出した時、メルグウェンは部屋を出たことを激しく後悔した。

丁度ガブリエルが客達と一緒に城の見学から戻って来るところだったのだ。

メルグウェンは仕方なく立ち止まり、皆が近づいてくるのを待った。

ガブリエルに紹介され腰を屈めて丁寧な礼をしたメルグウエンは、初めてワルローズ城の奥方となる女性を見た。

何と美しい姫だろう!!!

パドリックはこの姫には絶対に偽者などと言わないだろう。

メルグウエンは、ダレルカがしげしげと自分を見ていることに気付いた。

澄んだ青い海のような瞳が、黒いビロードのような瞳を覗きこむ。

メルグウエンは瞬きをすると視線を逸らし、もう一度お辞儀をする
とさっさと納屋の方に向った。

その為、青い瞳に探るような冷たい影が浮かんだのに気がつかなか
った。

「コンワール殿、お待たせしました」

「今日はもう来られぬかと思いましたが」

メルグウエンは急いで稽古用の剣を取ると、コンワールの前に行き
構えの姿勢をとった。

先程あったことを忘れ、剣だけに集中する。

ここ数日は全然稽古に集中できず、すぐにコンワールに剣を叩き落

されていたのだ。

私はエルギーオン地方の貴族の娘だ。

国一番誇り高いと言われるエルグ族の娘だ。

失恋したからって、みっともない真似はできないわ。

いつまで経っても勝負がつかず、声をかけて試合を止めたコンワールは言った。

「やっと吹っ切れたようだな」

「そうね。何だかずっともやもやしていたのが、すっかりしたわ」

「それは良かった。剣術は万病に効く薬です」

メルグウエンはコンワールと顔を見合わせて笑った。

無理をせずに笑うのは随分久し振りだった。

その日の夕方、メルグウエンが自分の部屋で縫い物をしていると、扉をノックしてダレルカが顔を覗かせた。

「お邪魔かしら？」

メルグウエンは驚いたが、立ち上がってダレルカを迎え入れた。

「いいえ。どうぞ」

「良いお部屋ね」

ダレルカは部屋の中を見回すと、メルグウエンの手元の刺繍に目を留めた。

「もしかして、お嫁入り道具？」

メルグウエンはダレルカを見上げた。

ダレルカは頬を染めたメルグウエンを見て微笑んだ。

「いいえ、そのような物ではありません」

「そう」

ダレルカは暖炉の前の椅子に腰を下ろした。

金髪のみつ編みで囲われた美しい顔を燃え盛る火が照らし出す。

ダレル力は踊る炎をうっとりとした目で見つめながら言った。

「ガブリエル様は貴方のことを妹の代わりだと仰っていたわ」

「…そうですか」

「だから私達が結婚したら、私にとっても貴方は妹のようになるわね」

「……」

「父上に頼んで、できるだけ早く貴方に結婚相手を見つけてあげましょう。それとも既にどなたかいらっしゃるのかしら？」

「私は結婚するつもりはありませんので」

「あら、何故ですか？まだお若いのに」

「ダレル力様はこのお城はお気に召されましたか？」

「ええ、楽しそうですわね。私も早く仲間入りしたいですわ」

「……」

「ガブリエル様とのお話があった時、私はとても嬉しかったわ。あんなにお若いのに既にこんなに大きなお城の城主様で、お家柄も申し分ないです。それに、ガブリエル様とならとても幸せになれる気がしたのです」

メルグウエンは黙って頷いた。

そう、二人は幸福になるだろう。

あの男に愛される女性が幸せにならない筈がない。

感謝祭の前夜は城下町でも城の中でも祝われる。

メルグウエンは初めは昼食の後、自分の部屋に戻るつもりだったが、パドリックがどうしてもメルグウエンに手伝って欲しいと両手を合わせて頼むので仕方なくついて行った。

パドリックに引つ張って行かれたのは、裏庭の隅にある庭道具を入れる小屋の中だった。

そこでパドリックは台所の連中が数日前から探し回っていた調理器具を使い、妙な楽器を作っていたのであった。

客の前で一緒に演奏して欲しいと言われてメルグウエンは困った。

これだけではとても音楽とは言えないのではないか？

美しい姫の前でガブリエルに恥をかかしてやりたいという少し意地悪な気持ちが湧いたが、パドリックが一生懸命なのを見て思い改めた。

「ねえ、私がラウドを弾いて歌うから、貴方はこれとこれだけで伴奏してくれない？」

メルグウエンはラウドを部屋に取りに行き、パドリックも知っている易しい唄を弾いてみると意外と上手くいったので、そうすることに決めた。

二曲選んでパドリックと繰り返し練習すると、すぐに夕食の時間になった。

食事の後、皆が焚き火の周りに集まってきた。

騎士達がルモンを呼ぶ。

食事の前にメルグウエンが話してあったので、ルモンは客の方を向いて言った。

「今夜は初めにメルグウエン姫とパドリック殿が演奏します」

パドリックが調理器具を持ち出してしまったため台所は大騒ぎになったことをルモンが話したので、客達は手を打って喜んだ。

俄か作りの楽器の上に屈みこみ真面目な顔をして一生懸命演奏しているパドリックと、そんなパドリックを優しい目で見ながらラウドを弾くメルグウエンは、傍から見るととても可愛らしい一組だった。

演奏が終わり沢山の拍手にお辞儀をした二人は、ガイディヤタラバード等の楽器を持ったルモンら3人と交代した。

メルグウエンは客の側を通る時、ダレルカが笑いながらガブリエル

に可愛らしいお猿ですことと言つのを聞いてムツとした。

私の可愛いパドリックが猿ですって？

ガブリエルが何と答えるかと立ち止まって耳を澄ませたメルグウェンは、彼がダレルカにあの猿は自分の甥だと言つのを聞いてほくそ笑んだ。

本当に可愛いと思っただけで、悪い意味はないのだとダレルカがしきりに言い訳しているのが聞こえたが、メルグウェンはフンと鼻を鳴らすと、パドリックの手を引つ張つて中庭を横切つて行った。

それはパドリックにも聞こえていたようで、メルグウェンと片隅に座ると耳に囁いてきた。

「やっぱり僕は貴方の方が好きだよ」

「私も貴方が好きよ」

メルグウェンはパドリックと笑い合つと、立ち上がつて言った。

「さあ、もうすぐ寝る時間よ。それまでルモン達の音楽に合わせて踊りましょう」

メルグウェンはパドリックや他の小姓達と踊つたが、ずっと話をしていたガブリエルとダレルカが立ち上がり踊りの輪の方に連れ立って歩いて来るのを見ると、パドリックの手を引いて退散した。

二人が踊るところなんて絶対に見たくない。

いくら元気に振舞っても、胸がチクリと傷むのは避けられなかった。

パドリックをベッドに寝かせると、メルグウエンは尋ねた。

「今夜は何かいいかしら？」

既に眠そうな顔をしたパドリックは、蝋燭の光を眩しそうに見ている。

「貴方の国の唄」

メルグウエンは優しい声で歌い出した。

二人の影が壁にゆらゆらと揺れる。

部屋は暖かく居心地が良かった。

やがて、パドリックが安らかな寝息を立て始めても、メルグウエンは立ち上がらなかった。

自分の部屋に戻るのが恐かったのだ。

パドリックが寝返りを打ち、小さな手が何かを探すように動いた。

メルグウエンは布で作った猫をその手に乗せてやった。

パドリックは猫を掴むと鼻にゴシゴシと擦り付けて、満足したように大人しくなった。

今頃、あの二人は手を取り合っているのかしら？

睦まじく寄り添っている二人の姿が目に見え、メルグウエンは慌てて頭を振った。

何故一番見たくない場面ばかり思い浮かべてしまっただろう？

微笑み合うガブリエルとダレルカ。

ダレルカの髪を撫でるガブリエル。

抱擁し合うガブリエルとダレルカ。

メルグウエンは頭を抱えると呻き声を耐えた。

望みのない恋とは何と辛く苦しいものなのだろう。

溜息をついたメルグウエンは、パドリックの頭を撫でると立ち上がった。

風に乗って賑やかな音楽と笑い声が、窓に近づいたメルグウエンの耳に届いた。

翌朝、メルグウエンが鷹匠のテイリオウの所に行った帰り、裏庭の井戸で水を汲み手を洗っていると話し声が近づいてきた。

こんな朝早くから誰が庭に出ているのだろうと思ったメルグウエンだったが、ふと女の声がガブリエルの許婚の声に聞こえ、木の陰に

身を隠した。

そっと窺ってみると確かにそれはダレルカだったが、ガブリエルとではなくルモンと一緒にだった。

何を話しているのかしら？

ダレルカが言っていることをルモンが首を振って拒絶している。

「そのようなことは、私にではなく城主様にお話ください」

強い口調でルモンがそう言って、足早に去って行った。

ルモンを怒らすなんて、何を言ったのかしら？

ダレルカは何か考え込んでいる。

いつまでもここに隠れている訳にもいかないと思ったメルグウエンは木の陰から出てきた。

その姿を目にしたダレルカは、ハツとしたような顔をしてメルグウエンに近づいて来た。

「おはようございます」

メルグウエンが丁寧に挨拶をすると、落ち着きを取り戻したダレルカは言った。

「そこに隠れて私達の話聞いていたって訳ね」

「いいえ。私は手を洗っていただけで、話など聞いておりません」

「しらばっくれるのね。ひとつ、ご忠告しておくわ。いくらあの方の甥を使って取り入ろうとなさったって無駄よ」

「何を仰っているのか分かりません」

「私がこの城の奥方になるの」

「城主様がお決めになることです」

「そうよ、彼が私を望んでいるの。だからいくら貴方が頑張っても無駄なのよ」

「どういふことですか？」

メルグウェンは段々腹が立ってきた。

何だと言っのだろう。

ガブリエルがそう望んでいるのなら、それでいいではないか。

この美しい姫はあの男に望まれて奥方になるのだ。

いったい何故私に文句を言ってくるのだろう？

「貴方は結婚には興味がないと仰っていたけれど、本当はガブリエル様のことが好きなのでしょう？」

ダレルカは、どんな小さな反応も見逃さないとも言うように、メ

ルグウェンをじっと見つめながら聞いた。

メルグウェンは目を逸らす。

「私には貴方の質問に答えなければならぬ義務はありません」

「彼の奥方になりたいのでしょうか？」

「いいえ」

「貴方は孤児？それとも貧乏な親に捨てられたの？親の後ろ盾や持参金もないのに城主の奥方になるうなんて、随分と厚かましい方だわ」

「奥方になるうなんて思っていないません。それに私の親のことは貴方に関係ないでしょう？」

「嘘が下手な方ね。でもよくもその汚れた烏みみたいな姿で私と張り合えるなんて思ったわね」

「貴方と張り合おうなどと思っていないません。やることがありますのでこれで失礼します！」

メルグウェンはそう言い捨てるとその場を離れた。

ダレルカは焦っていた。

ワルローズに着いたらすぐガブリエルから正式に結婚の申し込みをされると思っていたのだが、今日で既に3日目になるのにまだその心配がない。

そしてあのメルグウエンという姫の存在が目障りだった。

城の騎士達やガブリエルの甥に大層慕われ、ガブリエルには妹のようになら可愛がられている姫。

メルグウエンには烏などと言ったが、ダレルカはメルグウエンのことを決して醜いとは思っていなかった。

反対にその珍しい容姿を美しいと思ったからこそ危険だと感じたのだった。

そして若い女性特有の勘で、メルグウエンが密かにガブリエルに恋をしていることに気付いたのである。

丁度庭で会った時ダレルカは、ガブリエルと婚約したらメルグウエンを遠ざけるように、ガブリエルを説得してもらったことをルモンに頼もうとしていたのである。

また、この城でガブリエルが一番近いルモンを味方につけることは有利と思われたので、ダレルカは魅力的な微笑と愛想を惜しまなかった。

しかしルモンは煽てに乗らず、メルグウエンのことに關しては聞く耳を持たなかった。

ダレルカはイライラしていた。

騎士の癖に城主の奥方になる自分の言うことを聞かないあの男をどうするかは、結婚してから考えようと思った。

ダレルカはメルグウエンにあのような態度を取ってしまったことを悔やんでいた。

メルグウエンに全てを聞かれたと思って、あんな詰め寄るような態度を取ってしまったのだ。

あれではまるで私の方が嫉妬しているみたいじゃないの。

だがダレルカは、出会ったばかりの自分にはどうにもならぬ強い絆が彼らの間にあることに気付き、自分だけがのけ者にされたように感じていたのだ。

あの二人はガブリエル様に告げ口をしたりするのかしら？

私がガブリエル様の側にずっといればそんなことはできない筈だ。

そう思ったダレルカは急いで城の方に向った。

どうしても今日中にガブリエルに結婚を申し込ませる必要があった。

メルグウエンは怒っていた。

あんな失礼な姫を好きになるなんて、あの男も大したことないのね。うわべだけの美しさに惑わされているのだけ。

部屋に戻ったメルグウエンは、礼拝に行く準備をしながら考えた。

ダレルカが奥方となったら、この城に自分の居場所がなくなるのは目に見えていた。

ガブリエルは今は自分のことを妹のように守ってくれているが、自分は本当の妹ではない。

妹のような女と奥方ではわざわざ天秤にかける必要もないだろう。

そのようなことになる前に何とかしなくては。

張り合おうなどと思っていないと言ってしまったが、このままでは治まらない。

正々堂々と勝負してやろう。

もし私が負けたら父上の城に帰るわ。

でも勝負って何をしたらいいのだろう？

まさか決闘を申し込む訳にはいかないし。

何か良い考えはないのか？

礼拝の後、メルグウエンはパドリックを連れて庭に出て行った。

暫く二人でござこそやっていたが、やがてメルグウエンは木の箱を重そうに抱えて主塔に向った。

メルグウエンは誰もいない広間に入りダレルカの席にその箱を置くと、部屋で書いてきた皮羊紙を巻いて箱の上に乗せた。

階段を下りかけていたメルグウエンは、下から聞こえてきた女の悲鳴に密かに微笑んだ。

階段の手すりから覗くと、広間の扉が威勢良く開き、ダレルカが口元を押さえて中庭に飛び出して行くのが見えた。

その後をルモンとパーンが追いかけて行く。

ダレルカの母親も青い顔をして広間を出て行った。

それらを見届けたメルグウエンは涼しい顔をして広間に入った。

「パドリック！！！」

ガブリエルが怒鳴った。

その凄まじい形相に騎士達も恐れをなしている。

この男が本気で怒っているのを見るのは初めてだとメルグウエンは思った。

そんなにあの方が大切なの？

パドリックは顔を強張らせて、ベンチから立ち上がると、ゆっくりとガブリエルの前に行った。

「これはおまえがやったことか？」

パドリックはガブリエルを見上げた。

「はい、僕がやりました」

ガブリエルがパドリックを殴ろうと手を振り上げるのを見て、メルグウエンは叫び声を上げた。

「待って！！パドリックじゃなくて私がやったの」

ガブリエルはメルグウエンの方を振り向いた。

「下手に庇う必要はない」

「庇ってなんかいないわ、本当よ。パドリック殿が私を庇ってくれているの」

ガブリエルの前に駆け寄ったメルグウエンは、パドリックを背に隠すようにして立った。

冷たい灰色の瞳がメルグウエンを見下ろした。

「何故」のようないことをした？」

中庭の隅でダレルカは石の段に腰を下ろし、吐き気が治まるのを待っていた。

ルモンが手渡した水で濡らした布で顔を拭い、母親が背中を摩るのを煩そうにすると、騎士達を見上げて言った。

「城主様は勿論この張本人を厳しく罰してくださいさるでしょうね？」

ルモンとパバーンは顔を見合わせた。

「それは誰の仕業が分かったら、必要な処置は取られると思います
が」

二人はパドリックの悪戯ではないかと思っていたのだ。

ダレルカの母親も言った。

「娘はもう少しで気を失うところでしたのよ。私もまだ胸が苦しい
ですわ。是非とも厳密な調査をお願いしますわ」

漸く立ち上がれるようになったダレルカは、母親とパバーンに支えられて城の方にそろそろと歩き出した。

その足取りは不確かだったが、目は冷たい怒りに燃えていた。

丁度その時、ガブリエルが城から出て来た。

パバーンが場所を譲ると、ガブリエルはダレルカの腕を取って主塔の方に導いた。

広間の暖炉の近くにダレルカを座らせると、ガブリエルは頭を下げて言った。

「城の者がご無礼を働いたこと、深くお詫びします」

「それで張本人は？」

「決してこのようなことを繰り返さぬよう、きつく叱っておきました」

「私は死ぬほど恐い思いをしたのですよ。それでは満足できませんわ」

「どうしろと仰るのです」

「張本人に鞭打ち五回の刑をお願いします」

ダレルカはガブリエルの目を見ながら静かにそう答えた。

ルモンが何か言おうとするのをガブリエルは目で押し留め、扉の前に立っているメルグウェンの方を見た。

ダレルカもそちらを見る。

ガブリエルはダレルカに言った。

「貴方は誰がやったかご存知のようだ。何故だかお尋ねしてもいい

ですか？」

「はい。ここに証拠がございます」

ダレルカが差し出した皮羊紙を読んだガブリエルは、メルグウエンを呼んだ。

「こつちに来い。これはどういうことだ」

メルグウエンはガブリエルに近寄りながら答えた。

「書いてあるとおりです」

ダレルカが遮った。

「そんなことはどうでもいいでしょう？ガブリエル様、この無礼な娘を罰してくださいませ」

ガブリエルはメルグウエンを見つめたまま言った。

「説明しろ」

「相手が男なら決闘を申し込んでいるところです。私が烏なら、貴方は綺麗な皮を被った鼠だわ」

メルグウエンはダレルカを正面から見て言った。

ダレルカは聞こえなかったようにガブリエルの方を向き、その胸に擦り寄った。

そして上目遣いでガブリエルを見つめると甘えた声で言った。

「ガブリエル様、お願いしますわ」

寄り添った二人を見てメルグウエンは眉を顰め、踵を返しながら言った。

「刑罰が決まったら呼んでください。私は逃げたりしませんから」

扉の方に行きかけたメルグウエンは、ふと立ち止まり振り返るとガブリエルを見て言った。

「一つだけお願いがあります。城主様手ずから私に罰を与えてください」

メルグウエンは自分の部屋の窓辺に座り、風に髪を靡かせて海を眺めていた。

火照った頬に冷たい風が心地よい。

ガブリエルはダレルカの言うとおりにするのではないかと思われた。だから、メルグウエンは広間を出る前に言わずにはいらなかったのだ。

もし、ガブリエルがダレルカの希望通り自分を鞭打ちの刑にするなら、ガブリエル自身が打てばいいのだ。

鞭打ちの刑は子供の頃、父親の城で見たことがあった。

盗みを働いたその男は上半身裸に剥かれ、厩の柱に抱きつくように縛られていた。

革で作られた鞭が宙を舞い鋭い音を立てて襲い掛かり、男が獣のような吼え声を上げる度に、乳母に手を取られた幼いメルグウエンは身を竦ませ、恐怖に満ちた目で罪人の背中に次々と紅い線が走り、血が滲んでくるのを見ていたのだった。

メルグウエンは身震いをする、自分で自分の体を抱き締めた。

ある意味、それは一種の賭けでもあった。

ダレルカが、メルグウエンか？

メルグウエンは、もしガブリエルがそう決めたのなら、潔く罰を受けるつもりだった。

あの女の前で晒し者になるのは辛かったが、勝負に負けたのなら仕方がない。

そしてその後、誰にも言わずに城を抜け出し、エルギーエーンの本拠地に帰るつもりだった。

暴漢に攫われた私をもつ父上も無理矢理結婚させようとはしないだろう。

メルグウエンは気を取り直すと数少ない自分の荷物を纏めた。

母上に頂いた首飾りと衣類が少しばかり。

ガブリエルにもらったものは、剣以外は全て残していく。

忘れるのに時間はかかるだろうが、わざと思い出すような物を持って行く必要はない。

もし無事に父親の城に着いたら、スクラエラの剣は自分の恋心と一緒に葬るつもりだった。

だが、男の格好をしても、たった一人で父上の城まで帰り着けるのだろうか？

今までは私は幸運だった。

今回も何とか切り抜けられるだろう。

もし上手くいかなかったとしたらそれまでだ。

メルグウェンはそう決心すると、窓辺に戻り呼ばれるのを待った。

随分時間が経った気がした。

どうなったのだろうか？

メルグウエンは強張った体を起こすと扉に近づいた。

その時、下から人声が近づいて来た。

呼びに来たのだわ。

メルグウエンは緊張した面持ちで扉を見つめた。

しかし、いくら待っても扉は開かれず、そのうち声も聞こえなくなった。

メルグウエンは扉に駆け寄った。

そっと開けて覗いてみるが、誰もいない。

メルグウエンは部屋を滑り出ると階段の方に歩いていった。

ガブリエルの書斎の前を通る時、その扉が完全に閉まっておらず、中から話し声が聞こえるのに気がついた。

立ち聞きするつもりはなかったのですが、その場を離れようとしたのだが、その時、自分の名前が聞こえて思わず耳を澄ませた。

中にいるのはどうやらルモンとガブリエルのようだった。

「メルグウェン姫から謝罪をすれば」

「もう遅い」

「でも、まだお考えが変わるかも知れませんし」

「いや、あれはもう駄目だ」

客達はどうしたのだろうか？

もしかして帰ってしまったのだろうか？

ガブリエルの唸るような声がした。

「あの馬鹿。人の縁談をぶち壊しやがって！」

では結婚の話はなくなったのだ。

メルグウェンは思わず微笑みそうになったが、その後に聞こえた言葉に凍りついた。

「まったく、バザーンで会った時にさっさと斬り殺してりゃ、こんな面倒なことにならなかつたものを！！」

「ガブリエル様！」

メルグウェンは部屋に駆け戻った。

心臓がドクンドクンと嫌な感じに鼓動している。

扉を閉めると床にガクリと膝をついた。

では、あの男はあの時私を殺していた方が良かったと思っ
ているの
ね？

私はいない方がいいのね？

あの男に自分の存在を否定されることがこんなにも辛いなんて。

涙が後から後から溢れてくる。

嗚咽を漏らさないように唇を噛んだ。

やがてメルグウエンは涙の流れる顔を上げて天井を眺めた。

金髪の美しい姫の面影が浮かんだ。

この勝負、結局どちらが勝ったことになるのだろうか？

メルグウエンは涙を掃うと立ち上がり、荷物から剣を取り出した。

あの男の愛していた妹の剣。

妹と同じように大事にされていると思っ
ていた私が馬鹿だった。

メルグウエンは剣を鞘から抜くとゆっくりと切っ先を自分に向けた。

ガブリエルとルモンはメルグウエンが自分達の会話を聞いていたことに気付いていなかった。

ルモンは首を振って言った。

「そんなことを言われては、あまりにもメルグウエン様がお気の毒です」

「どこが気の毒なんだ？いくら腹の立つことを言われたからって、鼠の死骸を婚約祝いだと言って贈る奴だぞ」

「それは確かに褒められたことではないですが、姫はずっと苦しんでおられたのです」

「あいつはどこか悪いのか？確かにここの所あまり元気に見えなかったが。何の病だ？」

「恋の病です」

「…恋だと？」

「はい」

「相手は誰だ？おまえもモルガドだとか言わないよな？」

「モルガドですか？確かに騎士達の中にもメルグウエン様を妻にしたいという者は数人いますよ。ですが、姫が恋焦がれている相手が分かっていたので、誰も何も言わなかったのです」

「だからその相手は誰だ？」

「本当にお分かりにならないのですか？」

「ああ、分からない。俺は初めおまえのことではないかと思っていたのだが」

ルモンは溜息をついた。

「姫のことは好きですけど、そのような感情はありません。というか、なくなつたのです。他の騎士達と同じ理由で」

「好きだつたら競争すれば良いではないか。そんなに強力な相手なのか？」

「一番お似合いだと思ひましたので」

「尋ねるのは3度目だぞ。そいつは誰だ？」

「貴方ですよ」

「…まさか」

ガブリエルは信じられないという顔をして呟いた。

「何故まさかなんです？」

「あいつは俺を嫌っているぞ」

「そんなことは絶対ないです」

「だが、いつも俺に突っかかってくるし。以前妻にしてやると言ったら、父親の選んだ老人の方がまじだみたいなことを言っていたぞ」

「それはガブリエル様がいつも姫をおからかいになるからで」

「……………」

ガブリエルは暫く頭を抱えて物思いに沈んでいた。

夕食の席で皆はメルグウエンがいないことに気付いたが、昼間のこともあり遠慮して下りてこないのではないかと思っていた。

結局ガブリエルはダレルカの望む体罰をメルグウエンに与えようとしなかったため、客達は大層立腹してワルローズを後にしたのだった。

別れ際にダレルカの母親はガブリエルに言った。

「あのような悪質な悪戯が許されるような城には、私どもの娘を嫁がすことはできません。キリル殿にはこちらからご報告をします」

ダレルカもガブリエルを詰った。

「貴方は私よりもあの無礼な娘を選ぶのですね？あの娘がこの城にいる限り、二度とお会いしません」

食事中は皆気まずそうに殆ど口をきかなかった。

ガブリエルはうわの空で何かをじっと考え込んでいる様子だ。

その沈黙が広間に駆け込んで来たアナの泣き声で破られた。

アナは昼食も取らなかったメルグウエンの様子を見に先程広間を出て行ったのだった。

驚いて立ち上がったガブリエルは、アナが手に持っている物を見て

顔色を変えた。

それは長い髪の毛だったのだ。

聞かなくても誰の物だかすぐに分かる黒く艶やかな髪の毛だった。

何故か最後に見た棺に入った妹の顔が頭に浮かんだ。

愛らしかった顔は青白く浮腫んでしまっていたが、周りに広がる長い髪だけは生前と変わらず美しかったのだ。

ガブリエルはアナの肩を掴むと揺さぶった。

「あいつはどこだ？」

泣いているアナから話を聞きだすのは骨が折れた。

結局分かったのは、部屋が暗いのでアナは初めメルグウェンが眠っていると思ったこと。

しかしよく見てみるとベッドには誰もおらず、部屋の片隅に髪の毛の束が落ちていたということだけだった。

ガブリエルは直ちに騎士達に指示を出した。

次々と戻って来た騎士達から情報が集まった。

メルグウェンはいつも乗っている青毛の馬に乗って出て行ったようだった。

城の門番は、頭巾を目深に被ったその若い男がメルグウエンだと気付かず、午前中に帰った客の家来だと思って通したとのことだった。町の門番によると、メルグウエンは9時課頃に城壁を越えたようだった。

向った方向ははっきりしていない。

メルグウエンが町を出てから既に3時間以上経っており、どちらに向ったのか分からなくては探すことは無理だった。

ガブリエルはメルグウエンに対して腹を立てていた。

バザンで出会ってからずっと妹のように思っていた。

スクラエラにしてやれなかった分、ずっと守ってやるつもりでいた。

幸せにしてやりたかった。

ダレルカとメルグウエンのどちらを取るかという事態になった時、ガブリエルが信じたのはメルグウエンだった。

それなのに。

あの馬鹿はいつたどこに行っちゃったんだ？

既に日は暮れている。

女が一人で旅をするなど気違い沙汰だ。

男でも危険なのに。

ガブリエルは両手で髪を掻き毟った。

待てよ。

あいつは行く所があるのか？

行き先は父親の城しかないだろう。

とすると国道に向ったのか。

ガブリエルは皆に言った。

「松明を持って来い。あいつを探しに行くぞ」

可能性は低いが、メルグウエンはメリアデックの許に行ったかも知れないと数人がクエノン城に向った。

残りの者は松明を手にワルローズの南東にあるコアドモールの森に向った。

ブレシリアンの森ほどではないが、この鬱そうとした森には大きな岩がゴロゴロと転がっている。

つい最近、盗賊が出るとの通報があったばかりだった。

ガブリエルは感謝祭の後に山狩りを計画していたのである。

すぐさまそうしなかったことを後悔してももう遅い。

暗い道を馬で進みながらガブリエルは唇を噛んだ。

どうか無事でいてくれ。

月のない夜で松明の明かりでは殆ど何も見えなかった。

メルグウエンの匂いを嗅がせた猟犬を頼りにして一行は進んでいた。

しかし猟犬達は森に入った途端、混乱しているように暗闇の中をうろつくと歩き回った。

「二手に分かれる。かたっぱしから目に付いた岩の間を探れ」

ガブリエル達はメルグウエンの名を呼びながら森の中を進んだ。

夜が明けてきた。

男達は疲れた顔を見合わせた。

メルグウエンの行方はいつこうに分からず、手がかりとなる物も見つかっていない。

ガブリエルの近くにいたドグメールが言った。

「いったん城に戻り、町の者を集めて人数を増やし、もう一度出直した方が良いのではないですか？」

「そんなことをしている間に、あいつは危険な目に遭っているかも知れないだろう？」

叫ぶようにそう答えたガブリエルを宥めるようにルモンが言った。

「では、私がドグメールと城に戻り、人を集めてきます」

しかし二人がその場を離れる前に遠くから角笛の音が聞こえてきた。

物悲しげなその音は何度か繰り返されると余韻を残して消えた。

「あれはイアンだ！！あっちに向うぞ」

一行は角笛の聞こえた方角に馬を飛ばした。

湿っぽい秋の朝で夜が明けても辺りは薄暗く、空気がひんやりと冷たかった。

時間をおいて繰り返される角笛の響きを頼りに一行がパバーン達の所に辿り着くと、男達は慌ててガブリエルに駆け寄って来た。

「馬が見つかりました」

「馬を盗ろうとしていた奴らはあちらに捕らえてあります」

ガブリエルが顔色を変えたのを見て、パバーンが慌てて言った。

「姫はまだ見つかっていないのですが、盗賊どもは殺していないと言っています」

ガブリエルは馬を飛び降りると、背中合わせに縛られている二人の男にズカズカと近づき、剣を抜くと恐ろしい声で尋ねた。

「あいつをどうした？さっさと答えぬと斬り捨てるぞ！！」

男達はその剣幕に震え上がり、小便を漏らした。

そして歯を鳴らしながら泣き喚いた。

「わしらは馬が欲しかっただけで、誰も殺してはいない！！！」

「勘弁してくれ！！その男の方がわしらの仲間を殺したんだ」

「こいつらの仲間と思われる男がここから少しばかり離れた場所で死んでいました」

ガブリエルはパバーンに言った。

「その場所に案内しろ。馬がないならそんなに遠くには行かれない筈だ」

濡れて黒ずんだ枯葉の上につつ伏せに倒れている男をガブリエルは爪先でひっくり返した。

肩からわき腹にかけて斜めに斬られている。

既に血は流れていなかった。

側に男が使ったらしい大剣が転がっている。

見事な一撃だとガブリエルは思った。

だが、あいつはまた人を斬ったことを悔やんで泣いているのではないか？

ガブリエルは辺りを見回した。

「ここを中心に辺り一帯を探れ」

男達はメルグウェンを呼びながら辺りに散らばった。

ガブリエルは焦っていた。

あいつらはああ言っていたが本当なのだろうか？

メルグウエンは生きているのか？

怪我をしているのではないのか？

「メルグウエン姫、聞こえているなら返事をしろ！！助けに来たぞ
！！！！」

遠くで男達が同じように呼びかけている声がするだけで、返事はなかった。

木々の間を冷たい風が吹きぬけ、霧雨が降ってきた。

この寒い中、あいつはどこに行ってしまったのか？

ガブリエルは昨日の午後、ルモンに聞いたことを思った。

まだ完全に信じられない気持ちがあったが、もし本当だとすればメルグウエンはガブリエルが結婚すると思って身を引いたのだろう。

ガブリエルはダレルカと結婚するつもりだったが、それは彼女を愛していたからではなかった。

城主となったらできるだけ早く跡継ぎを儲けることが望ましい。

そして相手は精神と身体が健康であり、家柄の釣り合う家の娘でなければならなかった。

父親が熱心に薦めたマギユスの城主の娘はそれらの条件を満たしていたのだ。

ダレルカ自身は自分好みの魅力的な姫だと思ったし、少しばかり我侷そうだが城主の奥方として必要な気質を備えていると思えた。

結婚してから愛を育んでいけば良いと思っていた。

だがダレルカ姫と結婚することがあいつを失うことだと知っていたら、絶対に俺は承知しなかった。

メルグウエンにはいずれ良い縁談を見つけてやろうと思っていたが、もし自分の騎士達の中に気に入っている者がいるならば、その男と一緒にしてやっても良いと考えていた。

でもそれは、あいつが俺のことを好きだなんて思ってもみなかったからだ。

嫌われているとばかり思っていたのに。

俺はスクラエラを失った時の苦しみをまた味わらなければならないのか？

「メルグウエン、戻って来い!!!」

戻って来てくれ。

お願いだから。

木の洞の中に蹲り、寒さに震えていたメルグウェンは、遠くから聞こえる物音に気付いていた。

だが恐怖のあまり自分の頭が生み出した幻覚だと思っていたのだった。

助けに来てくれる人などいる筈がない。

私はいない方が良いのだから。

私がいなくなったら、あの男は希望通りにダレルカ姫を嫁に迎えることができるだろう。

不思議と悔しい気持ちはなかった。

あるのは悲しみだけ。

これからどうしよう？

馬もなく持っているのはこの剣だけ。

どこに行ったらいいのだろうか？

急に直ぐ近くで犬に吠え立てられメルグウェンは飛び上がった。

「姫、姫ですか？」

外を見ると、モルガドが泣きそうな顔で駆け寄ってくるのが見えた。

メルグウエンは凍えた体をそろそろと伸ばし木の洞から出て来た。

「お怪我は？」

モルガドが心配そうに聞いたが、メルグウエンは首を振って前をじつと見ていた。

険しい顔をしたガブリエルが大股に近づいてくるのが見えたのだ。

……来てくれた。

来てくれた。

でも、何故？

ガブリエルはとても怒っているように見えた。

この男の怒っているところを見るのは二度目だとメルグウエンはぼんやり考えた。

「馬鹿者！！！」

メルグウエンの目の前に来たガブリエルは、そう怒鳴ると勢いよく腕を伸ばした。

殴られる！！！！

そう思ったメルグウエンは身を竦め目を閉じる。

しかし、ガブリエルの大きな手はメルグウエンを打つことはせず、その頭を捉えると乱暴に自分の胸に押し付けた。

メルグウエンは咄嗟のことに抵抗もせず、大人しくガブリエルに抱かれている。

やがて、メルグウエンは肩を震わせて泣き始めた。

強張った体から恐怖や緊張が、涙と共にゆっくりと流されていく。

ガブリエルの手が、しゃくりあげるメルグウエンの背中を優しく叩いた。

このまま時間が止まってしまえば良いのに。

メルグウエンは額を逞しい胸に押し付けながら思った。

なんだか懐かしい感じがする。

前にもこんなことがあったような…

メルグウエンがそう思った時、ガブリエルが言った。

「帰るぞ」

泣き止んだメルグウエンはガブリエルから離れた。

「いいえ」

ガブリエルは首を振るメルグウエンを訝しげに見つめた。

メルグウエンは唇を噛むと頭を下げた。

「ごめんなさい」

「何だ？」

「貴方の結婚を駄目にしてしまつてごめんなさい。でも私がいなくなれば、ダレルカ姫は戻ってきてくれるでしょう？」

「その話はもういい。帰るぞ」

頭を振るメルグウエンにガブリエルは眉を顰めた。

「拗ねるのはやめろ」

「拗ねてなんかいません。私はいない方が良いでしょう？」

「誰がそんなこと言った？」

「貴方が」

「俺は言つてないぞ」

また涙が溢れ出したメルグウエンは唇を噛んで俯いた。

「…バザーンで、私を殺してしまえば良かったって」

少しばかり戸惑った顔をしたガブリエルは、直ぐに決まり悪そうな顔になった。

「俺達の話聞いたのか？あれは怒りのあまり口が滑ったんだ。許せ」

「でも本当にそう思っているから、口が滑ったのでしょ？」

「いや、そんなことはない。おまえを大事に思っている。だから一緒に城に戻ってくれ」

メルグウェンは自分に頭を下げている背の高い男を目を丸くして見つめた。

そして震える声で尋ねた。

「貴方は本当に私が城に戻ることを望んでいるの？」

涙で潤んだ黒い瞳を見つめながらガブリエルは答えた。

「心から望んでいる」

ワルローズの城に戻ったメルグウエンは、皆に心配をかけたことを謝り、助けに来てくれたことに感謝した。

クエノンから駆けつけて来たメリアデックを見てとても申し訳なく思ったし、アナとパドリックには二度と勝手にいなくならないことを誓わされた。

そして穏やかな以前の生活が戻ってきた。

ガブリエルは相変わらずメルグウエンを見かけるとからかった。

特に短くなったメルグウエンの髪をまるで案山子のように笑って、ポルの姉さんと呼んだので、メルグウエンはカンカンに怒って数日間ガブリエルと口を利こうとしなかった。

いつか遠出した時に、パドリックが領地の麦畑に立っていた案山子を愚鈍なポルと名付けたことがあったのだ。

ガブリエルはメルグウエンに対して、できるだけ以前と同じに接するように努力していた。

だがルモンから聞いた話が頭を離れず、ふと気がつくともメルグウエンの姿を目で追っていることがあった。

そうしてメルグウエンを見ていて気付いたことがある。

自分以外の相手だとメルグウエンは愛想良くいつも笑顔なのだ。

特にパドリックと一緒にいる時は本当に楽しそうで、二人を見ているだけで幸せな気持ちになった。

ガブリエルは思った。

あいつは俺にだけいつも不機嫌な態度を取る。

だからあいつが俺のことを好きだなんて気付く訳ないじゃないか。

またしてもメルグウエンを怒らし、走り去っていくその後姿を見送ったガブリエルの側にルモンが来た。

どうやら一部始終を見ていたらしい。

「どうしてもおまえの言うとおりだとは思えん」

ガブリエルがそう言うところルモンは苦笑いを浮かべた。

「ガブリエル殿がわざと姫を怒らせることばかり言われるからですよ。少しは優しい言葉をかけてあげなされば」

アナはメルグウエンの髪が短くなってしまったことを嘆いた。

「すぐまた伸びるわ」

メルグウエンは笑ってそう言ったが、アナは柔らかな布で作った頭巾をメルグウエンの頭に被せながら溜息をついた。

ガブリエルの婚約者もいなくなった今、アナはどうかしてガブリエルがメルグウエンを気に入るように計らいたかったのだ。

それなのに、こんな男の子みたいな頭になってしまわれて。

だけど、ガブリエル様があの姫とご結婚なさらなくて本当によかったわ。

メルグウエンの笑顔を見て、アナは嬉しくなった。

ある日、部屋で針仕事をしながらアナはメルグウエンに尋ねた。

「どうして、いつもいつもガブリエル様に素っ気無い態度を取られるのですか？」

首飾りを作ろうと夏に浜辺で拾った貝殻に小さな穴をあけていたメルグウエンは、びっくりした顔を上げた。

「好きな人には優しくなさらないと、叶うものも叶いませんよ」

メルグウエンは真っ赤になった。

「な、何故アナは知っているの?!」

「毎日お側で見ているれば、それぐらい分かりますよ」

メルグウエンは貝殻が散らばるのも構わずに両手に顔を埋め、くぐもった小さな声で言った。

「アナ、誰にも言わないでね」

「ええ、言いませんとも」

それからアナの問いにメルグウエンは、頬を染めながらポツリポツリと答えたのだった。

ずっと自分の胸だけに閉じ込めていた想いを話すのは、照れくさいことだったが同時に嬉しいことでもあった。

修道院でマルゴーに出会うまで、女友達のいなかったメルグウエンは、友達同士で胸の中を打ち明け合うようなことは殆どなかったのだ。

メルグウエンは自分の恋が叶うとは思っていなかった。

顔を合わす度にガブリエルは相変わらず失礼なことばかり言うてる。

私のことを案山子と呼ぶなんて、余程みっともないと思っているのだろう。

だけど助けに来てくれた時は嬉しかった。

森の中で雨に濡れながらガブリエルの腕に抱かれた時のことを思い、メルグウエンは顔を赤らめてほうっと溜息をついた。

城に戻ってきて欲しい言われた時のことを思い出すと、今でも顔が

火照ってくるのだ。

だがメルグウエンはこの幸せな時は長続きしないことを知っていた。ガブリエルはダレルカ姫とは結婚しなかったが、彼の親は別の花嫁候補をすぐに見つけてくるだろう。

その度にガブリエルの相手と喧嘩して縁談を壊すことなど、できる筈もないしするつもりもなかった。

それができるだけ遅くなりますようにとメルグウエンは祈った。

神々様、一生のお願いです。

もう少しだけ私をあの手側にいさせてください。

海から吹き付ける冷たい風の中にも僅かな春の兆しを感じる頃になった。

日中、雲の隙間に青空を見かけることも稀ではなくなった。

今はまだ裸の枝を晒している木々も、そのうち一斉に芽が吹くことだろう。

ガブリエルは戸惑っていた。

ルモンに言われたようにしてみたのだ。

メルグウエンの着ている新しい服を褒めてみたのだ。

メルグウエンは初めきよとんとし、それから噴出した。

「何か私にして欲しいことがあるのでしょうか？」

「いや、別に何もないが」

「この青い布はまだありますから、胴着を縫いますね」

「ああ」

どうやらメルグウエンは自分が同じ布で服を作っただけで欲しがっているとは勘違いしているようだ、ガブリエルは気付いたが何も言わなかった。

ルモンに話しかけられ、笑いながら答えているメルグウェンを眺めながらガブリエルは思った。

こいつは笑顔がいい。

見ている者の心を暖かくする笑顔だ。

二度と悲しい顔はさせたくないと思った。

俺は今までこいつをスクラエラの代わりと思ってきた。

妹として愛してきたのだ。

だが、女としても愛することはできるのだろうか？

メルグウェンは嬉しかった。

城に戻って来てから、ガブリエルを以前よりも身近に感じるようになっていた。

それに最近あまり私のことをからかわない。

その代わりに何だか色々と聞かれるようになった。

あんなことを調べて何をするつもりなのかしら？

他の人にも聞いているのだろうか？

ある夕方、メルグウエンは広間にいたルモンに、最近ガブリエルに食べ物の好みや好きな鳥を聞かれたかと尋ねてみた。

「いいえ。何か新しいゲームですか？」

「さあ、あの男の考えていることはさっぱり分からない」

そう首を傾げたメルグウエンにルモンは言った。

「だったら貴方も聞かれてみたらどうですか？」

あの男が北極星よりもアークツルスが好きかどうかなんて・・・

…知りたいような気もする。

つい最近、珍しく晴れた夜にメルグウエンが裏庭に立って星を眺めていると、側に来たガブリエルにそう聞かれたのだった。

赤い方が暖かそうで好きだとメルグウエンは答えたのだ。

「どうしてガブリエル様は、貴方の好みを知りたいのか」

だがそれらのことは全て一瞬のうちにメルグウエンの頭から消え去った。

翌朝まだ部屋にいるメルグウエンの所に、パドリックが熱を出してメルグウエンを求めていると侍女が呼びに来たのだ。

うつるかも知れないから、医師が診るまで側に行かない方が良いとアナが止めるのも聞かずに、メルグウエンは部屋を飛び出した。

パドリックは前の晩、珍しくお腹が空いてないと言って、夕食を食わずに寝に行ったのだった。

やっぱりあの時、何か暖かい物でも飲ませてやれば良かったとメルグウエンは悔やんだ。

パドリックは真っ赤な顔をして、熱に潤んだ目をしていたが、メルグウエンを見ると嬉しそうに笑った。

メルグウエンは、起き上がるうとしたパドリックを押し留めた。

「もう直ぐお医者さまが来られるから、それまで横になってなさい。何か欲しいものある？」

「喉渴いた」

メルグウエンが水を飲ませると、パドリックは大人しく横になった。

ぐったりとして息遣いが苦しそうだ。

メルグウエンは水に浸した布を絞ると、パドリックの焼けるように熱い額に乗せた。

召使に続いて入ってきた医師は背の低い太った男だった。

医師の服装と決まっている裏には白い毛皮がついた立派な赤い外套を着ている。

余程急かされたようで、額に流れる汗を拭きながらベッドに近寄った。

そして、せかせかとパドリックを診察すると言った。

「熱病ですね。熱が冷めるまで様子を見て、食事に注意してください」

医師は熱を冷ますと言われる冷たい食べ物次々と並べ立てた。

メルグウェンは不服そうにその様子を見ていた。

この季節に瓜も胡瓜もサラダもある訳ない。

どうしろと言っのだらう？

帰ろうとする医師を捕まえてメルグウェンは尋ねた。

「それで、何を食べさせれば良いのですか？」

「私が今言ったことを聞いておられなかったのですか？」

「今はお医者さまの仰った野菜はありません」

「では冷ました鶏のスープをあげてください」

「お薬は？」

「熱が下がるまでは薬は飲まない方が良いでしょう」

「その他に注意することはありますか？」

「ご容態が変化したら呼んでください」

そしてパドリックの部屋に薬草を燃すようにと言って、さっさと帰って行った。

とんでもない藪医者だわ。

召使に鶏のスープを作るよう頼んでから、メルグウエンはパドリックの側に戻ると、安心させるように微笑んだ。

「ゆっくり休んで早く良くなるのよ」

しかし、パドリックは中々良くならなかった。

数日すると熱は下がったのだが食欲が全然なく、スープ以外は食べようとしない。

そのうち枕から頭が上げられなくなり、一日中うつらうつらとして
いるようになった。

ふっくらと桃色だった頬もすっかりこけてしまった。

いつも好奇心に満ちて輝いていた目も光を失い、落ち窪んでしまっ
ている。

メルグウエンは心配でならなかった。

このまま衰弱していつて死んでしまうのではないか？

医師は熱は下がったのだからもう治る筈だと言い、血を採ろうとし
たのでメルグウエンは怒って部屋から追い出した。

その日も殆ど一日中パドリックの側で身体をさすってやっていたメ
ルグウエンだったが、夜になって自分のベッドに入ると不安で堪ら
なくなった。

起き上がると燭代に火を灯し、肌着の上に外套を羽織り部屋を出た。

暗い廊下を歩きながら、パドリックが夜中に城の中を徘徊するのを

とても好きだったのを思い出した。

一人で歩き回って怪我などしないように、メルグウエンはパドリックの夜の冒険に何度かついて行ったことがある。

その時、恐くないのかと尋ねたメルグウエンにパドリックは笑って答えたのだった。

「暗いと昼間と違う世界みたいで面白いよ」

メルグウエンは頑丈な木の扉の前に立って深呼吸した。

鍵がかかっているのかしら？

だが、力を入れて引くと扉は僅かに軋んで開いた。

メルグウエンは薄暗い部屋の中を見回した。

ベッドには誰もいないようだ。

扉が音をたてて閉まり、メルグウエンは飛び上がった。

ああ、びっくりした！

どこにいるのだろうか？

まだ広間にいるのかしら？

それとも、もしかして…

メルグウェンは嫌な思いを打ち消すように頭を振った。

広間に下りて行ってみようか？

メルグウェンがそう思って扉の方に行きかけた時、急に扉が開きガブリエルが入って来た。

メルグウェンを見てびっくりしたように立ち止まる。

「…随分と大胆だな」

メルグウェンは薄暗い部屋の中でも分かるように真っ赤になり、慌てて外套の前を掻き合わせた。

「勘違いしないでください！」

「俺の部屋で何をしている？」

「こんな時間にお部屋を訪ねるなんて非常識だと思っけど、お願いがあつて来ました」

ガブリエルは真面目な顔になり、メルグウェンに続きを話すよう促した。

「パドリック殿のことです。熱は下がったのに悪くなる一方だし、あの医者はいい加減なことばかり言っし、もう心配で心配で…」

メルグウェンは言葉に詰まり、涙をこぼした。

「お願いです。貴方の知っている魔女の住んでいる場所を教えてください。私が訪ねて行ってパドリック殿のために薬を貰って来ます」
ガブリエルはクツと笑いを漏らした。

「考えていることは一緒だな。夜が明け次第、ルモンと二人で行って来る」

メルグウエンはその時初めてガブリエルが鎖帷子を身に纏っていることに気がついた。

「8日後に絶対薬を持って帰ってくる。それまでパドリックのことをよろしく頼む」

涙を拭いたメルグウエンは、黙って頷いた。

数時間後、まだ夜が明けきらぬうちにガブリエルとルモンは旅立って行った。

二人を見送ったメルグウエンは自分の部屋に戻った。

これから、とても長い一週間となるだろう。

パドリックはガブリエル達が戻ってくるまで、はたして生きているのだろうか？

メルグウエンは自分の幼い兄弟のことを思った。

彼らの死が原因で気の病にかかってしまった母親の気持ちが分かる気がした。

メルグウエンはいても立つてもいられなくなり、パドリックの部屋に向った。

そっと部屋に入りベッドの側に座る。

パドリックは眠っているようだった。

ちゃんと息をしているのを確かめたメルグウエンは溜息をついた。

先程ガブリエルに言われたことが思い出された。

両親に知らせたのかと尋ねたメルグウエンにガブリエルは答えたのだった。

「パドリックの母親は妊婦だ。万が一熱病がうつつたりしてはまずいので見舞いに来ないように言っている」

「ではジョスリン様は？」

「兄上も同じだ。父上の城の跡継ぎが二人共病にかかったりしたら困るのだ」

「まだあんなに小さいのに一人で可哀想だわ」

「パドリックは大層おまえに懐いている」

「でも私は家族ではないわ」

「血が繋がっていないからか？あいつはおまえを本当の姉のように慕っているぞ」

「私もパドリック殿のことはとても好きよ」

そう言ったメルグウェンをガブリエルは優しく見下ろして言った。

「おまえがあいつの側にいてくれて良かった」

ガブリエルは馬に揺られながら思った。

もしパドリックのことさえなければ、この旅は楽しかったに違いない。

ここのところずっと城の仕事ばかりでくさくさしていたのだ。

潮風はまだ冷たかったが心地良かった。

「おい、少し駆けるぞ」

ガブリエルは後ろのルモンにそう叫ぶと馬の腹を蹴った。

できるだけ時間を稼ぐ為に、二人は夕方は足元が殆ど見えなくなるまで、そして朝は夜が明ける前から道を急いだ。

先週からの雨で道は少々泥濘んでいたが、危険という程ではなかった。

出発する前に見たパドリックの様子では、もうそう長くはもたない気がしたのだ。

どうしても8日以内に戻らなければならぬ。

ガブリエルは病気の子供と、その側に付き添っているだろう黒髪の娘に思いを馳せた。

あいつがパドリックの側にいなかったら、一週間も城を留守にすることは考えられなかっただろう。

信心深いとは決して言えないガブリエルだったが、今は神々に縋りたい気持ちだった。

どうか……

どうか、あの二人をお守りください。

俺達が戻るまで……

3日目の夕方、二人はガブリエルの叔父ルゲーンの城に着いた。

城主とその奥方は数年振りに会う甥を見て喜んだが、パドリックの話聞いて顔を曇らせた。

広間で食事を取りながら、ガブリエルが魔女のことを尋ねるとルゲーンは言った。

「ああ、あの女はずっとあの家に住んでいる」

「それは良かった。明朝、さっそく会いに行つてきます」

「だが、魔女なんかよりも、アランドルスから連れてきた医師の方が良いのではないか？」

ルゲーンは1年前からアランドルスで医学を学んだ医師を城に住ま

わせていたのだ。

「あれが調合した薬で、持病の神経痛が大分良くなった。少しの間
だっただら貸してやるぞ」

「叔父上、とても有難いのですが、パドリックの病には魔女の力の
方が効果があるような気がするのです」

「相変わらずおかしな奴だ。大人になっても変わらないな」

ルゲーンが呆れたように言った。

翌日、まだ暗いうちからガブリエルが広間に下りて行くと、暖炉の
側に座っていた少女が立ち上がり嬉しそうに挨拶をした。

ガブリエルの従妹のコラリーズである。

「すぐにお食事を準備しますね」

長く重たそうな金髪の三つ編みを背中に垂らしたコラリーズの後姿
を眺めながらガブリエルは思った。

俺が城にいた頃はまだ幼かったのに、女は成長が早いもんだ。

ガブリエルは食事をしながらメルグウエンのことを考えていた。

ずっと近くにいたから気付かなかったんだ。

あいつがもう子供ではないことを。

森でやっと見つけたとき、何故か以前よりもあいつを女らしく感じたのだ。

どうしてだろう？

髪は短くなってしまったというのに。

それに、とガブリエルはメルグウエンの潤んだ黒い瞳を思い浮かべた。

あいつは俺の前で涙を見せるようになった。

以前は意地を張って必死で我慢していた癖に。

ガブリエルは立ち上がると、自分の胸を押さえた。

最近何故か息苦しくなることが多い。

何なんだいったい？

パドリックの病がうつったのだろうか？

ガブリエルとルモンは城下町を出た。

領地から出る訳ではないので、二人共普段着に剣を帯びているだけで、鎖帷子は身に纏っていなかった。

朝靄の中、二人は畑沿いの道を馬で進んだ。

時折農家の近くを通ったが、人には会わなかった。

道の両脇には植物が生い茂るようになり、辺りは急に薄暗くなった。

ガブリエルとルモンは口を利かずに森の中を進んで行った。

やがて、農家のような造りの家の前でガブリエルは馬を止めて言った。

「ここだ」

青い粘板岩で葺かれた屋根はひしゃげており、分厚い石の壁には小さな窓がついていた。

煙突から一筋煙が流れ出ている。

馬を前庭に立っている木に繋ぐと、露に濡れた草を踏みしめて二人は家の方に向った。

古びた木の扉には動物の足のような物が沢山釘で打ち付けてあった。

鹿や猪だろうか？

すっかり干からびてしまっている。

「魔除けですかね」

ガブリエルは扉を開くと薄暗い家の中を覗いた。

「誰がいるのか？」

答えはなかった。

「留守でしょうか？」

「裏庭かも知れん」

二人が家を回って裏庭に行こうとした時、スルリと足元を掠めて走っていった動物がいた。

黒猫のように見えたが、イタチか何かかも知れなかった。

その後から背の高い、燃えるような髪をした女が近づいてきた。

濃い緑色の服を着て白い前掛けをつけている。

女はガブリエルとルモンの前で立ち止まると、二人をじろじろと順に見てニヤツと笑った。

そして歌うように言った。

「これはまた、美味そうな活きのいいのが2匹」

二人は顔を見合わせた。

「ジエノヴェファ」

ガブリエルが声をかけた。

「おや、馴染みかい？」

「俺を覚えているか？」

女はガブリエルの灰色の瞳を覗きこんだ。

ガブリエルは森の中の湖に引き込まれるような気がした。

ふと水面に波紋が広がったと思うと、女はからからと笑い声を立てた。

「小生意気な小姓殿ではないか。随分と育ったな」

「あんたは変わらないな」

ガブリエルも笑いながら答えた。

女の家に入り、ガブリエルとルモンは暖炉の前に座った。

ルモンは物珍しそうに部屋の中を眺めている。

天井の梁からそれは様々な物がぶら下がっていたのだ。

薬草の束、何か動物の干からびた死骸、羽とガラス玉で作った飾りのような物、木の皮、何かが入った大小の麻の袋……

ルモンはそれからジエノヴェファに視線を移した。

火の中に薬草を一掴み放り込んだ女は、暖炉の中に吊るしてある鉄鍋の中の物をしゃもじでかき混ぜている。

赤い縮れた髪の間に見えている顔は彫が深く美しかった。

どことなく威厳の備わったその風貌は女王を思わせる。

幾つぐらいなのだろうとルモンは思った。

ジエノヴェファは20歳とも40歳とも見えたのだ。

ガブリエルは、ジエノヴェファが鉄鍋で煮込んでいたスープを二人に勧め、両手を前掛けて拭いて二人の前に腰掛けるまで黙っていた。

「これは何ですか？」

スープの入った碗を受け取ったルモンが尋ねた。

「不老不死の靈藥さ」

「いや、魚のスープだろ？」

材料が何であるにしろ、こくがあつて美味しいスープだった。

ガブリエルは、空になった椀をテーブルに置くと話し始めた。

ウルローズの城主となった経緯を語り、城に幼い甥を預かっていることを説明した。

パドリックが数日前から病にかかつて臥せっていることを話すと、ジエノヴェファは言った。

「それで私が治すことができると思つたのかい？」

「ああ。俺はあんたの力を信じている」

「アランダルスの医者には信じないのか？」

「さあ？ 叔父上はとても効果があるようなことを言っていたが」

「いくら病を治しても、根源がなくならなければ意味がないのだ」

「病を引き起こした原因ということか？」

「そうだ」

ジェノヴェファは暫く考えていたが、ガブリエルを見ると言った。

「それで報酬は？」

「何が望みだ？」

「私には自分の知識を受け継がせる子がいない。だから、女の子が一人欲しい」

「欲しいって、攫ってくる訳にもいかんぞ？」

「自分の血を分けた子が欲しいのだ」

ガブリエルはジェノヴェファの緑色の瞳をじっと見つめた。

「それは無理だ。20年後に急に跡継ぎだなどと名乗り出られては困る」

「そのようなことは決してない。私は女の子を産むのだから」

「……それでもやっぱり、その話は受けられない」

ガブリエルがそう答えると、ジェノヴェファはせせら笑った。

「昔はもつと度胸があったのではないか？」

「度胸の問題ではない」

「ほほお、小姓殿も恋をする年頃になったか」

「俺はもう小姓ではないぞ」

「城主殿は大切な女がいるのだろう？ 悲しませたくないのだろう？」

「大事にしている女はいるが、恋人ではない」

「自覚していないという訳か。では聞くが、城主殿はその女を他の男に与えられるか？」

「そのつもりだったのだが」

「そうか？ 他の男がその女を抱き、口と口を合わせ、肌と肌を重ねても良いのか？」

ガタンと音をたててガブリエルは立ち上がった。

そして、平然と座っているジェノヴェファを上から睨みつけると言った。

「話を逸らすのは止める」

「報酬について話し合っていたのではないか」

ジェノヴェファはしやあしやあと答えた。

ガブリエルは苛立った声を上げた。

「時間がないのだ！！ こうやって話している間にもあいつは」

「ガブリエル様」

ルモンが遮った。

ルモンはジェノヴェファの方に向き直って言った。

「私ではガブリエル様の代わりにはなれないか？」

「おい、ルモン！」

「子供だけが欲しいと言うならそれでも良いが、貴方が受け入れてくれるなら、私は貴方を妻に迎えたい」

ガブリエルは口をあんどり開けてルモンを見ていた。

ジェノヴェファはルモンを観察するようにジロジロ見ている。

やっと話せるようになったガブリエルが慌てて言う。

「ルモン、俺の為に犠牲になる必要はないぞ」

ルモンはガブリエルの方は見ず、ジェノヴェファを見つめたまま言った。

「犠牲なんかじゃない。私は貴方を初めて見た瞬間、恋に落ちた」

ジェノヴェファはルモンを優しい目で見た。

「……良いだろう。城主殿の甥を診に行こう」

ルモンとガブリエルは目を輝かせた。

ジェノヴェファはそんな二人を見て言った。

「何故か、おまえたちは二人とも神秘的な力に守られているように感じるのだ。こういう力に逆らってはならぬ」

「神秘的な力だと？」

「ああ、霊の力か、妖精の力か」

「妖精の……」

ガブリエルは自分の首から月長石の首飾りを外した。

「もしかして、これのことか？」

その首飾りを手に取ったジェノヴェファは答えた。

「そうだ。城主殿はこの月長石に守られている。絶対外さない方が
良いだろう。だが」

ルモンの方を向いてジェノヴェファは頷いた。

「騎士殿は生まれながらにして、この力に守られているようだ。し
かし、結婚の申し込みについては考えさせて欲しい」

話が決まったのなら、すぐに出発したいと言ったガブリエルにジェ
ノヴェファは答えた。

「準備をするので2時間程、時間が欲しい。準備ができれば城に行
く」

ルモンと城に戻りながらガブリエルが聞いた。

「本当に妻にするつもりか？ あの女は俺が10歳の頃、既に大人
だった。いくら美人でも、俺達より10は年上だぞ」

「歳など関係ありません。彼女を見た瞬間、運命を感じたんですか
ら」

ガブリエルは溜息をついた。

「あの女に魔法をかけられてしまったのかも知れんな」

とにかく、これでワルローズに戻る。

一刻も早くパドリックの側に戻りたかった。

そしてパドリックを看病しているメルグウエンの許に。

メルグウエンはパドリックの手を摩りながら、必死に涙を耐えていた。

今までは話しかけると、それでも掠れた声で答えていたパドリックだったが、二日前からそうすることもなくなった。

ただ昏々と眠り続けている。

どうしたら良いのだろうか？

私は何ができるのだろうか？

メルグウエンは青白いパドリックの顔を見つめながら思った。

一日一日が何と長く感じるのだろうか。

あの男は約束どおり薬を持って帰ってくるのだろうか？

アナはパドリックにつきつきりのメルグウエンを心配し、少し外に出て良い空気を吸ってくるように勧めた。

薬草庭園に出たメルグウエンは、空を見上げて息を吸い込んだ。

春だ。

柔らかい日差しの中、植物はそれぞれ芽を出し、鳥は遠慮深い鳴き声を聞かせている。

そのうち一斉に賑やかになるだろう。

そこにパドリックがいらないなどと考えられない。

お願いです。

あの子を助けてください。

その為には何でもしますから。

堪え切れなかった涙が一滴メルグウエンの頬を転がり落ちた。

夕暮れ時に町に入ったガブリエル達は、辺りの異様な静けさに気がついた。

ガブリエルは不吉な思いがして、城までの道を急がせた。

跳ね橋を下ろす間、我慢できずに門番に訪ねたが、亡くなったという話は聞いていないとのことだった。

中庭には誰も出迎えていなかった。

ガブリエル達は馬から下りると、ルモンが馬を厩に連れて行く間、ガブリエルとジェノヴェファはパドリックの寝室を目指して走った。

階段を駆け上がり、扉を開くと、パドリックのベッド脇に跪いていたメルグウエンが驚いて振り向いた。

ジェノヴェファは、憔悴した顔に安堵の色を浮かべたメルグウェンをしげしげと見た。

「早くパドリックを診てやってくれ」

ジェノヴェファはパドリックに近寄ると、その額に手を当て、瞼を捲ったり、口の中を覗いたりした。

そして痩せ細った手首を取り脈を測る。

側に立ったメルグウェンは留守中のことをガブリエルに報告していた。

「……医者は何度診ても、もう治っていると云うのです。どう見てもパドリック殿は死にかけているというのに！」

ジェノヴェファは立ち上がると、ガブリエルの方を向いて言った。

「その医者のこともおながち間違っではおらぬ」

二人は驚いたようにジェノヴェファを見た。

ルモンがそつと部屋に入ってきて、ベッドの足元に立った。

「この子の体は癒えている。熱病は治っているのだ。だが心が病んでいて、それにより体が弱っているのだ」

「どづいつことだ？」

「人とは面倒な動物で心というものがある」

「……」

「この子は去年の夏からこの城で暮らしているのだったな？」

「ああ、そうだ」

「何故こんなに幼いうちに親と引き離れたのだ？」

「城主の跡取りとなれば、少年の頃から親元を離れ、騎士になるため修行を積むのは当たり前のことだ」

「それだけか？」

ガブリエルは唇を噛んだ。

確かに父親の城ではパドリックを持って余っていた。

パドリックは他の子供より2年ばかり早く親の城を出されたのだった。

「だが、俺もこいつと同じ歳で、手がかかり過ぎるという理由で叔父の許に送られた」

ジェノヴェファはガブリエルを哀れむような目で見た。

「いくら似ていても人は一人一人違うのだ」

パドリックは俺よりも繊細なのかも知れぬ。

それに、とガブリエルは思った。

俺には兄上がいた。

俺を肉親として愛し、庇ってくれる兄上が。

ガブリエルは眠っているパドリックの顔を見ながら言った。

「この城の者は皆パドリックを可愛がっていた」

ジエノヴェファは部屋にいる皆を見回しながら尋ねた。

「この子と特に親しかった者が最近死んだというようなことはなかったか？」

「いや」

「可愛がっていた動物などは？」

「それもない」

ジエノヴェファは溜息をつくと言った。

「では信じていた誰かに裏切られたのか」

ガブリエルは途方に暮れた顔をした。

その時、メルグウェンが叫び声を上げた。

そして、恐怖に見開いた目で皆を見回すと、口元を押さえて部屋を飛び出した。

明け方、パドリックの看病をルモンに交代してもらい、ガブリエルは自分の部屋に戻った。

あれからメルグウエンの顔を見ていない。

あの時、あいつは何か不吉な影でも見たのだろうか？

長柄の鎌を持ったアンカーでも見たのか？

ガブリエルは服を脱ごうとしていた手を止め考えた。

こんな時に眠れる筈がない。

あいつも眠ってはいないだろう。

あいつが何にあんなに怯えたのか確かめに行こう。

メルグウエンの部屋の前に立ったガブリエルは扉を叩いた。

暫くしてもう一度叩いたが答えはなかった。

扉を開けようとする、隣の部屋からアナが顔を出して、メルグウエンはパドリックの部屋に向かったことを告げた。

ガブリエルは足早にパドリックの部屋に戻った。

部屋の前で座りこんでいるルモンに気付いたガブリエルは、何をしているのかと尋ねようとしたが、ルモンは人差し指を口に当てガブリエルを黙らせた。

扉は僅かに開き光が漏れていた。

部屋の中からは誰かに話しかけている女の声が聞こえる。

ルモンはガブリエルに頷いて見せるとその場を後にした。

ガブリエルは壁に寄りかかると耳を澄ました。

初めはメルグウェンがジエノヴェファに話しているのかと思った。

「……………ごめんなさい……………自分のことしか考えていなかったの。もう二度と貴方の側を離れないことを誓うわ。貴方が騎士となるまでずっと一緒にいるわ。だから……………お願い……………目を覚まして頂戴……………」

メルグウェンが泣きながら謝っているのは、パドリックだと分かったガブリエルは愕然とした。

悲痛な泣き声を聞きながら、ガブリエルはじっと考え込んでいた。

やがて立ち上がる気配がして、足音が近づいてくるのを耳にしたガブリエルは蝋燭を吹き消し、息を止めて壁にぴったりと張り付いた。

部屋を出たメルグウェンは、ガブリエルに気付かず廊下を歩き去って行った。

足音が聞こえなくなるのを待って、ガブリエルは部屋に入った。

ベッドに近寄ると自分に良く似た子供の柔らかい髪に手をやった。

そしてパドリックの耳元に屈みこむと話し始めた。

「パドリック、メルグウエン姫があの時いなくなったのは、決しておまえの所為ではないぞ。あいつはおまえをとても愛している」

ガブリエルはパドリックの手を取った。

くったりとした小さな手。

叔父上、と元気なパドリックの声が聞こえる気がした。

ガブリエルはメルグウエンに任せきりで、もっとちゃんと面倒を見てやらなかったことを悔やんだ。

「あいつが城を逃げ出したのも、長い髪を切ったのも、全部俺の所為だ。俺があいつを悲しませたからだ。だが、おまえが死んだら、あいつは自分を責めるだろう。一生自分を許さないだろう。おまえが目覚ましたら、俺はもう二度とあいつを悲しませないと約束する。だからお願いだ、目を開らいてくれ」

ガブリエルはパドリックの顔を見つめた。

こんなに痩せちゃまって、可哀想に。

悪戯つぼく輝いていた瞳は閉ざされ、バラ色だった頬はこけて青白く、まるで石像のようだ。

急にガブリエルは恐ろしくなった。

こいつがこのまま死んじまったら、あいつは気が狂ってしまうのではないか？

「俺達は皆おまえのことを大事に思っている。家族もこの城の住人もだ。おまえがいなくなったら皆が悲しむ。絶対に死んでは駄目だ。まだおまえは全然人生を楽しんでいないだろうが。治ったらあいつと一緒に船に乗って父上達りに会いに行こう。だから早く目を覚ましてくれ！」

ぴくりとも動かないパドリックにガブリエルは段々腹が立ってきた。ドンとベッドの足を蹴っ飛ばす。

「おい、パドリック！ いい加減に目を覚ませ。おまえの所為で誰も仕事を手につかないだろうが！！ さっさと起きなければ、おまえのために作らせた剣もおまえのために買ってやった子馬も他のガキにくれちまうぞ！！！」

「ガブリエル様、何をなさっているのです?！」

ルモンが驚いて飛んできた。

「病気の子に怒鳴るなんて」

ルモンが非難するように見ると、ガブリエルは肩を竦め大股に部屋

を出て行った。

「本当に困ったお方だ」

力任せに閉じられた扉を見ながらルモンが呟いた。

「……僕の馬」

ベッドから聞こえてきた掠れた声にルモンは飛び上がった。

ガブリエル、メルグウエンとルモンに囲まれたパドリックは、ジェノヴェファに薬草を煎じた薬を飲まされていた。

やっこのことでパドリックがコップ一杯の薬を飲み干すと、ジェノヴェファは彼をベッドに横たえて言った。

「やれやれ、これで一安心だ。まだ油断は禁物だがね」

そして後ろに立っているメルグウエンを見て言った。

「2時間毎に私が作る薬を飲ませてやってくれ」

「はい」

「ずっと食事をしていなかったから今日はこれだけだ。明日からはもう少し腹に溜まる物をやれるだろう」

ジェノヴェファは大人しく聞いているメルグウエンをジロジロと見た。

メルグウエンの顔は泣きすぎた所為で斑になっていた。

黒い髪は何があったのか肩に届く程の長さもない。

だが、これが城主殿が恋している相手だろう。

メルグウエンはジェノヴェファに頭を下げた。

「パドリックを救ってくださってありがとうございます」

「私は別に何もしていないさ。聞けば城主殿が蹴っ飛ばして起こしたって言うじゃないか」

メルグウェンはびっくりした顔をして、パドリックの上に屈みこんで何か話しているガブリエルの方を見た。

メルグウェンが眉を顰めて何か言おうと口を開いたのでジェノヴェファが言った。

「まあ、いいじゃないか。その結果、こうして目が覚めたのだから」

ふん、気は強そうだが、優くていい娘じゃないか。

ジェノヴェファはルモンの側に行くと、ニヤリと笑ってその腕を取った。

「私たちは退散することによつ。どちらも水入らずということ」

メルグウェンがベッドの上に屈みこむと、ガブリエルの話を黙って聞いていたパドリックがメルグウェンを見た。

「……どうしたの？」

メルグウェンが泣いているのを見て、小さな声で心配そうに聞く。

「貴方が無事だったから、嬉しくて」

そう答えるにつっこり笑ったメルグウエンを見て、安心したようにパドリックは目を閉じた。

ガブリエルはメルグウエンに言った。

「俺が看ているから、おまえも少し眠りに行け。酷い顔だぞ」

頷いたメルグウエンはパドリックの額に接吻すると、扉に向った。

部屋を出る前に立ち止まり振り返ったメルグウエンは、何か言いたそうにした。

その様子を見ていたガブリエルは言った。

「こいつの病のことで、おまえが責任を感じることはない。全て俺が悪かったのだから」

メルグウエンがなおもじっと立っていると、ガブリエルは追い払うような仕草をした。

「ほら、さっさと行けよ。まるで猿みたいな顔しているぞ」

メルグウエンはガブリエルを睨みつけると走り去った。

ジエノヴェファが自由に台所を使うことをガブリエルが許可したため、料理長は不満だった。

初めて台所に足を踏み入れたジェノヴェファは、さながら自分のテリトリーを犯された動物のように、歯をむき出して鍋を抱えている料理長を見て大笑いした。

「私はあんたの鍋を盗ろうなんて思っちやいないよ。あの子一人の分を作るんだからこれで十分さ」

そう言っつて自分が持つて来た小さな鉄鍋を上げて見せたので、料理長も大人しくなった。

だが、魔女が妙な薬を自分の料理に入れたりしないように、ジェノヴェファの一挙一動を見張っていた。

城の台所では10人近くの料理人が働いている。

昼食の準備をするこの時間は大層賑やかだ。

料理長が見守る中、スープを作る者、魚を下ろす者、鳥に詰め物をする者、肉串を回す者、火に薪をくべる者、皆自分の受け持った仕事に一生懸命だ。

そして4人いる見習い達は、慌しく時には料理人に叱られながら、野菜を洗って剥き、鶏の羽を筆り、調理器具を洗い、床を掃き、料理人が仕事をしやすいように雑用をこなしていた。

ジェノヴェファを手伝うようにと言われたカドーは、鍋の周りをつろつろしている。

「これ、何ですか？」

恐る恐る鍋の中を覗きながら、そう聞いたカドーにジエノヴェファが答える。

「精力剤さ。おまえさんも飲むかい？」

カドーは顔を赤くして、エンドウ豆を剥いているヌエラの方をチラチラ見ながら言った。

「えっ、いいんですか？」

椀に入ったどろっとした薬を飲み干したカドーは、うわぁ苦いと顔を顰めた。

「何が入っているのですか？」

ジエノヴェファは考える振りをして指を折った。

「蛇の皮に蜥蜴の尻尾だろ。それから蝙蝠の爪に鶯の糞。新月の夜に生まれた雄牛の睾丸に鶏の鶏冠に……」

カドーは真っ青になると口を押さえて台所を飛び出して行った。

ジエノヴェファと一緒にカドーの慌て振りを笑っていたヌエラが尋ねた。

「本当にそんな物が入っているの？」

「いや、大麦の粥に薬草を入れただけさ」

パドリックはゆっくりと、だが確実に回復に向っていた。

しかし、ベッドに座れるようになるまで一週間もかかり、立ち上がれるようになるまで更に二週間かった。

そして赤ん坊のように一から歩くことを覚えなければならなかった。

その間、メルグウエンはまるで親鳥のようにパドリックに付き添い見守っていた。

パドリックが苦い薬を飲むのを嫌がって泣いた時も、自分の体が思うように動かず癩癩を起こした時も、辛抱強く宥め賺して薬を飲ませ、練習を続けさせた。

ガブリエルも出来る限り時間をつくり甥の様子を見に来た。

メルグウエンについてパドリックが歩く様が肥えた家鴨の親子のようだと笑ったので、メルグウエンはムツとしたが、パドリックは喜んでガアガア騒ぎながら歩いた。

元のように庭を駆け回れるようになったのは、緑に染まった麦畑に真っ赤な芥子の花が鮮やかに映える頃であった。

パドリックが元気になると、ガブリエルは度々自分と一緒に領地の見回りに連れて行くようになった。

ワルローズ規模の町では、領主が自ら領地を見回ることは稀ではな

かったのだ。

メルグウエンも出来るだけ一緒に行った。

ガブリエルは自分が城壁や税関所、港や麦畑を巡回する間、パドリツクに簡単だが時間のかかる仕事を与えた。

そうすれば悪戯を思いつく暇がないからだ。

だがパドリツクは大人の仲間入りを許してもらったと思い、嬉々として銅貨を仕分けて数えたり、城壁に使われている石の数を数えたりしていた。

また、ガブリエルはメルグウエンと一緒にいる時には、彼女に書記の仕事させた。

農作物の貢納や、レジンカ河の通行税等の記録を取りながら、メルグウエンは領地のことを知っていた。

メルグウエンは幸福だった。

色々な場所を見て歩くのも楽しかったし、一日中ガブリエルの側にいることができた。

それに前よりも自然に話せるようになったことが嬉しかった。

メルグウエンが分からないことを尋ねると、ガブリエルは馬鹿にしたりせずに丁寧に説明してくれた。

初めは笑われるのではないか、煩く思われるのではないかとビクビ

クしながら質問していたメルグウエンも、思ったことを自由に口にするようになった。

羊皮紙の上に屈みこんでいたメルグウエンがふと顔を上げると、ガブリエルが自分をじっと見つめていることがあった。

そんな時、メルグウエンは頬を染め慌てて書類に視線を戻したが、暫くすると目を上げガブリエルがもう自分の方を見ていないことを確認すると、そつと息を吐くのであった。

ワルローズには、レジンカ河の税関所を間に挟み海側と河側に港が二つあった。

河口の港は川辺に荷捌き地を整備したものであり、数十艘の帆船や小船を停めることができた。

主に商いに使われる活気溢れる港だ。

海に面した港は古代からあったもので、石を積んだ堤防に囲まれていた。

こちらを利用するのは漁船が多かった。

また堤防は北の国からの侵略を防ぐための城壁としての役割も果たしていた。

ある日の午後、ガブリエルは建築家と数人の騎士を伴って堤防を見回っていた。

パドリックと手を繋いで堤防の上を歩きながら、メルグウエンが船に乗りたいたと言うと、前を歩いてきたガブリエルが振り返って言った。

「秋になったら、船で父の城にパドリックを連れて行くことを約束している。こいつに弟か妹が生まれるのでな。その時、おまえも一緒に来たら良い」

「はい」

そう答えたメルグウエンだったが、夕日の中、港に戻ってくる漁船を眺めながら考えていた。

でも、この男は私のことを何てご両親に紹介するのかしら？

私の素性が分かったら、父上の城に戻るようにと言われてしまうのではないかしら？

建築家の話に相槌を打ちながら、ガブリエルは少し離れたところにいるメルグウエン達を見ていた。

パドリックと一緒に堤防に腰を下ろしたメルグウエンは、夕日に顔を染めて次から次にと港に入ってくる船に手を振っている。

嬉しそうなパドリックの笑い声が風に乗って届いた。

ガブリエルは胸の中が暖かくなった。

あの二人にはずっと今のように笑っていて欲しい。

最近ふと気がつく、知らぬうちにメルグウエンのことを考えていた自分がある。

病気が治ったパドリックの面倒を以前よりもちろんと見てやりたいと思った。

だが、俺はあいつもついて来ると分かっているから、こんなに頻繁にパドリックを連れ出しているのではないか？

仕事をさせるのも、その間気付かれずにあいつを眺めていられるからではないのか？

真面目な顔をして、羊皮紙に驚ペンを走らすあいつを見ているのは楽しい。

けれども、黒い艶やかな髪から覗く小さな耳や、長い睫が影を作る丸みを帯びた頬を見ていると何故か胸が苦しくなるんだ。

じっと見つめていると俺の視線を感じたのか、あいつは顔を上げて、俺と目が合うと真っ赤になっっておろおろしだす。

俺はどうしようもなくあいつを抱き締めたくなくて、気取られないようにそっぽを向く。

大体パドリックが病気だった時も、勿論パドリックのことは心配だったが、俺はそれ以上にあいつのことを心配していたのではなかったか？

魔女の奴は俺があいつに恋しているよつなことを言っていたけど、
そうなのだろうか？

ある日差しの強い夏の午後、メルグウエンはラウドを持って庭に出た。

久し振りに一人だ。

パドリックは他の小姓達と武芸の稽古中だった。

弩の稽古の時は、間違ってパドリックに矢が当たるのではないかと心配だったメルグウエンも一緒にいたのだが、剣術の稽古は剣術指南のコンウォールに任せることにした。

からりと晴れた夏の空は、雲ひとつなく青く澄んでいた。

メルグウエンは薬草庭園を横切ると、足取りも軽く林に向かって歩いて行った。

午後には日陰になる、柔らかい草が生えた場所があるのを知っていたのだ。

だが、林に入った途端、メルグウエンは驚いて立ち止まった。

先客がいたのだ。

それは、固く抱き合っている男女だった。

メルグウエンに背を向けている女の方は、その特徴ある髪ですぐに誰だか分かった。

しかし、男の方が誰なのか気付いたメルグウエンは目を丸くした。すぐにその場を離れるつもりだったのだが、その場面の美しさにメルグウエンは暫し見とれていた。

柔らかく降りそそぐ木漏れ日、辺りの緑に映える女の赤い髪、そしてその豊かな髪を梳り愛撫する逞しい男の手。

ふと、男の首に腕を巻きつけて接吻していた女が振り向いた。

メルグウエンは真つ赤な顔で慌てて頭を下げる。

「ごめんなさい！ 邪魔するつもりはなかったの」

そして楽器を抱えたまま走り去っていった。

ジエノヴェファは低い笑い声を漏らした。

「お姫様には、ちよいとばかり刺激が強かったかねえ」

男の色褪せた髪を撫でながら、思案するように言った。

「城主殿もさつさとモノにしてしまえば良いのに。なにを迷っているんだか。男女の仲は葡萄酒と同じで、あまり放っておくと酔になるぞ」

ガブリエルは窓から中庭を見下ろしていた。

彼はジェノヴェファに腹を立てていた。

勝手なことばかり言いやがって。

自分でもはつきりと自覚していなかった気持ちを書き当てられたのも癪に障ったし、先程すれ違った時に気になることを言われたのだ。

「あまり焦らしていると他の男に搔っ攫われるぞ。隙を狙っているのは一人じゃないようだしな」

以前ルモンからも、メルグウェンを妻にしたがっている騎士が数人いるというのは聞いていた。

そのうちの一人はモルガドだろう。

俺は阿呆のように本人に尋ねたのだから。

ガブリエルは眉を顰めた。

目の下ではメルグウェンがモルガドとパバーンと楽しそうに話している。

パバーンはともかく、モルガドは女に好まれる風貌をしているのではないか？

彼の短く刈った鳶色の髪や浅黒い肌を見ながら、ガブリエルはそう思った。

それに奴の何でもはつきりさせないと気がすまない性格は、時には

鬱陶しいが心根が分かっていいのかも知れぬ。

とにかく奴は忠実で勇敢な男だ。

話も上手いしユーモアもある。

モルガドが何かを言い、メルグウェンが嬉しそうに笑うのを見たガブリエルは、舌打ちすると窓際を離れた。

これが簡単なことだったら、俺だってさっさと言い寄ってるわ。

ある夜メルグウェンは、部屋を訪ねてきたジェノヴェファを訝りながらも迎え入れた。

月の美しい夜で、灯りがなくても部屋の中は煌々と明るかった。

メルグウェンの勧める椅子に腰掛けたジェノヴェファは口を開いた。

「別れの挨拶に来た。明日の朝早く、ここを発つ」

メルグウェンはびっくりした。

この前、ジェノヴェファがルモンと一緒にいる所を見て、これからずっと彼女はワルローズに残ると思っていたのだ。

これでパドリックや他の者が病にかかっても安心だと喜んでいたので。

「ルモンと一緒に？」

おずおずと尋ねたメルグウエンにジェノヴェファはくすつと笑った。

そして愛しそうに自分の腹を撫でながら言った。

「念願の子も授かったし、そろそろ自分の巣に戻る頃だ」

それではルモンもいなくなってしまうのか。

とつても寂しくなるけど、とメルグウエンは思った。

ルモンには幸せになって欲しい。

物思いに沈んでいるメルグウエンを暫く眺めていたジェノヴェファが言った。

「騎士殿に求婚されたが、断った」

メルグウエンはハツと顔を上げた。

「騎士殿ってルモンのことよね？」

「ああ」

「何故なの？」

「二人の利害が一致しなかったとでも言うておこうか」

メルグウエンは思わず立ち上がり、ジェノヴェファに向かって叫んでいた。

「貴方はルモンを愛しているのではないの？ いくらパドリックの命の恩人だからって、ルモンを傷付けたら私は許さない！」

ジェノヴェファは椅子に座ったままそんなメルグウエンを見ていたが、ふと厳しい顔をすると言った。

「これは騎士殿と私の問題だ。そして二人の間ではもう話はない。今更あんたがどうこう言ったからって変わらない」

メルグウエンは怯んだが、それでも言い募った。

「赤ちゃんがいるんでしょう？ その子には父親が必要だとは思わないの？」

「父親はいる」

「でも一緒に暮らさないのでしょうか？ 家族とは言えないじゃない」

「あなたは人のことを心配する前に自分のことを考えたらどうだい？」

「え？」

「あんたの城主様だよ。さっさと捕まえとかないと、フラフラとどっかに行っちまうよ」

メルグウエンは真っ赤になった。

何だってこの女はそれを知っているのだろうか？

「それこそ余計なお世話です！」

ジエノヴェファは笑いながら立ち上がった。

「これから先、辛いことがあっても絶対に挫けてはいけないよ。まあ、あんたの性格だったら大丈夫だろうけど。頑張りな、あんたは幸せになれるよ」

メルグウエンはジエノヴェファの手を取った。

「達者で良い子を産んでね」

「ああ。ルモンは年に一度私達に会いに来ると言っているから、あんたが奥方になったら一度一緒に来たらいい」

「そしたらもう一生会えないかも知れないわね」

二人は微笑み合った。

「未来は神のみぞ知るさ」

翌日、夜明けと共にジェノヴェファはルモンに付き添われて旅立って行った。

メルグウエンは塔に登り町を出て行く二人を見送った。

朝、広間でルモンと話したことが思い出された。

いつもどおりにベンチに座ってパンを齧っているルモンに尋ねたのだ。

「ルモン、貴方はこれで平気なの？」

ルモンはパンの固まりをゆっくりと咀嚼し飲み込むと、横に立っているメルグウエンを見た。

「……ええ。これから毎年夏が来るのが待ち遠しくなりますよ」

「何故一緒に行かないの？」

「私の居場所はワルローズにあります。いつの日にか、年老いて役立たずになつたら森で暮らしますよ」

「でも、貴方は彼女を愛しているのでしょうか？」

「はい。だけど姫がそんな顔をなさることはありませんよ。私は自分を不幸だと思つていませんから」

「本当？」

「ええ」

そう答えたルモンはどことなく悲しそうな目をしていたが、同時にさっぱりしたような顔だった。

メルグウエンは遠くに広がる海を見ながら深い溜息をついた。

「何をしている？」

急に後ろから声をかけられたメルグウエンは驚いて振り向いた。

ゆっくりと近づいてきて自分と並んで立ったガブリエルを見上げて言った。

「ルモンのことを考えていました」

「あいつは強情っぱりだ。送ったついでに向こうで一緒に暮らせと

言ったのだが、耳をかそうとせぬ。せめて子が生まれるまで側にいてやれば良いものを」

「ルモンは自分は不幸ではないと言っていたけど」

「二人が一緒にいた方が幸せだったと思うか？」

「ええ」

ガブリエルは優しい目でメルグウェンを見下ろした。

「だったらおまえはそういう男を選べ」

メルグウェンは黙って頷くと、悲しげな顔をして海の方を向いた。

ガブリエルは何か言いたそうに、暫くメルグウェンを見つめていたが、開きかけた口を閉じ頭を振ると言った。

「暫く城を留守にする。戻ったら俺の話聞いてくれるか？」

二人の視線が絡み合う。

明るい灰色の瞳に見つめられて、メルグウェンは自分の鼓動が早まるのを感じた。

「はい」

メルグウェンは、自分の心の中を見透かされるような気がして慌てて目を逸らした。

その話が自分にとって重要なことであると感じた。

ただ、それがはたして自分にとって喜ばしいことなのか、悲しむべきことなのかは分からなかった。

ジエノヴェファとルモンが去り、数日後にはガブリエルもドグメルとマロを連れて旅立ったため、城は一気に寂しくなった。

その年は天候が良かったお蔭で、果樹園では李や杏が大量に採れた。メルグウエンとパドリックは、女達がジャムや砂糖漬けを作るのを手伝った。

アナに教えてもらって、果物を？いで洗い、種を取り、裏庭に焚かれた焚き火の上の大きな鉄鍋に放り込んでいく。

メルグウエンはパドリックが生の実を食べすぎて腹を壊さぬように見張っていた。

「パドリック、もう終わりにしないとお腹が痛くなるわよ」

「うん、後ひとつだけ」

「さっきもそう言ったじゃない。本当に後ひとつだけよ」

「うん。じゃあ、その大きい頂戴」

山のようにあった果物がやっとなくなり、メルグウエン達はふやけた手を洗った。

パドリックは指先が李色に染まったと喜んでいる。

やがて鍋の中から沸々と音がして甘酸っぱい良い匂いが漂ってきて、パドリックは涎が垂れそうな顔をした。

出来たジャムや砂糖漬けは瓶に入れて食糧貯蔵室に保存する。

冬の間も城では果物が食べられるのだ。

2週間経つてもルモンもガブリエルも帰って来なかった。

そしてキリルの城からは、ガブリエルは更に3週間ほど留守にすることを伝えてきた。

その時初めてガブリエルが父親の城に行ったことを知ったメルグウエンは、何の用事だと不安になったが、アナや騎士達に尋ねても知らないと言われてしまった。

その日は朝から晴れていて、家具に閉まってあった敷布を虫干しするのにな女達は忙しかった。

メルグウエンも自分が刺繍した敷布を広げて、木の間に張ってある紐にかけた。

風にはためく布を見ながらメルグウエンは甘酸っぱい気持ちになるのを避けられなかった。

使われることはないだろうけど。

一針一針心を込めて縫ったのだ。

あの男を想いながら。

溜息をつき、空の籠を抱えて城の方に歩き始めたメルグウェンは、後ろから聞こえてきた侍女達のおしゃべりに思わず足を止めた。

メルグウェンが立っている場所からは彼女達の姿は見えなかったが、断片的に会話が聞こえてきた。

「……では、ご結婚の許可をもらいに」

「お相手は……」

「……この前のようなことにならぬよう……」

「それで、向こうのお城で……」

「……じゃあ、お戻りになる時は奥方とご一緒かも知れないわね」

メルグウェンは最後の言葉を聞くと、自分の部屋に走って戻った。

籠を片隅に置くと、ゆっくりと窓辺に近づいた。

とうとうその時が来てしまったのだ。

この城に戻って来てから、いつかはこうなることが分かっていた。

この幸福は長続きしないことは分かっていた筈なのに、それが現実となってしまつとこんなにも辛い。

鉄の固まりを飲み込んだように胸が苦しく、深呼吸をしても良くはならなかった。

あの時、ルモン達を見送った日、あの男が言っていた話とはこのことだったのだろうか。

また私に邪魔されないように、父親の城で結婚することにしたのね？

私に話したらまた何かされると思ったのだろうか？

メルグウェンは自分の胸の中にガブリエルに対する怒りが静かに燃え上がるのを感じた。

確かに私は自分の気持ちをはっきりとあの男に伝えていない。

だけど、あの男が気付いていなかった訳がない。

大体、こうして隠れて結婚しようとすることからして、それは明らかだ。

あまりにも酷いではないか！

戻ってから話を聞いて欲しいですって？

冗談じゃない、そんな話なんか聞きたくないわ！！！！

あの男が自由でなくなる前に決着をつけてやるわ。

メルグウエンはアナを説得にかかった。

「アナ、お願いよ。絶対に10日間で戻ってくるから」

「ガブリエル様に分かったら私が叱られます」

「分かりやしないわ。あの男は留守じゃないの。あの男が戻ってくる頃には、ここに澄まして座っているわ」

「でも、どこに行かれるのです」

「それは言えない。一人で行っては駄目というなら、イアンについて来てもらうから」

アナは溜息をついた。

一生のお願いだと言って手を合わせて頼むメルグウエン。

できればその願いを叶えてあげたかった。

けど、もし姫の身に何かあったら……

アナは悩んだ。

メルグウエン様は律儀なお方だ。

10日で戻ると言ったら、絶対に戻ってこられるだろう。

姫を信じよう。

そう決心したアナは、翌朝メルグウェンに言った。

「分かりました。10日間だけ私も目を瞑りましょう。けれども、護衛はイアンだけでは不安なので、モルガド様にも頼みました」

メルグウェンは目を輝かせた。

「ありがとう、アナ。ちゃんと戻ってくるから」

ガブリエルの結婚の噂はアナの耳にも届いていたのだ。

キリルの城に勤めている従兄弟の結婚式に行った料理人が、戻ってきて仲の良い侍女に話したようだった。

できればメルグウェンには聞かせたくなかったのだが、どこかで聞いてしまったらしい。

多分姫はガブリエル様に自分の気持ちをお伝えに行かれるのでしよう。

アナはメルグウェンが悲しむだろうと思って心を痛めた。

失恋した心を癒せるのは新しい恋しかないと言われている。

モルガド様だったら姫の傷付いた心を癒してあげられるのではないかしら？

ガブリエルは父親の力を借りようと思い、キリルの城に向ったのであった。

貴族同士の婚姻は王の許可が必要だ。

そしてメルグウエンは、いくらエルギーエーンの山奥から出て来たとしても貴族の娘だった。

問題はメルグウエンの父親が娘を攫われたとして王に訴えていることだった。

ガブリエルはキリルから上手い具合に王に話をしてもらえれば、メルグウエンの家族が納得するような方法が見つかるのではないかと考えていた。

だが、キリルはガブリエルがマギユスの城主の娘との縁談をふいにしたことを大層不満に思っており、息子の話を聞いて良い顔はしなかった。

ガブリエルは辛辣な言葉を吐く父親を、初めは根気良く説得しようとした。

だが元々互いに短気な性格のことでもあって、話しているうちに段々声が高くなり、最後は言い争いになってしまった。

「父上が協力してくださらないなら仕方がない。私は自分で首都に赴き王に許可を貰って来ます!!」

捨て台詞を残し、ガブリエルはさっさと首都へと発ってしまったのだった。

それから既に2週間が経とうとしていた。

ガブリエルに心の中を打ち明けられていたジョスリンは、弟の留守の間に父の許しを得てやろうと必死だった。

初めてワルローズに行った時、ジョスリンは弟がバザーンから連れ帰り大事にしているという姫に興味をそそられた。

ガブリエルが妹の死に責任を感じているのは知っていた。

だから妹と同じ位の歳の娘を戦場に放っておけなかったのも頷けた。

だがメルグウエンを見たときジョスリンは、ガブリエルが彼女に対して、妹以上の気持ちを持っているのではないかと疑ったのだ。

ジョスリンはこの地方では珍しい黒髪黒目の美しい姫に好意を抱いた。

彼女は貴族の娘らしく淑やかに見えたが、弟の話によると喧嘩っ早くて剣を持たせれば男でも敵う者はそう多くないだろうとのことだった。

とても美しい目をしているとジョスリンは思った。

その表情豊かな大きな瞳は、隠し事などできないように思えた。

反対に何か疚しいことがある者がこの目に見つめられたら、さぞかし居心地悪く感じるだろう。

ジヨスリンは父親に、メルグウエンが年の割りにしつかりとした美しい姫であること、パドリックが彼女にとっても懐いていて、まるで血の繋がった姉のように慕っていることを熱心に説いた。

「メルグウエン姫だったら、ガブリエルが戦に向う時も、別の理由で城を留守にする時も安心して城を任せられるでしょう。ワルローズ城の住人は皆彼女をとても大切に思っていることが感じられましたし、アナもまるでスクラエラにしていたように彼女に仕えていました」

「だが何故あいつは、そんな娘がいるのにマギユスからの話を受けたのだ？」

「その時は、まだそのように考えていなかったのでは？ ガビックは自分の気持ちに気づいたのは、つい最近だと言っていましたから」

「子でもできたのだろうか？」

「いや、それはないでしょう。ずっと、妹の代わりと思っていたそうですから」

「我が子ながらあいつのことは理解できぬ。せつかくの良縁を断り、何故わざわざ面倒な結婚を望むのだろう」

「愛ではないですか？」

「結婚は家と家の問題であると、あいつはあの歳になっても分らないのか」

「家とは関係なく城主になってしまったガビックですからね」

メルグウエンはパドリックを庭の隅に連れて行った。

「秘密つてなあに？」

パドリックが好奇心に目を輝かせて尋ねる。

「絶対に誰にも言っては駄目よ」

パドリックは手のひらをメルグウエンの方に向け、厳かに誓った。

「木の籬、鉄の籬、破ったら啄木鳥に突つかれ、狼に八つ裂きにされ、井戸に放り込まれ、天の火に焼かれるぞ」

「狼に八つ裂きにされちゃったら、もうどうされても構わないと思うんだけど」

メルグウエンはパドリックの目線に屈むと、ガブリエルそっくりの青みがかった灰色の瞳を覗き込んだ。

「あのね。人の体の中には心というものがあるの知ってる？」

「うん。物語の中で王子様がお姫様に私の心を貴方に捧げますって

「言つめれでしょ？」

「そう、その心よ」

「でも、どこから出すの？」

「出せないのよ。でも誰かをとても好きになると自然に心がその人のところに行ってしまうんだと思うわ」

パドリックは分かったような分からないような顔をした。

「それで、私の心なんだけど、うっかりしていて誰かに盗られちゃったの」

パドリックはびっくりした。

「誰に盗られたの？ 心を盗むなんて人間じゃないよね？ 僕、叔父上に言つてそいつを捕まえてもらつよ！」

「私が自分で取り返しに行かないと駄目なのよ」

「それって危険なの？ 僕も一緒に行つていい？」

「一人で行かないと駄目なの」

パドリックががっかりした顔をしたので、メルグウエンは慌てて言った。

「だけど帰ってきたら全部貴方に話してあげるわ」

「うん。その魔物を退治したら、そいつの目玉を持ってきてくれる？」

「目玉は無理かもしれないけど。でも何か証拠を持ってきてあげるわ」

「歯でも指でも何でもいいや」

「だから私がどこに行ったか誰にも言わないのよ」

「うん、分かった」

パドリックは真面目な顔をして頷いた。

翌日まだ明るくなる前にメルグウエンは、モルガドとイアンに付き添われて城を発った。

アナ以外は彼らがどこに向ったのか知らない。

メルグウエンは、もう二度としないだろうと思っていた小姓の格好をしていた。

メルグウエンはある計画を立てていた。

上手くいく保証はない。

でも試してみなければ何とも言えないわ。

メルグウエンは馬の上で頭を反らすと不敵な笑いを漏らした。

あの男に思っていることを全部言ってやるわ。

その後どうするかはまだ決めていなかった。

前回のようには逃げ出すつもりはなかった。

先のこと考えてくよくよしたって仕方がない。

その時になったら考えればいいわ。

モルガドとイアンは、メルグウエンがキリルの城に向うのだと言っ

ても何も言わなかった。

メルグウエンは、個人的なことで二人に迷惑をかけるので、申し訳なく思い謝ったが、二人は前回のように一人で城を抜け出して危険な目に遭われるよりはずっとましだと笑った。

久し振りに城を抜け出して旅するのは楽しかった。

天気にも恵まれ旅は順調に進み、3日目の午後、3人はキリルの城に着いた。

メルグウエンは、モルガドとイアンとは町に入る前に別れるつもりだった。

「ここからは一人で行くわ」

「もし姫に何かあつたら、ガブリエル様に俺達が殺されちまいます。無事に城に入られるまでお側にいますよ」

城下町に足を踏み入れたメルグウエンの第一印象は、清潔な町だということだった。

大聖堂のある広場を中心に放射状に広がる道は石畳で舗装され、その両脇には行儀良く、しかし高さや色はばらばらのハーフトインバ―の建物が並んでいた。

心なしか、擦れ違う人々の身なりも他の町と比べて上等に見える。

多くの商人や旅人が訪れる町なのだろう、旅人の格好をした3人を気に留める者はいない。

石畳に蹄の音を轟かし町を通り抜けた一行は、城壁に沿って進み、とうとう城に到着した。

メルグウエンは城の壮大さに驚き気後れがした。

だが、ここで怖気づいてしまっただけはどうしようもない。

メルグウエンは馬を降り、二人に頷いて見せると、城門に向かって歩いていった。

門番に用事を聞かれたメルグウエンは澄まして答えた。

「キリル様のご子息に仕事に困ったら城に来るが良いと言われて来ました」

門番は煤で汚したメルグウエンの顔をじろじろ見たが、怪しい者ではないと思っただけらしい。

跳ね橋を下ろしてくれた。

メルグウエンはドキドキしながら門を潜った。

さて、これからどうしよう？

メルグウエンは知っている顔にあっただら困るし、怪しまれてもいけ

ないので、さつさと台所と思われる方に歩いて行った。

中庭を横切り石の建物の入口に向ったメルグウエンは、飛び出してきた子供にぶつかりそうになった。

驚いたメルグウエンが脇に避けると、子供の後から真っ赤な顔をした髭面の太った親父が走ってきて子供の首根っこを捕まえたと思うといきなり殴りつけた。

「この泥棒猫め！ 性悪のがきめ！ 消えて失せる！！ 俺の台所に二度とその汚い面を見せるんじゃない！！！」

メルグウエンに止める暇も与えずに子供は走り去った。

赤い上着に白い前掛けをした男は怒りが治まらないようで、子供が消えた方を見ながら、ブツブツ文句をたれていた。

「不憫な子だと聞いて雇ってやったらとんでもない怠け者だ。おまけに摘み食いをしゃがって。テクル様の台所を何だと思っていやがる。あの馬鹿者が……」

男は肩を竦めると台所の方に向き直ったが、その時入口の横にいるメルグウエンに気がついた。

「何の用だ？」

「ケランドアレ村のグウエネックと言います。ここで雇ってください」

男は片手で顎鬚を扱きながら、頭を下げたメルグウエンの頭の天辺

から爪先までジロジロと眺め回した。

メルグウエンは不安になった。

ここ数年でギドゴアル地方の方言は大分話せるようになったが、訛りがあるのかも知れない。

それとも私の格好が何かおかしいのだろうか？

胸にはきつちりと布を巻いたから、女には見えないと思うのだけど。

「歳は？」

「16歳です」

「16と言えばもう一人前の男だ。おまえは随分痩せっぽちな」

「真面目に働きます！絶対に摘み食いなんかしません！」

「ああ、さっきの聞いていたのか？ まあ、あのガキもいなくなつたことだし、人手は必要だしな」

メルグウエンは考え込んだ男を心配そうに見つめた。

男は大きく頷くと、メルグウエンの肩をドンとばかり叩いたので、メルグウエンはもう少しでひっくり返りそうになった。

「いいだろう。俺は料理長のテクルだ。おまえはグウエネックとか言つたな？ ちつとでもさぼつたらあのガキのように追い出すからな」

「ありがとうございます。一生懸命働きます」

「お手並み拝見といこうじゃないか。では、さっさと仕事にかかれ」
さて、とメルグウエンは考えた。

これで無事に城に入り込めた。

そして当分食べる物や、寝る場所には困らなそうだ。

ガブリエルはイライラしていた。

既に首都に着いてから1週間以上経っているにも拘らず、何も片付いていなかった。

王はワルローズの城主を快く迎えた。

しかし、ガブリエルの願いを聞いた王は、すぐには答えてくれなかったのだ。

王侯の豪華な宮廷生活は、ガブリエルの好みにあつたものではなかった。

狩猟は宮廷風の作法が窮屈だったが、まだよかった。

宮廷での会話は噂話か世辞の言い合いが主なもので、ガブリエルはうんざりしていた。

田舎者と思われても構わぬと愛想のないガブリエルだったが、女達は若く見た目の良い男を放つてはおかず、物憂い騎士様などと呼んで近づいて来る。

その日も延々と続く食事の後に着飾った女達と踊らされ、いい加減嫌になったガブリエルは気分が優れないとの口実で王宮を抜け出した。

泊まっている宿屋に戻り、広間で酒を2杯程煽るとさっさと寢床に

引き上げる。

ベッドに横になり目を閉じると、メルグウエンの花のような笑顔が浮かんだ。

それはガブリエルにとって、宮廷の洗練された女達よりもずっと愛らしく思われた。

艶やかな黒い髪、綺麗な弓形を描いた眉、大きな黒い瞳、小さいが形の良い鼻、柔らかかそうな桃色の頬、ほっそりした首、小さな可愛らしい白い耳、柔らかい微笑を湛えたふっくらした唇……

一つ一つ大切に心の中に描きながら、ガブリエルは闇の中で笑みを浮かべた。

あいつの笑っている顔も、怒っている顔も、つんと澄ました顔も、驚いた顔も、真面目な顔も全て愛しい。

けれども、涙をいっぱい溜めた黒い瞳や、悲しそうに伏せられた長い睫を思い出したガブリエルは深い溜息をついた。

他の男と結婚させてやろうなどと考えていた俺は大馬鹿者だ。

森で見つけた時、自分がしたように、他の男がメルグウエンを抱き締めると想像しただけでも気が狂いそうになる。

俺がこんな所で足止め喰っている間に他の男に求婚されてしまうのではないか？

ドグメールではなく、モルガドと一緒に連れて来るのだったとガブ

リエルは後悔した。

あいつの気持ちはルモンから聞いただけで、確かめていない。

俺の側にいるのが嬉しそうに見えたが、離れて考えてみると分からなくなってくる。

本当に俺のことを好きなのだろうか？

ガブリエルは結婚の許可が下りて、メルグウエンの父の許しも得てから、彼女に話すつもりだった。

だが城を出てくる前にあいつの気持ちを確かめた方が良かったのではないか？

期待させてしまって、もし上手くいかなかった時に悲しませたくないかったんだ。

しかし、上手くいったとしても、俺の妻になってくれるのだろうか？

以前メルグウエンにきっぱりと断られたことを思い出し、不安になる。

どうしても眠れず寢床の中に起き上がったガブリエルは決心した。

明日の馬上槍試合で決着をつけてやる。

さっさと片付けて帰らなければ、俺はあいつに恋焦がれて狂っちまうぞ。

初めの日は既に夕食の支度は終わっていたので、床の掃除をさせられたが、翌日からはまだ薄暗いうちにたたき起こされ働かされた。

台所の仕事は厳しかった。

勿論、入ったばかりの見習いの小僧に料理長が調理を任せる筈はなく、メルグウエンは水汲みを命じられた。

井戸は中庭の隅にある。

桶に水を汲み、長い棒の両端に吊るし、肩に背負い台所まで運ばなければならぬ。

大きな台所で使われる水の量は半端ではなく、昼にもならないうちにメルグウエンは疲れ切ってしまった。

重い桶を担ぎ台所への階段を下りながらふらついたメルグウエンが、水をこぼしたのを見て、料理長はこっぴどく叱ったが殴りはしなかった。

真っ青な顔をしたメルグウエンは今にも気絶しそうに見えたのだ。

野菜の皮剥きをするように言われたメルグウエンはほっとしたが、代わりに水汲みを命じられた見習いはメルグウエンの側を通る時にわざと肘でぶつかり罵った。

「新入りの癖に偉そうにするんじゃないよ」

メルグウエンは腹が立ったが、確かに辛い仕事を代わってもらおうので、大人しく礼を言った。

見習いはいまいまして舌打ちをすると台所を出て行った。

メルグウエンは手際よく野菜を洗って皮を剥き、言われたとおりの大きさに切った。

その様子を見ていた料理長は考えた。

こいつはひ弱だが手先は器用なようだ。

力仕事より、手を使う仕事を与えた方が効率が良からう。

料理長の配慮のお蔭でメルグウエンの仕事は楽になったが、同時に他の見習いの反感を買うこととなった。

515

夕食の片付けが終わって初めて台所は静かになる。

既には真つ暗だった。

メルグウエンはくたくたで早く横になって休みたかった。

初めの夜は無理を言って台所の番をしている料理人に台所に残らせてもらったのだが、次の日からは召使達の休む部屋で寝るように言われていた。

メルグウエンはルモン達と泊まった宿屋の屋根裏部屋を思い出し、

気が進まなかったが仕方がない。

服を着たまま寝ようとメルグウエンは思った。

あまりにも疲れ過ぎていてどこでも眠れそうだった。

だが夜も更けた頃、息苦しくて目が覚めた。

壁際に縮こまるようにして寝ていたのだが、いつの間にか両側に人がいて、メルグウエンを押し潰すようにしている。

起き上がろうとしたが、がちりと押さえつけられ身動きが取れない。

叫ぼうとした時、誰かの手が口を塞ぎ、別の手が体を弄るのを感じた。

メルグウエンは暴れ、口を塞いでいる手に力一杯噛み付いた。

手が離れた隙に大声で叫ぶ。

「人殺し！！！！ 助けて！！！！」

辺りは騒然となった。

翌朝、台所に行くとき直ぐ、メルグウエンは料理長に呼び出された。

テクルは眉を顰めてメルグウエンに言った。

「夜中にあんな大声を出すなど、おまえは気でも狂ったのか？」

「誰かが僕の首を絞めようとしたのです」

「おおかた女にあぶれた野郎が、おまえの尻でも狙ったんだろうよ。おまえは男の癖に、女みたいに華奢で優しい顔をしているからな」

メルグウエンは怒りで真っ赤になった。

文句を言おうと口を開くとテクルが遮った。

「どつちにしろ、金輪際、人の寝込みを襲うような真似は止める。ここで無事で生きていきたいのだったらな。そして自分の身は自分で守れ」

「分かりました」

メルグウエンは剣を城に置いてきてしまったことを後悔したが、台所の下働きが剣を持っていても怪しまれるだろう。

台所から包丁を持ち出すことは固く禁じられていた。

何か良い武器はないのか？

昼食の後片付けが済むと、台所の者達は夕方までの数時間、自由にできる。

メルグウエンは外に出て行ったが、間もなく戻ってくると、入口の階段にだらしなく座っている見習い達に声をかけた。

「ちょっと顔を貸して欲しい」

見習いは5人いた。

男と言うにはまだ若干幼さが抜け切れていないが、既に子供とも言えない年頃の少年達だ。

メルグウエンに声をかけられた彼らは驚いた顔をして、それから無遠慮にジロジロ見回した。

「何だ？」

5人の中で一番背の低い頭の尖った少年が聞いた。

「どうやらこの少年が見習い仲間の頭のような立場にあるらしい。」

「裏庭についてきて欲しい」

「何で俺達がおまえなんかについていかなきゃならないんだ？」

馬鹿にしたように聞いた少年にメルグウエンは答えた。

「ふん、怖気づいたのか」

「なんだと!」

「俺達がおまえみたいのを恐がる訳がないじゃないか!」

脅すような声を出しながら立ち上がった見習い達に、メルグウエンは冷たく言い放った。

「だったら男らしく黙ってついてきたらいいだろう」

さすがに彼らに背を向けるのは緊張したが、男らしくと言った言葉が効いたのか、何もされずに裏庭に出ることができた。

メルグウエンは、片隅に立てかけてあった棒切れを手に持つと、少年達に向き直った。

「数人で手籠めにするような卑劣な真似をせずに、正々堂々と勝負したらどうだ?」

「何だその話は?」

頭の尖った少年が仲間達を見回した。

「その手に布を巻いた奴に聞いてみたらいい」

メルグウエンはひよろりと背の高い痩せた少年を睨みつけて言った。

「ホエル、おまえ、こいつに何かやったのか？」

ホエルと呼ばれた少年は目を逸らしたが、問い詰められると面倒になったのか開き直った。

「この生意気な小僧をちつとばかし懲らしめてやろうとしたのさ。それに俺だけじゃねえ、ヴォンも一緒だった」

「おい、小僧をやつちまおうつてのは、おまえの思いつきだっただろ」

ヴォンは昨日メルグウエンの代わりに水汲みを命じられた少年だ。

「おまえら馬鹿か？そんなことして、こいつに訴えられてでも見るこれだぞ」

頭の尖った少年が指で首を切るような仕草をした。

メルグウエンは大声で言った。

「文句があるならばつきり言えばよいだろう？ そのホエルとヴォンとかいう奴ら、いつでもかかって来い。相手をしてやる」

体力に自信のあるヴォンは薄笑いを浮かべながら、メルグウエンの構えている棒切れを掴もうとした。

だが予期しなかった一撃を鳩尾に喰らい尻餅をつく。

直ぐに起き上がり、怒りに顔を引き攣らせて飛び掛っていくが、今

度は腕を打たれ、痛みに叫び声を上げて蹲った。

それを見たホエルが懐からナイフを取り出した。

「ホエル、止める！」

メルグウエンは容赦なくナイフを握っている手を打ち据えた。

ホエルは叫び声を上げ、ナイフを取り落とした。

メルグウエンは屈んでナイフを拾うと、笑って言った。

「次にちよっかい出す奴はこいつでグサリだ」

あっけに取られていた少年達が騒ぎ出すと、頭の尖った少年が手を広げ皆を黙らせた。

「よし、そこまでだ。小僧、名は何という？」

「グウエネック」

「俺はロイグだ」

そして仲間達の方を向いて言った。

「グウエネックを俺達の仲間と認める。今後こいつに手を出す奴は俺が相手になるぞ」

メルグウエンは、いまだに腕を摩っているホエルとヴォンを見てニヤリとして言った。

「あの二人が謝るのなら、仲間になってもいい」

ロイグに睨まれて二人は仕方なくメルグウェンに頭を下げた。

首都から西部に向って喜び勇んで馬を飛ばす若者がいた。

やっと王の許可を得ることができたガブリエルである。

メルグウエンの父親宛の手紙も書いてもらえたのである。

馬上槍試合は怠け癖のついた腰抜け騎士ばかりで運がよかったぞ。

ガブリエルは優勝したら褒美も金も何もいらさないから、婚姻許可をくれと王に願ったのだった。

王は、ワルローズの城主が何故このように執拗にダネールの娘との結婚を望んでいるのか、不思議に思った。

そして、ダネールの娘との間に過ちがあり、それを後悔し償うことを望んでいるのだとすれば、それは騎士として見上げた振る舞いだという結論に至ったのであった。

ガブリエルは王に誤解されようが、許可がもらえさえすれば構わなかった。

だが、もしあいつが知ったら顔を真っ赤にして怒るだろうと思いい、馬に揺られながら笑った。

ガブリエルは、後ろに続いているドグメールとマロを振り返って叫んだ。

「おい、もつと飛ばすぞ。明日中に父上の城に着く」

「そんな無茶な！」

「絶対に無理ですよ。そんなこと」

ガブリエルは、キリルの城からメルグウエンの父親宛に手紙を出すつもりだった。

父上が手紙を書いてくれるならそれが一番だが、まだ怒っているようだったら、俺が書けばよい。

それからすぐにワルローズに戻ってあいつに結婚を申し込む。

ガブリエルの心は既にワルローズに向ってしまっているようだった。

メルグウエンは料理長にこっぴどく叱られた。

「見習いを二人も怪我させやがって、どういうつもりだ？ 誰が奴らの仕事を代わりにするんだ？」

「僕は自分の身を自分で守っただけです。水汲みは無理だけど、ホエルの仕事は手伝いますよ」

テクルはメルグウエンを散々罵ったが、最後に言った。

「おまえは見かけによらず喧嘩に強いんだな。まあ、今回は俺が言ったこともあるし、勘弁してやろう。二度と料理人を怪我させるな」

よ

「はい」

メルグウエンはテクルの側を離れる前に尋ねた。

「テクル殿、初めの日に怒られていた子供はどこの子なんですか？」

「ああ、ヤニックはこの城の召使だった女の子だ。母親が死んで一人になったのを哀れに思い、台所で使ってやろうと思ったのだが、仕事中に居眠りはするわ、摘み食いはするわで散々だった」

「あの子、今はどこにいるのですか？」

「納屋に隠れているのを見かけたと既の連中が言っていたが、本当かどうかは知らぬ」

メルグウエンは自分が帰るまでにその子を見つけて、台所に戻れるように計らってやろうと思った。

本当に怠け者なのかも知れないけれど。

あのどうしようもない見習いの連中に苛められていたのではないかしら？

釘を刺しておいた方がよさそうね。

翌日、メルグウエンは休み時間になると、ヤニックを探しに出かけ

た。

納屋から初め、子供の隠れそうな場所を見て歩く。

裏庭に出たメルグウエンはニッコリした。

子供の声が聞こえたのだ。

どうやら子供は茨の生い茂った低い石垣の後ろに隠れているようだった。

メルグウエンが音を立てないように近づき、そっと覗くと大きな男の子と小さな女の子がしゃがんでおしゃべりしている。

メルグウエンに気付いた男の子がパツと立ち上がり、逃げ出そうとしたので、メルグウエンは言った。

「ヤニック、逃げないで！ 君に話があるんだ」

やはり立ち上がった女の子が走って行って、ヤニックの手を取ると、メルグウエンの方に連れてきた。

ヤニックは10歳位に見える明るい目をした細っぱちの子供だった。

自分の肩までしかない小さい女の子に大人しく手を取られている。

メルグウエンは彼らの前にしゃがみこんだ。

「僕は新しく入った台所の見習いで、グウエネックと言った。ヤニック、台所の連中はもう絶対に君を苛めないと誓ったよ。だから

一緒に戻るっ」

ヤニックはメルグウエンをじっと見た。

「こんな所に隠れてひもじい思いをしているより絶対いいから」

「……でもテクル様はいつも僕を叱るよ」

「真面目に働けば叱られないよ。どうしてまた摘み食いなどしたんだ？」

「してないよ！ あいつらがそうテクル様に言いつけたんだよ！！」

ヤニックは悔しそうにポロポロ涙を零した。

隣に立っている女の子も泣き出しそうな顔をした。

「じゃあ、もうそんなことは二度とないよ。約束する。僕と一緒にテクル殿に話してあげるから」

メルグウエンはヤニックの手を取った。

ヤニックは鼻を噉ると、涙を袖で拭い、女の子の手を離れた。

メルグウエンは女の子を見た。

金髪の巻き毛に青い目でとても可愛らしい子だ。

「名前はなんというの？ 貴方がヤニックと遊んであげたの？」

女の子はニツと笑った。

「アエラがヤンに食べ物を持ってきてあげてたの」

ではこの子がパドリックの甘えん坊の妹なんだわ。

メルグウェンは微笑んだ。

「いい子だね」

その時、城の方からアエラ、アエラと呼ぶ声が出て、女の子は二人に手を振ると駆け出した。

メルグウェンは、アナに約束した期限を守るためには、もうあまり時間が残っていないことに焦っていた。

今日中にあの男の部屋を調べなくてはならないわ。

どうしたらよいのだろうか？

メルグウェンはガブリエルが部屋で一人の時に乗り込んで行って、自分の想いを告げるつもりでいた。

あの男は私がここにいるなんて知らないから、きっと驚くだろう。

不意をつかれれば本心を見せてくれるだろうと思ったのだ。

でも多分あの男は私のことを妹としか見ていないわ。

メルグウェンは期待をするつもりはなかった。

けれども、最近ガブリエルが熱の籠った瞳で自分を見つめているような気がしたのは、気のせいなのだろうか？

メルグウェンは青みがかった灰色の瞳を思い浮かべ、ため息をついた。

以前と比べると私のことからかうことも少なくなっただし、優しく話しかけてくれるわ。

まるで大切な女性に対するように。

でも妹も大切な女性よね。

あの男は亡くなったスクラエラ姫をとて好きだったのだろうから。

夕食の片付けの途中で、台所を抜け出したメルグウエンは、主塔に入りそつと広間を覗いてみた。

扉の位置からは誰も見えなかった。

だが話し声がするから、人々は暖炉の傍にでもいるのだろう。

メルグウエンは松明を確認する家来の振りをして、ドキドキしながら広間に足を踏み入れた。

暖炉の前にはジョスリンとその父親と思われる男がいた。

また近くのベンチには数人の男が座って、酒を飲んでいるようだ。

だが、その男達の中にガブリエルの姿はなかった。

そのうちキリルとジョスリンが立ち上がり扉の方に歩いてくるのが見えたので、メルグウエンは慌てて立ち去ろうとしたが、ジョスリンの声が耳に入り思わず立ち止まった。

曲がっている松明を直す振りをしているメルグウエンの後ろを、二人の男は話しながら通り過ぎた。

「……これ以上長引くようだったら、ワルローズに知らせなければなりませんね」

「だが、あいつはいつ戻ってくるのか分からんじゃないか」

「直接ワルローズには戻らずに、ここに寄っていくとは思いますが」
メルグウェンは逃げ出した。

暗い中庭を横切り、台所に帰りながらメルグウェンは思った。

ではあの男はここにいないのかわ。

どこに行ったのだろうか？

いつ帰ってくるのかしら？

帰ってくる時には結婚してしまっているのだろうか？

私がここににいる意味がなくなってしまったじゃないの。

急に力が抜けてしまったメルグウェンは、階段に座り込んだ。

どうしよう？

頭の中がぐちゃぐちゃで何も考えられない。

涙が出そうになり、両手で自分の頬をパンパンと叩いた。

泣いている場合じゃないわ。

どうするのか決めなくては。

少なくとも明後日の午後にはここを出ないと、アナとの約束を守れない。

メルグウエンはキュツと口元を引き締めると俯いた。

暫くして顔を上げたメルグウエンは決断していた。

仕方がない。

やっぱり、私とあの男は縁がないのだろう。

明日、ジョスリン様に会いに行こう。

全て話して、馬を一頭貸してもらおう。

呆れられてしまっわね。

とんでもないお転婆娘だと思われてしまっだろうけど、構やしないわ。

しかし、夜になって、ヤニックの隣に横になったメルグウエンは、中々眠れなかった。

胸がモヤモヤして苦しい。

多くを望んでいた訳ではないのに。

自分の気持ちが伝えられたら、それでいいと思っていたのに。

どうして待っていてくれなかったの？

運命の神様は意地悪だ。

結局、私はこの想いを吹っ切ることができないのではないか？

メルグウェンはパドリックに話したことを思い出した。

私の心はあの男がどこかに持って行ってしまったわ。

どうやって取り返せばいいのか、もう分からない。

メルグウェンはガブリエルと一緒にいった、港や麦畑を想った。

パドリックが治ってから、私はとても幸せだった。

多分生まれてから今までで一番幸福だったのではないか？

あの時はもう二度と戻らないのだろうか？

きつく閉じた瞼から、藁の寝床の上に涙が一滴零れ落ちた。

翌日、昼食の後片付けが済むとすぐ、メルグウエンは主塔に向った。

ジヨスリン様に会わなければならない。

どこにおられるのだろうか？

誰かに聞かなくては。

だが中庭に出たメルグウエンは、召使達が慌しく走り回っているのを見て目を丸くした。

あんなに走って行かれたら、呼び止められないじゃない。

何かあったのだろうか？

「おい、そこの若いの！」

振り返ると若い男がメルグウエンを手招きしている。

メルグウエンは仕方なくその男に近づいた。

「何でしょうか？」

そこに2つの桶を持った小姓が走ってきた。

「ほら、あいつと一緒に行って風呂の準備をしてくれ」

「えっ？ でも僕は台所の」

「台所はこの時間は暇だろ。こっちは人手が足りないんだ」

そう言うと男は別な用事があるようで、さっさと行ってしまふ。

「ちょっと待っててください！ こっちだって都合が」

男の背中にそう叫ぶと、走って戻ってきて、メルグウエンの手に何かを押し付けた。

「これで勘弁してくれ。ほら、さっさと行かないとキリル様に叱られるぞ」

メルグウエンは手の中の1ディン銀貨を見つめた。

何なんだろう、いったい！

腹が立ったが、金を受け取ってしまった以上は仕方ない。

メルグウエンは側で立ち止まってそれを見ていた小姓から桶を1つ受け取ると、台所に向った。

小姓の後に続いて、湯の入った桶を持って主塔の階段を上がる。

後、何度往復すればよいのだろうか？

休憩時間が終わってしまうのではないか？

風呂桶の用意してある部屋に入り、桶の湯を空ける。

白い布が敷かれた大きな風呂桶にはまだ半分も湯は入っていないかった。

メルグウエンはうんざりした。

どこかの宿屋でガブリエルにこき使われたことを思い出した。

普通大切な女性には、あんなことはさせないだろう。

やっぱりあの男は私のことを妹か、もっと悪いことには弟とでも思っているのだろう。

少くぐらい優しい目で見られたからって変な期待をした私が馬鹿だった。

メルグウエンは溜息をつく、台所の階段を駆け下りた。

とにかくこれをさっさと片付けて、ジヨスリン様に会いに行かなくては。

湯の入った桶は重かった。

そのうちメルグウエンは腕が痛くなり、腰も痛くなってきた。

だが時間はどんどん過ぎて行く。

メルグウエンは額を流れる汗を袖で拭くと、桶を持って主塔の方に

歩き出した。

何度も台所と部屋を往復するうちに、一緒に湯を運んでいる小姓と途中で擦れ違うようになった。

これが最後とメルグウェンがよろよろと湯を運んで行くと、衝立の陰で小姓が誰かと話しているのが聞こえた。

「父上に呼ばれているならさっさと行けよ。俺は一人でできるから耳に入った声に、メルグウェンは飛び上がり、桶をひっくり返しそっうになった。

小姓が部屋を出て行き、メルグウェンは震える手で桶を持ち上げると湯を注ぎ入れた。

心臓が口から飛び出そうにドキドキしている。

メルグウェンは空の桶を持ったまま、衝立に背を向けて立ち尽くしていた。

やがて近づいて来る足音が聞こえ、続いて水音が聞こえた。

メルグウェンはまるで目が覚めたかのようにビクリとすると、慌てて部屋を出て行こうとした。

「おい」

後ろから声をかけられ、メルグウェンは立ち止まったが振り向けない。

顔見られたらばれてしまうじゃないの。

「はい」

「そこにぼーっと突っ立っているのだったら、髪を洗つのを手伝ってくれ」

メルグウェンはムツとした。

相変わらず人を怒らせるような言い方をする男だ。

確かに私はボンヤリ立っていたのだけど。

だってあまりにもびっくりしたのだもの。

「……はい」

頭巾を被った顔を背けながらそろそろと風呂に近づいた。

横目で伺うと、大きな背中が目に入った。

メルグウェンは唇を噛むと、袖を捲くり大きな石鹸を手を取った。

パドリツクの髪を洗ってあげる時のように、メルグウエンは男の髪を丁寧に洗った。

男が何も話しかけてこないのは有難かった。

石鹼が目に入らぬよう、目を瞑っているだろうから見られる心配もない。

いくら真面目な顔をしようとしても、唇が綻んでしまう。

メルグウエンは俯いた男の髪に水差して湯をかけながらそう思った。

そして、胸がドキドキして顔が熱い。

頭に手をやった男の動作に合わせて大きな肩甲骨が動くのを息を潜めて見つめていたメルグウエンは、聞こえないようにそつと息を吐いた。

好きな男の体に触れたいと思うことは、はしたない事だろうか？

日に焼けた頂や逞しい肩を見ながら考える。

もし私がこのまま背中に抱きついたらどうなるのだろうか？

勿論そんな思い切ったこと、できる筈はないのだけど。

メルグウエンは急に可笑しくなった。

確かに会ったら自分の想いを伝えようと思っていたのだけど、まさか素っ裸の男に告白する訳にはいかないだろう。

メルグウエンは笑いを耐え、肩を震わしながら、水差しを掲げた。

風呂桶の中に胡坐を掻いたガブリエルは、これからすべきことを考えていた。

昼前に城に着くとすぐにキリルに会いに行き、王の許可証がもらえたことを伝え、ダネールへの手紙を書いてくれるように頼んだ。

キリルはその前にメルグウエンに会いたいと言ったので、ガブリエルは不満だったのだが、キリルはどうしても考えを変えようとしなかった。

ガブリエルは自分で迎えに行きたかったが、キリルにダネールへの手紙は署名は自分がするにしても内容はおまえが考えろと言われ仕方なく残ったのであった。

暫し休んだドグメールとマロはワルローズに向けて旅立った。

二人は、ワルローズに着いたら、直ちにメルグウエンをパバーン、セズニと共にキリルの城に向かわせるようガブリエルに言われていた。

このような場合、何て書いたらいいんだ？

王のように相手を誤解させるようなことを書いた方がいいのだろうか？

既に結婚してしまったと匂わすか？

それとも全て正直に説明するか？

だが娘を返してほしいなどと言われたらどうする？

ガブリエルは立てた膝に肘をつき頭を抱えた。

でもこれは全てあいつが俺と結婚することを承諾してくれなきゃ意味ないぞ。

ドグメールには、まだ本人には何も話すなど言っている。

あいつのことだから、理由も分からないのに、行きたくないなどと言いかねないぞ。

奴らがワルローズに着くのには2日とすると、あいつがここに着くのは早くても5日後か。

そんなに長い間、俺は大人しくここで待っているのだろうか？

ガブリエルが急に立ち上がったため、メルグウェンは驚いて尻餅をついた。

そんなメルグウェンを振り返りガブリエルは言った。

「何やってんだ？ さっさと体を拭く布を持って来い」

メルグウエンは慌てて立ち上がると衝立の後ろに駆け込んだ。

大きな麻の布を手に取り、その中に火照った顔を埋める。

どうしよう？

ここから出たくない。

逃げ出したい。

でも扉は風呂桶の向こうだ。

ぐずぐずしているとガブリエルが怒鳴った。

「おい、寝ぼけてんのか？ 俺が取りに行かなきゃならないのかよ」

「はい、ただいま」

仕方なくメルグウエンは頭巾を目深に被り直すと、そろそろと衝立の陰から出た。

ガブリエルは小姓の差し出す布を何も考えずに受け取ったが、その時ちらと見えた横顔がメルグウエンに似ているように思え苦笑いした。

のろまの小姓があいつに似て見えるなんて、俺も相当重症だな。

頭をガシガシ拭きながら、洗面道具を片付けている小姓の方を横目で見る。

小姓はガブリエルの方に背を向けて屈み込んでいて顔は見えない。

だが、その腰の辺りを眺めていると、何故か体が熱くなりガブリエルは慌てた。

おいおい、俺はおかしくなっちゃったんじゃないのか？

確かに随分と女には無沙汰しているが、何で男に欲情しなければならぬんだ。

大股に衝立の方に歩いて行きながら、ガブリエルは首を捻った。

衝立にかけてある新しい肌着を身に着けると、もう一度小姓の方を見た。

二人の目が合った。

小姓は赤くなり、さっと顔を背ける。

やっぱりあいつに似ているぞ。

ガブリエルはそう思って小姓に近づいた。

メルグウェンは逃げ出すことしか考えていなかった。

どうしても男の方に目が行ってしまうのだ。

顔をみられてしまったわ。

私だって気づかれたかしら？

ガブリエルが近づいてくるのを見たメルグウェンは、何も考えられなくなり、身を翻すと扉に向かって駆け出した。

だがガブリエルに先を越され、メルグウェンは扉に手を突いたガブリエルに囲われる形になった。

「何故逃げる？」

メルグウェンは扉の方を向いたまま、小さな声で答えた。

「台所に戻らなくては叱られます」

「おまえは台所で働いているのか？」

「はい」

ガブリエルはメルグウェンから離れた。

「そんなに怯えなくてもいいぞ。俺は男には興味ないから」

メルグウェンは扉に手をかけたが、ガブリエルの声を聞いて立ち止まった。

「台所に戻る前に服を着るのを手伝ってくれ」

ガブリエルは自分の体を持って余っていた。

逃げ出そうとするのを見ると、我慢できずに追いかけてしまった。

服を身に着けながら、苦笑いする。

こいつが怯えるのももつともだ。

俺だってこの位の小僧で、俺みたいな大男が半裸で襲って来たらそりゃ逃げ出すわ。

「何て名前だ？」

「……グウェネック」

嘘だろ？

あいつの弟……の訳ないよな。

「グウェネック、おまえは俺に誰かを思い出させるんだ」

小姓がはつとした顔をしてガブリエルを見た。

その期待を込めたような眼差しを見てガブリエルは思った。

「こりゃ、似ているなんてもんじゃないぞ！」

「何であいつがこんな格好をしてここにいるんだ？」

「期待しちまっぺいいんだらうか？」

「だが、おまえが薄鈍の粉屋の息子に似ているのか、怠け者の馬丁に似ているのか、さっぱり分からない」

顔を赤くしたり青くしたりしているメルグウェンを面白そうに見ながらガブリエルは続けた。

粉屋の息子は領地を見回りに行った時にメルグウェンも見ているし、酒飲みの馬丁は城でも有名なのだ。

「それとも、俺がこれから結婚を申し込もうとしている娘に似ているのか」

メルグウェンはビクツとすると悲しそうに項垂れた。

ガブリエルは堪らずにその手を取った。

「俺の話を聞いてくれるか？」

メルグウエンは俯いたまま微かに頷いた。

好きな男に他の女の人の話をされることぐらい辛いことはない。

でも、それではまだ結婚の申し込みはしていないのだわ。

戻って来る時には奥方を連れてくるかも知れないと思っていたのだもの。

それよりは、ましじゃないかしら？

少なくともまだ他の女のものではないこの男に自分の想いを伝えることができるわ。

物思いに耽っていたメルグウエンは、耳に入ってきた言葉に混乱した。

「メルグウエン、ずっと傍にいてくれ」

やっぱり私だと分かってしまったのね。

でも、これはどういう意味なんだろう？

「……………それは、小姓としてってこと？」

「まさか。恋人としてだ」

「誰の？」

「勿論、俺の」

「……………愛人になれってこと？」

「違う。俺の妻になって欲しい」

「……………」

俯いて黙り込んでしまったメルグウエンをガブリエルは不安そうに見つめた。

やっとガブリエルの方を見たメルグウエンはおずおずと尋ねた。

「それって、冗談？」

「冗談でこんなこと言うか」

ガブリエルは呆れた顔をしてメルグウエンを見たが、決心したように床に片膝をついた。

「メルグウエン姫、どうか私ワルローズの城主ガブリエル・キリルの妻になってください」

だが、メルグウエンは目を丸くしたまま何も答えない。

混乱した頭の中を整理しようにも、この男に手を取られ見つめられ

ていたら、不可能だった。

ガブリエルが長引く沈黙にもう我慢ができず気が狂うかと思った時、
漸く震える声で尋ねた。

「……………どうして？」

「おまえを愛しく思っているから」

メルグウエンは溢れてくる涙をもう止めようとしなかった。

ガブリエルは泣き出したメルグウエンを見て驚いた。

泣くほど嫌なのだろうか？

不安で堪らなくなった。

だが、それよりもこいつの泣き顔を見るのが辛い。

思わず立ち上がるとメルグウエンを抱き締めていた。

嫌がって抵抗されるかと思ったが、メルグウエンは大人しく自分の腕の中に納まっている。

頭巾に包まれた丸い頭を撫でると、愛おしさが込み上げてきてきつく抱き締めた。

相変わらず胸は苦しいが、こいつをこうして抱いていると少しばかり

り楽になるようだ。

何故こいつは抵抗しないのだろうか？

何故何も答えてくれないのだろうか？

涙に濡れた顔を両手で挟みこみ、潤んだ黒い瞳を不安げに覗き込んだ。

「お願いだ、何とか言ってくれ。俺がどうにかなっちまう前に」

「……………」

「俺の妻になるのは泣くほど嫌か？」

「……………嫌……………な訳……………な……………」

「ちゃんと答えてくれ」

メルグウェンは唇を震わせ答えようとした。

だがその答えは痺れを切らしたガブリエルに飲み込まれてしまう。

……………

……………

初めての接吻は涙の味がした。

しょっぱくて苦いのに、甘く感じるのはどうしてだろう？

やっと二人の唇が離れ、足元がふらついたメルグウエンは男の腕に縋り付く。

ガブリエルは目を輝かせ嬉しそうに笑うと、メルグウエンを抱き寄せた。

「一生大事にする」

耳元で囁かれた言葉に、また涙が溢れてきたメルグウエンは頷いた。

夢みたいだ。

あまりにも幸福でどうにかなってしまいそう。

叶わぬ恋だと思っていた。

苦しんで、苦しんで、沢山泣いたけど、それでもどうしても諦め切れなかった。

涙を手の甲で拭ったメルグウエンは、もう一度確かめるようにガブリエルを見上げた。

明るい灰色の瞳が迷いもなく、濡れた黒い瞳を覗き込む。

その目の中に探していたものを見つけたのか、メルグウエンは頬を染め柔らかな微笑みを浮かべる。

そして両腕を男の首に回すと、自分から男の顔を引き寄せた。

午後の日差しが降り注ぐ部屋の中で、恋人達は長椅子に寄り添って座っていた。

メルグウェンは自分の肩を抱くガブリエルの胸に頭を預け、彼の話に耳を傾けていた。

その話は驚くことばかりであり、またとても嬉しいことでもあった。

ガブリエルは腕の中のメルグウェンを覗き込むと尋ねた。

「だが何故おまえはこんな格好をしてここにいるのだ？ まさか一人で来たのか？」

「モルガド殿とイアンに連れて来てもらいました」

「モルガドだと？」

そうだった。

私はまだ伝えなくちゃいけないことがあるのだわ。

メルグウェンはガブリエルの腕をはなれ立ち上がった。

「貴方にお礼を言いたかったの。バザンで私を殺さなかったこと、自分の城に連れ帰ってくれたこと、それから私が父上の城を逃げ出した時に助けてくれたこと。私は気付いていなかったけど、貴方は最初からずっと私を守ってくれていたでしょう？ 今までありがとう

うございました」

そう言っ頭を下げたメルグウエンを見て、ガブリエルは眉を顰めた。

「本当におかしな奴だな。そんなことで、わざわざここまでやって来たのか？ 変装してこき使われて、ご苦労なこった」

メルグウエンはムツとした。

「だって貴方が結婚してしまうと思ったのももの」

「今度は鼠の代わりに何を使うつもりだったんだ？」

メルグウエンは真っ赤になると、くるりと背を向け部屋を出て行くとしたが、ガブリエルに手を取られてしまう。

大きな手の中から自分の手を引き抜こうとしながら、口を尖らせた。

「そんなこと思っていなかったわ！ 気持ちを伝えたら、きっぱり諦めるつもりだったのだから」

抵抗するメルグウエンを引き寄せ顎に手をかけると、ガブリエルは真面目な顔をして尋ねた。

「諦められたのか？」

メルグウエンは目を逸らしたが、暫くするとぽつりと答えた。

「ずっと諦めようとしたけど、無理だった」

「それは良かった」

ガブリエルは目を細めて嬉しそうに笑うと、メルグウエンの顔に接吻した。

その腕の中から逃れようとしていたメルグウエンは、くすぐったそうな顔を見ると大人しくなる。

それから暫く黙って滑らかな頬や柔らかな脛、ふっくらとした唇を味わっていたガブリエルだったが、やっとメルグウエンを放すと言った。

「父上がおまえに会いたがっている。その格好じゃ具合が悪いだろ。服を取りに行かせて、風呂を準備させてやる」

そして準備ができるまで散々からかったので、ガブリエルが部屋を出て行く頃にはメルグウエンはすっかり脹れてしまっていた。

部屋を出たガブリエルは、苦笑いをしながら扉の前の階段に腰を下ろした。

幸せに酔っちまったみたいだ。

調子に乗って少々からかい過ぎたか？

だが顔を真っ赤にして怒るあいつがあんなに愛らしいからいけないんだ。

薔薇色に染まった頬やほっそりした首を思い浮かべたガブリエルは、部屋の中のメルグウエンを想像しそつになり、慌てて頭を振る。

こいつはまずいぞ。

扉に伸ばしかけた手を引っ込める。

ここは、本当に嫌われてしまう前に退散した方が良さそうだ。

ところが、ガブリエルが立ち上がる前に下から騒がしい物音がしてきて、階段が上がって来た女が転がるように駆け寄ってくると足元に身を投げ出した。

ガブリエルは驚いて立ち上がった。

「アナ、いったいどうしたんだ?!」

もしかしてパドリックに何かあったのか？

「申し訳ございません!! メルグウエン様を一人で行かせてしまつて……」

泣いているアナの話は分かり辛かったが、どうやら戻って来たモルガドとイアンにメルグウエンと城門前で別れたと聞かされ心配になり、様子を見に行こうと数日前にカドーを連れてワルローズを出たようだった。

そして今日の昼頃、キリルの城を出たドグメール達に出会い、メルグウエン姫は城にはいなかったと聞いて、真っ青になって慌ててガ

ブリエルの所に来たという訳だ。

「ルモンは戻って来たのか？」

「はい」

「では、ワルローズは大丈夫だな。おまえらが皆ふらふらしているうちに、城を攻められたりしたら困るだろうが」

「……でも、姫は？」

「アナ、丁度いい所に来たな。この中で俺の許婚が風呂に入っている。行って手伝ってやってくれ」

ガブリエルは部屋の扉を開けると、口を開いて何か言おうとしていたアナをさっさと中に押し込んだ。

「失礼致します」

部屋に入ったアナは、気を取り直し、顔を袖で拭くと衝立の方に向かった。

ガブリエル様はメルグウェン様のことを心配なさっていないようだけど。

いったいどこに行かれてしまったのかしら？

そして許婚って、やっぱりご結婚なさることよね？

どんな方なのかしら？

姫はそれを知って……

「……………アナ？」

この声は？！

「姫！！」

「どうしてアナがここにいるの？」

アナは風呂桶に駆け寄った。

メルグウェンは泣いているアナを見てびっくりした。

「どうしたの？ ワルローズで何か悪いことでも」

風呂から立ち上がりかけたメルグウェンに、濡れるのも構わずアナが縋り付く。

「……無事で良かった！！！」

メルグウェンは困ったような顔をした。

「まだ10日経っていないわよ。キリル様に会ったらワルローズに帰るつもりだったのに」

アナが恐る恐る尋ねた。

「……ガブリエル様の許婚って？」

メルグウェンは嬉しさと恥じらい、それから少しばかり誇らしさの入り混じった表情を浮かべる。

その幸せそうな笑顔を見て、アナは新たに涙が溢れ出すのを感じた。

「おめでとついでいます……！」

ガブリエルの連れて来た娘を見て、キリルはどうしたものかと思案していた。

子供の頃から突飛な思いつきで皆を驚かしてきたガビツクだ。

そんなあいつが選んだのだから普通の女ではあるまいと思っていたが、想像以上に変わった娘だった。

息子が結婚してしまう前に自分の気持ちを伝えようと、わしの城に男装して乗り込んできて、台所で下働きをしていただと？

キリルに呼び出された料理長のテクルは、見習いのグウエネツクが実は女でガブリエルの恋人だったと聞かされてびっくり仰天したのだった。

それに、乱暴者の見習いの連中を打ち負かして手懐けてしまったと言うではないか。

ジヨスリンの話だと剣術の腕前は大したものらしいということだったが、本当なのだろうか？

彼女のはきはきした物言いや、真っ直ぐに人を見る眼差しには好感が持てた。

美しいというより可愛らしいという表現がぴつたりと思える娘だ。

キリルは夕方、中庭を囲む廊下で見かけた光景を思い出し、溜息を

ついた。

石段に腰掛けたメルグウエンに、隣の壁に寄りかかったガブリエルが何か熱心に話しかけていたのだ。

二人は廊下を通るキリルに気付かなかった。

丁度その時、ガブリエルが言った一言にメルグウエンが明るい笑い声を立てた。

頬を染めて目を輝かせ、嬉しそうにガブリエルを見上げる様は愛らしく、微笑ましかった。

息子が屈み込み、可愛くて仕方がないという風にメルグウエンの顔に手を伸ばすのを見て、キリルは慌ててその場を立ち去ったのであった。

あいつも好きな女の前では、あんなに優しい顔をするのだな。

見ているこっちが照れ臭くなるわ。

若く美しい恋人達は、見ている者まで幸せにしてしまうほど幸福そうで、鬼でもない限りあの二人を引き裂くことなどできないだろう。

キリルは自分の奥方と知り合った頃を懐かしく思い出していた。

親の選んだ婚約者は、家柄が釣り合うだけでなく、美しく気立ての良い娘だったのだ。

初めての子を生まれて直ぐに亡くし、数年前に娘も死んでしまった

が、自分達はとても幸福だったと言えるのではないか？

長男に申し分のない嫁を迎えて数年。

今度は城主となった次男に良い結婚をさせようと考えていたのだが、せっかくなためてやったマギユスの娘との縁談をあいつは反故にしてしまった。

マギユスからは、ガブリエル殿は残念ながら娘を気に召さなかったようだ、そのうえワルローズ城には娘に危害を加えようとした者がいるが、ガブリエル殿はその者を野放しにしている、それ故この話はなかったことにして欲しいとの便りが来た。

キリルは息子を呼び付け何があつたのかを問い詰めたのだが、その話は初めから受けるべきではなかった、ダレル力姫には申し訳ないことをした、全て自分の責任ですと言ったきりで、それ以上何を聞いても答えようとしなかった。

あの娘が絡んでいるのではないか？

だがいくら惚れていても、あいつは女に操られるような男ではないだろう。

それにあの娘が、家柄や金目当てに男に取り入ろうとするとは、到底思えない。

キリルは自分がメルグウェンに好意を持ち始めていることを認めざるを得なかった。

面白い娘だ、あのメルグウェンという姫は。

エルギーエーンのダネールと言ったな？

仕方がない。

許してやるとするか。

ジョスリンも言っていたように自分の力で城主になったガブリエルだ。

自分で選んだ女を娶らせてやってもよかろう。

だがその前にもう一度あの娘と話してみよう。

翌日、まだ部屋にいたメルグウエンの所に侍女がキリルが呼んでいと伝えに来た。

メルグウエンは急いでアナに手伝ってもらい身支度を済ませると、侍女について城主の部屋に向かった。

昨夜、食事の席で会った時は、挨拶をただけで殆ど話さなかった。

だが、メルグウエンはガブリエルの父親が自分のことを鋭い目で見つと見ていたことに気付いていた。

何を言われるのだろうか？

結婚に反対されるのだろうか？

家に帰れと言われるのかしら？

不安で胸が苦しい。

ある部屋の前に来ると、侍女はメルグウエンをそこに残して去って行った。

メルグウエンは大きく息を吸い込むと、ノックして部屋に入った。

そこは図書室だった。

だが周りを眺める余裕などなく、メルグウエンは窓際に立っているキリルの前に進んだ。

キリルは腰を屈めて挨拶をするメルグウエンに頷き、椅子を顎で示すと、自分もその向かいに腰を下ろした。

メルグウエンはその厳しい顔をちらと見て緊張した面持ちで座ると、膝の上で手を組み合わせる。

そしてキリルが話し出すのを待った。

暫く黙ってメルグウエンを見つめていたキリルが口を開いた。

「結婚について、貴方の考えを聞かせて貰いたい」

「……はい」

「政略結婚についてどう思っているのか？」

「父は領地を守るため、私を40歳以上も年上の男に嫁がせようと思いました。人は私のことを親に背く悪い娘だと言うかも知れない。でも、どうしても嫌だったんです。貴族の娘にも幸せになる権利はあります。領地や財産を守るためだけに我が子を犠牲にする親には賛成できません」

話しているうちにメルグウエンは、無理やり結婚させられそうになった時、父親に対して感じた怒りが、胸の中にまた燃え上がるのを感じた。

父上は私を家畜のように閉じ込めて、ネヴェンテル様の許に連れて行こうとしたのだ。

「ふん。若い男だったら納得したのか？」

皮肉を含んだ口調でキリルが尋ねた。

「相手によります。父には私の意見も聞いて欲しかった」

「わしの息子とだったら幸せになれるのか？」

メルグウエンは、遠くを見つめる眼差しをすると微笑んだ。

「初めはご子息のことも大嫌いでした。何て無礼な腹の立つ人だろうと思っていたのです。でも一緒に暮らすようになって、人としてそれから城主として知れば知るほど尊敬するようになって、惹かれていくのを止められなかった。彼に愛されるなんて、私は世界一幸せな女です」

「わしが息子にマギユスの娘との縁談を考えていたのはご存知かな？」

「はい」

「だがあの馬鹿者は勿体無い位の相手を断ってしまった」

メルグウエンは唇を噛んで暫く俯いていたが、やがて顔を上げるとキリルを真っ直ぐに見て言った。

「申し訳ございません。それは、私の所為なんです」

「貴方の所為？」

「はい。ダレルカ姫に言われたことに我慢ができず、仕返しをしてしまったのです。ダレルカ姫は城主殿に私を鞭打ちの刑にするように望まれました。でもそうならなかったので、怒って帰ってしまったのです」

「やはり貴方が絡んでいたのか」

メルグウエンは、小さな声でもう一度申し訳ございませんと呟くと、膝の上で服をぎゅっと握り締めた。

「自分のしたことが、どのような結果を招いたのか知った時、償おうとはしなかったのか？」

メルグウェンははつと顔を上げる。

「父の城に一人で帰ろうとしたのです。私がいなくなれば、ダレルカ姫が戻ってきてくださると思って。でも途中で盗賊に馬を盗まれてしまつて。城主殿が助けに来てくれて、城に連れ帰ってくれました」

「それでそのまま息子の許に居座つて、別の女の為に用意されていた席を横取りしてしまつたと言つ訳か」

メルグウェンは真つ赤になつた。

「そんなことするつもりはありませんでした！！ 結果としてはそうなつてしまいましたけど。ここに来た時もご子息と結婚しようなんて、これっぽっちも考えていなかった。ただ彼がまだ他の女性のものではないうちに、自分の気持ちを伝えたかったです。そして、きつぱり諦めようと思つていたので」

「息子の気持ちに気付いていなかったのか？」

「……思つてもみなかったから、とても嬉しかった」

「それで今は？」

「城主殿が私を妻にと望んでくださるのなら、私は良い奥方になるように一生懸命頑張ります」

話しているうちにキリルのことを恐れる気持ちはなくなつていた。

厳しそうな表情の中、キリルの目はその息子の目にそっくりだった

のだ。

自分をからかう時のガブリエルの笑いを含んだ瞳に。

「親の反対を押し切るつもりかな？」

「父は王が許可を与えた結婚に反対するでしょうか？」

メルグウェンは不安げにキリルを見た。

キリルはそんなメルグウェンを見ると、初めて微笑を浮かべた。

「わしが反対するとは思わないのか？」

メルグウェンはキリルの前に跪くと、深く頭を下げた。

「私がご子息の妻となることをお許しください。どうかお願いします」

もつと言いたいことがあったが、何故か胸がいっぱいになり、言葉が出てこない。

「……いいだろう。貴方と息子の結婚を認めよう。あいつを幸せに
してやってくれ」

暫くして上から聞こえてきたキリルの声に涙が溢れ、震える声で礼を言うのがやっとだった。

キリルに結婚を認められた二人は翌朝、アナとカドー、それからアナ達と戻ってきていたドグメールとマロと一緒にワルローズに向かつて旅立った。

キリルが書いた手紙を王の手紙と一緒にエルギーン地方まで届けるため、正式に使者が立てられた。

返事が来るのは早くても1ヶ月後である。

ガブリエルは、これ以上自分の領地を留守にする訳にはいかなかった。

少しばかりの葡萄畑、それから合わせるとかなりの面積となる麦畑の収穫がある。

仕事をするのは勿論、農民達であったが、城主が見回りに来るか来ないかで、捌り方が違ったのだ。

真夏の日差しは強く、絶好の旅日和であった。

メルグウエンは海沿いの道をガブリエルの後に馬で続きながら、幸せに浸っていた。

一週間前にこの道を通った時は、まさかこんな嬉しいことになるとは思ってもいなかった。

同時に少しばかり恐ろしい気もした。

これは夢で、いつか目が覚めてしまつのではないか？

結婚を妨げるような、何か悪いことが起こるのではないか？

どうか冬になるまで何も起こりませんように。

ガブリエルの希望で婚礼は、11月末に予定されていた。

どうか父上が、キリル様のように私達の結婚を認めてくれますように。

数日後、無事ワルローズに着くと、メルグウエンはすぐにパドリックを探しに行った。

皆の帰りを首を長くして待っていたパドリックは、メルグウエンを見ると駆け寄ってきた。

「取り戻せたんだね！！」

メルグウエンの笑顔を見て、目を輝かせてそう叫んだ。

「あのね。私の心を盗ったのは、実は城主殿だったの」

パドリックは目をぱちくりさせた。

「えっ?! 叔父上が?」

「ええ」

パドリックは恐る恐る尋ねた。

「叔父上は貴方のだって知らないで、間違っ
て持って行ってしまったのでしょ
う？ 直ぐに返してくれたでし
ょう？」

「返してもらわなかったわ。でも代
わりに貴方の叔父上の心をも
らったの」

パドリックはびっくりした。

「……叔父上の心ってどんなの
だった？」

メルグウェンはにっこりした。

「大きくてとても温かいわ」

「叔父上は？」

「戻っておられるわよ」

「叔父上に聞いて来よう！」

止める間もなく、パドリックは
駆けて行ってしまった。

ルモンから留守の間の報告を聞
いていたガブリエルは、駆け込
んできたパドリックを見て笑っ
た。

「随分元気になったな。おまえ
の家族は皆元気だったぞ。お
まえに宜しく伝えてくれと言っ
ていた」

「叔父上、メルグウエン姫の心をどうしたの？」

ガブリエルは一瞬戸惑った顔をしたが、メルグウエンから聞いた話を思い出して笑いながら言った。

「おまえが妙なことを頼むから、もうちょっとであいつに目玉をくり抜かれるところだったぞ」

「でも叔父上が人の物を盗るからいけないんでしょう？」

「そうだな。だけど今度はちゃんとあいつに頼んでもらったから大丈夫だ」

「取替えっこしたんでしょ？メルグウエン姫は叔父上の心はとっても大きくてとっても温かいと言っていたよ」

「あいつの心も温かいぞ。生きが良くて、柔らかくて甘い匂いがして、齧ったら凄く美味そうだ」

パドリックは驚いた。

「食べたりしちゃ駄目だよ！！」

ガブリエルは、パドリックの目の高さにはしゃがむと、真面目な顔をして言った。

「ああ、食べたりしない。俺の懐に入れて一生大切にするよ。パドリック、俺はあいつを嫁に貰うことにした」

パドリックも真面目な顔で答える。

「叔父上、僕はメルグウエン姫のことを他のどんな美しい姫よりも好きだよ。だからあの人が僕の叔母上になるのは、とても嬉しい。それに叔父上、僕はもう、あの人のこと醜いと思っていないよ」

「当たり前だ。俺の許婚は世界一綺麗で愛らしいぞ」

「うん。叔父上がそう言ったと聞いたなら喜ぶね！ 伝えて来よう」

そう言って駆け出したパドリックの後姿を見ながら立ち上がったガブリエルは、笑いながらルモンを振り返った。

「忙しい奴だな。多分またやってくるぞ」

ルモンも笑いながら言った。

「元気な証拠でいいじゃないですか。それで、いつ頃パドリック殿を連れてキリル様の城に行かれるのですか？」

「多分11月の中旬だな。帰りは兄上も一緒に来る予定だ」

「結婚式に来られるのですね？」

「ああ。アゼノール様と赤ん坊は無理だろうが、兄上とパドリックの妹が来ることになっている」

「賑やかになりますね」

「そうだな」

ガブリエルの嬉しそうな笑顔を見てルモンは思った。

この二人が幸せになることは、城の住人にとってとても喜ばしいことだ。

これでやっとワルローズの城にも奥方ができる。

それから何週間か、ガブリエルにとって忙しい日が続いた。

城には眠るためだけに帰り、昼間は殆ど野外で麦の刈り入れを見回って過ごす。

領地には小麦や大麦、カラス麦の畑があったが、パンが主食となる生活で特に小麦は重要な作物だった。

刈り取られた麦は、その場で直ぐに脱穀される。

仕事はそれでおしまいではなかった。

農民達は乾燥させた藁を集め束にする。

藁は家の屋根を葺くのに使われるし、厩や鳥小屋に敷かれ、人々の寝床にもなった。

また干草の足りない冬には家畜の食料にもなったし、薪の代わりに燃料にもなった。

収穫の終わった畑は、それから耕され、秋には次の年の麦が蒔かれるのだ。

農民達にとって、夏から秋にかけてのこの季節は一年中で一番忙しかった。

明け方から日が暮れるまで毎日働く。

メルグウエンはパドリックと一緒に、昼には弁当をガブリエルと騎士達に届けた。

農民達は好奇心に満ちた目でメルグウエンを迎えた。

噂は既に町だけではなく村にも届いていると思われ、特に女達は城主様の許婚に興味を持っているようだった。

皆に挨拶をして籠をガブリエルに渡した後、メルグウエンは居心地悪そうに立っている。

女達の話し声が耳に入ってきた。

「可愛らしいお姫様じゃないか」

「あんなに細っこくて果たして丈夫な赤ん坊が産めるのか？」

「関係ないよ。赤ん坊と一緒に女の体も育つんだ」

「そうだよ。あのケルラン村のリザだって若い頃にやほっそりしてたんだぞ」

「早く立派な跡継ぎをこさえてもらわなけりゃな」

「そりゃ、城主様に頑張ってもらわねば」

「城主様だったら瞬く間に奥方を身一つになさるだろ」

「直ぐにでも頑張りたいのは山々だが……」

女達の話聞いたガブリエルが横目でメルグウェンを見ながら言った。

メルグウェンは眉を顰めるとそっぽを向いた。

「婚礼が済むまでお預けだそうだ」

ガブリエルの一言に皆が笑い声を立て、メルグウェンは真っ赤になった。

麦畑の収穫がやっと終わると、今度は葡萄畑だ。

木陰で休憩していた者達からワツと歓声が上がった。

ガブリエルは馬を下りると、後に続いた荷馬車から家来に大きな樽を降ろさせた。

樽の中身は葡萄酒だ。

葡萄酒は毎日飲んでいるビールと違って農民達には、めったにありつけない飲み物だった。

数人の男が樽から素焼きの椀に葡萄酒を注ぐと皆に配り始めた。

全員に配ると椀に半分位しかなかったが、それでも皆嬉しそうに騒いでいる。

ガブリエルは木の根元の空いた場所に腰を下ろすと、女達が持つて来たチーズを乗せた大きなパン切れと葡萄酒の入った椀を受け取った。

農民達は気前の良い主人に杯を掲げる。

2年前、ワルローズの農民達は自分達が干草を集めている所や、葡萄を摘んでいる所に一人でふらりと現れては、天候や農作物の出来について気さくに話す若者を初めは訝しく思った。

次第に、溝に落ち込んだ荷車を皆と一緒に引上げて引き上げるのに手を貸したり、足を挫いた女を自分の馬で村に連れ帰ったりしてくれる男に好意を持つようになった。

だが、城主様に畑の見回りを命じられている気の良い家来と思っていた男が、実は城主様本人だと分かった時、農民達は非常に驚いたのだった。

ガブリエルにしてみれば、状況を把握するには現場の者に聞くのが一番手っ取り早いし、正確だと思えた。

その為、今でこそ家来に任せていることも多いが、城主になったばかりの頃は全て自分で確認しようとしたのだった。

そして、農民達が汗水垂らして造った葡萄酒を、彼らに一滴も飲ませないのは、おかしいのではないかと思っただのだ。

味見ぐらいさせてやろうではないか。

それで仕事の効率が良くなるのなら、願ったり叶ったりだ。

そのような訳で、それから年に一回葡萄の収穫の時期になると、ワルローズの農民達は自分達が前年に造った葡萄酒を飲めることになったのだった。

やがて皆は仕事に戻った。

手で葡萄の房を摘んで籠に入れる者、葡萄で一杯になった籠を担いで桶に運ぶ者、桶の下に開いている穴から流れ出る果汁を受け皿に受ける者。

桶の中には服をたくし上げた裸足の男が、額から汗を流しながら、一人葡萄を踏みしめている。

暫くして別の男に交代する頃には、男の脚は紫色に染まり、服も染みだらけになっていた。

収穫の最後の夜には、村で祭りが行われる。

一日の労働で疲れ果てている人々も、夜が来ると不思議と元気になるのだ。

村人達は夜通しビールを飲み、ガイディヤタラバードの奏でる音楽に合わせて踊る。

ガブリエルは見回りで一緒だった者達と長居はしなかったが顔を出した。

その夜はメルグウエンも同行していた。

アナは大事な娘がそのような庶民の祭りに行くのは反対したのだが、メルグウエンがどうしても行くと言い張ったのだ。

「一緒に来いよ。じゃないとまた俺が村一番の別嬪と踊らされる」

ガブリエルの誘い文句にメルグウエンは腹を立てていた。

行ったらまるで私がやきもち焼いているみたいだし、行かなかったらあの男の浮気を許しているみたいじゃないの。

でも綺麗な村娘と踊っているガブリエルを想像するのは本当に嫌だったので、行くことにしたのだった。

二人が着くと既に村の広場では火が焚かれ、音楽に合わせて数人の若者達が踊っていた。

ガブリエルは馬を下りるとメルグウエンの腕を取り、村長の所に連れて行き紹介した。

暫くして踊りの輪の方に向かいながら、メルグウエンはガブリエルに尋ねた。

「私のことを皆に許婚と紹介して、父が結婚を許してくれなかったら困らない？」

ガブリエルは片方の眉を上げ、からかうように見下ろした。

「許してもらえなかったら、大人しく親の許に戻るつもりなのか？」

メルグウエンはそつとガブリエルに寄り添うと小声で答える。

「嫌。帰りたくない」

「だったらここにいて俺の妻になれ。親が何と言おうと構わん」

メルグウエンはホツとしたように微笑んだが、ガブリエルを見上げると言った。

「でも父は持参金をくれないでしょう？」

「そうしたら、俺が代わりにやるよ」

「貴方の所にお嫁に行くのに？」

「ああ」

ガブリエルはそう答えるとメルグウエンの肩に両手を置いた。

「親も金もどうでもいい。おまえと一緒に生きたいんだ」

口を利いたら泣きそうだったので、黙ったまま大きく頷いた。

ガブリエルが屈み込み、メルグウエンは顔を上げてそつと目を閉じる。

周りからワツと歓声が上がリ、照れたような顔をしてメルグウエンはガブリエルから離れた。

「結婚おめでとございます…！」

「お幸せに！」

「城主様万歳！」

ガブリエルはメルグウェンの手を取ると、踊りの輪に引き込んだ。

夏の終わりのある午後、マルカリードは不貞腐れてベッドに寝転がっていた。

城は急に決まった婚約式の仕度で慌しかったが、当事者である城主の息子は何を言われても気のない返事をして、数週間前から部屋に閉じ籠り気味であった。

姉の婚約を見てきて、自分もいつかは家の為の結婚をするのだと覚悟していたつもりだ。

だが何故こんなに若いうちから妻を娶らなければならないのだ。

去年は城壁を強化する工事も行ったし、父上は心配し過ぎなのではないか？

「ダネール様がお呼びでございます」

「直ぐに行くかと伝えてくれ」

召使の声に仕方なく起き上がると服を調えた。

部屋を出たマルカリードは、薄暗い廊下を歩きながら顔を顰める。

姉上が予定通りにネヴェンテルの奥方になっていれば、もう少し自分の好みにあった嫁を迎えることが出来たのではないか？

あの時、姉上が攫われたのは、この城にとっても自分にとっても不

運だった。

一番不運だったのは、暴漢の餌食になった姉上だろうけど。

多分死んでしまったのだろう。

だが、あの姉上のことだから、奴隷として売り飛ばされた異国で凶
太く生きているのではないか？

父上に結婚を決められた時、姉上もこんな気持ちだったのだろうか？

マルカリードは溜息をつく、父親の部屋に通じる階段をゆっくり
と上がっていった。

マルカリードの相手は、彼よりも6歳年上の後家だった。

ダネールの領地と隣り合わせた土地を持つオルカン城の現城主の妹
で、数ヶ月前に夫を亡くし兄の城に戻って来ていたのだ。

ネヴェンテルとメルグウエンの婚約が破談になり、ダネールは自分
の領地を守るため、別の手段を検討しなければならなくなった。

こうなると兵力を持っているネヴェンテルは危険だった。

兵を養う金が必要なネヴェンテルは、結婚によって持参金を得るこ
とが出来なくなった今、力尽くでダネールの金を奪いに来る恐れが
あったのだ。

それを防ぐ為にダネールは隣人達を見方につける必要があった。

結果としてダネールは、昔から仲の悪かった隣人の妹を息子の嫁に迎えることを決めた。

丁度良い時にトリフィナ姫が実家に戻って来てくれたとダネールは思った。

亡くなった夫との間には3人の子供がいたそうだから、石女ではないと分かっているのも有難い。

二人の息子は夫側の親戚が引き取ったようだが、末の娘は連れて来るらしい。

まだ幼いようだが、数年経ったらネヴェンテルに嫁がせることもできるかも知れない。

メルグウェンと違ってマルカリードは、結婚をしたくないなどとは言わないだろう。

ダネールは溜息をついた。

王に告訴状を出してから既に2年が経とうとしているが、相変わらず娘の行方は明らかになっていない。

生きているのか、死んでいるのか？

いまだに分からないのは、娘がどうやって城から攫われたかだ。

メルグウェンが逃げ出すことを恐れて部屋に閉じ込めたのだ。

鍵は自分の手元にあった。

しかし娘は掻き消すようにいなくなってしまった。

城内は風潰しに調べたが、手掛かりは掴めなかった。

怒ったダネールは、見張りに立たせていた家来と門番を牢にぶち込んだ。

暫くしてメルグウエンが数人の暴漢に攫われて山の方に行くのを見たと言する男が現れた。

目撃者は城下町の宿屋の息子で、子供の頃は大変な暴れん坊だったそうだが、ここ数年で落ち着いて、今では女房と一緒に親の宿屋を切り盛りしているそうだ。

茸狩りの帰りに森の中で怪しい男達に出くわし、捕らえられて身包み剥がれた。

そして裸のまま木に縛り付けられて置き去りにされた。

2日後に通りかかった農夫に助けられ、空腹と喉の渇きで殆ど死んだようになっていた男は、一週間後、城主に会いにやって来た。

「……奴らは若い女を連れていたんです。それは綺麗な黒い髪と黒い目を持った女でした。奴らはおらを殺そうとしたんですけど、その方が命乞いしてくだすって、命だけは助かりました。やっと傷も癒えて、起き上がれるようになったんで、女房から聞いた行方不明になった姫様じゃないかと思ひまして、急いで城主様に会いに来た

のです」

男は泣き出した。

「どうか、どうか城主様。あの心優しい姫様を助けてあげてください。攫われて行く身の上で自分のことよりも、おらなんかの為に奴らに懇願してください。悲しいお顔が目の前にちらついて、夜もおちおち眠れません。城主様、お願いでございます。どうか早く悪い奴らを捕らえて、姫様を救い出してあげてくださいませ」

ダネールは自分の足に縋り付いて泣き喚く男を起き上がらせた。

そして、その時の状況を詳しく話すように促したのだった。

暴漢達が連れていた女は、メルグウェンに違いないと思われた。

男の口述を基に犯人の人相書が作られた。

異国人と思われる背の低い逞しい体に褐色の肌、黒髪黒目で髭を蓄えた獰猛な風貌の男達。

全員荒い麻の衣服を身に付けており、布で作った帽子を被っている者もいたと言う。

だが山狩りでも、この地方の若者達が競って参加したにも拘らず、何も手掛かりは掴めなかったのだ。

ダネールは椅子から立ち上がると部屋の中を行ったり来たりし始め

た。

マルカリードはいったい何をやっているのだ。

呼びに行かせてから随分時間が経つ。

息子がこの結婚を喜んでいないことは分かっている。

だが領地を守るためには必要なことなのだ。

扉が開きマルカリードが顔を覗かせた。

「遅かったな。明日、相手側と交わす契約書についてだが…」

マルカリードは父親に気付かれないように息を吐くと答えた。

「はい、父上」

翌日、聖堂での式の後、城に戻った一行は、広間で豪華な食事を楽しんでいた。

ダネールは長男の結婚に金を惜しまないことを決めたようだった。

結婚契約書の内容は両方が承認し、婚礼は来年の2月に決められた。

マルカリードは、初めて会ったトリフィナ姫が大人しそうな女性で思ったよりも若く見えることを喜んだ。

そして隣に座った許婚を横目で見ながら、8年間も連れ添った夫を亡くしてまだ半年もしないうちに、年下の男と結婚するというのはどんな気持ちだろうと考えていた。

だが若いマルカリードには、トリフィナ姫が年老いた気難しい夫よりも、夫の家族の許に残していかなければならなかったまだ幼い二人の息子を大層恋しく想っているということは分からなかった。

次から次へと運ばれてくる料理に皆は歓声を上げ、やがてダネールがこの日の為に呼び寄せた大道芸人が音楽や芸を披露し始めた。

その時、緊張した面持ちの家来がダネールに近づき、その耳元に何事か囁いた。

ダネールはハツとしような顔を見ると眉を顰めて何度か頷き、家来を出て行かせる。

そして席を立つとオルカン城の城主に近づき、急用で暫く席を外さなければならぬことを謝った。

近くに座っているマルカリードが不安そうにダネールの顔を伺う。

ダネールは息子を安心させるように頷いた。

「マルカリード、わしがいない間、城主殿を丁寧にもてなしていてくれ」

「はい」

「ご心配なくダネール殿。十分楽しませてもらっている。トリフィ

ナもこの様な楽しい思いをするのは久しぶりだろうか？」

兄に祝いだからと無理やりに葡萄酒を飲まされたトリフィナは、頬を染めて頷いた。

それから自分の方を見ている許婚に気付くと、嬉しそうに忍び笑いを漏らした。

トリフィナは普段は真面目そうな、どちらかと言えば地味な容貌をしていたが、微笑むと目が射したように表情が明るくなり、酒の所為もあってかその時は大層艶やかに見えた。

「どうです、マルカリード殿。可愛らしいでしょう？」

その声に、ぼうつとトリフィナを見つめていたマルカリードは真っ赤になった。

その様子を満足そうに眺めていた二人の城主は杯を交わし合う。

そして、皆の笑い声を背中に聞きながらダネールは広間を出ると、ギドゴールからの使いの者が待っている部屋に向かった。

最近良く眠れないとメルグウェンは思った。

とても幸せなのに、何故不安になるのだろうか？

父上の返事が気になるからかしら？

既に使者は父上の城に着いている頃よね？

あの男はああ言ってくれたけど、お荷物にはなりたくない。

収穫も済み、城では穏やかな日が続いていた。

ガブリエルは冬の来る前に堤防の補強工事を進めようと、昼間は港に出かけていることが多かったが、夕食に間に合うように城に戻って来る。

メルグウェンは婚礼の仕度に忙しかった。

アナの指図の下、麻糸を紡ぎ、糸を染め、刺繍を施した敷布や枕カバーを何枚も何枚も作る。

既に出来上がっていた物には、自分の頭文字の左側にGの文字を刺繍していく。

また上質な布で肌着を縫った。

肌着の裾にも頭文字を刺繍する。

メルグウェンは結び目を作ると小さな鋏で糸を切り、指先でそつと刺繍の上を撫でた。

まだ本人の前では名前で呼んだことないけど。

以前ガブリエルに言われたことがあった。

ガブリエルでも、ガブでもガビツクでもいいから名前で呼んで欲しいと。

ガブなんて、呼べる訳ないじゃない!!!

メルグウェンは火照った頬に両手を当てた。

とても優しくなったけど……

それでもやっぱりあの男は、私をからかって遊んでいるような所があるわ。

急にガブリエルの唇の感触をまざまざと思い出したメルグウェンは、真っ赤になると勢い良く頭を振った。

そして立ち上がるとさっさと裁縫道具を片付け始めた。

さあ、まだ明るいうちにひとつ走りして来よう。

パドリックが暇だったら誘って、馬で裏の林まで行ってみよう。

あそこは障害物が多いからパドリックの乗馬の訓練にもなるわ。

狩に参加するためワルローズを訪れたメリアデックは、ガブリエルからメルグウエンとの結婚の話聞き、衝撃を受けた。

何とか平静を装って祝いの言葉を述べる事ができたが、胸の中がチリチリと痛んだ。

メルグウエン姫がワルローズの城主を好きなのは、以前から知っていた。

だがガブリエル殿は姫のことを特別に想っているような素振りは見せなかったので、まだ可能性は皆無ではないと思っていたのだ。

ガブリエル殿が奥方を迎えば、諦めて自分を振り向いてくれるのではないかとの期待が捨て切れなかった。

簡単に諦められない気持ちだということは、自分が一番良く分かっていた癖に……

好きな人の幸福を喜ばなければと思いつつも、心が苦々しい気持ちで満たされていくのを避けられなかった。

パドリックとふざけ合っているメルグウエンを眺めながら、メリアデックは齒を食い縛る。

こんなに美しい姫を見たことはない。

何と幸せそうなのだろうか。

それに、とメリアデックは拳を握り締めながら思った。

女らしくなった。

以前はまだ蕾だったのが、恋が叶って柔らかく綻び始めたのだ。

だが、匂い立つような美しい花は、後数ヶ月で俺の手の届かない所に行ってしまう。

愛する女性が他の男によって、娘から女に変わっていく様を指を銜えて眺めていなければならぬのか。

もしかしたら、彼女をこんな風に幸せにするのは、自分だったかも知れないのだ。

もしガブリエル殿さえいなかったら。

だが、俺は誓ってしまったのだ。

あの男に命を助けられた時に。

……絶対ワルローズには刃向かわぬことを。

ガブリエルはそんなメリアデックの様子を遠くから見ながら、困ったもんだと溜息をついた。

メルグウェンとの婚約を隠すつもりはなかった。

はつきりとさせてしまった方が良さだろうと思ったのだ。

結婚の申し込みを断った後も、メリアデックがメルグウエンのことを諦め切れていないのを知っていた。

ガブリエルはこの真面目な若者に好意を持っていたし、できるならば未永く隣人として仲良くしていきたかった。

色恋が絡むと何事もややこしくなるとガブリエルは思い、それから自分がメリアデックの立場だったらどうしただろうと思うと堪らなくなり、ルモンと話しているメルグウエンに足早に近づいた。

そして、無言でメルグウエンの腕を掴むと、引き摺るようにして広間を出て階段を上がり、突き当たりの衣裳部屋となっている小部屋に連れ込んだ。

びっくりしてガブリエルのなすがままになっていたメルグウエンは、ガブリエルが扉を足で乱暴に閉めると憤慨して叫んだ。

「何をなさるのです!!」

しかし、黙ったまま自分を引き寄せようとするガブリエルに抵抗しながら、その目を見たメルグウエンは不安そうな顔になった。

「怒っているの？ 私、何か怒られるようなことしたかしら？」

「俺のことが好きか？」

メルグウエンは目を丸くした。

ガブリエルが真剣な顔をして見つめているので、メルグウエンは顔を赤くして目を逸らした。

「ちゃんと答えてくれ。本当に俺でいいのか？」

ガブリエルらしくない言葉にメルグウエンは、びっくりしたように男の顔を見上げる。

からかっているようには見えない。

頬がカッと火照るのを感じたが、はっきりと答えた。

「貴方が好き……」

ガブリエルの嬉しそうな笑顔に胸が一杯になった。

手を伸ばし男の頬にそつと触れると、小声で尋ねた。

「どうしたの？」

「……俺が俺じゃなかったらと考えていたら、不安で堪らなくなつた」横を向いて不貞腐れたように答えたガブリエルにメルグウエンは呆れた顔をしたが、こんな大きい歳をした男がまるでパドリツクのように思えて笑い出した。

「変な人」

引き寄せられるままに男の腕の中に納まると、逞しい胸に頬を摺り寄せる。

力強い心臓の鼓動はとても落ち着く。

……よかった。

不安なのは私だけじゃないのかわ。

キリルの執事のユリオは、物珍しげに図書室の壁に掛かったタペストリーを眺めていた。

それはエルギエーン地方に伝わる英雄の生涯を描いたもので、手の込んだ美しいものだった。

山奥の貴族にしては金を持っておられるようだ。

地税の利益か、それとも鉱山でも持っておられるのだろうか？

キリルの為に難しい交渉をしたことは何度もある。

だが、娘のメルグウエン姫から聞いたところでは、ダネール殿は大層頑固で融通の利かないお方のようなのだ。

話は慎重に進めた方が良さそうだ。

やがて図書室の扉が開かれ、幾許か白髪の混じった黒髪の小柄な男が入って来た。

ユリオは男に近づき丁寧な挨拶をする。

ダネールは暫く鋭い目でユリオを見つめると、やっと厳しい口元を緩めた。

「ギドゴアールから遙々訪ねて来られたそうだな。長旅さぞお疲れでしょう。どうぞお掛けください」

そして傍に控えていた家来に飲み物を持って来るように命じた。

「それで、娘の消息を伝えに来てくださったそうだが」

ダネールは表情を変えずに尋ねた。

「はい。メルグウエン様はお達者で、ギドゴアールのワルローズ城で暮らしておられます」

「それは確かに私の娘に違いないのか？」

「背は中位。ほっそりとした黒髪黒目の美しい姫です。ラウドをお上手に演奏されます。それから、剣術に長けておられると聞きましました」

「間違いない。メルグウエンだ」

ダネールの声が震えていることに気付いたユリオは、これは是非ともメルグウエン様にお伝えしなければと思った。

キリルと共にメルグウエンの話聞いたユリオは、ダネールが娘を愛していないと思い込んでいた。

だが、これは父親の顔だ。

目を片手で隠し暫く黙っていたダネールは、落ち着きを取り戻すと口を開いた。

「娘は囚われの身なのか？」

「姫はある約束に縛られてはおりますが、牢に繋がれている訳ではございません」

「身代金は？」

「姫がご結婚なさったらお与えになるつもりだった金額では如何でしょうか？」

「それを支払ったら娘を返してもらえるのか？」

「メルグウエン様をどうなさるおつもりですか？」

ダネールは溜息をついた。

「無一文で穢れた娘を嫁に欲しいと言う者はいないだろう。私の城で養っていくつもりだ」

「それでも構わないから妻に迎えたいと望む者が現れたら？」

「身分の低い者なら、妻にと望む者もあるかも知れん。あれは母親に似て見目形が良いからな」

ユリオは頷くと、話を変えワルローズの美点を次々と並べ始めた。

「姫が暮らしておられるワルローズは、ギドゴアル地方北部にある海に面した豊かな港町です。領地には面積数百ボワスレの麦畑や葡萄畑があり……」

ダネールは黙って聞いている。

「現城主は、ギドゴアールきつての名門キリル家当主の次男のガブリエル様。まだお若いですが、ジユディカエル王も彼の才能を認められます。奥方は……」

ダネールはユリオを遮った。

「その男が娘を捕らえているのか？」

「捕らえているとは人聞きの悪い。ガブリエル様は戦に巻き込まれた姫を救い出され、ご自分の城に連れ帰られて介抱されたのです」

「娘を攫った暴漢達はどうなったのか？」

「戦のことですから、はつきりとは分かりませんが、殺されてしまったのではないでしょうか？」

「それで娘を助けた代わりに金をと言うのか？」

「ガブリエル様は金が欲しいとは仰っておりません」

「では何だ？」

ユリオは手紙を差し出した。

「どうぞキリル様の手紙をお読みください」

手紙に目を通したダネールは顔を上げた。

「よく分からない。先程その城主には妻がいると言ったのではな

「つたか？」

「いいえ。メルグウェン様をととても大切に想っておられ、奥方に迎えたいと」

ダネールは考え込んだ。

ここぞとばかりキリルの忠実な家来は、話し続けた。

「王も認めておられるこのご結婚。ここは、どうかダネール様もお許し頂けませんでしょうか？ キリル家と縁続きになるのは、貴方にとつても悪い話ではない筈です」

王の手紙を読んだダネールは諦めたような顔をした。

「王が承認されたとなれば仕方がない。だが筋を通してもらわねばならぬ」

「それはどのようなことでございましょう？」

「娘をいったん返してもらいたい。我々の手で全てを整え、ここから輿入れさせる」

ユリオは、これは困ったことになったと思った。

ガブリエルは絶対にメルグウェンを離さないだろう。

メルグウェンの父親が許さないなら、略奪婚とつてもらっても構わないと言われているのだ。

だが、どんなに説得してもダネールは頑として聞き入れようとせず、ユリオはさすがにと引き下がるしかなかった。

数週間後、キリルの城から来た手紙を読んだガブリエルは、眉を顰め唸り声を上げた。

あいつの父親のことだから、一筋縄じゃ行かぬだろうと思っていたが。

メルグウェンを返したらどうなるのか？

本当に俺との結婚を許してくれるのか？

返してから、約束を取り消したいなどと言われたら？

今度はもう脱出することは無理だろう。

返してはなるものか。

だがあいつはこのことを知ったらどう思うのだろうか？

貴族の娘らしく親が仕度を整えてやると言っているのを、俺が拒否したと知ったら？

あいつも本当は親に認めてもらいたい筈だ。

ガブリエルは溜息をついた。

あいつに決めさせよう。

だが、もし家に戻ることを決めたなら、俺が送っていく。

やがてメルグウェンを探しに部屋を出たガブリエルは、そう決心していた。

「父上がそんなことを？」

「ああ」

メルグウェンは眉間に皺を寄せて考え込んだ。

私が生きているって知った時、父上が動揺したなんて本当なのかしら？

私のことを心配してくれていたの？

帰ったらどうなるのだろうか？

駄目よ、帰ったら。

前回はとんでもないことになったじゃないの。

今度は逃げられないだろう。

だけど、父上はこの男との結婚を許すと言ったのよね？

約束を破ったりするのだろうか？

領地の為だったら、そうするのじゃないかしら？

まだ幼い弟を婚約させてしまったなんて。

マルカリードは可哀想だけど、父上の言いなりになるからいけないのだけ。

「……父上の希望通り、家に戻ると言ったら？」

「俺が送って行く」

メルグウエンは顔を上げてガブリエルを見る。

「でも、また城を留守にして平気なの？」

「収穫も終わったし、あいつらがちゃんと留守番してくれるだろ」

メルグウエンはホツとした顔をしたが、それからまた心配そうに言った。

「父上が約束を守らなかったら？」

「おまえを攫って逃げる」

「この前みたいに閉じ込められたら？」

「俺が救い出してやる。大丈夫だ。俺達はちゃんと予定通りに婚礼を挙げられるさ」

自信たっぷりにそう断言するガブリエルに、メルグウエンは微笑んだ。

「貴方にそう言われると、本当に大丈夫な気がするわ」

「父を信じたいのだろうか？ だったら家に戻れ。どんなことになろうとも、俺は絶対に諦めないから」

そう言ったガブリエルを見つめてメルグウエンは、嬉しそうに笑った。

「私も絶対諦めない」

そして、抱き寄せられた腕の中で思った。

不思議ね。

この男といると私は私でいられる。

でも私は自由なのに、同時に守られている気がするわ。

それは、とても心地好い。

ずっと、こうしていたいと思う。

数日後、準備を整えた一行は、エルギーオンに向けて旅立った。

許婚と3人の騎士、10人の兵に守られたメルグウエンは女の服装だ。

季節は秋も深まり、以前通ったことのある道でも、辺りの景色は別の世界のようにだった。

木々は黄や茶色に染まり、落ち葉が地面を覆い尽くしている。

刈り入れの終わった後の畑は、寂しく寒そうだった。

少しでも太陽が見れる日は、運が良かった。

その日は比較的天気がよく、日暮れまでに予定以上の道のりを進むことができた。

夕方、宿屋に着いた一行は荷物を部屋に運んだ後、食事の為に下の広間に降りていた。

メルグウエンはベンチの端に座り、眉を顰め口を尖らしていた。

先程、寝室に案内してくれた宿屋の親父とガブリエルが話しているのを聞いてしまったのだ。

「寢床は奥様とご一緒でよろしいでしょうか？」

「ああ、そうしてくれ」

驚いて口も利けないまま部屋の入り口に立っているメルグウエンを見ると、ガブリエルはニヤリと笑って親父に言った。

「新婚なんだ。他の客に迷惑かけぬよう気を付けるつもりだが、多少のことは大目に見てくれ」

親父はガブリエルと真っ赤になっているメルグウエンを交互に見て、心得たという風に目配せをした。

「それは、それは、おめでとうございます。他のお客様方にはもうひとつの部屋を使ってもらいましょう。美人な奥様で騎士様は幸せ者ですな」

親父が部屋を出て行くと、メルグウエンはガブリエルに食って掛かった。

「何が新婚よ！ 誰が奥様よ！！ 直ぐに別のベッドを用意してもらわー！！！」

そう叫んで、部屋を飛び出そうとしたメルグウエンの腕をガブリエルが掴んだ。

「おい、待てよ」

「放して！！！！ どうして後少し待ってくれないの？ 放してよ！！ ！ こんな所では絶対嫌！！！！」

逃れようとするメルグウエンを腕に閉じ込めるとガブリエルは言った。

「暴れるな。俺の話聞けよ」

「嫌」

「メルグウエン、泣くな」

ゴホンと咳払いがして、ガブリエルは顔を上げた。

宿屋の女将が敷布を抱えて部屋の扉の隙間から覗いている。

「入ってもよろしいですか？ ベッドの」用意を「

「ああ、頼む」

ガブリエルが腕を緩めると、メルグウエンは顔を背けたまま、部屋を飛び出して階段を駆け下りた。

騎士達と話しているガブリエルの声を聞きながら、メルグウェンはナイフを握り、皿の上のハムに八つ当たりをしていた。

こんな宿屋で、周りに大勢人もいる部屋でなんて、死んでも嫌だわ。

この男、いったいどういう神経をしているのだろうか？

この男はどう思われてもいいのかも知れないけど、私はふしだらな女と思われたくない。

考えているうちに段々腹が立ってきた。

やっぱりアナを連れてくるのだったわ。

アナは絶対にそんなこと許さなかったに違いない。

でもこの男がアナにパドリックの世話を頼んだので、一緒に来れなかったのだ。

メルグウェンは唇を噛んだ。

自分の身は自分で守るしかない。

守ってもらうつもりでいたこの男から、自分の身を守らなければならなくなるとは。

切り刻まれてぼろきれのようになったハムを見て、メルグウェンは

顔を上げガブリエルを睨みつけた。

無理やりしようとしたら、このハムのようにしてやるわ。

そして確かめるように腰に手をやった。

剣を持ってきて本当に良かったわ。

「騎士様はどちらまで？」

同じテーブルで食事をしていた中年の女がガブリエルに尋ねた。

踝までの服の上に袖なしのたつぷりとした上着を羽織り、裾が肩を覆うフードを被っている。

先程まで暖炉の傍に座っている父親と思われる老人の世話をしている、やっと仲間達の傍に戻ってきた所だった。

仲間達も皆同じようないでたちだ。

「エルギエーンまでだ」

「途中までご一緒してもいいですかね？ 私どもはアローミュの聖地に向かう者なんです、宿屋の亭主に道中がかなり危険だと聞きまして。年寄りや病人もおりますし、ご一緒できれば何とも心強いのですが」

女と一緒に座っている男達も一斉に頷いた。

「そうしたいのは山々だが、おまえ達は徒歩だろうか？」

「病人達の為に荷馬車が一台あります。明日の晩はどちらにお泊りです？」

「ポンディあたりで宿を借りようかと思っている」

「でしたら荷馬車だけでも一緒に緒させてもらって、歩きの者が追いつくまでポンディで待ちます」

「分かった。では俺達の後をついて来たらいいだろう」

「どうもありがとうございます」

明らかにホツとした顔をして巡礼女は丁寧な礼を言った。

「それでアローミュに行ったら病気が治るのか？」

「三つ岩の泉の水は、それはそれは効果があるそうです。寝たきりの病人が水を飲んだだけで踊りだしたと聞きました」

「そいつは凄いな。元気な者が飲んだらどうなってしまうのだろうか？ 余分な物が生えたりするのだろうか？」

「長生きするのではないのでしょうか？」

女はガブリエルがからかっているのに気付かなかったようで、真面目に答えた。

明日は早いからと皆が寢床に引き上げてからも、ぐずぐずと広間に居残っていたメルグウエンだったが、最後の一人がテーブルを離れるのを見て仕方なく立ち上がった。

のろのろと階段を上がり、暗い寝室に入る。

あの男のベッドは一番奥だと分かっているけど、行きたくない。

「誰だいたい。さっさと灯りを消せよ！」

「シーツ！！！！」

扉近くのベッドから罵られたメルグウエンはビクツとすると、手で炎を隠しながらガブリエルのベッドに近づいた。

あの親父あんなことを言っていたけど、他の客がいるじゃない！！

カーテン越しに窺っても何の物音もしない。

もう眠ってしまったのかしら？

そうだったらいいのだけど。

メルグウエンは片手でカーテンをそろそろと開けた。

蠟燭の明かりに照らされた大きな背中を見ると、メルグウエンはホツと息を吐いた。

灯りを吹き消すと、靴を脱いでベッドに這い上がった。

隅の方にやはり男に背を向けるようにして縮こまる。

皺になってしまっけど、服を着たまま寝ることにしよう。

そして剣はいつでも抜けるように持ってよう。

その時、ベッドが大きく軋み、隣の男が寝返りを打った。

メルグウエンは半分体を起こし、何かされたらベッドから飛び降りようと待ち構える。

だが男は動かない。

息を潜めていたメルグウエンは、聞こえてきた規則正しい寝息に体の力を抜いた。

絶対に眠れないと思っていたが、日中の疲れに次第に瞼が重くなってきた。

.....

とても温かくて気持ちが良い。

メルグウエンは寝惚けた頭で思った。

ずっとこのまま.....

何だろう、この壁は？

暖かくて、何だか懐かしい匂いがする。

でも壁つてもっと平らなんじゃ……

ハツとしたメルグウエンは飛び起きた。

「目が覚めたのか？ 朝早くから随分と元気だな」

メルグウエンは目を丸くして、真っ赤になった。

何てこと……！

私はこの男の胸に縋り付いて眠っていたのだ……！！

自分のことを引っ叩いてやりたい気分。

あたふたとベッドから出ようとする、その様子を笑いながら見ていたガブリエルが言った。

「何もしないから、話を聞けよ」

「……」

メルグウエンは靴を履こうと屈んでいた体を起こしたが、ガブリエルには背を向けたままだ。

「前回、おまえの父親はおまえがまだ処女だと知ったから、無理やり結婚させようとしたんだろ？ 今度は王の手紙のおかげで、俺達のことを色々誤解している筈だ。だがおまえは俺が傍に寄っただけ

で、顔を真っ赤にして気絶しそうに見える」

「気絶なんかしません!!」

「あまりにもぎこちなくて、見ただけで俺達がまだそういう関係にないことがばれてしまうだろう。おまえの恥らう姿は俺には嬉しいが、今回はちょっと都合が悪いのだ」

「だからって……」

「まだ、おまえを抱く気はない。それは初夜の楽しみにとっておくつもりだ。しかし、見た目だけでも、もっと俺に慣れてもらわねば困る」

メルグウエンはガブリエルを見つめる。

「でも、どうして……」

「日中は馬の上だし、他の連中もいる。仲良くしている暇はない。けれども、2週間も寝床を共にすれば、いい加減慣れるだろう?」

メルグウエンは大きな溜息をついた。

「嫌だけど……。分かったわ」

ガブリエルは可笑しそうに笑うと、メルグウエンの髪に手を伸ばした。

「おまえが嫌なこととはしない。俺に抱かれるのは、それ程嫌か? 昨夜は殺気立って見えたぞ」

「……今は、嫌……」

メルグウエンは大人しく頭を撫でられている。

「ここでは、嫌……」

ガブリエルは頷くと威勢よく起き上がった。

そして、まだベッドに座っているメルグウエンを振り返って言った。

「丁度いい。服を着るのを手伝ってくれ」

ポンディで巡礼者達と別れた一行は、南を目指して進んでいた。

秋の空は暗く重たく、日の光は厚い雲に遮られている。

昼頃になっても霧が晴れない日が続き、メルグウエンは気持ちが塞いでくるのを避けられなかった。

以前この道を通った時は、ルモンと歌ったり話したりして随分楽しかった。

今回ルモンは一緒ではない。

騎士のドグメールとセズニ、それからセズニの近習のテヴェエが一緒だったが、彼らは前の方にガブリエルという。

何やら設計中の新しい兵器の話をしているらしく、興奮した声が風に乗って後ろにいるメルグウエンの耳に届いた。

ガブリエルは時折メルグウエンの様子を見に来たが、周りに人がいるためメルグウエンは思ったように話せず、ガブリエルを退屈させているのではないかと不安になり、早く騎士達の傍に戻るよう促すのだった。

メルグウエンは馬に揺られながら、ポンディで別れた巡礼女のことを考えていた。

マリアナというこの女は、年老いた父を自分の家に引き取ったが、

父の体がまだ動くうちに長年の望みだったアローミュへの巡礼に連れて行ってやろうと、夫と息子に靴屋の店を任せ故郷を出てきたのであった。

老人は既にかなり体が衰弱しており、マリアナはまるで赤ん坊にするように甲斐甲斐しく世話をしていた。

気難しい病人に辛抱強く食事をさせたり着替えを手伝ったりしている姿は、見ている者に好感を与えた。

メルグウエンは自分の父親を思い浮かべた。

父上が年老いて病気になったら、私はマリアナのように世話をすることができのだろうか？

世の娘が父親を想う様に、私は父上のことを好きではないのではないのでしょうか？

私は悪い娘なのだろうか？

父上は家族よりも財産や領地を大事にする冷たい人だ。

メルグウエンは、自分の母親があのようなことになってしまったのは、その夫である父親が原因だと思っていた。

腹を痛めた子を亡くすことは、とても辛いことだろう。

私の子ではないけれど、パドリックが死ぬかと思った時はとてもとても辛かったから。

けれども、悲しみを分かち合える人がいたならば、母上も少しは救われたのではないかしら？

父上が母上を愛して支えてあげてさえいれば。

服の織り目に染み込むような霧雨に降られた日は、夕方宿屋に着くとほっとした。

暖炉の前に旅人達の濡れた服がぶら下がった広間は暗く湿っぽく、食べ物匂いに旅人達の体臭が混じり合い、息苦しい程であったが、温かい料理と乾いた寝床にありつけるのは有難かった。

初めの数日は、中々寝室に行こうとしなかったメルグウエンだったが、そのうち一日の疲れで早く横になりたいとばかり思うようになり、食事が済むと早々とベッドに入るようになった。

起きている時は、暗闇の中でもメルグウエンの緊張感が伝わってくるようで、それがガブリエルには可笑しくも愛しく思えたのだったが、同時に自制する理由ともなっていた。

だが眠っているとなると話は別だ。

温まったベッドに横たわりながら、ガブリエルはぐっすり眠っているメルグウエンの体を引き寄せた。

いつもはがちがちに硬くなっている体が、ふんわりと柔らかく腕の中に納まる。

ガブリエルはメルグウエンの頭に顎を乗せてそつと息を吐いた。

この胸の痛みはもう何か分かっている。

これはこいつに対する俺の気持ちだ。

あまりにも大きくなり過ぎて、俺の体の中に納まりきれなくなっているのだ。

「愛しいメルグウエン。おまえが好きで好きで、どうにかなくなっちゃまいそうだし……」

メルグウエンの耳元にそう囁くと、少しだけ楽になった気がした。

そつと髪を撫でる。

優しく額に接吻する。

それから頬に、鼻に、唇に……

メルグウエンが身動きすると、小さな声を漏らし、ガブリエルは手を止めた。

起こしちゃったのか？

しかし、メルグウエンはガブリエルの胸に顔を摺り寄せると動かなくなつた。

温かい息が裸の胸にかかる。

そんなことされたら我慢できなくなるだろうが。

ガブリエルはそっとメルグウエンの背中を撫でた。

肌着の上からでも感じる暖かく滑らかな肌。

直に触れたい。

丸尻や柔らかい乳房を愛撫したい。

だが、そうしたら俺は自制できなくなるに違いない。

こいつが嫌がっても押さえつけて、無理やり犯してしまうだろう。

大切にしたいんだ。

こいつが自分から進んで俺のものになるまで待ちたい。

だから、この位は許せ。

ガブリエルはメルグウエンの体をぴったりと抱き寄せると、髪を掻き分け首筋に口付けを落とした。

旅は終わりに近づいていた。

数日前から一行は国道を離れ、山道を進んでいる。

問題なければ、明日の昼頃にはダネールの城に着くだろう。

家が近づくにつれ、メルグウエンは不安が増してくるのを感じていた。

どうか、お願いします。

父上が許してくれますように。

離れ離れになったりしませんように。

その夜、泊まった村でガブリエルは皆に話した。

「明日はいよいよ目的地に着く。俺はドグメール、テリオ、エオン、ギーらとメルグウエンを送って行く。残りの者はここで待機して欲しい。上手く行った場合には、3日目に使いを寄こす。4日目になっても音沙汰なかったら、迎えに来てくれ」

「分かりました。上手く行くように祈っています」

セズニが答えた。

この季節の山は旅人も少なく、宿屋では十数人の客を殊の外喜んだ。

「このように歓迎されるのなら、この季節の旅も悪くない」

食べ物が溢れるばかりのテーブルを見てドグメールが笑った。

赤ら顔の宿屋の夫婦は額に汗をかきながら、皆が腹一杯になるまで

台所と広間を小走りに行ったり来たりしていた。

ガブリエルはその合間に彼らに愛想よく話しかけ、この辺りの領地の話を聞き出した。

この村はオルカン城の領地にあつた。

城主はまだ若く奥方と息子が二人いる。

上の息子は2年前から奥方の実家の城に預けられている。

オルカンと隣人ダネールとの間では長年土地争いが絶えなかった。

「今回のダネール様の跡継ぎのマルカリード様とオルカン様の妹姫とのご結婚で、こちら辺の者は皆胸を撫で下ろしております」

「戦が起こる可能性がなくなった訳だ」

「そうだと本当に良いのですが」

親父は不安そうに頭を振った。

「ここから3日程南に向かって進みますと、セリニヤツクの死火山に着くのですが、ここ数年、ネヴェンの城主がセリニヤツク付近の町を次々と攻撃しているのです。いつか我々の土地にも攻めて来るのではないかと、村の者達はびくびくしております」

「それは、ダネールの娘の許婚であつた男か？」

「騎士様は外国の方とお見受けしましたのに、よくご存知で」

「ちょっと小耳に挟んだのさ。それはそうと、この辺りの地理に詳しい男を一人手配してもらいたいのだが」

「それでしたら、私どもの倅を使ってください。いつも山の中を駆け回っていて、宿屋の仕事はさっぱりな奴なんです」

他に客がいなかったなので、寝室に泊まるのは二人だけだった。

メルグウエンは食事の間ずっと黙って考えていたが、この日は先に寝に行かず、ガブリエルが立ち上がるのを待った。

後に続こうとしたテヴェに自分がやるからと断り、ガブリエルの後に続いてギシギシと音を立てる古い木の階段を上りながら、メルグウエンは胸を高鳴らせていた。

鎖帷子を脱ぐのを手伝い、それを他の荷物と一緒に部屋の隅に片付ける。

「それはいいから。こっちに来い」

ベッドに座ったガブリエルにそう言われ、おずおずと近寄った。

男からかなり離れた隅の方にそつと腰掛ける。

「メルグウエン」

メルグウエンはガブリエルの方を見た。

「はい」

「おまえの父親がどういう反応を示すかは俺にも分からない。最悪の場合、俺を叩き出し、おまえを閉じ込めてネヴェンの城主の許にやろうとするかも知れない」

「ええ」

「例えそうだったとしても、俺が絶対に何とかするから諦めるなよ」
メルグウエンはにっこり微笑んだ。

「分かってるわ。貴方を信じてる」

ガブリエルは満足そうに頷くと言った。

「じゃあ、そんな端っこにいないで、もっと傍に来て」

メルグウエンは顔を赤くしたが、立ち上がるとガブリエルの前に行
った。

手を強く引つ張られガブリエルの腕の中に倒れ込む。

もしかしてこれが最後かも知れないという思いが、メルグウエンに
羞恥心を忘れさせた。

自分から男の膝に腰掛けて、首に腕を回したメルグウエンにガブ
リエルの方がびっくりする。

「メルグウエン……」

顔に熱い息を感じながらメルグウエンは、目を閉じ体から力を抜い
た。

今までとは違う接吻。

それは涙が出る程甘く、また官能的なものであった。

メルグウエンは自分の奥で何かが目覚めるのを感じ、許婚の腕の中で身を震わせた。

ぼんやりとした頭で考える。

この男も怖いのだろうか？

父上に反対されるのが。

離れ離れになってしまうのが。

暫くしてぐったりとした頭を男の肩に預けたメルグウエンは、力強い手が自分の体を撫でるのを感じていた。

なんと心地良いのだろう。

これが最後だったなら……

「……いいわ」

「ん？」

「今夜、ここで抱いてもいいわよ」

流石に恥ずかしくなって、男の肩に顔を埋めた。

「メルグウエン」

ガブリエルはメルグウエンの肩を持ち、体を離した。

「……嫌なの？」

「嫌な訳ないだろう。だが、おまえはこれで最後だからなどと思っ
ているのではないか？」

凶星だったメルグウエンは目を逸らし唇を噛んだ。

ガブリエルはメルグウエンを引き寄せると、優しく髪を撫でる。

「急くことはないぞ。予定通りに式を挙げるから、それまで楽しみに
待っている」

不安げに揺れる瞳で尋ねる。

「本当？」

「ああ。約束する」

断られてやっぱり少しホッとしている。

メルグウエンは思った。

この男が好きだ。

何があるつとそれだけは絶対変わらない。

「じゃあ明日の朝まで、しっかりと抱き締めていて」

「分かった」

翌日、5人の男に守られたメルグウエンは、やっと父親の城に着いた。

その日は珍しく朝から太陽が顔を覗かせている。

これは良い兆しなのではないかとメルグウエンは思い、胸の中が少し軽くなった気がした。

城門に乗りつけ、メルグウエンは馬を下りようとしたが、何故かガブリエルが門を通り越し城壁に沿って進むのを見て、びっくりして後を追った。

「どこに行くの？ 門はこっちょ」

「ちよつと確認したいことがある」

騎士達はガブリエルの突飛な行動に慣れたもので、驚きもせず後に続いて来る。

ガブリエルは城の裏まで回り込むと、城壁が崩れかけた塔によって途切れている所をじっと見ている。

もし私が閉じ込められたら、ここから救い出そうとも思っているのかしら？

「もういい。行くぞ」

城の周りを一周した一行は、今度こそ城門に乗りつけた。

ガブリエルが大声で門番に名と用件を伝えると、そのうちの一人が大慌てで城主に知らせに走った。

同僚のように城主様に牢屋にぶち込まれるのは御免だった。

やがて、門の所に城主の息子が現れた。

武装した騎士達に守られているのは、確かに行方不明になった姉だった。

マルカリードが頷くと、門が大きく開かれる。

メルグウェンは緊張した面持ちで、スルスルと跳ね橋が下げられるのを見つめていた。

「このように姉上を迎えるのは2回目ですね」

マルカリードは眩しそうな顔をして、メルグウェンが馬から下りるのに手を貸した。

「城主殿。弟のマルカリードです」

メルグウェンが斜め後ろを振り返ってガブリエルに言った。

「マルカリード、この方がワルローズの城主の……」

メルグウエンの隣に立ち、兜を脱いだガブリエルが言葉を継いだ。

「ガブリエル・キリルだ。よろしく頼む」

マルカリードは背の高い男を見上げると、口をあんぐりと開け、それから慌てて頭を下げた。

「こちらこそよろしくお願ひします」

「ダネール殿の許に案内をして欲しい」

「はい。どうぞ、こちらへ」

馬の世話を下男に任せると、マルカリードは一行を主塔に案内した。居間に着くと皆に席を進め、召使に飲み物を持ってくるよう言いつけた。

「どうぞ、おつくるぎください。父を呼んでまいります」

マルカリードが部屋を出て行き、メルグウエンは不安そうにガブリエルの方を見た。

「どうした？ まるで水に落ちた猫のような顔をしているぞ」

むっとしたメルグウエンは、笑っているガブリエルを睨みつける。

人が不安で堪らないって言うのに。

何でこの男はこんなに平然としていられるのだろうか？

でも、本当にそんな情けない顔をしていたのかしら？

つんと横を向いて、真っ直ぐに座り直すと、ガブリエルが噴出すのが聞こえた。

メルグウェンも我慢が出来なくなり、唇を綻ばせる。

その時、居間の扉が大きく開かれた。

ダネールは部屋の中を見回すと、立ち上がったメルグウエンとガブリエルの方に歩み寄った。

「父上」

強張った表情で挨拶をするメルグウエンにダネールは頷いたが、娘の生存を知らされた時に見せた動揺は、その顔からこれっぽっちも窺えなかった。

次にダネールはガブリエルの方に向き直った。

ガブリエルが挨拶の言葉を述べ、頭を下げるのを鋭い目で見ていたダネールは、やっと口を開いた。

「キリル殿、娘を救い出し、連れ帰ってくれたことに礼を言う」

メルグウエンを救い出した時の状況など聞かれては不味いと思ったガブリエルは言った。

「ダネール殿、あの崩れかけた塔を直ちに取り壊し、城壁を修復した方がよかるう」

「何だと？」

メルグウエンはハラハラと二人を交互に見ている。

「昨夜、泊まった宿屋でネヴェンの城主がこの地方の町村を次々と

襲撃していると聞いた」

「確かにそうだが」

「気を悪くされるかも知れないが、このままではこの城は3日とせぬうちに落ちるぞ」

ダネールは、若造が何を小癪なことをとガブリエルを睨んだが、ガブリエルはビクともせず居間の扉を開けた。

「ついて来られよ。何故防御できぬか説明する」

そう言うときさつさと中庭に出て行った。

ダネールは何か喉に痞えたような声を出し、怒りに顔を赤くした。何故自分の城をあんな偉そうな若造に案内されなければならないのだ！

父親の後ろに控えていたマルカリードが言った。

「私が見てまいります」

「いや、わしが行く」

ダネールはガブリエルの後を追った。

城の北側にある塔の前で立ち止まったガブリエルは、ダネールを振り返った。

「何故このような建物をそのままにしておられる？」

「……」

「城壁にはどこから上るのか？」

ガブリエルは城主の答えを待たずに辺りを見回すと、階段の方に向かう。

勝手なことを！！

ダネールは怒りに震えながら、ガブリエルの後に続いて城壁に上った。

見張りの兵が心配そうに近寄って来るのを一喝して、ガブリエルが話し出すのを待った。

「この塔が邪魔になり数百フィートが死角となっている。そのうえ城壁もないのだ。堀を渡るのに多少時間がかかったとしても簡単に侵入できる」

ダネールは厳しい眼差しで城壁の向こう側を見ていたが、ガブリエルに対して感じていた怒りは、今や自分に対する怒りと変わっていた。

迂闊だった。

この城に初めて来た若造が一目で気付くようなことを長年ほったらかしにしてたとは。

黙ったままのダネールにガブリエルが言った。

「もし、この塔を取り壊したくない理由があるのだったら、屋根を修繕し檣を建てられるが良い」

ダネールはガブリエルをじっと見て頭を下げた。

「確かに言われるとおりだ。明日にでも建築家を呼んで設計図を描かせる」

ガブリエルは頷いた。

「兵器を見せてもらえるなら、それについても何か気付くことがあるかも知れぬ」

「ご案内しよう」

中庭に出て不安そうに様子を窺っていたメルグウエンは、二人が穏やかに話しながら武器倉庫の方に向かうのを見てホツとした。

あの男があんなことを言い出して、父上と喧嘩になるのではないかと思っただけど、どうやら上手く収まったようね。

セズニとテヴェエは宿屋の俵に案内され、山道を歩いていた。

地図も描いてもらったのだが、実際に見て歩いた方が頭に入り易い。

明日で三日目だ。

メルグウェン姫の父親の許しを得ることができたのだろうか？

約束どおりに使いは来るのだろうか？

暗くならないうちに宿屋に戻ったセズニとテヴェは、食事を注文するとサイコロで遊んでいた兵達と共にテーブルに着いた。

皆が女将の料理に舌鼓を打っていると、外から騒がしい音が聞こえてきた。

怒鳴るような声と足音、女の叫び声も聞こえる。

「何だ？ 何だ？」

セズニ達は席を離れ、剣を手にして、扉を開いた。

宿屋の方に走って来た男が叫んだ。

「戦だ！！ 戦だ！！！！ ネヴェンの兵が来たぞ！！！！」

「何だと？」

男の後には村の者がついて回り、口々に叫んだり、泣き声を上げたりしている。

宿屋の親父が頭を抱えた。

「とつとつやってきましたよ」

セズニは気違いのように走り回っている男を捕まえた。

「ちょっと止まって、ちゃんと話してくれ」

痩せた男はゼイゼイ息を切らしながら、セズニの質問に答えている。

エルギーオン地方南部の、ここから馬で3日程の所にある町がネヴェンテルの軍に襲われた。

偶々町を留守にしているで虐殺を免れた者達が親戚を頼って、オルカンの領地まで逃げてきた。

軍は北に向かっているようだったから、間もなくここまで攻めてくるだろう。

人数ははっきりとは分からないが、ネヴェンには数百人の兵がいると言われている。

「娘や金を持っている者は、すぐに山に逃げて隠れた方がいいぞ」

男はそう言うと、そろそろと村人を従え走って行った。

セズニは皆を振り返り顔を顰めた。

「厄介なことになった」

城門の前で馬を止めたセズニは、よく通る声で門番に呼びかけた。

「私はダネール様の客、ガブリエル・キリルの騎士である。急を要する用件でダネール殿にお目通りを願いたい」

門番は武装した見知らぬ男を直ぐには通そうとしなかった為、押し問答が続いている間にもネヴェンテルの兵がすぐそこに迫っているのではないかと、セズニは気が気でなかった。

やっと跳ね橋が下ろされ、セズニは急いで門を潜った。

中庭にはマルカリードとガブリエルが出てきていた。

「セズニ、何が起こったのだ？」

「ネヴェンの兵が攻めて来ます。ガブリエル殿の命令とは違つが、一刻も早くお伝えしなければと思ひあの村を発ちました」

マルカリードは真つ青になった。

「そ、それで、どこまで……」

震える声で質問するマルカリードを遮り、ガブリエルは言った。

「直ちにダネール殿に知らせに行かれるが良からう」

そして、走り去るマルカリードの後姿を見ながら、セズニに知って

いることを全て話すように促した。

セズニが話し終わると、ガブリエルは呆れたような顔をした。

「それで、敵の人数も、どのような武器を持っているのかも分からぬ。今現在、敵がどこにいるのかも、本当にここに向かっているのかも分からぬと言うのだな？」

「はい。ですが、北に向かっているのは確かなようです」

ガブリエルはダネールの城をぐるっと見回して言った。

「ここで来ないかも知れぬ敵を待つよりは、城を出てどこかで待ち伏せした方が良さだろう。城主殿はどう思われるだろうか？」

ガブリエルとセズニが広間に入って行くと、息子と話していたダネールが立ち上がった。

「よく知らせてくれた」

セズニに礼を言ったダネールは、ガブリエルを見て苦笑いをした。

「どうやら工事は間に合わなかったようだな」

「どうなさるおつもりか？」

ダネールは肩を竦めた。

「城を出て、敵を討ちに行くしかあるまい」

ガブリエルは頷いた。

気難しい城主殿は勇気があるようだ。

「こちらには戦える者が14人いる。加勢いたそう」

「それは有難い。ギドゴアールの戦士の腕前を拝見させて頂こう」

急に騒がしくなった中庭を覗いたメルグウエンは、武装した男達の姿に驚いた。

慌てて広間に下りると、丁度父と許婚が入って来た。

ダネールはいつもに増して険しい顔つきだったが、ガブリエルは不安そうなメルグウエンを見ると笑った。

「奥方になったら、戦場に赴く夫を見送る時は、もう少ししっかりしてもらわないと困るぞ」

メルグウエンはガブリエルを睨んだ。

「戦勝をお祈りしています」

父親にそう言って頭を下げたメルグウエンだったが、ガブリエルの方を向くと思わず縋り付くように見上げてしまう。

「どづかどづ無事で」

声が震えてしまつのを避けられなかった。

「ああ、ちゃんと帰ってくる。大人しく待っているよ」

そう言つてメルグウエンの頭を自分の胸に引き寄せたガブリエルは、黒い艶やかな髪に口付けると、後も振り返らずに中庭に向かったダネールの後を追つた。

中庭に出たメルグウエンは武装した男達が次々と馬に跨り、城を出て行くのを見送つた。

ガブリエルの姿が見えなくなると、メルグウエンは溜息をついたが、近くに来た騎士が話しかけたのでそちらを向いた。

ダネール家の紋章が描かれた盾を手に持ち武具を着けた若い騎士は、メルグウエンの前に立つと頭を下げた。

「行つて参ります、姉上」

マルカリードは初めての戦に緊張した面持ちだったが、その口調は意外としつかりしていた。

「マルカリード、父上とあの男の邪魔にならないようにするのよ。無事で帰ってきてね」

「はい」

マルカリードは腕に抱えていた兜を被ると馬に跨り、数人の兵を従えて城を出て行つた。

最後の兵が門を潜り蹄の音が遠のくと、先程までの喧騒が嘘のように中庭は静かになった。

急に寒さを感じて身震いをしたメルグウェンは、自分の肩を抱いてその場に暫く立ち尽くしていた。

だが城の門が閉じられる音に目が覚めたようにビクリとすると、城壁に向かって走り出した。

そして階段を駆け上がる。

メルグウェンは息を弾ませながら、城壁の向こうを見た。

曇った空の下、3つの隊に分かれた男達は砂埃を舞い立たせ、南に向かって馬を飛ばして行く。

一生懸命に目を凝らしても、ガブリエルもダネールもマルカリードも、どこにいるのか分からなかった。

お願い。

どうか無事で帰って来て。

メルグウェンは両手を握り締めた。

泣いては駄目。

しっかりしなくちゃ。

私はもう直ぐ城主殿の奥方になるのだから。

そう言えば、母上はどうしたのだろう？

父上は母上にちゃんとご挨拶に行ったのだろうか？

メルグウエンはもう一度誰も見えなくなった南の方角を見つめると、階段をゆっくりと下り始めた。

薄暗い廊下を歩いて、ある部屋の前で立ち止まった。

ノックして、返事を待たずに扉を開く。

「母上、メルグウエンです」

そっと覗くと、薄暗い部屋の隅で椅子の上に蹲っている人影が見えた。

「……母上」

「……」

前に会った時より、一回りも小さくなったと思える母親を見つめて、メルグウエンは目を潤ませた。

「少しお話してもいいですか？」

そう尋ねた娘に傍らの椅子を黙って示す。

メルグウエンは近付くと、母の隣にそつと腰を下ろした。

冷え切った手を暖炉に翳すと、メルグウエンは話し始めた。

聞いてもらえているのか分からない、慰めてもらうつもりもない。

でも、こつやって話すことで、少しだけ胸の中の不安が軽くなる気がした。

偵察に行かせた兵と宿屋の倅が戻って来た。

その報告を聞きながらガブリエルは、満足そうに頷いた。

敵はここから約4マイルの距離にいる。

人数はおよそ200名、そのうち徒歩の者が150名。

城の攻撃に使う大型投石器や破城槌、長い梯子を引き摺りながらの前進だ。

しかも数日前の雨で泥濘んだ山道だ。

敵は思うように動けないだろう。

そこに奇襲をかければ、十分勝ち目はある。

多分、ダネール殿は正面から攻撃することを望むだろう。

ならば、マルカリード殿には最後尾に回ってもらおう。

そして俺達は一番に横合いから攻撃すればよい。

ダネールの隣人のオルカンの加勢も期待されているが、待っている時間はない。

「よし。直ぐにダネール殿とマルカリード殿にそのように伝えるに行

け

兵に命じるガブリエルをドグメールとセズニは嬉しそうに見る。

久し振りの戦だ。

ギドゴアールの男の勇氣と力をとっくりと見せてやろうじゃないか。

ガブリエル達は山道を逸れて崖を登り始めた。

濡れた岩は滑りやすい。

男達は器用に馬を操り岩を避けながら進んで行く。

ガブリエルは、道が見下ろせる場所を見つけると馬を止めるように命じた。

宿屋の倅を見張りに立たせると一行は岩陰に隠れた。

ここで敵が来るのを待つのである。

合図を待つ男達は神経をピリピリさせていた。

馬達も彼らの緊張を感じているらしく、首を振ったり足踏みしたりしている。

ガブリエルはイライラする気持ちを静めようと大きく深呼吸をした。

待つのは苦手だ。

だが、戦はタイミングが大事だ。

戦略どおりに進めないと部下や自分自身を危険に晒すことになる。

やがて左の方から蹄の音が近付いて来た。

「来ました。10騎ほど北を目指して飛ばして行きます」

宿屋の倅が興奮した声で報告した。

どうするのと言う風に皆がガブリエルの方を見た。

どうやら先駆けの兵のようだ。

「見逃す。ダネール殿が始末されるだろう」

木々の間をヒユウと冷たい風が吹き抜けた。

馬がブルルと鼻を鳴らし、待ち遠しいとでも言つように落ち葉に覆われた地面を蹄で掻いた。

「遅いな。沼にでも嵌ったのですかね」

やはり待つのに飽きてきたドグメールがガブリエルに尋ねる。

「早くしないと後ろからマルカリード様の軍が追いついてしまいま

すよ」

セズニも心配そうな顔をした。

ガブリエルが手を広げて皆を黙らせる。

「もうすぐだ。耳を澄ませ」

確かに僅かに地響きのような鈍い音が地面を伝わってくる。

男達は緊張感が足元から這い上がり体中を満たすのを感じた。

とうとう来た。

やがて宿屋の倅が大慌てで報告に来る。

「見えました」

「よし。敵が下に来たら10秒数える。それから攻撃する」

ガブリエルの指示が男達の間伝わり、皆心得たという風に頷いた。

初めの兵達が木々の間に見え隠れし始めた。

どうやら丸太を縄で縛り、引き摺っているようだ。

「これは見過ごす」

皆の間に興奮と緊張感が高まり最高潮に達した時、ガブリエルは片手を挙げ合図をした。

そして一声叫ぶと馬の腹を蹴り、崖を駆け下り始めた。

先頭に行くガブリエルの後を一斉に続く。

崖を駆け下りる男達の間から、ウオオオオオオオ！！！！！！ と腹の底に響くような声が上がった。

相手にできるだけこちらの人数が多いと思わせ、恐怖を与えるための鬨の声である。

またそれは自分達の士気を鼓舞するためでもあった。

兵器を運んでいたネヴェンテルの兵達は驚いて、一瞬混乱におちいった。

そこに容赦せずに突っ込んで行く。

低く構えた槍で歩兵を払い落とすとどめを刺す。

頭上に高く掲げた斧で襲い掛かり、抜き放った剣で斬りつける。

不意を突かれた男達は武器を手にとる間もあらずに一人また一人と倒されていく。

しかし後から来たネヴェンの騎兵が立ち向かってきた。

瞬く間に細い山道とその辺りは戦場と化した。

男達の叫び声や馬蹄の轟きが入り混じり、武具や武器のぶつかり合

う音が響き渡る。

流石に訓練された兵は怯むことなくガブリエル達に抵抗するが、少人数で素早く戦うことに慣れた男達に敵う筈は無く、次々と斬られ血飛沫を上げ泥濘んだ地面に倒れていった。

「引き上げるぞ」

ガブリエルの合図でギドゴアールの戦士達は、さっとそこから離れると崖を登り始める。

追い継る敵を斬り捨て十分距離をおくと、宿屋の俵に案内されて山の中を進んで行った。

敵は弓矢で仕掛けてくるが、木々に遮られるには当たらない。

「怪我を負ったものは？」

「いずれも軽傷です」

幸いなことに味方の兵を一人も失ってはいない。

ガブリエルは満足そうに兜の影で笑った。

迂回してマルカリードの軍を加勢しに行くのだ。

メルグウェンの弟は初めての戦に難儀しているだろう。

持ち堪えていれば良いのだが。

「急ぐぞ」

ガブリエルの声に皆は一斉に駆け出した。

湿った空気の中に熱い吐息が立ち昇り、男達は意気揚々と山道を進んで行った。

また一人殺られた。

マルカリードは、その場から逃げ出したくなる気持ちを必死に抑えていた。

父上の兵は自分を守るために戦っている。

自分が一人前の戦士ではないからだ。

子供の頃からの武芸の稽古ではそれなりに上達もしていた。

しかし、生死をかけた戦いとなると、習ったことなど何の役にも立ちやしない。

恐ろしい声を出しながら襲い掛かってくる敵が、ちびりそうになる程怖かった。

次期城主としてあまりにも情けなくはないか。

満身に指示を出すこともできない。

父に与えられた男達は、皆優れた戦士だった。

だが敵は何人倒しても、後から後から湧き出てくる。

もうこれ以上味方に負傷者を出さない為に、引き揚げた方が良いのではないか？

マルカリードが途方に暮れたように辺りを見回し、逃げ出そうとした時、目の前に踊り込んで来た騎士がいた。

「マルカリード殿、加勢を致そう!!」

その力強い声を聞いた途端、マルカリードはホツとして肩の力を抜いた。

役にも立たぬ剣をずっと握り締めていた腕が痺れている。

この季節は真冬ほどではないが日が短くなってきている。

昼間からどんよりと曇った空だったのだが、気付かぬうちに日が暮れかけていた。

暗黙のルールで戦は日が暮れるまでと決まっている。

つまり、翌朝まで休戦だ。

稀に夜襲をかけることもあるが、通常は太陽の下で戦うのだ。

「引き揚げるぞー!!!!」

相手に最後の一撃を与えると、見方の兵達はさっと脇に避けた。

辺りが闇に包まれる前に城に帰り着かなければならぬ。

急がなければならなかった。

「ダネールの跡取り息子は腰抜けだ！！ 明日は出てくるに及ばぬ。城で裁縫でもしておられたらよかるう」

槍が届かない距離を保ちながら傍を通ったネヴェンテルの騎士が嘲るような口調で叫んだ。

自分とマルカリードの兵が無事戦場から離れるのを確認していたガブリエルは、それを聞いたマルカリードが踵を返し、その男に向かっていくのを目の端に見た。

「マルカリード殿、そんな挑発に乗るんじゃない！！」

だがマルカリードは、言いたいことを言つと逃げて行く男を追った。味方の兵がどうしたら良いかという風にガブリエルの方を見る。

「あの馬鹿！！！ セズニ、いいから皆を連れて行ってくれ。俺はあいつを連れ戻して直ぐに追いつくから」

そしてガブリエルはマルカリードの後を追って駆け出した。

敵はわざとマルカリードを怒らして、味方から引き離すつもりなのだろう。

後少して追いつくという時、ガブリエルはマルカリードの馬が横腹に矢を受けてどうと倒れるのを見た。

冷たい風に晒せれるのも構わずメルグウェンは、城壁に登って南の方角をじっと見つめていた。

ざらざらした石の壁は冷たかったが、何かに縋らないと倒れそうだった。

既に暗くなってきているのに、まだ誰も帰っていない。

最悪のことばかり頭に浮かんでしまう。

お願い、早く戻って来て！！！！

震える手を組んで、目を瞑って祈る。

目を開けたら絶対に誰かが現れる筈。

だが、何度繰り返しても何も見えない。

そして、辺りは段々暗くなってくる。

あまりにも長引く不安にこれ以上我慢できないと思ったとき、遙か彼方、既に区別がつかない空と森の間で何かが蠢いているように見えた。

目の錯覚ではないか？

それが確かに城に向かって来る騎馬隊だと分かった時、メルグウェンは叫び声を上げて警備の兵を呼んだ。

あれは誰だろう？

父上か、マルカリードか、あの男か？

どうか、どうか……

中庭は一斉に賑やかになった。

弾んだ声で松明を掲げた家来は駆け回り、負傷者を馬から下ろした。

城主様をご無事で戻られたのだ。

馬から下りたダネルは、主塔の入り口に立っているメルグウェンを見た。

「息子とキリル殿はまだ戻らぬか？」

「まだでございます」

そう答えた家来に手綱を渡すと、青ざめた顔で震えているメルグウェンに近付いた。

「中で待つが良い。直ぐに他の者達も戻るだろう」

「はい」

父親の後に続いて、のろのろと広間に向かう。

城では朝までにやらなければならないことが沢山あるのだ。

誰と誰が明日も戦に向かえるか確認する。

その者達の怪我の手当てと武具の修理を優先させる。

元気な男達は急いで夕食を済ませ、短い睡眠をとりに行った。

メルグウエンは食欲がなく目の前に置かれた皿を押しやったが、出陣前にガブリエルに言われたことを思い出した。

城主殿が戦に行かれている間に奥方が倒れたりしたら皆困るわよね。

しっかりしなくては。

無理矢理パンと肉を口に入れた。

ゆっくりと咀嚼しながら考える。

あの男に相応しい奥方になりたい。

もう取り乱したりなどしないわ。

だが、残りの兵がやっと城に帰り着き、その中に許婚の姿も弟の姿もなかった時、メルグウエンはすうと背筋が冷たくなるのを感じた。

とどめを刺そうと近付いたネヴェンテルの騎士を倒すと、ガブリエルは馬を飛び降り、瀕死の馬の下からマルカリードを引き摺り出した。

助けを借りてやっと立ち上がったマルカリードは左足が地面につくと呻き声を立てた。

あまりの痛みに泣き声を上げるマルカリードを見て、ガブリエルは呆れたように言った。

「足をやられたのか？ 救いようのない馬鹿だな！」

ガブリエルは素早く考える。

どうする？

知らぬ者ならこのまま捨ておくんだが、こいつはメルグウエンの弟だ。

この愚か者が死んだら、きっとあいつは泣くだろう。

「乗れ」

「……えっ、でも貴方は？」

「何とかする。さっさと乗れ」

自分の馬にマルカリードを引っ張り上げると、ガブリエルは馬の鼻面に手を当てて言った。

「こいつを城に連れ帰ってくれ。頼むぞ」

そして、馬の尻をピシヤリと叩いて叫ぶ。

「早く行け！！ 落馬するなよ！！！！」

怪我人に乗せた馬は暫く前に味方の兵が通って行った道を走り去った。

さて、どうする？

辺りはいつそう暗くなってきたが、異変に気付いた数人の兵がガブリエルの方に向かって来た。

剣を抜いたガブリエルは溜息をついた。

目立たぬようにさっさと邪魔者を始末して、森に隠れて夜を明かさねばならぬ。

長い夜になりそうだ。

メルグウェンは怒りに顔を赤くして、ワルローズの騎士達を睨みつけた。

「貴方達は城主殿を見捨てて逃げてきたの？」

ドグメールが居心地悪そうにセズニの方を見た。

「恥ずかしくないの？ 城主殿が危険な目に会っている時に家来がぬくぬくとしていて」

「……ですが、ガブリエル殿が怪我人を連れて先に行けと指示されたのです」

「大胆不敵で自分の身を危険に晒すことを何とも思わない男だっ
知っているでしょう？ ルモンが一緒だったら絶対にあの男を置き
去りになんかしないわよ」

セズニは顔を叩かれたようにビクリとすると、唇を噛みメルグウエ
ンに頭を下げた。

「お許してください。確かに我々は迂闊でした。城主殿を見捨てたと
言われても弁解のしようもない」

ドグメールとテヴェエも揃って頭を下げた。

「ガブリエル殿を探しに行きます」

セズニが宿屋の倅を呼んだ。

アルバンという小僧で、これが中々役に立っている。

「夜道をあの場所に戻ることが出来るか？」

「少々危険ですが、できると思います」

「よし、案内してくれ」

メルグウエンが遮った。

「セズニ殿は万が一の為、ここに残って頂戴」

そしてドグメール達の方を向いて頭を下げた。

「どうか城主殿を連れて戻ってください」

城を出て行こうとする彼らの傍に3人の兵を伴ったダネールが来た。

「わしの息子も戻っておらぬ。その様子も探ってきてもらえるか？」

「承知しました」

ドグメールとテヴェエは3人の兵を連れ、宿屋の俵に案内されて城を出た。

月は雲に隠れて見えなかったが、暗い空にぼんやりとその明かりが窺える。

寒い夜だった。

彼らが出発してから数時間後、皆が寝静まった城に辿り着いた馬がいた。

「おい、誰か乗っているぞ！」

「そこにいるのは誰だ?!」

警備の兵は大声で馬の上の黒い影に呼びかけた。

敵が一騎で攻めてくるとは思えないが、用心するに越したことはない。

掠れた声で名を告げるその声に兵達はどよめいた。

「マルカリード様が生きておられた!!」

「直ちに城主様にお知らせしろ!!!」

傷ついた城主の息子を家来が馬から下ろすと城内に運ぶ。

知らせを受けたダネールが慌てて広間に入って来た。

「よくぞ無事で戻ってきたな」

寝不足の所為かダネールの目は少しばかり赤いように見える。

一足遅れてメルグウェンとセズニが駆け込んできた。

メルグウェンはホツとした顔をしている。

マルカリードと共にいた兵達は殆どが重傷を負っている。

戦いなれていない弟は殺されてしまったのではないかと心配してい

ただ。

だが、青ざめ強張った顔をしたセズニがマルカリードに尋ねた。

「ガブリエル殿はご一緒ではなかったのか？」

武具を外されながら呻き声を上げ、顔を顰めていたマルカリードが薄目を開けてセズニを見た。

目を瞑り黙って頭を振ったマルカリードにセズニはもう一度聞いた。

「ガブリエル殿は貴方を追って行かれた筈だ。どうなさったかご存じないのか？」

メルグウェンが驚いたような顔をして弟を見た。

「マルカリード、それは本当なの？」

その声に目を開けたマルカリードはメルグウェンから目を逸らすとはっきりと答えた。

「いいえ、お見かけしませんでした」

自分の部屋に戻ったメルグウェンは、寒さに震えながらベッドに上がると布団に潜り込んだ。

泣いては駄目だ。

まだ何も分からない。

元気で帰って来るかも知れないのだ。

あの男は今までずっと運が良かったではないか。

今回も何でもないような顔をして戻ってくるに違いない。

いくらそう自分自身に信じ込ませようとしても、メルグウエンは不安が雨雲のように胸の中を覆うのを避けられなかった。

やはり何かあったのだ。

でなければ既に帰って来ている筈だ。

ガブリエルが自分をからかう時に見せる、腕白小僧のような嬉しそうな顔が目に見えた。

胸がぎゅっと締め付けられる。

メルグウエンは自分を愛しそうに見つめる明るい灰色の瞳を思い浮かべた。

「……ガブリエル、お願い。早く帰って来て」

暗闇の中でそっと囁くともう堪らなくなり、涙が堰を切ったように溢れ出す。

もし私が家に戻りたいなどと言わなければ、このようなことにはならなかった。

悔やんでも悔やみ切れない。

メルグウエンは布団の中で丸くなり、自分の肩を抱いた。

歯を食い縛って嗚咽を耐える。

万が一あの男の身に何かあったら……

ワルローズはどうなってしまっただろう？

自分が家族のように思っていた人達はどうなってしまっただろうか？

明け方、疲れ果てた男達は城に戻り、憔悴した顔でガブリエルがネヴェンテルに捕らえられたことを告げた。

見張りが嚴重でもとも救い出せるような状況ではなかったという。

直ちにオルカン城に使者を送りそのことを伝え、敵がどう出るのかを待つことになった。

セズニとドグメールは気も狂わぬばかりだった。

メルグウェンが止めなかつたら、自殺行為でも直ちにネヴェンテルの野営地を突撃しに向かっただろう。

「貴方達が死んでも城主殿は戻って来ないし、今は待つしかないわ」
落ち着いてそうセズニ達に話したメルグウェンであったが、胸の中は不安で一杯だった。

怪我をしているのではないかしら？

拷問されたりしていないだろうか？

お腹を空かせているのではないか？

寒くないのだろうか？

でも捕虜となったということは、生きてはいるということよね。

生きていると分かっただけでも、有難いと思わなければ。

その日は朝から雨が降っていた。

空はどんより暗く、人々の気持ちを滅入らせた。

今日は時間が経つのがとても遅く感じられる。

どのような知らせが来るのだろうか？

そして待ちに待ったネヴェンテルの使者が現れた。

ダネールは家来が差し出す手紙を鷲掴みにすると、封を切り素早く目を通した。

その様子を見守っていたメルグウェンが待ちきれずに尋ねる。

「ネヴェンテル殿は何と？」

「捕虜の釈放に身代金を要求してきた。とても、わしが払える金額ではない」

「私に下さるおつもりだった持参金をそれに当ててください」

「それでは半分にも満たない」

「どうなさるのですか？」

ダネールは不機嫌そうに言った。

「幸いなことにおまえはまだあの男と婚約していない」

「私は城主殿と結婚の約束をしています」

「父親が許可をしていない約束など無効だ」

メルグウェンは震える声でダネールに詰め寄った。

「城主殿は私の命を救ってくれました。父上は恩を仇で返すのですか？ 本当に彼を見殺しになさるの？」

「人聞きの悪いことを言うんじゃない。あの男には気の毒だが、わしが金を出さねばならぬ義理はないだろう」

「猶予は？」

「明日の昼までだ」

「要求に応じなかったら？」

ダネールは目を逸らした。

「……」

メルグウェンは目の前が真っ暗になった。

駄目だ。

そんなことを絶対にさせるものか。

何か良い方法はないのか？

暫く俯いていたメルグウエンは顔を上げると言った。

寝不足にも拘らずその顔は美しく、凜としており、強い決意が窺えた。

「父上、城主殿を私と交換するようにネヴェンテル殿に申し入れてください」

「馬鹿なことを言うんじゃない」

「お願いです。私、ネヴェンテル殿と結婚しますから」

耐え切れなかった涙がポロリと零れた。

自分が犠牲になることなど何でもない。

それである男の命が助かるのなら。

「長年の友好関係をこのような形で壊したネヴェンの城主を許すことはできぬ。大人しく部屋に戻っていなさい」

メルグウエンは泣きながら書斎を出た。

何もできずに愛しい人が殺されるのを見ていなければならないのか？

自分の部屋に戻ったメルグウェンは、ベッドに身を投げ出し激しく泣いた。

父上は明日の朝、戦に向かうつもりなのだろう。

そうしたら、あの男の命は昼までもたないだろう。

メルグウェンはガブリエルの快活な笑顔を思い浮かべた。

そんなことはさせない。

あの男を殺させない。

自分の命をかけてでも、城主殿を救ってみせる。

メルグウェンは涙を拭って起き上がると、自分の荷物からスクラエラ姫の剣を取り出した。

剣を腰に吊るし外套に包まるとそっと部屋を出る。

父上が嫌だと言うのなら、私が自分で行って交渉するわ。

セズニとドグメールの力を借りるつもりはなかった。

彼らの命を危険に晒したくない。

ガブリエルがここに戻ってきた時、ワルローズから来た者達には皆無事でいて欲しかった。

既に忍び込んだメルグウエンは、その中に鼠色の芦毛を認めると、自分がしようとしていたことを忘れて大声で馬丁を呼んだ。

メルグウエンも知っている男が慌てて駆けつけてきた。

「姫、どうなさったのです?」

メルグウエンは震える手で馬を指差した。

「この馬はどうしてここにいるの?」

バーンッ！！！！！！

扉が吹っ飛ばすような勢いで開かれ、ベッドに横になってウトウトしていたマルカリードは飛び上がった。

傷ついた足に負担をかけてしまい呻き声を上げる。

それでも、もしや敵かと慌ててベッドの脇に置いてある筈の剣を手探りで探す。

「メルグウエン様！」

ベッドの傍に控えていた家来が驚いた声を出した。

「姉上、どうなさったのです？」

涙目でそう言った弟を睨みつけたメルグウエンは、あまりの怒りに唇を震わせ口も利けない状態だ。

「…………マルカリード、あの男をどうしたの?!?!」

やっとのこと声を絞り出したメルグウエンから目を逸らしたマルカリードは小さな声で言った。

「…………何の話でしょう?」

「しらばっくれないで!!!!」

家来がそつと部屋を出て行ったのを目の端で見ながらマルカリードは答えた。

「姉上が何の話をしているのか分かりません」

メルグウエンはつかつかとベッドに近付くと、両手でマルカリードの襟首を掴んだ。

「さつさと答えなさい！！ 何故貴方があの男の馬に乗っていたの？」

ガクガクと揺すぶられながら、マルカリードは悲鳴を上げた。

「メルグウエン、何をやっているんだ！！ マルカリードを放しなさい」

家来に呼ばれて駆けつけたダネルは、メルグウエンの肩を掴み息子から引き離そうとする。

「意気地ないとは思っていたけど、自分の弟が嘘つきで卑怯者とは思っていなかったわ！！！」

メルグウエンは怒りのあまりワナワナと震えながら、泣き声を出しているマルカリードを張り倒すと父親の方を向いた。

「父上、私はこの家に生まれたことを恥ずかしく思います。誇り高きエルグ族の戦士は勇気があって誠実だったのでないのですか？」

「何の話だ」

「このままでは城主殿のご家族に申し訳が立たない。ネヴェンテル殿の許に乗り込んで、捕虜を交換してくれるように自分で交渉に行つて来ます！！」

そう言い捨てると、メルグウェンは身を翻し部屋を出て行くこととした。

雨が降っている。

テントに当たる雨の音を聞きながら、ガブリエルはぼんやり思った。

水を含んだテントの布は重たく、縫い目から雨漏りがしている。

ガブリエルは、肌着一枚で後ろ手で縛られ、湿った地面に転がされていた。

薄暗いテントの中でははっきりとは見えないが、白かった肌着は泥と血に汚れ、所々穴が開いてほつれている。

髪もべったりと血に汚れ顔に張り付いていた。

雨で気温はかなり下がっていたが、ずっと同じ体勢でいた為、体が麻痺してその寒さも大して気にならなかつた。

上半身に数多くある傷は簡単に止血してあるだけだ。

出血と空腹の所為で眩暈がする。

ふと意識が途切れそうになったガブリエルは、縛られた両手を動かし頭を振った。

こんな所で気を失ったらみっともないぞ。

ガブリエルは襲ってくる睡魔と闘いながら、鼻歌を歌い始めた。

「黙れ！ 煩いぞ」

テントの入り口に立っていた兵が近寄ってくると、背中を蹴飛ばした。

昨日の戦いで予想外の死者や負傷者を出したネヴェンテル軍。

兵達はかなり苛立っている様子だ。

「おい」

半分体を起こしながら、ガブリエルは掠れた声で呼んだ。

「腹が減ってどうにもならぬ。鳥の丸焼きと葡萄酒を持って来い」

頬を殴られ地面に崩れ落ちながらも、憎まれ口を利くのを止めない。

「爺さんは捕虜を丁寧に扱うようにと言ってたぞ」

「よくも、ネヴェンテル様のことを！」

兵は声を荒げたが、テントに入って来た別の兵に遮られた。

「明日の昼までは、絶対生きてるように見張ってるとの仰せだ」
入り口の方に向かう兵達にガブリエルは懲りずに呼びかけた。

「何か食べさせてくれぬと死んじまうぞ」

「黙れ!!」

だが本当に死なれたら困ると思ったのだろう。

暫くすると先程の兵とは別な男が、冷めた水のようなスープに浸したパンを持ってきた。

「おい、体を起こして縄を解いてくれ。手を縛られていては食べられぬ」

「駄目だ。調子に乗るな」

「では、おまえが食べさせてくれるのか？」

男は仕方がないと思ったのだろう、パンの塊を掴むとぽたぽたと汁を垂らしながらガブリエルの口に押し込んだ。

モグモグと口を動かしながらガブリエルが言う。

「おまえらこんな不味い飯を食わされているのか？ ケチな城主だな。こりゃ戦う気力も失せるわ」

「口の減らない野郎だな」

兵は呆れたように言うとテントを出て行った。

後はもう寝るしかないな。

ここから抜け出すことは不可能だろう。

ネヴェンテルの要求した身代金をはたしてダネールは出してくれるのか？

ダネール殿は気難しいが公正な男だと思う。

跡取り息子の命の恩人を見殺しにはしないだろう。

だが俺が捕らえられたと聞いて、あいつはどうしただろうか？

泣いているのではないか？

ガブリエルは溜息をついた。

もうあいつを悲しませないと誓ったのに。

明日の昼までは、とりあえず殺されることはないだろう。

一眠りしたら何かよい考えが浮かぶかも知れぬ。

いかな。

熱が出てきたようだ。

目を瞑ったガブリエルは、すうと意識が遠のくのを感じた。

夕方になって捕虜の様子を見に来た兵は、真っ青になるとテントを飛び出した。

数人の男がバタバタとテントに入って来る。

「おい、捕虜が息をしないって本当か?!?!」

「メルグウエン姫、私達も一緒に行きます!!」

ダネールの後を追って来て、寝室の外で待っていたセズニとドグメールが叫んだ。

部屋を出て行こうとした3人にダネールが声をかける。

「待ちなさい。キリル殿の馬がどうのこうのと言っるのは何の話だ?」

振り向いたメルグウエンは、マルカリードを指差して言った。

「貴方の息子にお尋ねください。何故、城主殿の馬に乗って帰ってきたのか」

「マルカリード、話しなさい」

父親に鋭い眼差しを向けられたマルカリードは、しぶしぶ口を開いた。

「……私の馬が倒れて、足を怪我したので、キリル殿が自分の馬を貸してくれたのです」

「ガブリエル殿は、一人で敵の中に飛び込もうとしたマルカリード殿を連れ戻そうと後を追われたのです」

セズニが説明する。

ダネールは不貞腐た顔をしている息子に尋ねた。

「何故、そんな馬鹿な真似をしたのだ？」

「ネヴェンテルの兵に侮辱されたのです」

メルグウエンはマルカリードを軽蔑しきった目で見た。

「貴方のつまらない自尊心の為にあの男は犠牲になったのよ」

「でも父上だって絶対あのようなことを言われたら許せないでしょう」

「ふん、弱虫とでも言われたの？ それとも卑怯者と？」

暫く黙っていたダネールが口を開いた。

「では、キリル殿がいなかったら、代わりにおまえが捕らえられていたのだな」

「殺されていたかも知れないわね」

メルグウエンが容赦なく付け足した。

「つまり我々はキリル殿に恩義がある訳だ」

そう呟いたダネールをメルグウエンと騎士達は期待を込めて見つめる。

「暫く考えさせて欲しい」

そう言うとダネールは、息子の寝室を足早に出て行った。

「この馬鹿者！……！！ 何だ、この態は？！ 捕虜は丁寧に扱えと命じただろう？……！！」

ネヴェンテルは額に青筋を浮き上がらせ白髪を振り乱して、自分の前で頭を下げている男達を叱っていた。

「全員縛り首にしてくれるぞ……！！ この役立たずめ……！！ 明日の昼までは絶対に死なせるなど言っただろうが……！！」

泡を吹きながら怒鳴り散らす年老いた城主の前で、大の男が恐ろしそうに縮こまっている。

「貴様らが髑り殺したのか？」

「滅相もない。食事を与えて、暫くして様子を見に行ったら息絶えていたのです」

ガブリエルを殴りつけた男が弁解を試みる。

「食事に毒でも入れたのか？」

「決してそのようなことは」

「では何だ？ 致命傷は負っていなかった筈だぞ」

「……恐怖のあまり心の臓が止まってしまったというようなことは、ありませんか？」

ネヴェンテルの後ろに控えていた床屋兼外科医が言った。

「それはないです。怖いもの知らずの男で、食事の前まで元気で憎まれ口を叩いていましたから」

ガブリエルに食事を与えた兵が答える。

ネヴェンテルは、首を竦めている男達の前をイライラと行ったり来たりし始めた。

「貴様らのお陰で身代金はふいになつたぞ。当分の間、給料は貰えないものと思え!!」

兵達はハツと顔を上げかけたが、ネヴェンテルの氷のような視線にぶつかり唇を噛んで俯いた。

ネヴェンテルは彼らの前に立ち止まると、男達の後頭部を見ながら吐き捨てるように言った。

「捕虜はギドゴアールのキリル家の者だと名乗っていた。キリル家とはジュディカエル王との繋がりも濃い、我が国屈指の名家だ。つまり、どういうことか分かるか？」

「……」

「我々がキリル家の者を捕虜にして鬻り殺したことが明るみに出れば、最悪の場合は王の征伐も覚悟しなければならぬということだ」

兵達は事の重大さに青ざめ震えている。

「遺体はどうしますか？」

軍医が尋ねた。

「洗い清めて、新しい肌着と武具を着けてやれ」

ネヴェンテルはそう言つと、兵達を下がらせ、暫く考え込んでいた。故郷から遠く離れた場所で戦死した貴族の遺体を家族の許に持つて帰ることは難しい。

そのような場合には、遺体から心臓を取り出し陶器の器に収め、それを遺族に届けるのが慣わしだった。

そうすべきかも知れぬ。

心臓はギドゴアールのキリル家の許へ。

そして遺体はネヴェンの墓地に丁寧に埋葬してやろう。

キリル家の怒りを受ける覚悟はできていたが、できるだけそれが軽減されるならば、それに越したことはない。

「おい、もう少し上の方にも水をかけてくれ」

ネヴェンテルに命じられ、テントの外でガブリエルの体から血と汚れを拭っていた兵が、水桶を提げている男に言った。

「こいつは金になるだろうか？」

乾いた布で体を拭いていた小柄な男が、ガブリエルの胸に青白く光る月長石の首飾りを指差して言った。

「おい、ニツク!!! 触れるんじゃないぞ。ネヴェンテル様に叱られるぞ」

「しかし、羨ましいくらいの男振りだな。さぞかし女にもてるのだろうか」

「だが死んじまったら、色男も形無しさ」

「まるで眠っているようじゃないか」

「畜生、俺もこれぐらい容姿が良けりゃな」

「何だ、おまえ、また振られたのか」

大袈裟に驚いてみせる兵に、ニツクと呼ばれた男が悔しそうに叫ぶ。

「自分と並ぶのに竹馬に乗らなきゃ釣り合わないチビはみっともないから嫌だ、などとほざきやがった!」

他の男達はゲラゲラ笑っている。

「俺様の魅力が分からないあんな女は、こっちから願い下げだ。さ

あ、雨が止んでいる内にさっさとやっちまおうぜ」

曇り空を見上げたニックが言った。

男達はガブリエルをテントの中の寝台に運ぶと、新しい肌着と、更に鎧下を着せた。

その上から鎖帷子を着せ、肩当て、籠手、脛当て、鉄靴等を付けていく。

最後に脇に兜を置き、剣を手に持たせた。

枕元の燭代に火が灯される。

薄暗いテントの中、蠟燭の光に照らされたガブリエルは、あたかも戦死した勇敢な騎士の彫像のように見えた。

厳粛な気持ちになった男達は、遺体に向かって黙って頭を下げるとテントを出て行った。

セズニとドグメールは、何とかメルグウエンを引き止めようと必死だった。

「駄目です。城主殿がお許しになる筈がない」

「貴方が身代わりになったなどと聞いたら、どんなに嘆かれるか」

「父が身代金を払うことを拒否すれば、あの男は殺されてしまうわ。そんなこと絶対にさせたくないの」

「貴方が犠牲にならずとも、ガブリエル殿を救う案が他にあるかも知れない」

「そうだ。キリル様に手紙を出して、金を送って頂いたら……」

「無理よ、時間がかかり過ぎる。使いの者がキリル様の許に着かないうちに城主殿は冷たい骸となっているわ」

メルグウエンは諦めたように頭を振った。

「奇跡など期待しない方が良いわ。それに、これが私の運命なのかも知れないと思うの」

「……メルグウエン姫」

「城主殿と過ごした3年間は、私の人生の中で一番幸福な時だったわ。ずっと一緒にいたかった……」

涙が溢れそうになり、唇を噛み締めて俯いた。

暫くして低い声で続ける。

「城主殿は何度も私の命を救ってくれたわ。ずっと私を守ってくれた。今度は私が彼を助ける番。お願い、止めないで頂戴」

セズニとドグメールは、自分達の無力さに拳を握り締め、歯を食い縛り涙を流していた。

ガブリエルが捕らわれたのは、自分達に責任があると思っているのだ。

だが自分達は二人合わせても、ガブリエル殿と交換する対象とはならぬ。

「では、せめて野営地までお供させてください」

セズニの必死の言葉にメルグウエンは頷いた。

そして、ガブリエルに最後の晩に言われたことを思い出した。

絶対諦めるなと言われたのに。

私は信じると答えたのに。

ごめんなさい、でも貴方の死を黙って待ってはられない。

貴方が冷たい遺体となって横たわることを思えば、あの老人の妻に

なることなど何でもないわ。

貴方との思い出があるから、私は生きていける。

だけど、とメルグウエンは思った。

ネヴェンテル殿にとって、私はまだそのような価値があるのだろうか？

もし交換などしないと断られたら？

考えるのを止そう。

明日の朝になってみれば、分かること。

人払いをして、書斎に閉じこもったダネールは悩んでいた。

初めは身代金を出すつもりはなかった。

もし金を出さなくても、ネヴェンテルがガブリエルを殺すとは思えなかったからだ。

キリル家の一員を殺したら後々面倒なことになると考えて、思い止まるだろうと期待していたのだ。

だが、キリル殿はわしの息子を救ってくれた。

助けてもらわなかったら、マルカリードは殺されていただろう。

残念ながらマルカリードは、わしが期待していたような男に育たなかった。

そう認めざるを得ない。

優秀な教師をつけて厳しく育てたのだが、どこでどう間違ったのか？

やはり、習慣どおりに他人に任せた方が良かったのか？

もう遅過ぎるのだろうか？

自分が間違っていたと認めるのは難しい。

ダネールは苦虫を噛み潰したような顔をして、嫌な思いを振り切るように頭を振った。

それにメルグウエンのこともある。

キリル殿は娘を連れ帰ってくれた。

メルグウエンは元気そうで、怖い思いや辛い思いをしたことなど、まるでないように見えた。

二人の間に強い信頼関係があることは見て取れた。

始めこそ何だこの生意気な若造はと思ったが、中々大した器量の男だ。

王が認めた婚姻を承諾するつもりだった。

それが、こんなことになるとは……

ダネールは暖炉の中に赤々と踊る炎を上空で見つめながら、物思いに沈んでいた。

しかし、娘がネヴェンテルの許に行くと言った時は驚いた。

キリル殿を救う為、あんなに嫌っていた元許婚の妻になると言うのだ。

勝気な娘のそんな一面がいじらしかった。

ダネールは頷くと立ち上がった。

娘の持参金はくれてやってもいい。

ネヴェンの城主の言ってきた金額の半分までは出してやってもいい。

……だがそれ以上は無理だ。

ガブリエルは目を開くと、自分の上に広がっている星空を見て息を呑んだ。

まるできらめく星が自分の上に降り注ぐかのように見える。

そのあまりの美しさに暫し息をするのも忘れ、見とれていた。

北から南の空にかけて、おおぐま座、うしかい座、ヘルクレス座と眺めていたガブリエルは、南の地平線近くにさそり座を見とめると、驚いて起き上がった。

今は秋だぞ。

何故この季節にさそり座が見えるのだ。

ここはいったいどこなんだ？

辺りの空気は澄み、清々しい緑の香りがする。

汗ばむ程の気温ではないが、爽やかな風が心地良かった。

暗くてよく分からないが、手探りで触れてみると、どうやら草原に寝そべっていたようだ。

草原だと？

テントの周りは泥濘だった筈だろ？

俺はネヴェンの城主との戦に向かい、捕虜となった。

傷ついた体を縛られて、地面に寝かされて。

寒くて雨が降っていた。

まさか、俺は死んじまったのか？

自分の体に触れてみる。

肌は暖かいし、胸に手を当ててみると鼓動を感じる。

だが血に汚れた肌着は纏っておらず、数多くあった筈の傷も痛まな
い。

これは夢なのだろうか？

地面に座って闇に目を凝らすが何も見えなかった。

声は出さない方が良さそうだろつ。

眠るしかないな。

目が覚めたら、テントの中かも知れぬ。

夜が明けたらどうするか考えよう。

そう思ったガブリエルは柔らかい草の上に横たわると目を閉じた。

.....
耳の傍でひたひたと水音がする。

ガブリエルは目を覚ますと慌てて飛び起きた。

辺りはほんのりと淡紅を帯びた乳白色の朝靄に包まれている。

見回すと、寝ていた場所から十歩と離れていない所に池があった。

昨夜、暗い中を動き回らないでよかったぞ。

運悪く池に嵌って溺れていたかも知れん。

周りには誰も見えず、池の向こうに広がる森からか、鳥の囀りが聞こえる。

ガブリエルは立ち上がると自分の体を見た。

ネヴェンの兵に与えられた傷が、跡形もなく消えてしまっている。

やはり俺は夢を見ているのだろう。

ここがどこなのかは分からぬが、都合悪いことになったら目を覚ませばいいのだ。

ガブリエルは、柔らかい草を踏み締めながら池の方に歩いていった。

池の周囲には葦が密生しており、水は黒く深く油のように滑らかだった。

幼い頃、乳母が語った御伽噺のように、この水に触れたら水の精が現れるのだろうか？

下半身が鱗で覆われている、長い金髪を靡かせた美しい女が。

ガブリエルは葦を掻き分け池の淵に跪くと、両手で水を掬い顔を洗う。

乱れた水面をじっと見つめるが何も現れる気配はない。

まるで子供のように目を輝かせて水の中を覗き込んでいる自分の顔が水面に映り、ガブリエルは苦笑いをした。

おい、俺は何を期待しているんだ？

濡れた肌にひんやりとした朝の空気が心地良い。

夢の中でも腹が空くというのはどうということだろうか？

そう言えば、昨日からふやけた不味いパンしか食っていないな。

ガブリエルは立ち上がると、森に向かって歩き出した。

森の中で何か食べる物が見つかるかも知れぬ。

歩きながら周囲を見回す。

朝焼けで空は薔薇色に染まっている。

千切れた真綿のような雲は青みがかつた銀色だ。

何と美しい空なのだろう。

ガブリエルがそう思った時、太陽が梢を超え、世界を黄金色に染めた。

近付いて見るとその森は鬱蒼としており、故郷のプレシリアンの森を思い起こさせた。

裸で丸腰のガブリエルは、それでも恐れずに森の奥深くに続いていると思われる細い道をずんずん進んで行った。

暫く歩くと巨大な岩に突き当たった。

古代からそこにあつたと思われる岩には不思議な文字が刻まれている。

よく見ると、道は岩を沿って続いているようだ。

長年の雨風で磨り減り、苔の生した岩に手を当てて見上げた。

意味は分からないが神聖な場所なのかも知れぬ。

だが、岩の後ろに回ったガブリエルは、驚いて立ち止まった。

岩の影には人が10人座れる位の石のテーブルがあった。

広い石板を大きな岩が支えている。

そして、その上にはガブリエルの方に足を向けて何者かが寝ていたのだ。

ガブリエルは足音を忍ばせて近付いた。

どうやらそれは、武装した騎士のようだった。

傍らに兜が置かれている。

騎士の頭の方に回ったガブリエルは、驚愕して声を上げた。

黄ばんだ白髪が張り付いた騎士の顔は、空洞の目を見開き、歯を剥き出した骸骨だったのである。

それでは、この岩は墓なのか。

丁度いい。

死んでいるのだったら、俺が武具を借りても悪いことはなかるう。

「騎士殿。お借りするぞ」

ガブリエルがそう言って手を伸ばし甲冑に触れると、騎士の骨はサラサラと崩れて砂となった。

死んだ騎士の武具は、艶のある黒味がかつた金属でできていて、驚くほど軽かった。

盾には騎士のものだったと思われる紋章が描かれている。

アジュールの地に櫛の木が聳え立つその紋章は、ガブリエルの知らないものであった。

ガブリエルは何とか一人で武具を着け終わると、兜を被り騎士の剣を手に取った。

剣を鞘から抜いたガブリエルは、鈍く光る切れ味の良さそうなその刃を見て満足そうに頷いた。

余計な装飾等は一切ないシンプルな作りの剣だったが、死んだ騎士に大切に使い込まれたものらしく籠手にしっくりと馴染む。

これで、もう怖いものは皆無だ。

そしてガブリエルは、足取りも勇ましく、更に森の奥へと進んで行った。

城の住人達は様々な思いを抱え、眠れない夜を過ごしていた。

ネヴェンテルの許に行く決心をしたとはいえ、メルグウエンは悩んでいた。

もう一度、城主殿の姿を見たい。

無事なことを確認して、できれば話がしたい。

だけど、あの男は私が何をしているのかを知ったら、自分の命を粗末にしてまで守ってくれようとするだろう。

だから、もう会えない。

あの男は私が裏切ったと思うだろうか？

愛していると言いたかった。

ネヴェンテル殿のものになっても、私の心は未来永劫、貴方のものだと伝えたかった。

メルグウェンはキュツと口元を引き締めるとベッドを出た。

さあ、元気を出さないよ。

起きる時間だわ。

ダネールが広間に入って行くと、出発する準備を整えたメルグウェンと騎士達が立ち上がった。

「父上」

別れを告げようと近付いたメルグウェンにダネールが言った。

「提案がある」

「……はい」

メルグウエンは顔を上げ、父親の厳しい顔を見つめた。

胸の中に小さな希望の炎が点る。

セズニとドグメールも固唾を呑んで、ダネールが話し出すのを待っている。

「ネヴェンテルの要求してきた身代金の半額を出そう。残りは立て替えるということでもいいか？」

メルグウエンはあまりの驚きに口も利けない。

「はい、勿論です！！ 感謝します！！ 直ちに残りの半額を準備してくださるようキリル様に使いを出します」

セズニが急ぎ込んで答えた。

目を丸くしてダネールを見つめていたメルグウエンが叫んだ。

「父上！……！」

いきなりメルグウエンに飛びつかれたダネールは、面食らった顔でしたが、やがて苦笑いをしながら娘の背中にごつごつとした手を回した。

「……ありがとうございます……！」

「幸せになりなさい」

泣きじゃくる娘の肩を抱いてそう言ったダネールの瞳は、少しばかり潤んでいるように見えた。

「……」

「……」

森の中で木に寄りかかって休んでいたガブリエルは気配を感じて、目を開き飛び起きると剣に手をやった。

だが、自分の前にしゃがみこんでいる者達を見とめると、愉快そうな笑い声を上げる。

「何だ、おまえらか」

小さな生き物達は腰に手を当ててガブリエルを仰ぎ見ると、尖った歯を見せて笑った。

704

「騎士ガブリエルのお陰でヤウン・エレージアは安泰だ」

「ウルゲルミールの悪魔の手先共も尻尾を巻いて逃げ出すぞ」

「女王様がお待ちかねだ」

よく見ると、裸の者も腰巻を纏っている者も、鷲の羽のついた矢の入った矢筒を背負い、背丈より大きな弓を手に持ち、石で作った短剣を腰に提げている。

鋭く尖ったフリント石の鏃が付いた槍を持っている者などもいて、中々勇ましそうだ。

ガブリエルは長い三つ編みを背中に垂らし、鳥の羽や貝殻で飾りつけた帽子を被った生き物に尋ねた。

「そのウルゲルミールとかいう奴らのことをもっと詳しく教えてくれ」

生き物達はガヤガヤと口々に話し始めた。

「騎士ガブリエルと同じ位の丈がある」

「……」

「あんなに醜悪な生き物はいない」

「我々の骨を砕く尖った歯を持っているぞ」

「鋭い爪の付いた長い手を持っているぞ」

「……」

「黒くて毛むくじゃらだ」

「鼻がひん曲がりそうに臭い」

「……」

「狡賢くて卑怯な生き物だ」

ガブリエルが笑い出す。

「そんなに皆で話されたら何が何だかさっぱり分からん。そいつらは熊か？」

「熊？ いやいや、そんな可愛いものではない」

「武器を扱うのか？」

「棒切れや石ころじゃ敵わない」

そして、小さい者達はガブリエルの前に立って歩き始めた。

「女王様の所にご案内しよう」

馴染みのある大木の下に妖精の女王はいた。

「騎士ガブリエル、召集命令によく応じてくれた」

女王は疲れているようだった。

顔色も灰色がかって見えだし、記憶にあるよりずっと小さく細く見えた。

「姉上を悩ませている奴らのことをもう少し詳しく教えてください」

女王はガブリエルの言葉に頷くと手を叩いた。

控えていた家来が駆け寄ってきて女王の前に跪いた。

「食事を持ってまいれ」

それを聞いてガブリエルは嬉しくなったが、持ってこられた果物と菓子をみるとがっかりした。

妖精達は肉は食べないのだな。

俺が今必要としているのは、油の滴る鴨の丸焼きなんだが。

仕方がない、腹が減っては戦もできぬ。

そう思ったガブリエルは菓子に手を伸ばした。

だが、口に入れた途端、目を白黒させて慌てて飲み下した。

女王がガブリエルの顰め面を見て可笑しそうにする。

「どんぐり粉の菓子だ。騎士殿の口に合わぬか？」

「土壁を砕いて水で捏ねて焼いた味ですね。そっちの林檎をもらいます」

果物を齧りながら女王が敵について語るのを聞いていたガブリエルは、話が一段落すると尋ねた。

「そう言えば、あの岩の上の死んだ騎士は誰ですか？」

女王はガブリエルを大きな金色の瞳でじっと見つめて答えた。

「あれはこれから其方がなり得るもの、そして其方がなり得ない者だ」

「そんなことだろうと思って武具を借りました」

「夜の世界の魔力が籠った武具。今は亡きデツカルファル族の鍛冶師ヴェリユンドウルの作ったものだ」

「ふーん、ご利益がありそうですね。そろそろ出かけますか？」

女王は立ち上がると控えている家来に合図する。

辺りに角笛の音が響き渡り、バラバラと武装した妖精達が口々に叫びながら集まって来た。

「出陣だ！！ 出陣だ！！！！」

重たい袋が驟馬に積まれた。

ダネールは金を守らせる為に10人の兵を出した。

その他にワルローズから来た者達全員がガブリエルを迎えに行くことを望んだ所為で、城の中庭は馬と人とでこった返している。

「私も行くわ」

その声に馬に乗ろうとしていたセズニが振り向くと、小姓の格好をしたメルグウエンが目を輝かせ、寒さに頬を染めて立っていた。

セズニは仕方がないという風に頭を振って言った。

「ガブリエル殿は貴方がここで大人しく待っていることを望まれま
すよ、なんて言っても無駄ですね」

「もう待っているのはうんざりだわ。城主殿が無事な姿を一番に見
たいの」

「分かりました。だが、絶対に私の傍を離れないことを約束してく
ださい」

「約束するわ、危ない真似はしないって。でも父上には内緒よ」

メルグウエンは悪戯っぽく笑うと、厩に向かって駆け出した。

その後姿をセズニと見送ったドグメールが目を細めて言った。

「姫のあんな元気そうな顔を見るのは随分久し振りだな」

「分かっているか？ 無事ガブリエル殿を連れてこの城に戻るまで
油断は禁物だぞ」

「大丈夫だ。二度とへまなどするもんか」

ドグメールがセズニを安心させるように肩を叩く。

先頭の兵がダネール家の紋章を描いた旗を手に門を潜ると、残りの
者達も次々と門を潜り、跳ね橋に蹄の音を轟かしながら城を去って
行った。

メルグウエンは両脇をセズニとドグメールに守られ、金を積んだ驟馬の後に続いた。

後少しでガブリエルに会えると思うと、気が急いて堪らない。

どうか、どうか全て上手く行きますように。

今日も朝から曇っており、今にも雨が降りそうだ。

神々様、お願いします。

城主殿が無事私の許に戻って来ますように。

メルグウエンは手綱をしっかりと握ると、馬の腹を軽く蹴り驟馬に追いついた。

その頃ダネールの城では、侍女がメルグウエンのベッドに横たわっている者に驚き叫び声を上げていた。

「城主様!!! 城主様!!!! 姫様が!!!!!!!」

自分がいなくなったことに直ぐに気付かれないように、メルグウエンは羽根布団を縄で縛って自分の服を着せ、ベッドに寝かせて置いたのだった。

妖精4匹に担がせた緑の葉で飾られた輿に乗った女王は、隣を歩くガブリエルに説明した。

「先程話したように、森は我が種族の魔力によって守られている。しかし数年前に起こった事故で、我が国と敵国の境目に亀裂が生じてしまったのだ。敵はそこから闖入し、森を破壊し、我が種族の者を捕らえ攫って行く」

ガブリエルの前を歩いていた生き物が振り返って言った。

「聞くところによると我が種族の者共は奴隷として、鉱山で働かされているらしい。だが生きて帰った者はいないので、本当にそうなのかどうかは分からぬ」

やがて女王は、大きな檜の根元に輿を下ろさせた。

「ここからは魔術が効かぬのだ」

「危ない!!!」

メリメリと何かが裂けるような音がしてそちらを見たガブリエルは、ズザザザ……と自分達を目掛けて木が倒れて来るのが目に入り、慌てて女王を抱えて飛び退いた。

幸いなことに地響きを立てて倒れた木の下敷きになった者はいなかった。

生暖かい風が木々の間を吹き抜けた。

森の怒りの籠った不吉な風だ。

ガブリエルは、まるで木々が意思を持っているかのように身震いするのを見てそう思った。

風の向きが変わり、きな臭い濛々とした灰色の煙が妖精達のいる辺りに漂って来る。

ガブリエルが女王を地面に下ろすと、僅かに頭を下げた女王は臣民に向き直った。

女王が鳥の囀るような声で話し始めると、ガブリエルの横に立った生き物が小声で人間の言葉に訳してくれた。

「平和を愛する我が種族が、ウンゲルミールの子孫が相手とはいえ争わなければならぬことを余は真に残念に思う」

妖精達は尖った耳を敬て、金色の大きな目を更に見張り、一言も聞き漏らすまいと女王の口元を見つめている。

その中には若い男ばかりではなく、老人や女子供も混じっていた。

「だが、我が種族の生存の為、ヤウン・エレージアの存続の為に戦うことが必要なのだ。今回の戦の目的は敵を境界線まで追い返し、森を封じることだ」

女王は幾つかの組に皆を分けると、細かい指示を与え続ける。

最後にガブリエルを見上げて言った。

「騎士殿には長老達と余を保護してもらおう。封印の魔術をかけるまで傍についていて欲しい」

「分かりました」

数百匹いると思われる生き物達は、女王の前に跪くと地面に額を擦り付けた。

そして、立ち上がると一斉に鋭い叫び声を上げながら、森を破壊する敵に向かって走り出した。

ネヴェンテルは疲れた顔をしてテントに入ると、横たわっている騎士を眺めた。

既に蝋燭は燃え尽きており、夜は明けたとはいえ、テントの中は薄暗い。

騎士の表情ははっきりとは見えないが、まるで眠っているようなきれいな顔だと思えた。

幸せな奴だ。

わしが死ぬ時はこのようにはいかぬだろう。

戦か病か、死ぬ原因が何になるのかは分からないが、断末魔の苦しみて歪んだ自分の衰えた顔を想像することは容易かった。

ネヴェンテルは死を恐れていた。

ここ数年、朝目を覚ますと一番先に思うのが、ああまだ生きていた、なのだ。

しかし、自分よりも遥かに若く頑丈そうなこの若者が死んで横たわっている姿を見て、ネヴェンテルは一種の優越感に浸っていた。

昼にはダネールの使いが来るだろう。

金を持ってくるのだろうか？

ネヴェンテルは自分の手に入る筈だった金を思い齒噛みをする。

何とか上手く金を騙し取る方法はないものか？

ネヴェンテルは喉から手が出る程、その金が欲しかった。

報酬を与えなければ兵が自分に背く恐れがある。

ダネールの娘との話がなくなった時、ネヴェンテルが仕方なく自分の跡継ぎにと決めた男は、数十年前に召使に産ませた子で、女の尻を追いかけることしか脳がない。

あの馬鹿は、領地一帯に種を撒き散らし、自分の子で軍隊でも作ろうと思っっているのだろうか？

しかし最近その馬鹿息子を煽って、わしに背かせようとしている奴らがいるのだ。

あの金さえあれば、暫くの間、兵の不満を消し去ることができらう。

だが、捕虜にした男を故意ではなかったといえ死なせてしまい、更に身代金を騙し取ったなどとキリル家に知られたら大問題だ。

今回は残念だが、不運だったと思って諦めるしかない。

真に不運だったな。

戦では予想外の被害を被り、面倒な遺体の始末も残っている。

その時、ある考えが頭に浮かび、ネヴェンテルは薄い笑みを浮かべた。

少しばかり卑怯だが、できるだけ面倒なことは避けたいのだ。

この男はダネール殿の客人と言っていた。

ならば、ダネール殿に遺体を任せてしまえば良い。

捕虜が逃げ出したので、身代金は諦めたと言い逃れできるのではないか？

逃亡した捕虜がどうなったかなど知りませぬと。

口止めすれば兵達も余計なことと言わぬだろう。

身代金を渡す為、使いの者が野営地に来る前に引き揚げてしまおう。

暫くの間はこの地方には顔を出さない方が良さそうだ。

南へ向かおう。

山の向こうにも豊かな土地がある筈だ。

そう決心するとネヴェンテルは、遺体に背を向け晴々とした顔でテントを出て行った。

ガブリエルは右へ左へと剣を振るい、次から次へと自分達に襲い掛かって来る敵を相手に戦っていた。

確かにそれは、熊とは似ても似つかぬ生き物だった。

丸い鉄の兜を被り古代の剣のような長く重い剣を振り回す様子は、人間のようにも見えなくはなかったが、その顔を見たガブリエルはぞっとした。

飛び出た目は血走って瞳孔が開いている。

瞑れた鼻と大きな顎を持ち、耳まで裂けた口には鋭い歯が生えていた。

確かに力では妖精達がこの怪物に叶う筈はない。

妖精達が放つ矢が体に刺さっても、まるで何でもないかのように片手で引き抜き、剣を振り回し続けているのだ。

ガブリエルは目の隅で、その生き物が長い腕で暴れている妖精の子供を軽々と持ち上げ、頭からバリバリと噛み砕くのを見た。

畜生、俺一人ではどうにもできぬ!!!

敵はかなり手強く、女王達を守るのが精一杯である。

「何故、女子供を連れて来たのです？」

ガブリエルは後ろにいる女王に非難するように問いかけた。

これではまるで殺してもらいに来たようなものではないか。

「我が種族は一体となって国を守るのだ。女も子供もその使命を持つて生まれてきている」

「だからと言って」

長老の一人が続けた。

「そして彼らも森を守ることを、この戦に参加できたことを誇りに思っているのだ」

その時、角笛の鈍い音が辺りに響き渡った。

それは後退の合図だったらしく、敵はさっとガブリエル達の前からいなくなる。

「奴らは戦いを長引かせない。少しでも自分達に不利となったら、

できるだけ多くの捕虜を連れて後退行動を起こすのだ」

「あの者達を見捨てるのですか？」

どす黒い血に汚れた剣を拭い、兜の目庇を上げたガブリエルが、遠く敵に引き立てられていく妖精達を指差して女王に尋ねた。

女王は悲しみに満ちた顔で頷いた。

「仕方があるまい。奴らは戦で捕虜にした者を、女であれば性欲の捌け口にし、男であれば奴隷にするのだ」

長老達も厳しい顔で頷いた。

「そして子供らはおやつ代わり」

「それが奴らのならわしじゃ」

「残酷な種族じゃのう」

「同じ世界に暮らしている他の種族と争ってばかりいる野蛮な奴らじゃ」

「騎士殿のような高貴な魂を持つ戦士には理解できぬだろうがな」

ガブリエルは眉を顰める。

「誤解されては困る。俺の仕事は人を殺すことだ」

女王が金色の瞳でガブリエルをじっと見つめる。

ガブリエルも灰色の瞳で真っ直ぐに見つめ返して続けた。

「人間の世界でも戦は醜いものだ。その上、人間の場合は別の種族ではなく兄弟や親と子が争うこともある」

「兄弟、親子で殺しあう人間とは、残酷で愚かな生き物だのう」

長老の一人が哀れみを混めた眼差しでガブリエルを見て呟いた。

セズニは、ネヴェンテルの野营地からさほど離れていないと思われる丘の上で馬を止めた。

そしてドグメールを傍に呼ぶと言った。

「俺は荷物とここで待っているから、兵を連れて偵察に行ってくれないか？」

しかし、セズニの近くにいたメルグウエンが口を挟んだ。

「偵察にはセズニ殿が行って頂戴。そして、私も一緒に行くわ」

セズニは顔を顰めた。

「危険な真似はしないでって約束したじゃないですか」

「危険じゃないわよ。様子を見に行くだけでしょう？」

「ネヴェンの兵に貴方の身元がばれたら」

「ばれっこないわよ。お願い、一緒に連れて行って」

セズニは途方に暮れたようにドグメールを見た。

ドグメールはそしらぬ顔をして遠くの山を眺めている。

セズニは大袈裟な溜息を吐くと言った。

「分かりました。だけどガブリエル殿に知られたら私の命が危うくなるようなことは、しないでくださいよ」

ドグメールと兵達に金を守ることを頼み、セズニはメルグウェン、ダネールの兵二人とワルローズから一緒に来たギー、それから道案内の宿屋の息子と共に山道を進み始めた。

やがて先頭に歩いていた道案内のアルバンが、指を唇に当てて皆を振り返った。

「直ぐその筈ですよ。おかしいですね、静か過ぎる」

セズニは辺りを見回した。

「どうやら逃げられたようだな」

つい先程まで大勢の兵がいた形跡がそこら中にあっただが、人の影は見えなかった。

メルグウェンは焚き火の跡に手を翳した。

「まだ温かいわ。行きましょう!! そんなに遠くには行っていない筈よ」

「ちょっと待ってください。我々が金を持って来ると思っているのに何故逃げるのでしょうか?」

傍にいた兵が積んである藁の束を槍で崩しながら不安そうに聞いた。

「畏でしようか？」

「もう少し探らせてくれ。何か手掛かりが掴めるかも知れない」

セズニは頭を振って、城主のテントが張ってあったであろう空き地の中心に向かって歩き出した。

平静を装っていたが、胸は不安で一杯だった。

身代金を待たずに捕虜を捕らえていた敵が逃亡する。

胸騒ぎがする。

捕虜はどうなったのだ？

その後を小走りに追いかけていたメルグウエンが、急に息を呑んで立ち止まった。

「どうしたのです？」

びっくりして振り向いたセズニに、黙つてあるものを指差した。

彼らの立っている場所から右手に見える葉の散った櫓の下に、何者かが横たわっているのが見えた。

二人は恐る恐るその木に近付いた。

それは武具を着けた騎士のようだった。

そして木に立てかけてある盾にはよく知っている紋章があった。

左半分にはキリル家の紋章であるアーミン地に帆船と麦束と赤のレイブルが、右半分にはワルローズの紋章の青地に黒い海豚が描かれている。

眠っているのだろうか？

それとも……？

恐ろしい考えが頭を過ぎりメルグウェンは蒼白となった。

セズニが手を広げ止めようとしたが、それを振り切って走り出す。

「ガブリエル！！！！」

メルグウェンは大声で叫ぶと許婚の体に取り縋った。

「森を封じるのは少しばかり待ってくれ。あいつらを取り戻してくる！！！！」

ガブリエルはそう叫ぶと、引き揚げて行く敵の後を追った。

あんな小さな生き物を慰み者にしたり、奴隷にしたりする奴らを許す訳にはいかぬ。

胸にメラメラと怒りが燃え上がる。

ガブリエルは齒を食い縛り全速力で走った。

迂回して木の陰に隠れ、動悸を治めながら敵を待つガブリエルは、先程長老が言ったことを思い出していた。

のう。
兄弟、親子で殺し合う人間とは、残酷で愚かな生き物だ

確かにそうだ。

他種族しか襲わぬウンゲルミールの奴らにも劣る。

だが、それが私益の為ではなく、自分の保護下にある者、家族や愛する者を守る為であれば、少しは俺達の罪も減少されるのではないか？

やがて縄で繋がれた妖精達を引き立てていく敵が木々の後ろに現れた。

全員を救うことは無理かも知れぬ。

ガブリエルは敵の人数を数えると、剣を抜き払い列の前に躍り出た。

そのような攻撃を受けるとは夢にも思っていなかったのだろう。

敵は一瞬戸惑ったようだったが、相手が一人だと分かると、猛然と立ち向かって来た。

ぶつかり合う剣の音と共に醜悪な生き物達の唸り声や叫び声が辺り

に轟いた。

どす黒い血が飛び散り、敵の体から剣を引き抜いたガブリエルは、一瞬の隙に奴隷達を繋いでいた綱を切ると叫んだ。

「逃げる！！ 逃げる！！ 森に向かって走れ！！！！」

逃げる妖精達の何匹かは後ろから斬り付けられ倒れたが、残りの者は転がるように森に向かって駆け出した。

物音を聞いて先に進んでいた敵が走って戻って来るのを見たガブリエルは、目の前の相手に最後の一撃を与えると妖精の子供を3匹程、脇に抱えて走り出した。

やっと森の境界線が見えてきた。

「早く、早く！！！！」

既に森に行き着いた者達と女王と一緒にいた者達が口々に叫んでいる。

だが後ろには新たな敵が迫っている。

妖精達が放つ矢も攻撃を妨げることはできない。

「姉上、今だ！！！！！！」

ガブリエルは腕に抱えていた子供達を妖精達の方に放り投げた。

そして、すぐさま振り向くと、剣を構え敵を待ち受けた。

……だが、俺には人間の世界で守るべき人々がいるのではないか？

……海之都ワルローズ。

そうだ、俺の大切な場所だ。

そして、俺がそこで大事にしていたのは……

あれは一体誰だったのだろうか？

……

……

「……………ガブリエル！！！」

この声はよく知っている。

優しい懐かしい声。

ガブリエルは胸の中が温かくなった。

だが、誰だったのか思い出せない。

母上か、アナか？

……………それとも、スクラエラだろうか？

女の啜り泣く声がする。

胸を締め付けるような切ない声で泣いているのは誰だ？

ふと、涙の一杯堪った大きな黒い瞳が頭に浮かんだ。

.....メルグウェン。

どうして忘れていられたのだろうか？

俺が世の中で一番大切に想う、愛しい愛しい許婚を。

体が動かせない。

どうなっちまったんだろうか？

泣いているのはあいつなのか？

ガブリエルは顔に雫が降りかかるのを感じ、やがて熱い口付けを額に瞼に唇に感じた。

いや、あいつはこんなに積極的じゃなかった筈だぞ。

訝しげに目を開くと、潤んだ黒い瞳が自分を見つめていた。

メルグウェンは目を見開き、唇を震わせている。

ガブリエルはがばつと起き上がるとメルグウェンを抱き寄せた。

「どうした？」

「……よかった……！」

メルグウェンはいつもの恥じらいを忘れ、ガブリエルの首に齧りつく。

ガブリエルは驚いた顔をして、それでもメルグウェンをしっかりと抱き締めると背中を優しく叩いた。

セズニとギーは、そんな二人の様子を見て涙を流している。

メルグウェンの後ろに立っている男達に気付いたガブリエルは声をかけた。

「礼を言っぞ。どうやら交渉は上手くいったようだな」

そう言って立ち上がったガブリエルだったが、セズニ達の泣き顔に気付き、呆れた顔をする。

「何だ、皆して情けない顔をして。俺は元気だぞ」

そして曇った空を見上げて呟いた。

「だが、長い間眠って、ずっと奇妙な夢を見ていた気がする」

女王達は森を封じることができたのだろうか？

暫くぼんやり夢の中の出来事を考えていたガブリエルは、頭を振ると皆の後について歩き出した。

セズ二達がガブリエルを連れて丘の上に戻ると、待機していたドグメールと兵達は歓声を上げた。

これで皆揃ってワルローズに帰ることができる。

ガブリエルは、自分の腕に縋り付いて離れようとしないうメルグウエンを可笑しそうに見下ろした。

「おい、そんなに掴んでいなくてもどこにも行かぬぞ」

メルグウエンはちらとガブリエルを見上げたが、何も言わずにしっかりと腕を組み直す。

兵がガブリエルの馬を引いてきた。

だがメルグウエンが腕を離そうとしないので、馬に乗ることができない。

「おい、離せよ」

「……嫌」

「離してくれなきゃ帰れないだろうが」

半分呆れて半分腹を立ててそう言ったが、メルグウエンが唇を噛ん

で泣き出しそうにしているのを見ると驚いて、優しく引き寄せた。

「心配かけて悪かった」

ひんやりと冷たい頬を両手で包み込み、顔を仰向かせると震えている唇にそっと口付ける。

大きな黒い瞳から涙がぼろぼろ零れる。

「泣くな、メルグウエン。俺はここにいるから」

フードを被った頭をギュッと抱き締めた。

そして、手の甲で涙を払い、泣き顔に必死で微笑を浮かべる許婚を担ぎ上げると自分の馬に乗せる。

自分も馬に跨ると、メルグウエンを抱き寄せ自分の胸に寄りかからせた。

「ちゃんと掴まっているよ」

メルグウエンは顔を赤くして頷くと、ガブリエルの腰に腕を回した。

馬に揺られながらメルグウエンは、幸福感がふつふつと胸を満たすのを感じていた。

神々様、私にこの男を返してくださって有難うございます。

どうか、これからも私達をお守りください。

この先、何度このようなことがあるのだろうか？

でも、これからは城主殿が留守の間、私が皆を守らなければならぬのだから。

ワルローズに戻るまで、もう絶対にこの男から離れない。

さつきみたいに嫌な顔されても、しがみついて絶対に離さないから。どこかに行こうとしたら私を引き摺っていく羽目になるわ。

メルグウェンはそう決心すると急に可笑しくなり、ガブリエルに気付かれないように下を向いて笑った。

ガブリエルはメルグウェンに自分のいない間にあったことを尋ねた。

メルグウェンは父も弟も無事城に帰ってきたこと、弟がガブリエルに助けてもらったことを隠していたこと、ガブリエルがネヴェンテルの捕虜になってとても心配したことを話したが、自分が代わりにネヴェンテルの許に行こうと思ったことは話さなかった。

「父上はネヴェンテルの要求してきた身代金の半額を出してくれたの。残りは立て替えてくれたので、今朝早く使いの者が残りの半額をお願いしにキリル様の許に向かっているわ。でも金を渡してないから、必要なくなったわね」

「では、人をやって使いの者を追わせなければならぬな」

「だけど、どうして貴方はあそこに一人で寝ていたの？ ネヴェンテル殿はどこへ行ったの？」

「分からない。覚えているのは雨漏りのするテントの中にいたことだけだ。目が覚めたらおまえがいたのだ」

「貴方を見つけた時、死んでしまったのかと思ってとても怖かった」
ガブリエルはニヤニヤした。

「それで、おまえに似つかわしくなく、あんなに大胆だったのか。
一瞬、誰か別の女かと思つて焦つたぞ」

メルグウェンは頬を膨らました。

「別な女の人つて誰のことかしら？ その人の方が良かった？」

「そんな訳ないだろう？ おまえの方が希少価値があるだろうが」

「もう、絶対しないから」

「おい、怒るなよ。馬から落ちるぞ」

ダネールの城では、城主本人が一行を迎えに出てきた。

馬から下りたガブリエルに歩み寄り、その手をしっかりと握って頭を下げた。

「キリル殿、愚息の命を助けてくださったこと感謝します」

そして、ガブリエルに寄り添っている男の姿をした娘を見ると苦笑いをして言った。

「じゃじゃ馬で頑固で、しようもない娘だが、宜しく頼みます」

ガブリエルも真面目な顔をして頭を下げる。

「結婚を許してくださって有難うございます」

それからメルグウエンの方をちらと見るとニヤリとして付け足す。

「悍馬を御するのは好きですし、お陰で一生退屈せずに済みますよ」

メルグウエンはガブリエルを睨むと口を尖らし、男達に背を向けてさっさと城の方に歩き始めた。

元気で帰ってきてくれたのは嬉しい。

嬉しいけど。

何である男は人の気に障るようなことばかり言うのだから？

悍馬ですって？

メルグウエンは以前ガブリエルに猪のグウェネックと呼ばれたことを思い出した。

人のことを猪だの馬だのって、本当に失礼な男だ。

私が怒るのを面白がっていると分かるから、余計に腹が立つわ。

もう少し恋人らしい振る舞いをしてくれないと思うのだけど。

私は欲張りなのかしら？

「アナ、まだなの？ 肩が凝っちゃったわ」

メルグウエンは欠伸を噛み殺しながら尋ねた。

「もう少しでございますよ。ちょっとこちらをお向きになって」

アナはもう一人の侍女とメルグウエンの髪を結び上げるのに一生懸命だ。

艶のある黒髪に絹のリボンや金銀系の紐を編みこんでいく。

細かい手間のかかる作業で、メルグウエンが椅子に腰掛けてから既に一時間以上経っている。

「できました」

やっとアナは髪から手を放すと、手鏡をメルグウエンに渡した。

メルグウエンは文句を言っていたわりには、満更でもなさそうに鏡に見入っている。

メルグウエンの部屋は侍女が次から次にと広げる華やかな服で一杯だった。

「さあ、次はお召し物ですよ」

アナ達はメルグウエンを裸にすると、上質な麻の肌着を着せた。

毎日着ている物とは違い長くたつぷりとした肌着は、胸の下の辺りには細かなプリーツ、胸元と袖口には刺繍が施されている。

次に白テンの毛皮を首元と袖口に覗かせた薄紅の絹の服を着せた。

胴と袖は体にぴったりと添い、金糸の縁飾りのある裾は踝まである。

「本当はね」

メルグウェンが後ろにいるアナを振り返って言う。

「城主殿と二人だけで、海辺で式を挙げたかったのだけど」

アナが大きさに眉を顰めて見せた。

「何を仰るのです。ご婚礼はご家族の前で聖堂で行うものですよ」

侍女が胴当てと胸当ての紐をきつく締め上げる。

そして、更にその上から殆ど下の服を隠してしまう上着を着せた。

それは深みのある青色の軽い上等な絹できており、金銀糸の刺繍が施されている豪華なものであった。

縁取りのある袖はたつぷりと床まで垂れており、裾には細かい切り込みが入っている。

暫く黙って侍女にされるがままになっていたメルグウェンが言った。

「でも、私が頼んだらきつとあの男はそうしてくれたと思うわ」

「そんなこと、キリル様もダネール様も絶対にお許しになりませんよ」

アナはベッドの上から帯を手に取りながら言った。

メルグウエンは溜息を吐いた。

父親のダネールと叔母のマリアニッグが二人の結婚式に出席する為、遙々エルギーオンから訪ねて来たのだ。

そしてガブリエルの両親と兄のジョスリン、姪のアエラも昨夜ワルローズに着いている。

エルギーオンから戻って来るのが遅くなった所為で、予定通りパドリックと船に乗ってキリルの城には行けなかったのだ。

がっかりしたパドリックとメルグウエンにガブリエルは、春になったら赤ん坊を見に行くことを約束した。

私達の婚礼にこうして皆が来てくれたのだもの。

とても残念だけど、海辺での式は諦めるわ。

一面に金糸で刺繍をし宝石をちりばめた豪華な帯を腰に緩く巻き前に垂らす。

それから宝石箱に大切にしまってあった母からの贈り物の首飾りを着けた。

メルグウエンの母親は病弱な為、長旅は無理ということだ。ダネール達と一緒に来れなかった。

でも、母上に城主殿を会わせることができよかったわ。

ちゃんとお分かりになったかどうかは疑問だけど、私は幸せだとお伝えできてよかった。

多分、母上には二度と会えないだろう。

子供の頃から母親らしい温かみを与えられたことはなかった。

ガブリエルと結婚することになって初めて少しだけ母に近づけたよ。うな気がすると、メルグウエンは思った。

最後の仕上げに一面に刺繍された先の尖った小さな革靴を履く。

「まあ、何てお綺麗なのでしょう!!!」

仕度を手伝っている侍女達が感嘆の声を漏らした。

「やっと終わり?」

「いえいえ、次はお化粧ですよ」

メルグウエンはうんざりした顔をする。

朝、風呂に入ってから時間を数えると、既に3時間以上経っているのだ。

「もう疲れてしまったわ」

「何を仰るのです。ガブリエル様に美しく見られたくないのですか？」

アナは、その言葉にうつすらと頬を染めたメルグウエンを見て、ホッと息を吐いた。

私の姫様は本当にお綺麗だ。

「お化粧は殆どいりませんね」

真珠を砕き小麦の澱粉と混ぜた粉をさつと額と頬に叩くだけにした。

ガブリエルは扉の方を見ながらイライラと広間の中を歩き回っていた。

一体何をやっているのだ？

先程召使に様子を見に行かせ、直ぐ行きますと返事をもらってから既に一時間は過ぎていく。

もう一度様子を見に行くか、と思って廊下の方に歩き出した。

「何をイライラしているのだ？」

ポンと肩を叩かれて、ガブリエルは振り向いた。

ジヨスリンが笑っている。

「あんまりせつかちだと奥方に嫌われるぞ」

「女は仕度に手間がかかり過ぎて困る」

不貞腐れたように言う。

「まあ、そう言うな。おまえに綺麗に見られたいから、化粧に時間がかかるのだろうよ」

ガブリエルは何も答えなかったが、心の中では思っていた。

あいつは化粧なんかしなくても十分美しい。

大体こんな仰々しい儀式は苦手なんだ。

別にこんな窮屈な格好をしなくても、神々なんかに誓いを立てなくてもいいじゃないか。

あいつと俺と二人で、普段着でも素っ裸でも互いに夫婦になるって誓い合えばそれで良くないか。

いや、流石に裸はまずいだろ。

今夜、あいつと二人きりになるまで、余計なことは考えない方が良さそうだ。

思えばダネール殿の城から戻ってから今まで随分忙しかった。

ガブリエルはネヴェンテルとの戦で受けた傷が癒えるまで、エルギエーンに留まらなければならなかったのだ。

俺が絶対に婚礼は延期しないと言い張ったから大騒ぎになった。

けれども皆の努力の結果、何とか準備は間に合ったようだ。

扉が開きメルグウェンが叔母の後に続いて入って来ると、広間にいた皆は感嘆の溜息を漏らした。

メルグウェンは広間の中を見回して、ガブリエルの姿を認めると嬉しそうに近付いて来た。

花嫁の衣装と同じ生地の上着を着て肩には毛皮の裏地のついた外套を羽織ったガブリエルは、大層凛々しく立派に見えたのだ。

メルグウェンはガブリエルの前に来ると、立ち止まってその顔を見上げた。

ガブリエルは黙ったままメルグウェンをジロジロ見ている。

メルグウェンは不安そうに尋ねた。

「私の格好、可笑的いかしら？」

ガブリエルは夢から覚めたような顔をして頭を振った。

「いや、あんまり美しいので見惚れていた」

メルグウエンは頬を染めて照れ臭いそうに呟く。

「城主殿もとてもご立派です」

「城主殿じゃないだろ。この前みたいにちゃんと名前で呼べよ」

「……後で、ね」

二人が並んで広間を出ると、下男が中庭に馬を引いてきた。

花嫁の馬は深紅の衣を纏い、首の周りには銀の鈴、そして額には魔除けの紅榴石の飾りをつけている。

家来の手を借りてメルグウエンが馬上の人となると、その後にはワルローズの紋章を刺繍した馬衣を着せた愛馬に跨った花婿が続く。

馬の歩みに合わせて鈴がシャラシャラと鳴った。

二人の後から親や親戚、その他の招待客が進んで行く。

皆、色とりどりの衣装を着て大層華やかだ。

この季節にしては珍しく晴れており、皆は一張羅を濡らしたり泥で汚したりしなくて済んだことを喜んだ。

先頭に立ったルモン達が奏でるガイディとタラバードの音楽に合わせて、一行は城を出て城下町の大聖堂に向かった。

大聖堂の前で馬を下りた二人は、階段を並んで上り正面玄関の前で向かい合った。

優美なアーチを描く天井の下で、今一度確認するようにメルグウェンはガブリエルを見上げる。

ガブリエルが安心させるように頷くと、メルグウェンは柔らかい微笑みを浮かべ、許婚に右手を差し出した。

メルグウェンの手をしっかりと握ったガブリエルが誓いの言葉を口にする。

「我、ガブリエルは汝を妻とする」

メルグウェンの澄んだ声が響く。

「我、メルグウェンは汝を夫とする」

こうして、二人は夫婦となった。

.....

続いて結婚契約書と花嫁の持参金目録が長々と読み上げられた。

ガブリエルの両親は満足そうに頷き合い、目を細めて若い夫婦を見守っている。

その頃になると、聖堂の前広場に集まって来ていた見物人がそわそわし始める。

貴族の結婚式の習慣で、貧乏人に硬貨が配られるのだ。

ガブリエルとメルグウエンが階段を下りていくと、この瞬間を楽しみに待っていた人々から歓声が上がる。

「城主様万歳！！！！」

「奥方様、お幸せに！！！！」

ダネールは娘をガブリエルの傍に連れて行った。

ガブリエルはメルグウエンの手を取ると、義父に向かって言った。

「健やかなる時も病める時も、永久にメルグウエンを守り慈しむことを誓います」

そして、祭司の差し出した銀の盆に乗った指輪を手に取り、メルグウエンの指に嵌めた。

「この指輪によって貴方を我が妻とする。我が心と身体を貴方に捧げ、財産を貴方に与えることを誓う」

家族と親しい者達が若い夫婦に祝いを述べに来る。

「叔父上、叔母上、ご結婚おめでとうございます！！」

妹と手を繋いで二人の前に来たパドリックが大きな声で言った。

パドリックは空色の服、アエラは明るい緑色の衣装で、二人共とても可愛らしい。

メルグウェンは屈んで二人に接吻しながら答える。

「ありがとう。貴方達の家族になれてとても嬉しいわ」

再び馬に乗った一行は、城下町を練り歩き港の方まで行ってワルローズの住民達の祝福を受けた。

やがて、一行は城を目指して馬を進めた。

城の広間には大宴会の用意がされていた。

ガブリエル達がエルギーオンから帰ってきてから、大慌てで暖炉を掃除して、壁を塗り直し、タペストリーの虫食いの痕を修繕したのだ。

広間に入りきらない客の為に、庭にテントが張られている。

漸く皆が席に着いた。

中央に並んで座ったメルグウェンとガブリエルの後ろには、給仕する騎士が二人立っている。

自分達からその役割を買って出たモルガドとドグメールである。

彼らが葡萄酒を注いだ杯を花嫁花婿が掲げ、同時に飲み干す。

そして、次から次へと豪華な料理が運ばれてくると、客達は目を輝かせて歓声を上げた。

特にローストした野鳥に羽を貼り付け、まるで生きている鳥のように飾り付けたものなどは、皆の拍手喝采を受けた。

テーブルの前では大道芸人が音楽を奏で、様々な曲芸を披露している。

メルグウェンとの結婚式にガブリエルは金を惜しまなかったのだ。

ワルローズの城主の婚礼の様子は、長年この地方で語り継がれていくのだろう。

そして長かった食事がやっと終わりに近付いた頃、メルグウェンとガブリエルの前に来てお辞儀をした者がいる。

丁寧に祝いの言葉を述べるその男の顔を見たメルグウェンは驚いた声を出した。

「ゲイルヘルム殿！！」

吟遊詩人ゲイルヘルムは、目を細めるとメルグウェンに頷いた。

「奥方様、お小姓姿よりもやはり花嫁衣裳の方がお似合いですよ」

メルグウェンは目を丸くする。

では、やっぱり私が男ではないってばれていたのだけわ。

城主殿は何も言っていないかったけど。

グイルヘルムが今日の為に書いたという歌を聞きながら、メルグウエンはガブリエルに出会ってからのことを思い出していた。

あれからもう3年も経つのだわ。

とても短かったようで、同時に随分昔のことのようにも思える。

メルグウエンはグイルヘルムの歌に聞き惚れているガブリエルを見て微笑んだ。

幸せな3年間だったけど、これからもっともっと幸せになるのだけわ。辺りが暗くなるにつれて皆酔いが回り、猥歌や笑話が出るようになってきた。

眉を顰める者もいたが、大抵は楽しそうに笑って聞いている。

人々が席を立ち始めると、テーブルの上が片付けられ、広間の真ん中に場所が空けられた。

音楽に合わせて若者達が踊り出す。

だが、メルグウエンとガブリエルが手に手を取って彼らの方に歩み寄ると、皆立ち止まって場所を空け、新婚夫婦が踊るのを手を叩きながら眺めた。

城主の奥方としてどう振舞うべきか、叔母に色々と助言を与えられていたメルグウエンの所にアナが来た。

アナはマリアニッグに丁寧にお辞儀をすると、メルグウエンの手を取った。

「どうぞ、こちらへ」

メルグウエンが広間を出て行くのを目敏く見つけた客が、卑猥な冗談を言ったようだ。

騒がしい笑い声を背中に聞きながら、メルグウエンは頬を染めた。

アナに連れて行かれたのは自分の部屋ではなく、ガブリエルの部屋だった。

侍女が3人がかりでメルグウエンの服を脱がせ、髪を解いていく。

そして、ラベンダー水で体を拭かれ、新しい肌着を着せられた。

メルグウエンがベッドに入り、枕に寄りかかった頃になって、ガブリエルが部屋に入って来た。

別室で既に寝る準備をしてきたようで、メルグウエンと同じように長い肌着を纏っている。

ガブリエルが靴を脱ぎ捨てベッドに上がると、アナは天蓋を閉じた。

部屋の中には蠟燭が灯されたままなので、ベッドの中はほんのりと明るい。

メルグウェンは口の辺りまで布団を引き上げ、頬を真っ赤に染めている。

ガブリエルはベッドの上に胡坐を掻き、自分の肌着をさっさと脱ぎ捨てると言った。

「さて、バザーンで見た時より少しは育ったのか確認するとするか」
部屋を出て行こうとしていたアナは、メルグウェンの叫び声を聞いて驚いて振り向いた。

どうやら花嫁が新床から飛び出そうとしたらしい。

初夜に奥方を怒らせるなんて、ガブリエル様にも困ったものだ。

メルグウェンの咎めるような声とガブリエルの宥めるような声が聞こえ、暫くして静かになった。

そのうち接吻の音が聞こえてくると、アナは胸を撫で下ろし、部屋を出てそっと扉を閉めた。

そして、図書室で酒を飲みながらチェスをしているキリルとダネールの許に行き、二人が無事に床入りを済ませたことを告げた。

「……ガブリエル」

メルグウエンが低い声で呟くと、嬉しそうに目を細めたガブリエルが答える。

「メルグウエン、綺麗だ」

初めての愛撫は切なくなる程優しかった。

肌にそつと触れていく夫の手を唇を感じながら、メルグウエンは全身を震わせていた。

私は何と幸せなのだろう。

今こうしてここにいるのはこの男ではなく、政略結婚の相手だったかも知れないのだ。

急に胸が一杯になり涙が溢れそうになる。

「ガブリエル、……好き!!」

自分の首に腕を巻きつけ、頭を擡げて接吻をせがむ妻にガブリエルは目を丸くした。

「おい、あんまり煽ると制御できなくなるぞ」

だが、そう言いながらも、ガブリエルは新妻の身体をゆっくりと優しく丁寧に愛撫していく。

ずっとこいつにこうやって触れたかった。

やがて最後の蠟燭がジィと小さな音を立てて消えた。

寝静まった城は暗く静かだ。

だが、城の外は昼間のように明るかった。

この季節には珍しく綺麗な満月が辺りを煌々と照らしていたのだ。

婚礼に来た者が酔いを醒まそうと浜辺に行き、とんでもないものを見かけた翌日村の人々に語ったそうだ。

皆は酔っ払って寝惚けたんだろうと相手にしなかったが、その男は真面目な顔で言った。

「奴らはその岩の上で輪になり歌いながら踊っていたのだ。月明かりに大きな丸い目と尖った耳がはつきり見えた。随分小さかったから子供だったのかも知れない。波の音に交じって聞こえてきたのは、こんな歌だった」

……………海の都に城がある、

城には3つの塔がある

城の主は勇敢な騎士

ディグリンディグルドン、天と地、櫛と火

ディグリンディグルドン、輝く剣と赤い血潮

ある日、騎士は嫁を迎えた

麗しき姫の髪は黒檀のよう

麗しき花嫁の瞳は暗夜の色

ディグリンディグルドン、天と地、櫛と火

ディグリンディグルドン、輝く剣と赤い血潮

海の騎士と山の姫

我らが祝福するこのご婚礼

異議唱える者はあるまいぞ

ディグリンディグルドン、天と地、楯と火

ディグリンディグルドン、輝く剣と赤い血潮……

エピソード

中世を思わせる節回しの歌を、少々調子外れのしわがれた声で歌ったエジエーン婆が口を噤んだ。

物語に耳を傾けていた人々は、暖炉の火に見入り、暫く余韻に浸っていた。

老婆の足元に座っていた少女が、ほうつと溜息を吐く。

「そして二人は沢山の子に恵まれ幸せに暮らしました。めでたし、めでたし」

沈黙を破り、おどけたようにそう言った若い男に、隣に腰掛けていた恋人らしい娘が肘鉄砲を食らわす。

「さて、夜も更けたことだし、そろそろ寝に行くとするか」

「おやおや、また雪が降り出したようだよ」

「今年の冬は冷えるねえ」

村人達が立ち上がり、糸車や農具を片付けるのを眺めていた娘が尋ねた。

「でも二人は幸せになったのでしょ？」

エジエーン婆は糸車を脇に退けながら答えた。

「そりゃ好き合った男と結婚したんだから幸せだっただろう。それが長続きたかどうかは分からないが。当時は戦が多かったからね」

娘の恋人が相槌を打つ。

「飢饉や流行病もあっただろうしなあ」

「絶対に幸せになったわよ」

怒ったようにそう断言する娘を見て、中年の女が呆れたように言う。

「何をむきになっているんだい、アナヴァリ？ おまえさんが好きな男と幸せになりゃいいじゃないか。親父さんに許してもらえただろ？」

隣にいた男が顔をくしゃくしゃにして笑う。

「そうなんですよ。やっと許してもらえて、春には結婚できることになったんです」

「そりゃ、春が来るのが楽しみだな」

アナヴァリと呼ばれた娘は、外套に包まり黒い艶やかな髪に頭巾を被ると、カンテラを提げた恋人と手を繋いで外に出た。

雪が舞う暗い空を見上げアナヴァリは呟いた。

二人が幸せになってくれていないと、私達も幸せになれない気がするの。

きっと幸せになって長生きして、子供は男の子と女の子が生まれたのだろう。

きっと……

「早く春が来るといいわね」

アナヴァリは恋人の手をしっかりと握り直すと、仲良く雪の道を帰って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2681/>

メルグウェン姫と騎士ガブリエルの物語

2011年2月14日00時28分発行